

茨城県教育財団文化財調査報告第222集

辰海道遺跡 1

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

（第2分冊）

平成16年3月

日本道路公団
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第222集

辰^{たつ}海^{かい}道^{どう}遺跡 1

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

（第2分冊）

平成16年3月

日本道路公団
財団法人 茨城県教育財団

目 次

— 第2分冊 —

(4) 居館と遺物	479
(5) 土坑	534
(6) 井戸跡	540
(7) 溝跡	541
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	543
(1) 竪穴住居跡	543

(4) 居館と遺物

① 居館の構造 (第373～414図)

位置 桜川支流の泉川の氾濫原中に張り出した段丘の縁辺部東端、調査区中央部H14i5～K13a3区に位置し、濠と竪穴住居跡で構成される。濠の東端部は、調査区北部南東端に一部が確認でき、さらに調査区域外へと延びている。また、濠の南端部は第4A・B号溝、第215号土坑、第500号住居にそれぞれ掘り込まれているため形状は明確でないが、張り出し部が認められ、ここで屈曲して東へと方向を変えて調査区域外へと延びている。また、濠が延びていると想定される東側は、現況で水田となっている。

形状(構造) 上幅5.6～8.5m、深さ約2mの濠跡(第1号濠跡)によって区画されている。濠の検出された部分の規模は長軸方向が約75m、短軸方向が約58mの逆L字状を呈し、長軸方向はN-10°-Wである。濠は東端部、南端部でさらに調査区域外に延びており、平面形は方形または長方形に選っていたものと想定される。また、北西コーナー部、南北濠の中央部、南端部では張り出し部が認められ、濠の形状も張り出し部の形状に沿うように彎曲する。居館内の面積は、確認された範囲で約2100㎡である。

内部施設 内部には弥生時代後期の竪穴住居跡2軒、4世紀から7世紀の竪穴住居跡41軒・井戸跡1基、8世紀以降の竪穴住居跡23軒・方形竪穴遺構1軒・掘立柱建物跡9棟・欄柵2列などが確認されている。これらの中で濠が機能していた時期の遺構は、4世紀代が竪穴住居跡9軒、5世紀代が竪穴住居跡2軒、5世紀末から6世紀初頭までが竪穴住居跡1軒、6世紀前半の竪穴住居跡2軒と考えられる。その後の6世紀中葉から7世紀後半の竪穴住居跡はある程度濠を意識して建てられているが、主軸方向や配向等に規則性は認められない。また、濠の覆土中層から上層にかけてこの時期の遺物が比較的多く出土していることから、6世紀中葉以降の竪穴住居跡は濠としての機能を失った後に建てられたものと考えられる。

4世紀代の竪穴住居跡は4世紀中葉と考えられるものが3軒、4世紀末が6軒である。4世紀中葉での配置は、中央部に2軒が約12mの間隔を置いてほぼ東西に並び、南西部に1軒が配されている。また、4世紀末では、西部に3軒が濠から約4.5m内側にそれぞれ約12mの間隔を置いて南北に並び、北部中央に3軒が北を頂点とする三角形に配されている。また、5世紀代から6世紀前半にかけては、各時期ごとに1軒または2軒の竪穴住居跡が北部中央に確認できただけである。

南北濠中央部の張り出し部では、中央から2基の土坑が濠と平行に並び、芯々間で約2mの間隔で確認されている。しかし、それらに対応すると考えられる土坑や柱穴等は、濠の内外ともに認められなかったが、橋脚施設の一部の可能性も想定される。

② 濠跡

第1号濠跡 (第373～414図)

位置 調査区中央部のH14i5～K13a3区に位置した逆L字状の濠で、東端部と南端部は調査区域外に延びている。

重複関係 第356号住居跡を掘り込み、第328・337・343・410・421号住居、第11号方形竪穴遺構、第35号掘立柱建物、第215・217・244号土坑、第4A・B号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 確認できた範囲では、東西外辺約58m・内辺約38m、南北外辺約75m・内辺約60mの逆L字状を呈し、主軸方向はN-10°-Wである。上幅5.6～8.5m、下幅1.2～2.9m、深さ1.7～2.0mを測り、断面形状は鉛筆削状を呈しており、内縁より外縁の方が急な傾斜で立ち上がる。

張り出し部 濠の内辺北西コーナー部は、外方に向かって半径約4mの半円形状に突出している。ここでは第

22号ピット群が確認されているが、ピットの規模や形状は不揃いで柱穴と考えられるものはなく、遺物もほとんど出土していないため、本跡との関わりはないものと考えられる。また、南西コーナー部も外方に向かって突出しているが、重複で掘り込まれているため本来の形状を留めておらず、濠の底面が南東へと湾曲することが確認できただけである。さらに、南北濠中央部が外方に向かって突出しており、規模は幅約2m、長さは北端が重複で掘り込まれているため約8mが確認でき、形状は長方形を呈していたものと想定される。張り出し部の中央部からは、濠と平行に並ぶ2基の上坑が確認されているが、橋脚の一部とも想定できる。

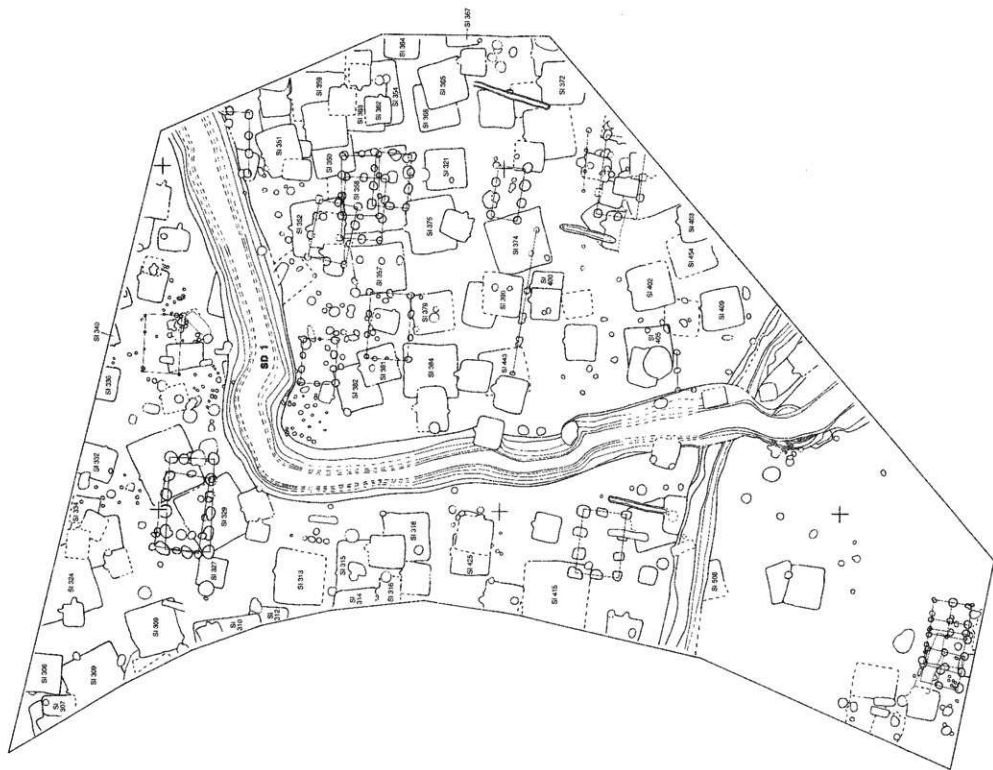
覆土 濠の覆土(A~G)は14~20層に分層され、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。濠は炭沼バミス層を掘り抜き、不透水層まで達していることから、常時水を湛えていたと考えられる。そして、腐植土を多量に含む層は、明瞭に分層できた地点で3層を確認することができた。このことから、濠は少なくとも2回の掘り返しが行われたと考えられる。また、テフラ分析の結果では、土層断面C圏中の第6~17層から浅間C軽石(A s - C:新井, 1979)が確認されている。最下層の18層では確認されていないことから、濠がある程度埋まった段階で浅間C軽石が降灰して堆積した可能性が指摘されている。さらに、第5層からは榛名ニツ岳伊香保テフラ(H r - F P:新井, 1979)、または榛名ニツ岳渋川テフラ(H r - F A:町田・新井, 1992)がわずかながら確認されている。

土層解説A

- | | | |
|----|-----|-------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・焼上ブロック・炭化物少量 |
| 3 | 灰褐色 | 粘土ブロック・焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック微量 |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒子・焼上ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 | 黒褐色 | ローム粒子少量、焼上粒子・炭化粒子微量 |
| 6 | 黒褐色 | ローム粒子中量、焼上粒子・炭化粒子少量 |
| 7 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 8 | 黒褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 9 | 暗褐色 | ロームブロック・炭沼バミス少量、焼上粒子・炭化物微量 |
| 10 | 暗褐色 | ロームブロック・炭沼バミス中量、焼上粒子・炭化物微量 |
| 11 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・炭沼バミス中量 |
| 12 | 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼上粒子微量 |
| 13 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物少量、焼上粒子微量 |
| 14 | 黒褐色 | 砂粒多量、ローム粒子・焼上粒子・炭化物少量 |
| 15 | 黒褐色 | ローム粒子・焼上粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 16 | 黒色 | ローム粒子中量、焼土ブロック少量 |
| 17 | 黒褐色 | 砂粒多量、炭沼バミス中量、炭化粒子少量、炭化物微量 |
| 18 | 黒色 | 砂質粘土ブロック多量 |
| 19 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼上粒子微量 |

土層解説B

- | | | |
|----|-----|---------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・白色粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量、白色粒子少量、焼上粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | 白色粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼上粒子微量 |
| 5 | 黒褐色 | ロームブロック・炭化材少量、焼上粒子微量 |
| 6 | 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物・炭沼バミス少量 |
| 7 | 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量、焼上粒子・白色粒子微量 |
| 8 | 黒褐色 | 焼上ブロック・炭化材中量、ロームブロック少量 |
| 9 | 黒褐色 | ロームブロック・炭化材中量、焼土粒子少量 |
| 10 | 黒色 | 焼上ブロック多量、炭化材中量、ローム粒子少量 |
| 11 | 暗褐色 | ロームブロック・白色粒子中量、炭化材少量、焼上粒子微量 |
| 12 | 暗褐色 | 炭化材中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 13 | 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック・白色粒子微量 |
| 14 | 黒色 | ローム粒子・焼上粒子・炭化材少量 |
| 15 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 16 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭沼バミス少量、焼上粒子・炭化粒子微量 |
| 17 | 黒褐色 | ロームブロック・炭沼バミス・砂粒少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 18 | 黒色 | 炭化物中量、ロームブロック・砂粒少量 |
| 19 | 暗褐色 | ロームブロック・白色粒子中量、炭化粒子微量 |
| 20 | 黒褐色 | ロームブロック・砂粒中量、炭沼バミス少量 |



第373图 第1号遗址全图

土層解説 C

- 1 暗 褐色 ロームブロック・炭化物・白色粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量、白色粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック・炭化材中量、焼土粒子・白色粒子少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック・炭化材少量、焼土粒子微量
- 5 黒 褐色 ロームブロック多量、炭化物微量
- 6 暗 褐色 ロームブロック中量、炭化材少量、焼土粒子微量
- 7 暗 褐色 ロームブロック多量、炭化物・産沼バミス少量、焼土粒子微量
- 8 黒 褐色 焼土ブロック・炭化材中量、ロームブロック少量
- 9 黒 褐色 ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子・白色粒子微量
- 10 黒 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子・白色粒子微量
- 11 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化材少量
- 12 極暗 褐色 ローム粒子中量、産沼バミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 13 黒 褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
- 14 暗 褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子微量
- 15 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 16 黒 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量
- 17 黒 褐色 炭化物中量、ローム粒子・砂粒少量
- 18 暗 褐色 ロームブロック・産沼中量
- 19 暗 褐色 白色粒子中量、ロームブロック少量
- 20 暗 褐色 ロームブロック・砂粒中量、産沼バミス少量

土層解説 D

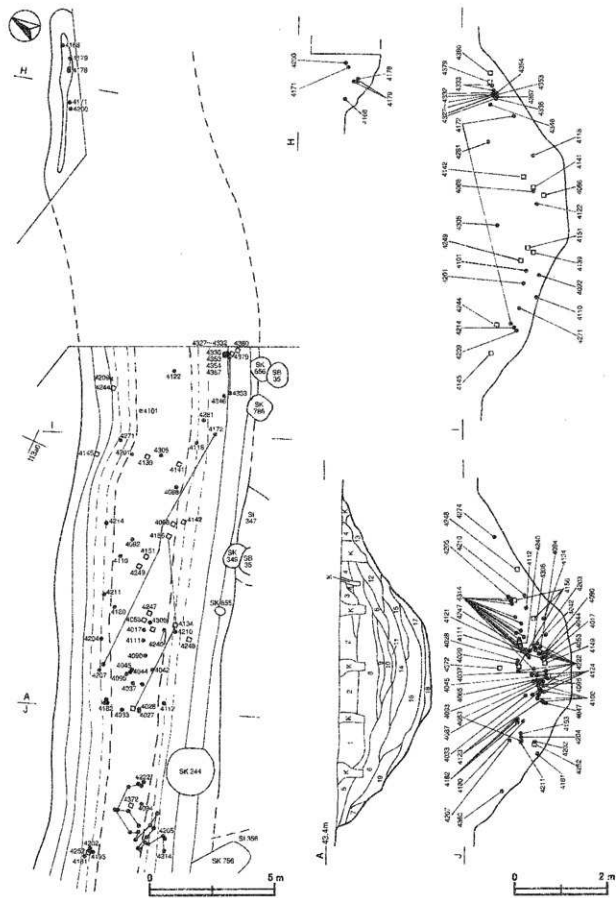
- 1 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 極暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 4 黒 褐色 ロームブロック・産沼バミス中量、炭化物少量
- 5 黒 褐色 炭化物中量、ロームブロック少量
- 6 黒 褐色 ロームブロック・炭化材少量
- 7 黒 褐色 粘土粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 黒 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・産沼バミス少量
- 9 黒 褐色 ロームブロック・産沼バミス少量、焼土粒子微量
- 10 暗 褐色 ロームブロック多量、産沼バミス中量
- 11 黒 褐色 ロームブロック多量、砂粒少量
- 12 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量
- 13 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 14 暗 褐色 粘土粒子中量、ロームブロック少量
- 15 黒 褐色 ロームブロック・炭化材・産沼バミス少量

土層解説 E

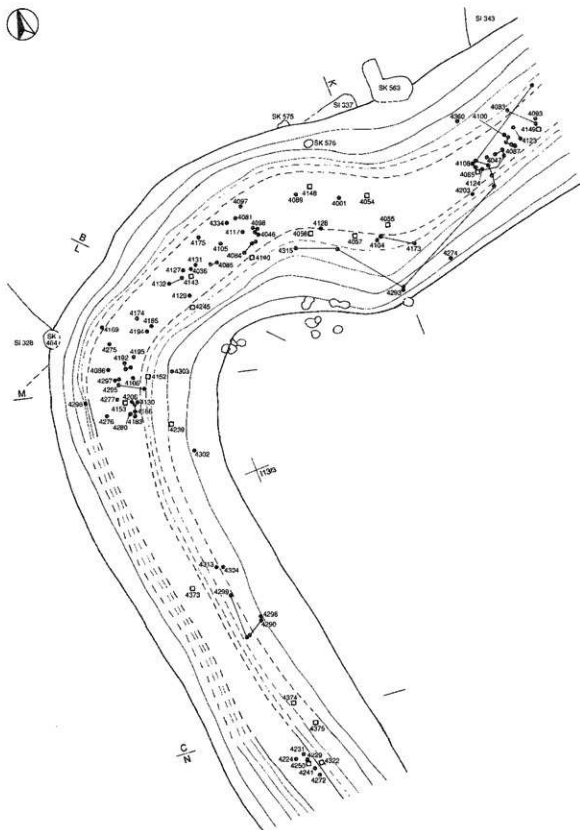
- 1 黒 褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・産沼バミス少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子・産沼バミス少量、焼土ブロック微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子・産沼バミス少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック・炭化物・産沼バミス少量、焼土ブロック微量
- 5 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子・産沼バミス少量、焼土粒子微量
- 6 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子・産沼バミス少量、焼土粒子微量
- 7 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 黒 褐色 ローム粒子・炭化材少量
- 9 暗 褐色 ロームブロック・産沼バミス中量、炭化粒子少量
- 10 極暗 褐色 ローム粒子・炭化物・産沼バミス・酸化土少量
- 11 暗 褐色 ロームブロック・産沼バミス・砂粒少量
- 12 黒 褐色 酸化土中量、ロームブロック・炭化材・産沼バミス少量
- 13 に近い褐色 産沼バミス・酸化土中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 14 暗 褐色 酸化土中量、ロームブロック・炭化物・粘土ブロック少量

土層解説 F

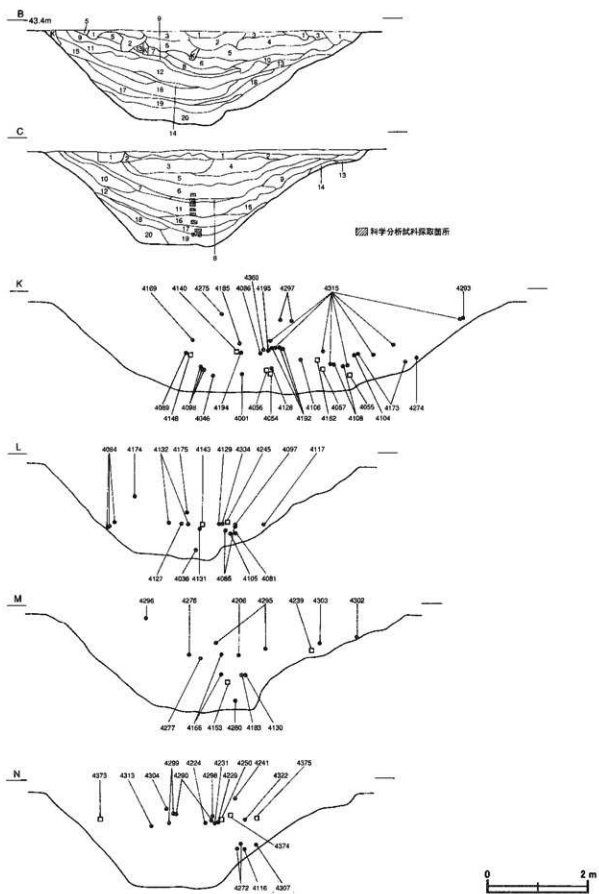
- 1 黒 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・産沼バミス少量
- 2 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・産沼バミス少量
- 3 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子・産沼バミス少量
- 4 黒 褐色 産沼バミス中量、ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
- 5 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子・産沼バミス少量、焼土粒子微量
- 6 黒 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 7 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 黒 褐色 ローム粒子・炭化材少量
- 9 暗 褐色 ローム粒子・産沼バミス中量、炭化粒子微量
- 10 極暗 褐色 ロームブロック・炭化物・産沼バミス少量
- 11 暗 褐色 ローム粒子中量、産沼バミス・砂粒少量
- 12 黒 褐色 ロームブロック・炭化材・産沼バミス少量
- 13 に近い褐色 産沼バミス中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 14 暗 褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・炭化物少量



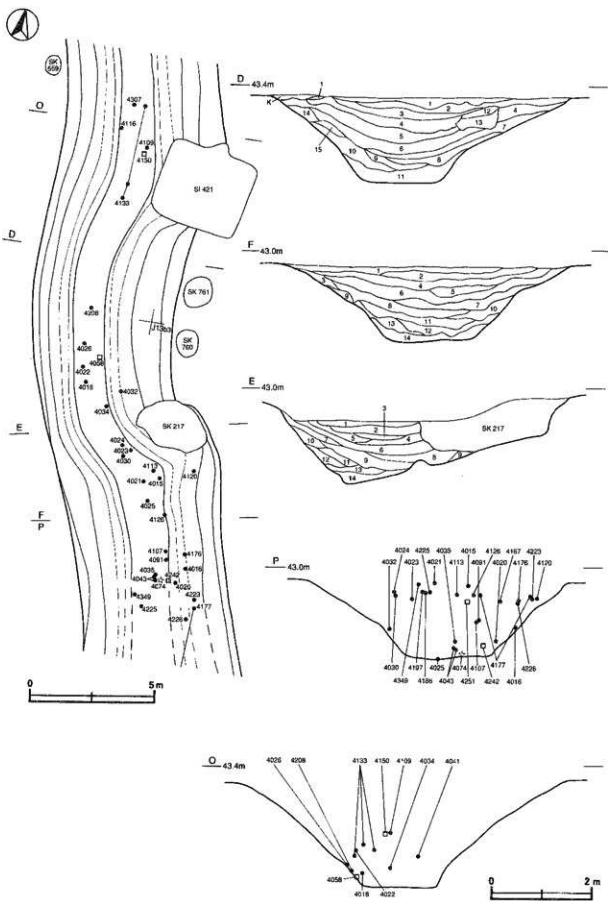
第374号 第1号滝跡 (北部) 実測図(1)



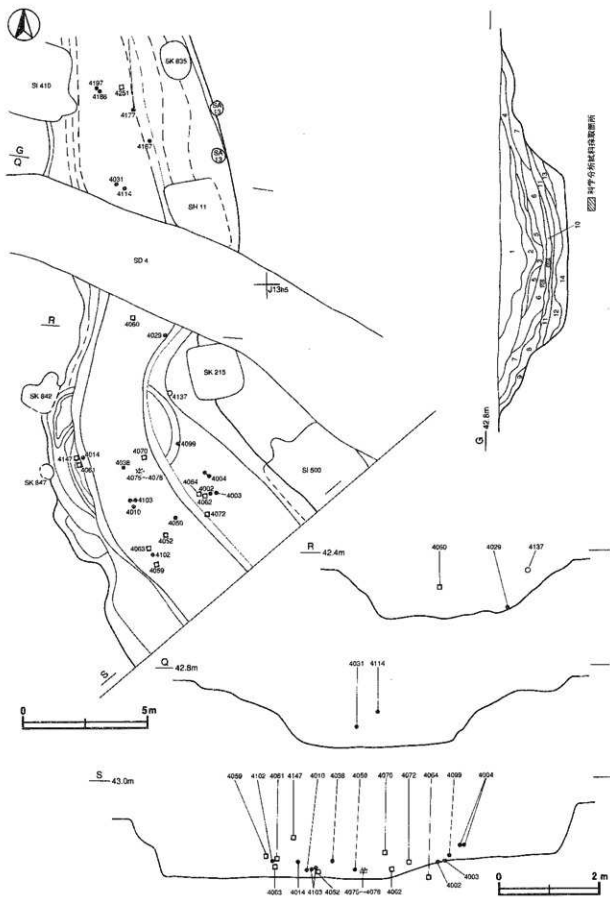
第375图 第1号滚迹(北西部)实测图(2)



第376图 第1号濠跡(西北部)实测图(3)



第377图 第1号遗址(西部)实测图(4)



第378图 第1号壕跡(西南部)实测图(s)

土層解説G

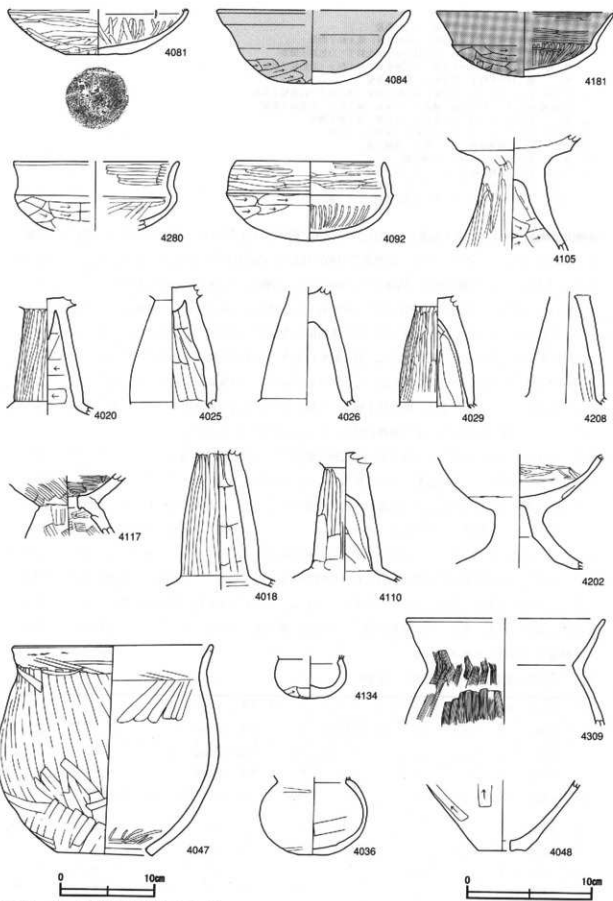
- 1 黒褐色 ロームブロック多量、炭化物微量
 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化材少量、焼土粒子微量
 3 暗褐色 ロームブロック、炭化材中量、焼土粒子・白色粒子微量
 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子・白色粒子微量
 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化材少量
 6 黒褐色 ロームブロック中量、炭化材少量、焼土粒子・白色粒子微量
 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 8 黒褐色 ロームブロック、炭化材少量、焼土粒子微量
 9 暗褐色 ロームブロック、炭化粒子・焼土粒子少量
 10 黒褐色 炭化物中量、ローム粒子・砂塵少量
 11 暗褐色 ロームブロック・砂塵中量
 12 暗褐色 白色粒子中量、ロームブロック少量
 13 黒褐色 砂粒中量、ロームブロック・炭化材少量
 14 暗褐色 ロームブロック・砂粒中量、焼土粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は土器器片27,331点(坏7326, 輪16, 高台付坏147, 高坏719, 皿2, 甕18,852, 甌208, 鉢4, 埴29, 甕19, ミニチュア9), 須恵器片918点(坏156, 高台付坏14, 高鉢4, 甕700, 甌2, 蓋29, 瓶9, 隠4), 平瓦片1点, 土製品11点(紡錘車3, 輪羽口2, 支脚5, 土鍾1) 焼成粘土塊42点, 石器54点(砥石50, 磨石2, 石皿1, 浮子1), 礫片515点(内礫石カ23, 台石カ: 砥付着5, 被熱痕43)がほぼ全域から散在した状態で出土している。南北濠と比べると東西濠の方が出土量が多く、東西濠の中央部や北西コーナー部から特に集中して出土している。さらに、出土層位は大きく分けて4層に分層することができ、出土遺物総量の約88%は覆土上層から中層にかけて出土し、これらは濠としての機能が失われた後に濠の内外から投棄された出土状況を示している。また、覆土最下層から中層にかけては出土量は少ないが、新旧の遺物が混在して出土しており、濠深いや掘り返し等で遺物が混入している可能性が考えられる。

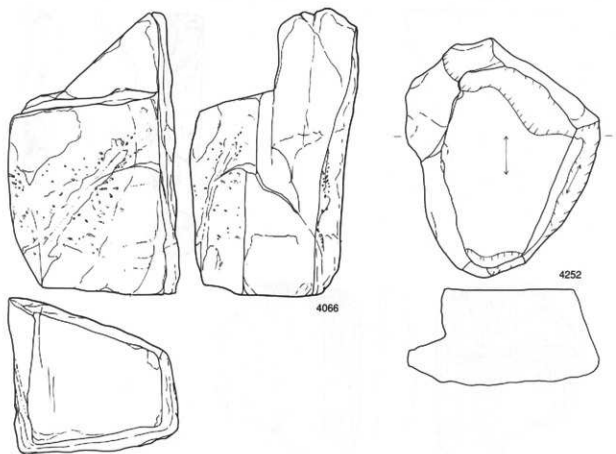
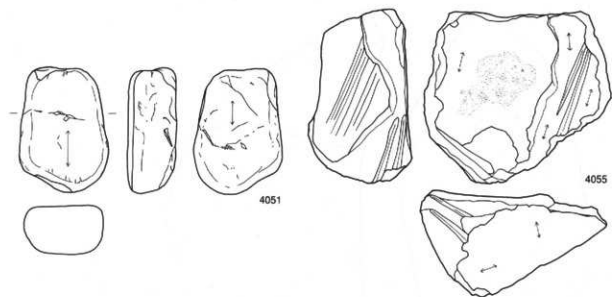
所見 本跡は張り出し部を有する濠と竪穴住居跡で構成され、竪穴住居跡と濠から出土した土器の形状から、時期は4世紀中葉から6世紀前葉にかけて機能していたものと考えられる。その間、濠は覆土の状況から少なくとも2回掘り返しが行われ、さらに新旧の遺物が混在することから濠浚えが行われた可能性が指摘でき、かなり長期にわたって機能していたものと考えられる。また、内部の竪穴住居跡の配置では、4世紀中葉から末葉にかけて複数確認できるが、5世紀中葉から6世紀前葉にかけては同時期に1軒または2軒だけしか確認できず、本跡は4世紀中葉から後葉にかけて首長階級の居宅として機能し、その後、濠の内部は特別視される区域として6世紀前葉まで存続していたものと考えられる。6世紀中葉以降の竪穴住居跡についてはその配置に規同性は認められず、また、その時期以降の土坑などに濠が掘り込まれていることから特別視する区域としての機能も失われたと考えられる。

第1号濠出土遺物観察表(第379~414図)

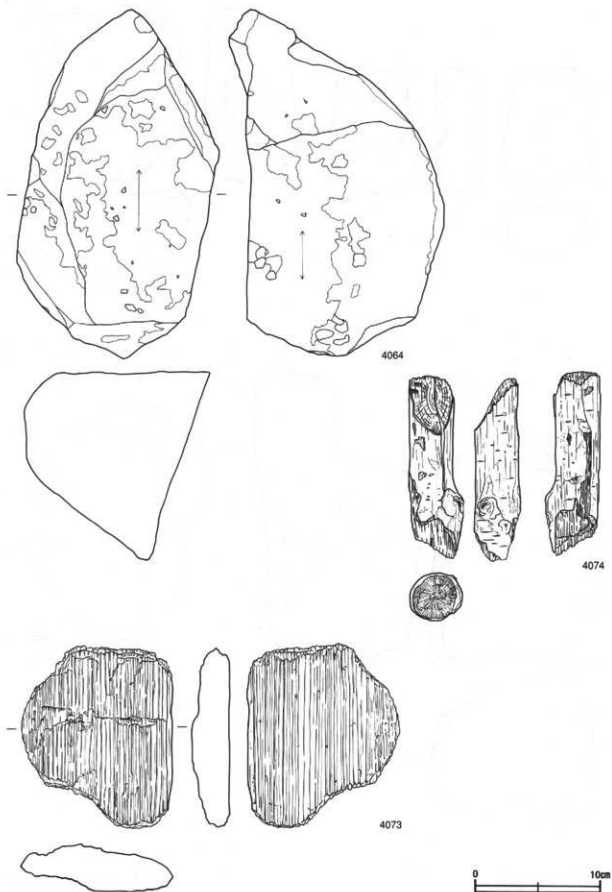
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4001	土師器	坏	14.4	6.7	4.8	黒母・長石・赤色粒子	黒	普通	口縁部傾ナデ	北西部覆土下層	85% PL240
4902	土師器	坏	[12.7]	4.4	-	黒母・長石	黒褐	普通	体部外面ヘウ削り	北西部覆土下層	50%
4003	土師器	坏	[12.4]	4.3	-	黒母・赤色粒子	黒	普通	口縁部傾ナデ	北西部覆土下層	70%
4004	土師器	坏	13.4	4.4	-	長石	黒褐	普通	内面ヘウ削り、外面ヘウ削り	北西部覆土下層	70%
4009	須恵器	坏	[13.8]	(4.2)	-	長石	灰	普通	内外面ロクロナデ	覆土中	3% 「キ」の類占
4010	須恵器	坏	12.9	4.5	6.7	長石	灰	普通	内外面ロクロナデ	北西部覆土中層	70%
4011	須恵器	坏	[16.4]	(4.6)	-	長石	灰	普通	内外面ロクロナデ	覆土中	20%
4013	須恵器	高台付坏	[17.4]	1.8	[10.8]	長石	黒褐	普通	高台削り付け後ナデ	覆土中	20% 朝夷
4014	土師器	皿	13.1	2.3	7.2	黒母・長石	に灰黄相	普通	内外面ロクロナデ	北西部覆土中層	70% PL249 「庄南」の類占



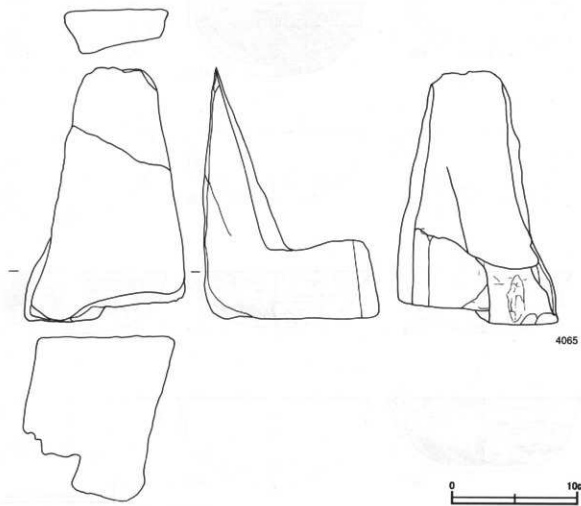
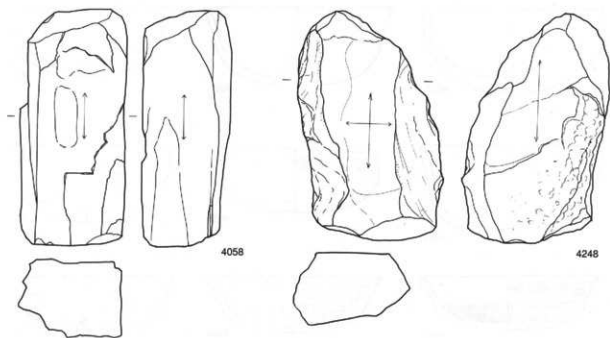
第379图 第1号漆迹出土文物实测图(1)



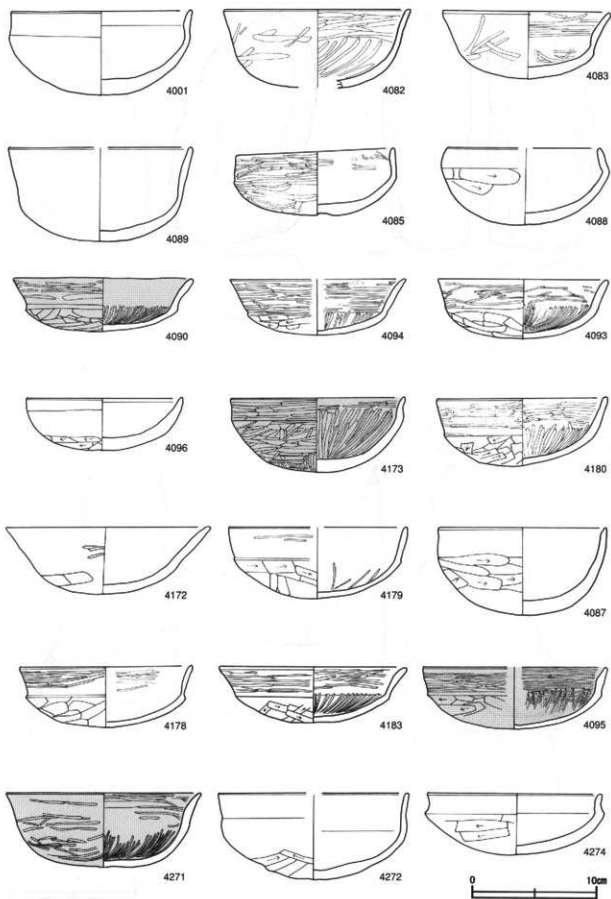
第380图 第1号濠跡出土遺物実測图(2)



第381圖 第1号濠跡出土遺物実測図(3)



第382图 第1号濠跡出土物実測图(4)



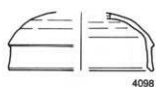
第383图 第1号濠跡出土遺物実測图(5)



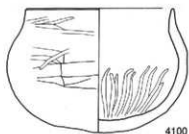
4135



4097



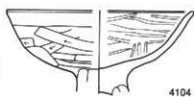
4098



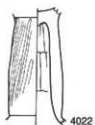
4100



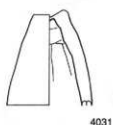
4193



4104



4022



4031



4032



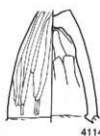
4033



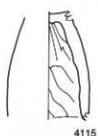
4111



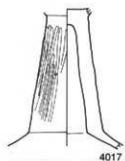
4112



4114



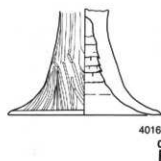
4115



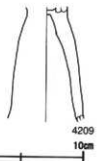
4017



4116



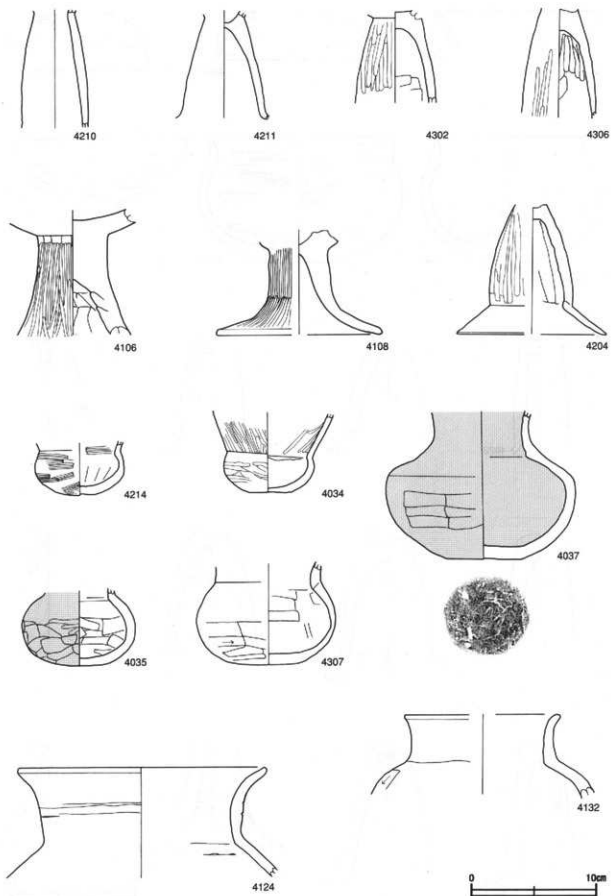
4016



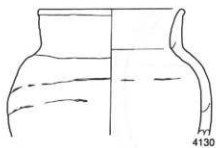
4209



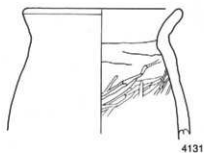
第384图 第1号濠跡出土遺物実測图(6)



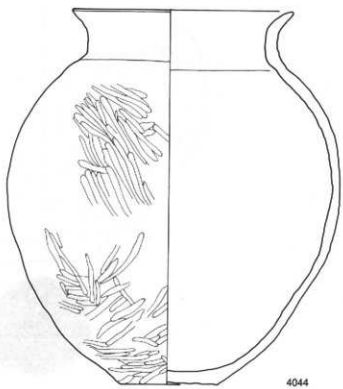
第385图 第1号濠跡出土物実測图(7)



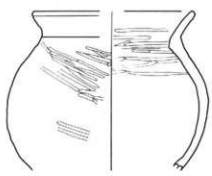
4130



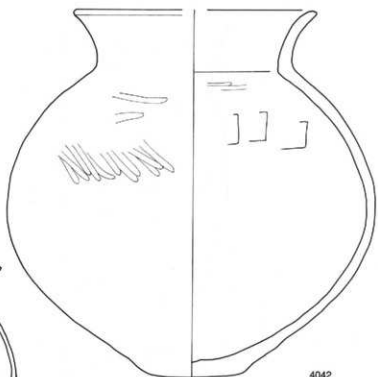
4131



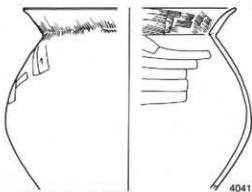
4044



4129



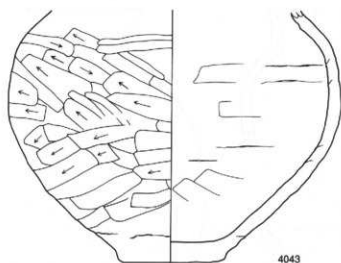
4042



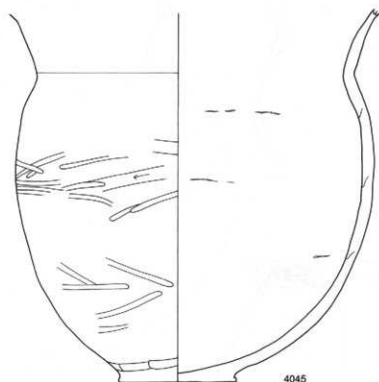
4041



第386图 第1号濠跡出土遺物実測図(8)



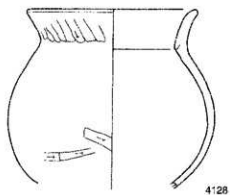
4043



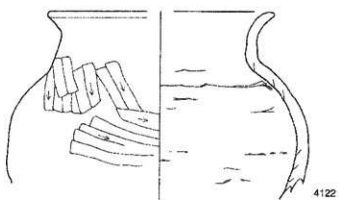
4045



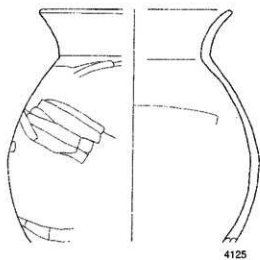
第387図 第1号濠跡出土遺物実測図(9)



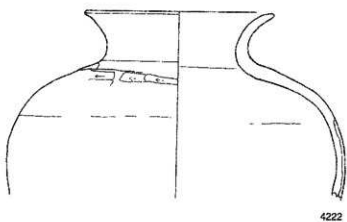
4128



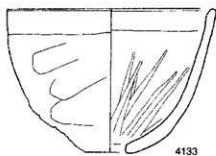
4122



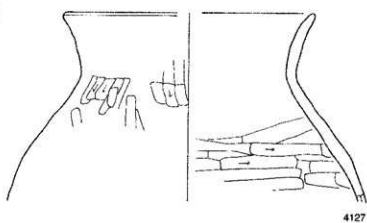
4125



4222



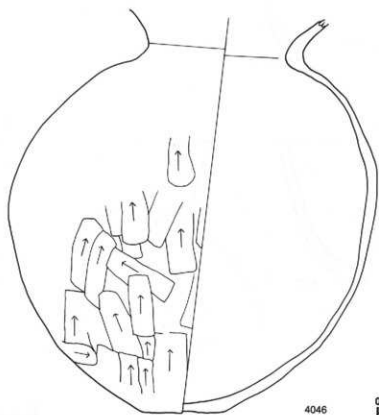
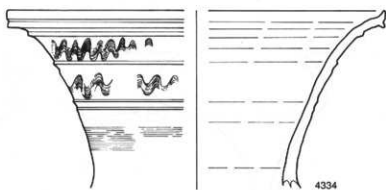
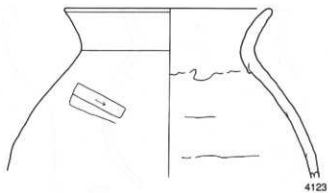
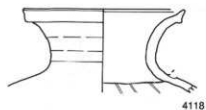
4133



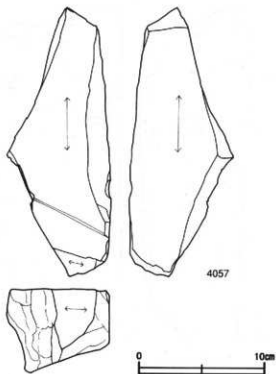
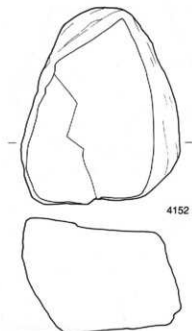
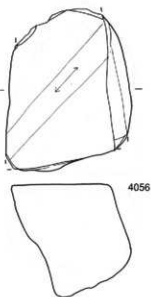
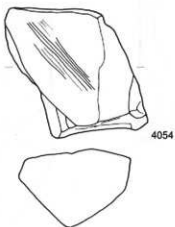
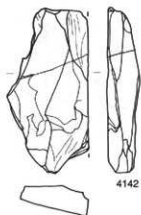
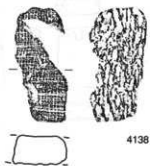
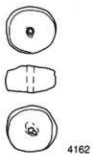
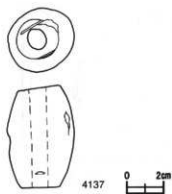
4127



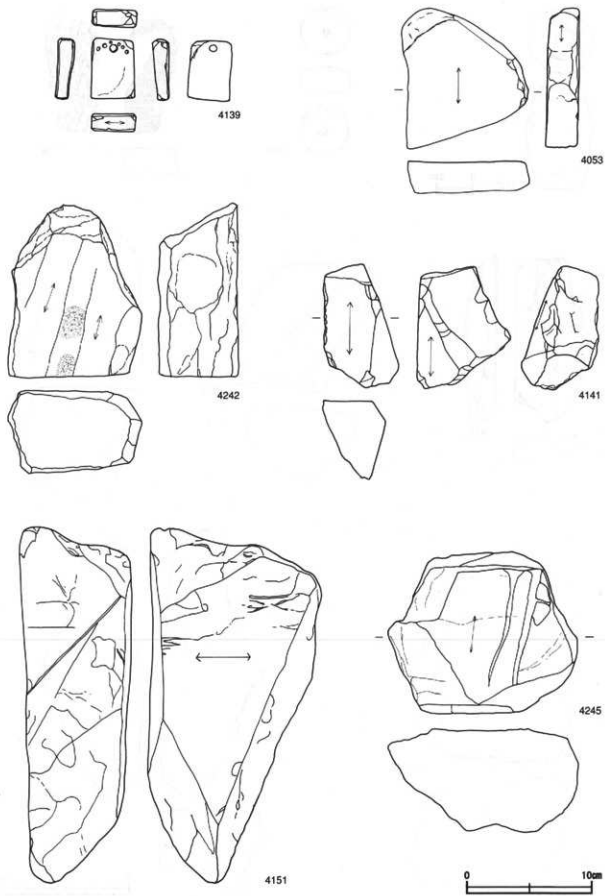
第388图 第1号滚捺出土遗物实测图(0)



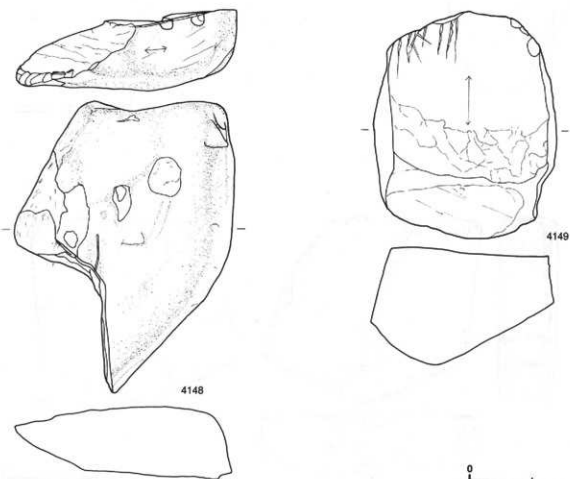
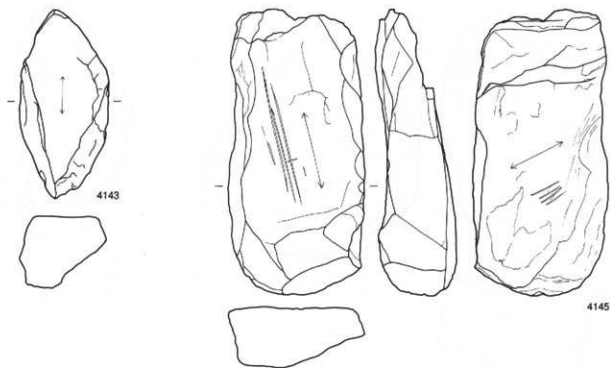
第389图 第1号濠跡出土遺物実測図(1)



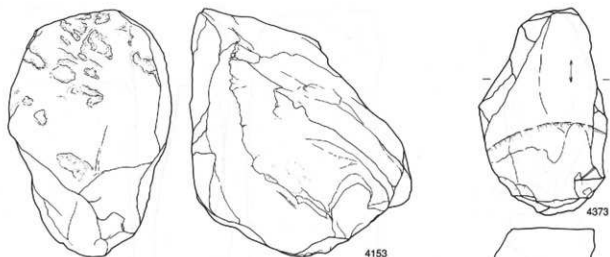
第390图 第1号濠跡出土遺物実測図(2)



第391图 第1号濠跡出土物実測图(3)

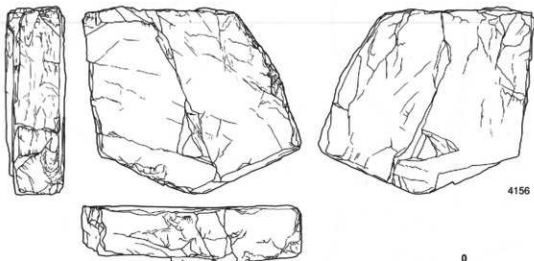
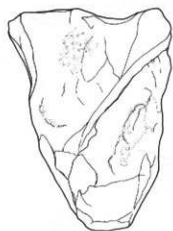


第392図 第1号濠跡出土物実測図④



4153

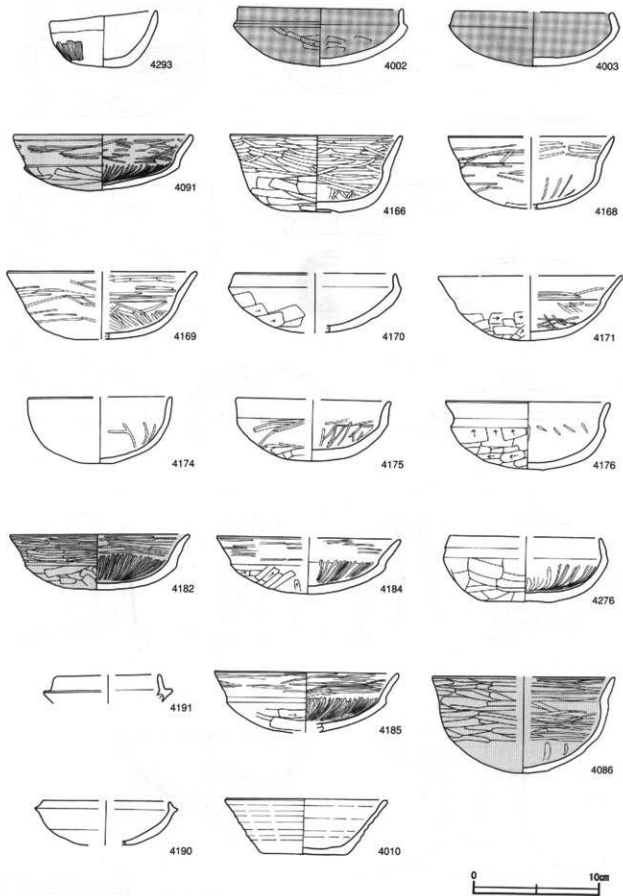
4373



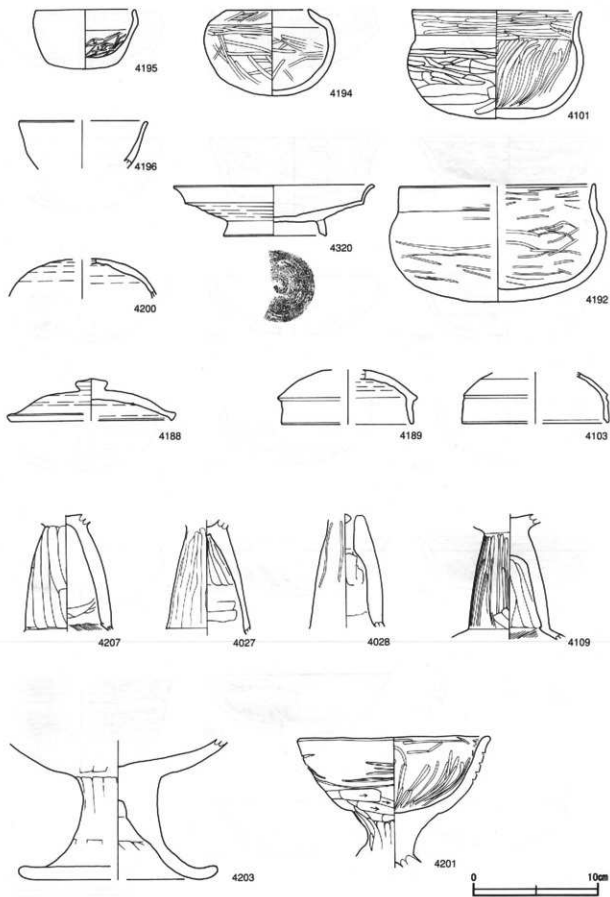
4156



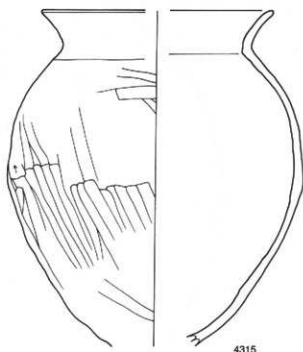
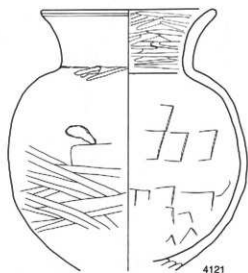
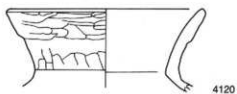
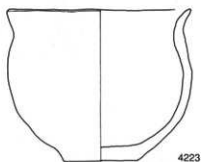
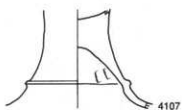
第393图 第1号壕跡出土遺物実測図(5)



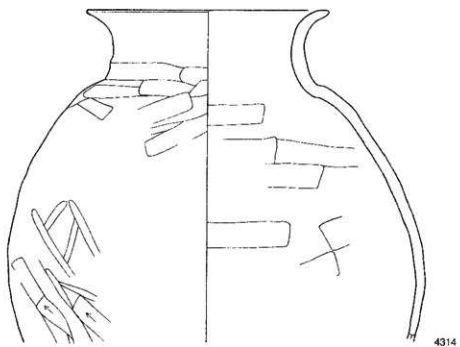
第394图 第1号濠跡出土物実測图⑥



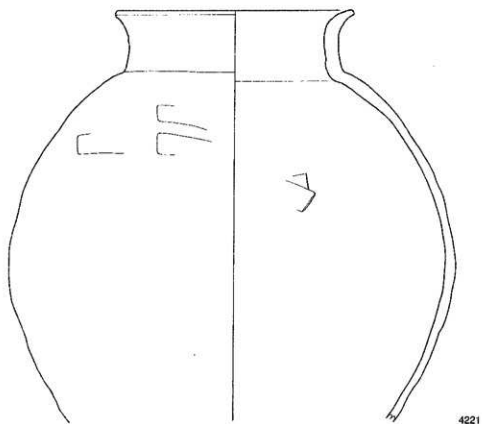
第395图 第1号濠跡出土遺物実測図(7)



第396图 第1号濠跡出土遺物実測図(8)

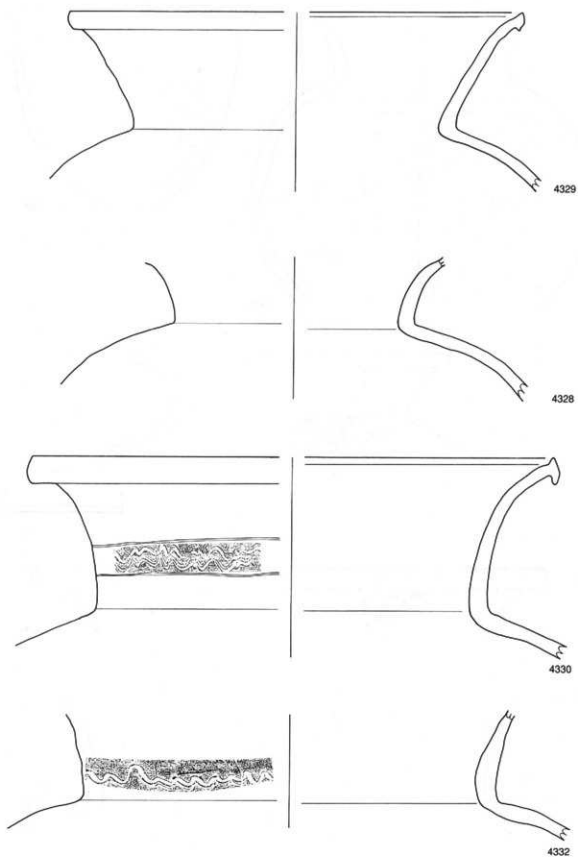


4314

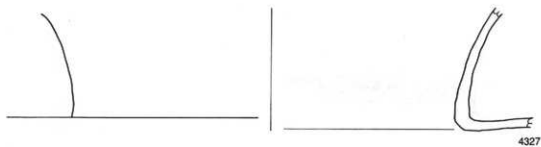
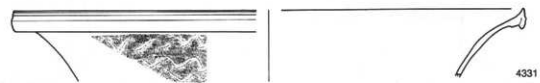
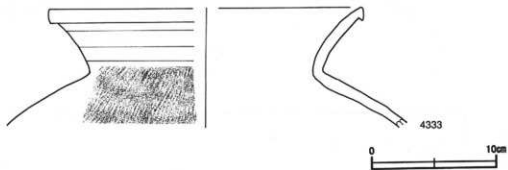
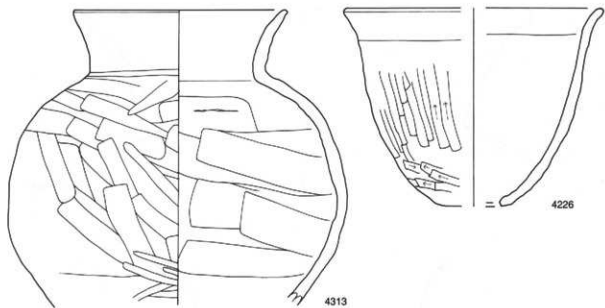


4221

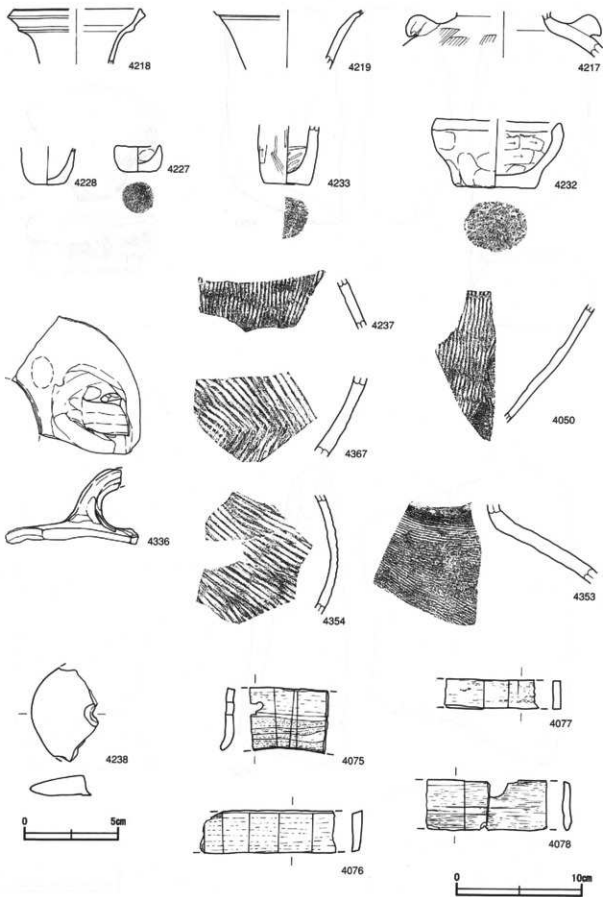
第397图 第1号漆跡出土遺物実測図09



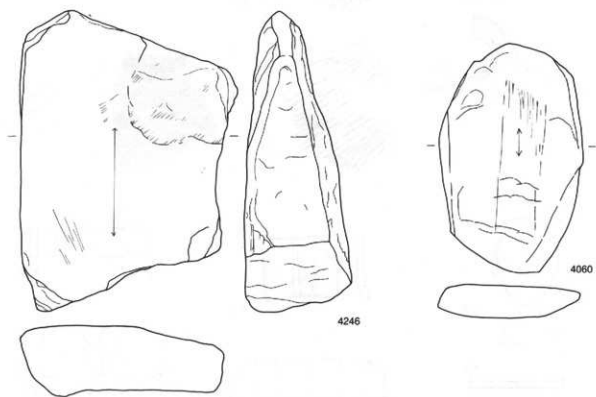
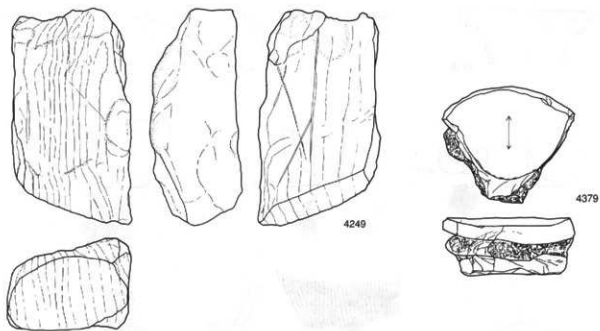
第398图 第1号濠跡出土遺物実測図20



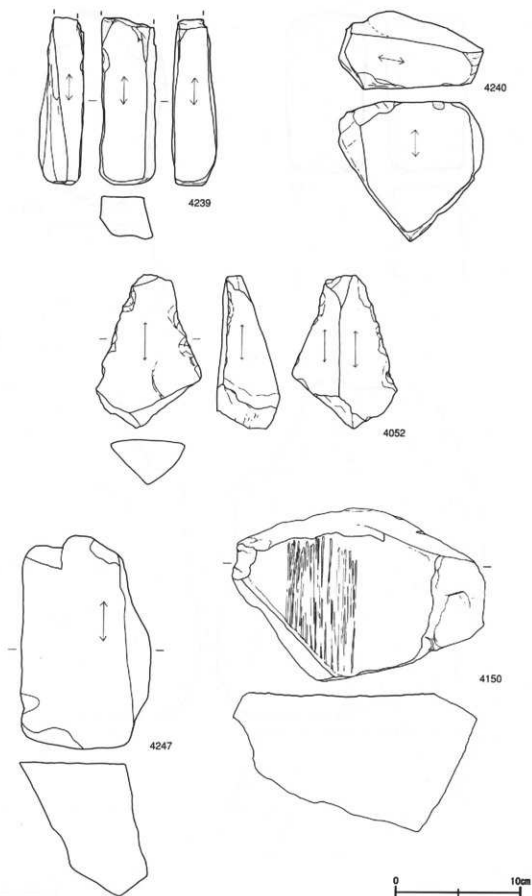
第399图 第1号濠跡出土遺物実測図(2)



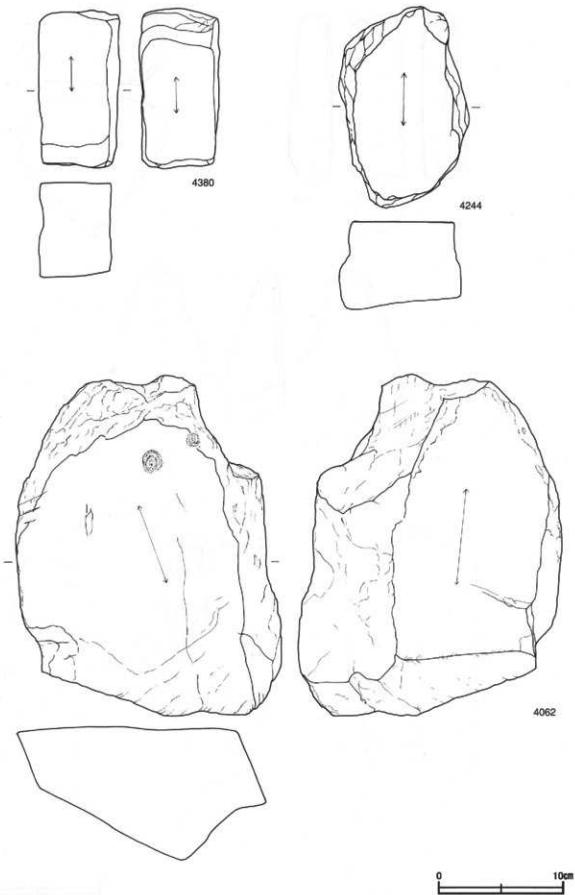
第400图 第1号濠跡出土遺物実測图(2)



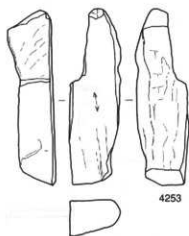
第401图 第1号濠跡出土遺物実測図(2)



第402图 第1号濠跡出土遺物実測图②0



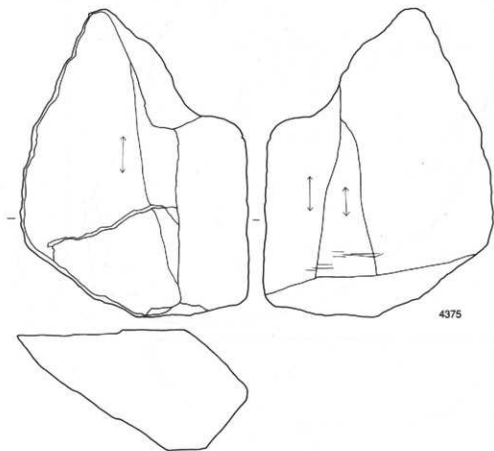
第403图 第1号濠跡出土遺物実測図(2)



4253



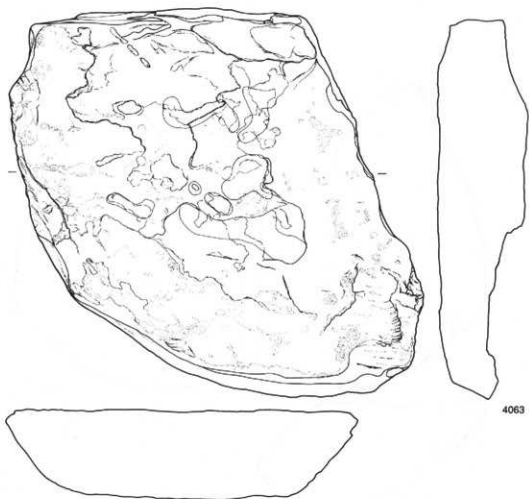
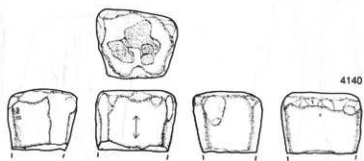
4254



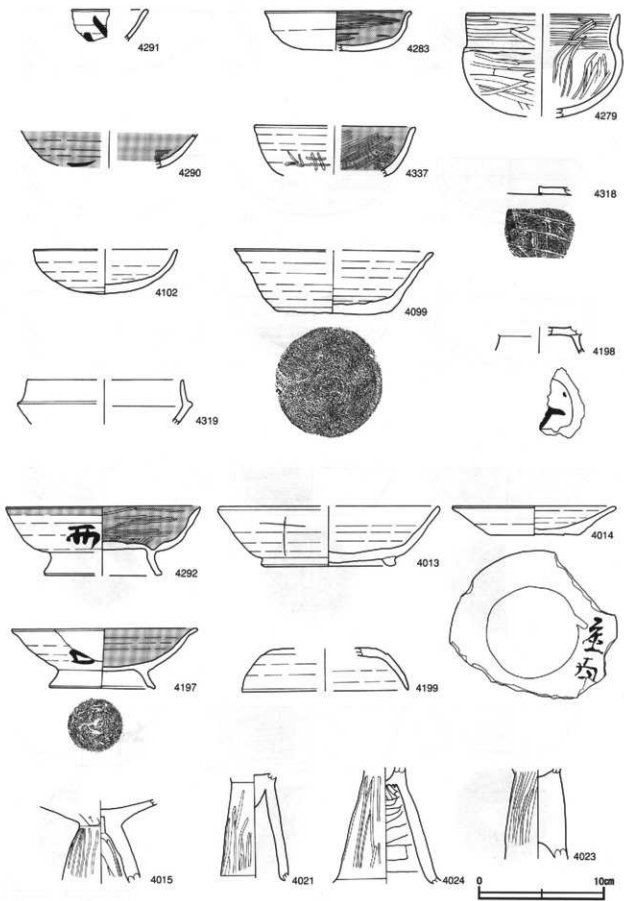
4375



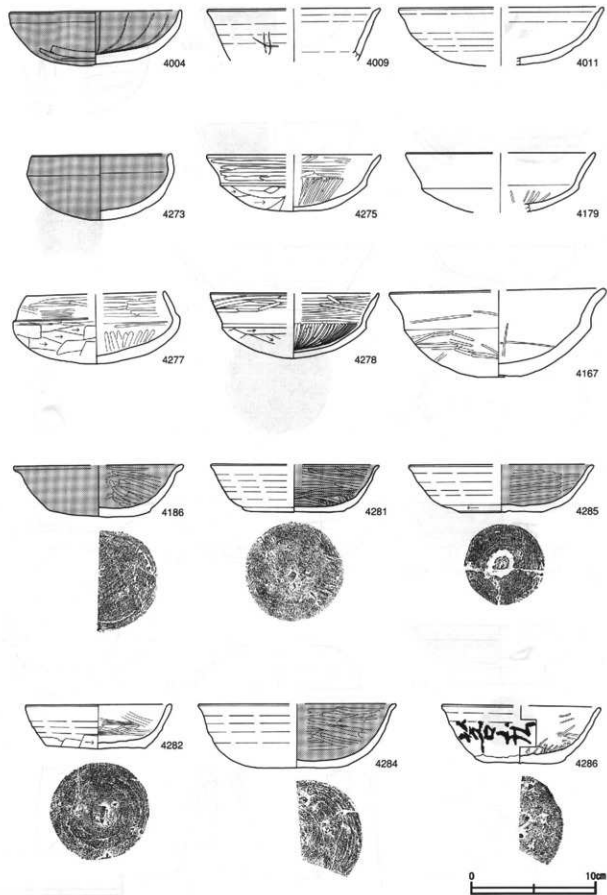
第404图 第1号濠跡出土遺物実測図(2)



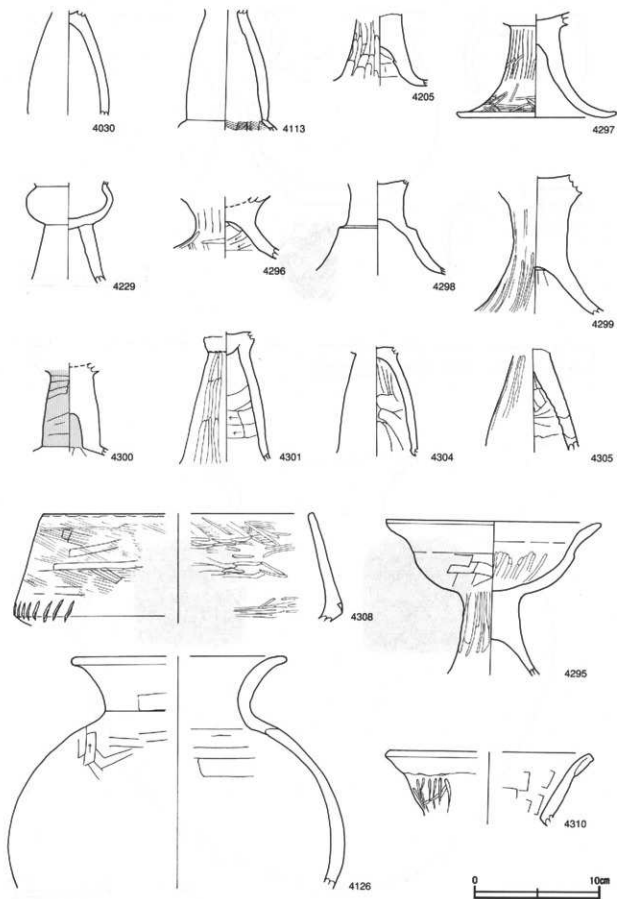
第405図 第1号濠跡出土遺物実測図(27)



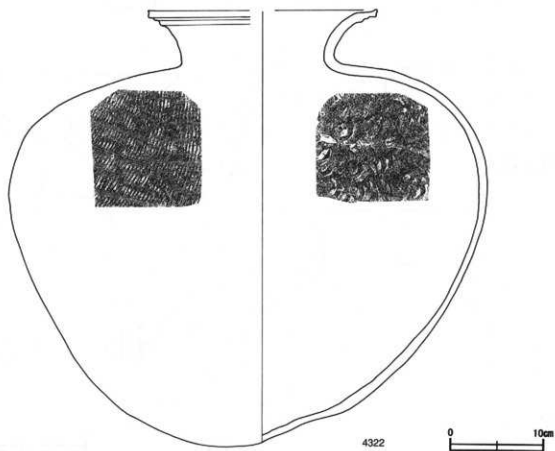
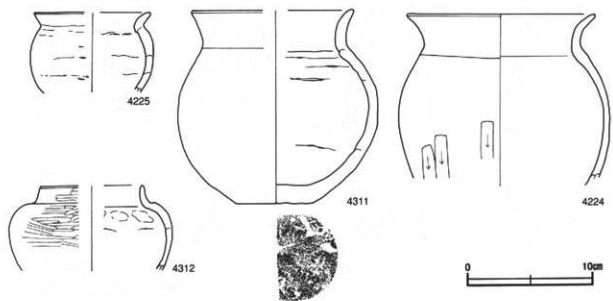
第406图 第1号濠跡出土遺物実測図(28)



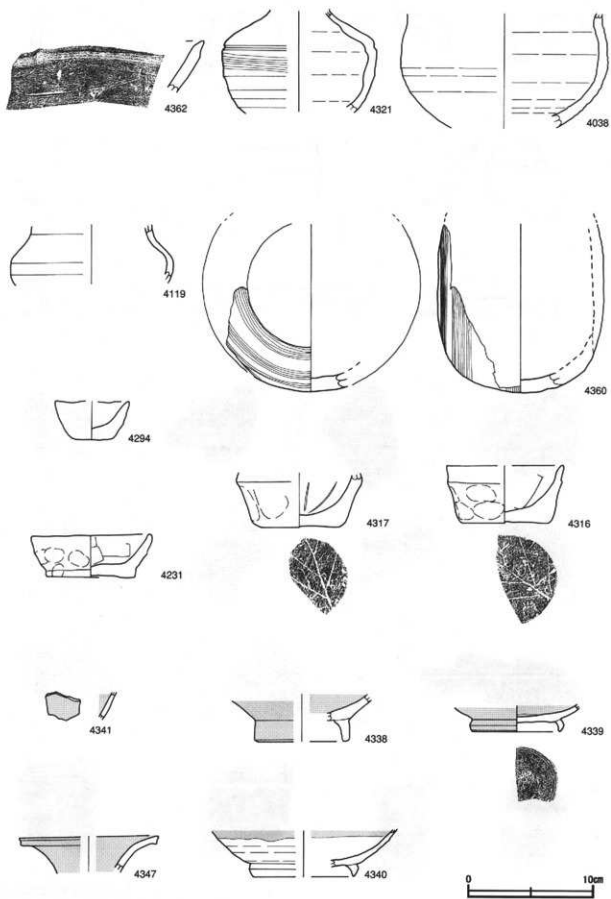
第407图 第1号濠跡出土遺物実測図(29)



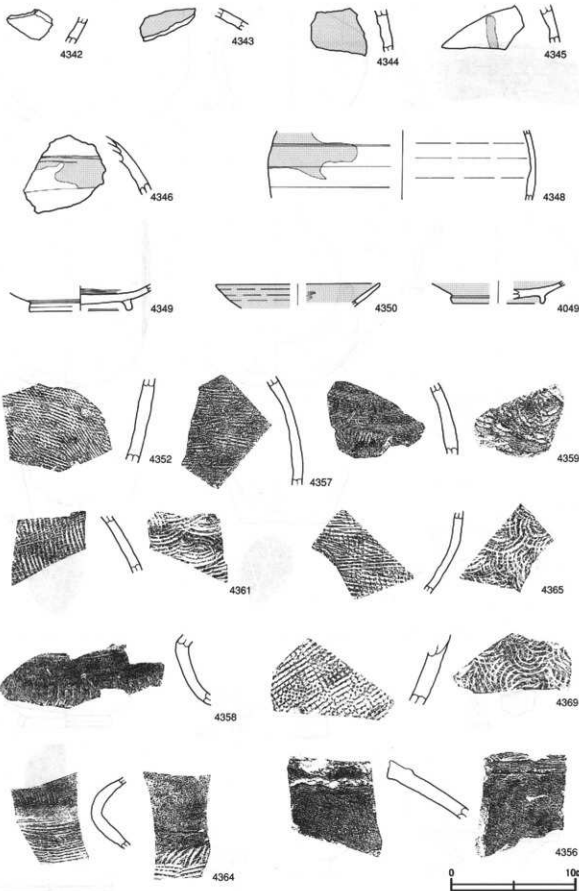
第408图 第1号濠跡出土遺物実測図(30)



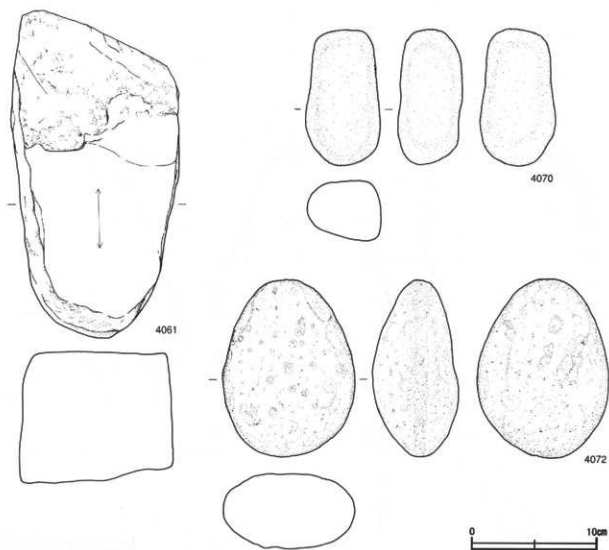
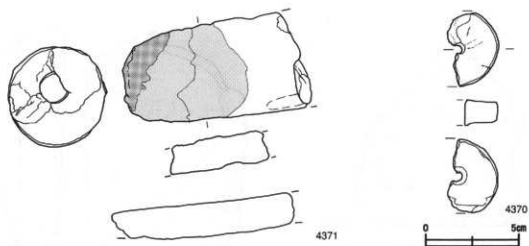
第409図 第1号漆跡出土遺物実測図(3)



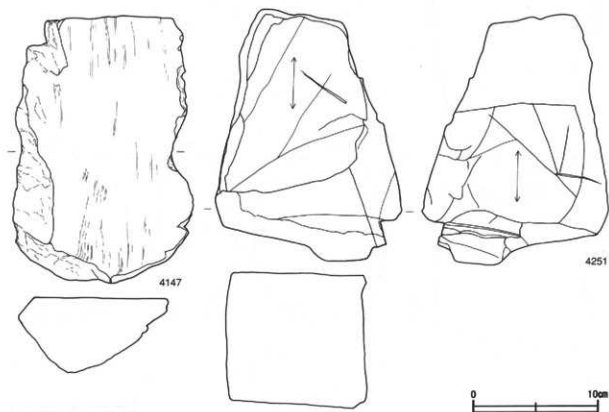
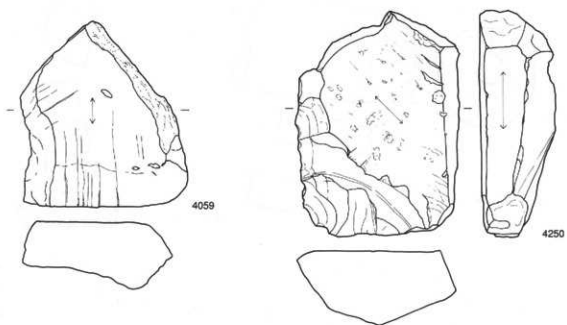
第410图 第1号濠跡出土遺物実測図(32)



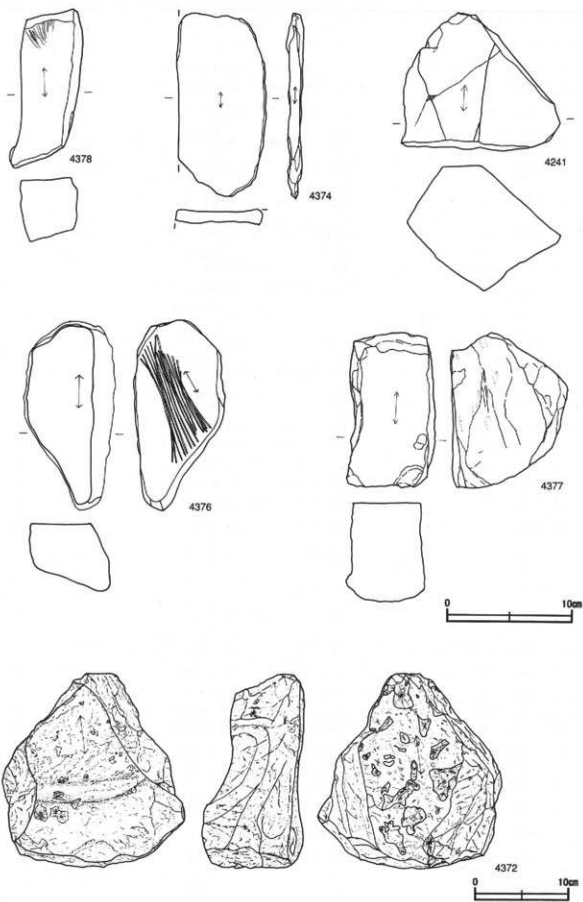
第411图 第1号漆迹出土遗物实测图(3)



第412图 第1号壕跡出土遺物実測図(3)



第413图 第1号濠跡出土遺物実測図(3)



第414图 第1号漆跡出土遺物実測図(36)

番号	種類	寸法	口径	高さ	底径	材質	仕上げ	色調	焼成	手法の概要	出仕位置	備考
4013	土師器	高坏	-	(6.6)	-	長石・石英	襷	普通	普通	脚部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土上層	13%
4016	土師器	高坏	12.0	(8.3)	12.0	雲母・長石・石英	襷	普通	普通	脚部外面ヘラ磨き	北西部覆土上層	40%
4017	土師器	高坏	-	(11.2)	-	長石・石英	明赤堀	普通	普通	脚部外面ヘラ磨き	北部覆土下層	30%
4018	土師器	高坏	-	(11.0)	-	雲母・長石	にぶい襷	普通	普通	脚部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土上層	50%
4020	土師器	高坏	-	(9.4)	-	雲母	明赤堀	普通	普通	脚部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土最下層	30%
4021	土師器	高坏	-	(8.5)	-	雲母・長石・石英	襷	普通	普通	脚部内面横ナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土上層	30%
4022	土師器	高坏	-	(9.3)	-	雲母・長石・石英	赤堀	普通	普通	脚部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土下層	30%
4023	土師器	高坏	-	(7.2)	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい襷	普通	普通	脚部外面ヘラ磨き	西部覆土上層	30%
4024	土師器	高坏	-	(9.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい襷	普通	普通	脚部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土上層	50%
4025	土師器	高坏	-	(9.8)	-	雲母・長石・石英	明赤堀	普通	普通	脚部内面ヘラナデ	西部覆土上層	30%
4026	土師器	高坏	-	(9.4)	-	長石・石英	にぶい襷	普通	普通	脚部内面横ナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土最下層	20%
4027	土師器	高坏	-	(9.1)	-	長石・雲母	にぶい襷	普通	普通	脚部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土中層	30%
4028	土師器	高坏	-	(8.6)	-	長石・石英	明赤堀	普通	普通	脚部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	北部覆土中層	30%
4029	土師器	高坏	-	(8.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい襷	普通	普通	脚部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土最下層	30%
4030	土師器	高坏	-	(8.4)	-	雲母・長石・石英	襷	普通	普通	脚部内面ナデ	西部覆土上層	30%
4031	土師器	高坏	-	(7.3)	-	雲母・長石・石英	襷	普通	普通	脚部内面ナデ	西部覆土上層	30%
4032	土師器	高坏	-	(8.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい襷	普通	普通	脚部内面ナデ	西部覆土下層	30%
4033	土師器	高坏	-	(7.1)	-	長石・石英	襷	普通	普通	脚部内面ナデ、外面ヘラ磨き	北部覆土中層	30%
4034	土師器	罎	-	(6.1)	3.3	雲母・長石	にぶい襷	普通	普通	脚部内面ナデ	西部覆土上層	65%
4035	土師器	罎	-	6.2	-	長石・石英	赤	普通	普通	体部内面ナデ、外面ヘラ削り	西部覆土下層 外面赤堀	40% 10%
4036	土師器	罎	-	(6.2)	2.1	雲母・長石・赤色粒子	にぶい襷	普通	普通	体部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	北部覆土最下層	50%
4037	土師器	壺	-	(11.8)	6.0	長石・石英	赤	普通	普通	体部外面ヘラ磨り	北部覆土下層	80% 10% 10%
4038	須恵器	平蓋	-	(9.1)	-	砂粒	黒い襷	普通	普通	内外面ロクロナデ	西部覆土中層	20%
4041	土師器	小形壺	[15.9]	(14.1)	-	雲母・長石	にぶい襷	普通	普通	外面・口縁部内面ハケ目、体部内面ヘラ磨り	覆土下層	30%
4042	土師器	壺	[18.7]	29.4	6.8	長石・石英	灰堀	普通	普通	口縁部横ナデ	北部覆土下層	70%
4043	土師器	壺	-	(20.2)	8.0	雲母・長石・石英	にぶい襷	普通	普通	内面ヘラナデ、外面ヘラ削り	西部覆土下層	40%
4044	土師器	壺	17.4	29.9	7.6	雲母・長石・石英	赤堀	普通	普通	口縁部横ナデ	北部覆土下層	60%
4045	土師器	壺	-	(29.7)	9.3	雲母・長石・石英	明赤堀	普通	普通	口縁部横ナデ	北部覆土下層	63%
4046	土師器	壺	-	(31.6)	6.5	雲母・長石・赤色粒子	赤堀	普通	普通	口縁部横ナデ	西部覆土下層	70%
4047	土師器	瓶	21.0	22.3	9.8	長石・石英・赤色粒子	明赤堀	普通	普通	内外面ヘラナデ、体部内面ヘラ磨り	西部覆土最下層	80% FL244
4048	土師器	瓶	-	(5.6)	3.8	石英	にぶい襷	普通	普通	外面ヘラ削り、厚孔式	覆土最下層	25%
4049	緑釉陶器	皿	-	(1.8)	[7.4]	白色粒子	長石・石英・赤色の襷	普通	普通	ロクロナデ	覆土中層	10% 黒粒状 厚約30号蓋式
4050	須恵器	壺	-	(9.3)	-	長石・赤色粒子	黒灰	普通	普通	外面磨り方向の叩き目	西部覆土下層	3%
4081	土師器	罎	[13.8]	3.6	4.8	雲母・長石・石英	襷	普通	普通	内外面ヘラ磨り、底部外面ヘラ削り	北部覆土最下層	60%
4082	土師器	罎	14.6	(6.1)	-	雲母・長石・石英	襷	普通	普通	内外面ヘラ磨き	覆土下層	70%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4083	土師器	坏	13.2	5.3	-	雲母・長石・石英	赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き、底部外面ヘラ磨り	北部覆土下層	60%
4084	土師器	坏	[16.0]	5.8	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	外面ヘラ磨り	覆土域下層	5% 内外面赤彩
4085	土師器	坏	12.3	5.3	-	長石・赤色粒子	明赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き、底部外面ヘラ磨り	覆土下層	50% PL240
4086	土師器	坏	[14.4]	7.7	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き、底部外面ヘラ磨り	北部覆土中層	20% 内外面赤彩
4087	土師器	坏	13.2	6.9	-	雲母・赤色粒子	褐色	普通	外面ヘラ磨り	北西部覆土下層	60%
4088	土師器	坏	[12.0]	6.5	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	外面ヘラ磨り	北部覆土下層	70%
4089	土師器	坏	[14.1]	7.4	-	雲母・長石・石英	褐色	普通	器面磨滅のため調整不明	北西部覆土下層	5% 赤彩あり
4090	土師器	坏	14.0	4.3	-	雲母・長石	明赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き、底部外面ヘラ磨り	北部覆土下層	100% PL240 内外面赤彩
4091	土師器	坏	14.1	4.5	-	長石	明赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き、底部外面ヘラ磨り	西部覆土中層	80% PL240 内外面赤彩
4092	土師器	坏	11.7	6.3	-	雲母・長石・石英	赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き、底部外面ヘラ磨り	北部覆土下層	65%
4093	土師器	坏	13.2	4.8	-	雲母・長石	赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き、底部外面ヘラ磨り	北西部覆土下層	95% PL240
4094	土師器	坏	[13.8]	4.1	-	雲母・赤色粒子	赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き、底部外面ヘラ磨り	北部覆土下層	35%
4095	土師器	坏	[14.4]	4.9	-	雲母・石英	明赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き、底部外面ヘラ磨り	北部覆土下層	50% 内外面赤彩
4096	土師器	坏	12.2	4.1	-	雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	底部外面ヘラ磨り	覆土下層	70%
4097	須恵器	蓋	[12.0]	(3.9)	-	長石・石英	灰	良好	ロクロナデ	北西部覆土下層	10% 自然釉
4098	須恵器	蓋	11.4	(4.6)	-	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	北西部覆土下層	40% 自然釉
4099	須恵器	坏	[15.6]	[5.1]	8.8	長石	灰黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り	北西部覆土上層	70%
4100	土師器	碗	11.6	9.9	-	雲母・石英・赤色粒子	褐色	普通	内面ヘラ磨き、外面ヘラ磨り後ヘラ磨き	北部覆土下層	88% PL243
4101	土師器	碗	13.4	8.6	5.0	雲母・長石・赤色粒子	明赤褐色	二次焼成	外面ヘラ磨り後ヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き	北部覆土中層	85% PL242
4102	須恵器	坏	[11.4]	3.5	-	長石	灰	良好	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	南西部覆土下層	30%
4103	須恵器	蓋	[12.7]	3.4	-	長石・赤色粒子	灰	普通	ロクロ成形	南西部覆土下層	60%
4104	土師器	高坏	[14.8]	(6.6)	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	外面ヘラ磨り、内面ヘラ磨き	北西部覆土下層	50%
4105	土師器	高坏	-	(9.1)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	北西部覆土最下層	40%
4106	土師器	高坏	-	(9.9)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	北西部覆土下層	50%
4107	土師器	高坏	-	(7.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	内面ナデ	西部覆土中層	35% 器面荒れ
4108	土師器	高坏	-	(8.3)	[13.2]	長石・赤色粒子	褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ	北西部覆土下層	40%
4109	土師器	高坏	-	(9.9)	-	長石・雲母	にぶい褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ	西部覆土中層	50%
4110	土師器	高坏	-	(10.2)	-	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き後ヘラ磨り、内面ナデ	北部覆土下層	50%
4111	土師器	高坏	-	(8.5)	-	石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ、輪縁みぞ	北部覆土下層	40%
4112	土師器	高坏	-	(11.0)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	内面ナデ、脚部内面ハケ目	北部覆土下層	50% 器面荒れ
4113	土師器	高坏	-	(9.5)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	内面ナデ、脚部内面ハケ目	西部覆土上層	60% 器面荒れ
4114	土師器	高坏	-	(8.9)	-	長石・雲母	褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ	北西部覆土中層	50%
4115	土師器	高坏	-	(8.6)	-	長石・雲母	褐色	普通	内面ナデ	覆土下層	50% 器面荒れ
4116	土師器	高坏	-	(10.4)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ	西部覆土下層	50%
4117	土師器	高坏	-	(4.8)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	内外面ハケ目黄褐色、輪縁みぞ	北西部覆土下層	30%

番号	種別	器種	口径	口径	高さ	底径	胴上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4118	須恵器	横瓶	12.6	(6.6)	-	長石・石英	黄灰	良好	口縁部各面ヘラナデ		北部覆土下層	20%
4119	須恵器	罐	-	(3.8)	-	砂粒	灰	良好	口縁部各面ヘラナデ		覆土中	10%
4120	土師器	甕	15.8	(6.2)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り		西部覆土中層	25%
4121	土師器	甕	13.7	(20.7)	-	砂粒	橙	二次焼成	外面ヘラナデ後ヘラ磨き、内面ヘラナデ		北部覆土中層	80% PL243 体部穿孔
4122	土師器	甕	[18.5]	(15.0)	-	緑・黄・赤粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り、内面輪襷み直し		北部覆土下層	50%
4123	土師器	甕	16.6	(13.5)	-	緑・黄・赤粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラ磨き、内面輪襷み直し		北部覆土下層	30%
4124	土師器	甕	19.5	(8.7)	-	緑・黄・赤粒子	明赤褐	普通	内面輪襷み直し		北部覆土下層	10%
4125	土師器	甕	[15.3]	(18.4)	-	長石・小礫	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り、内面ナデ		覆土下層	30%
4126	土師器	甕	[17.2]	(18.3)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラナデ		北部覆土上層	50%
4127	土師器	甕	[20.1]	(15.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部外面ヘラ削り、内面ナデ		北部覆土下層	15%
4128	土師器	小形甕	13.2	(14.3)	-	長石	明赤褐	普通	胴部外面ヘラ削り		北部覆土下層	80%
4129	土師器	小形甕	[12.7]	(12.6)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	内外面ヘラ磨き		北部覆土下層	60% 偏付者
4130	土師器	小形甕	11.8	(10.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	輪襷み直し		北部覆土下層	40%
4131	土師器	小形甕	12.7	(9.9)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	内面ヘラ磨き、輪襷み直し		北部覆土下層	45% 偏付者
4132	土師器	小形甕	12.5	(6.3)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	外面ヘラ削り		北部覆土下層	25%
4133	土師器	瓶	16.6	11.4	3.8	長石・石英・雲母	明赤褐	二次焼成	外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラナデ		西部覆土下層	35% PL244
4134	土師器	ミニチュア	-	(3.4)	1.6	長石・石英	明赤褐	普通	外面ヘラ削り		北部覆土下層	60%
4135	須恵器	環	[13.2]	(3.0)	-	長石	黒	良好	口縁部ナデ		覆土下層	5%
4166	土師器	環	13.5	6.1	3.4	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラ磨き		北部覆土中層	60%
4167	土師器	環	[17.1]	(7.0)	3.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内外面ヘラ磨き		北部覆土上層	35%
4168	土師器	環	[13.2]	5.7	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き		北部覆土上層	45%
4169	土師器	環	[15.0]	5.4	-	長石・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	内外面ヘラ磨き		北部覆土中層	25%
4170	土師器	環	(12.6)	4.7	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り		覆土中層	40%
4171	土師器	環	[14.6]	5.1	-	長石	明赤褐	普通	外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き		北部覆土中層	30%
4172	土師器	環	16.2	5.8	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	器面荒れ、口縁部外面ヘラ削り		北部覆土中層	40%
4173	土師器	環	13.8	6.0	-	長石・雲母	赤褐	普通	内外面ヘラ磨き		北部覆土下層	80%、PL241 内外面穿孔
4174	土師器	環	(11.2)	5.3	-	長石・雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き		北部覆土中層	40%
4175	土師器	環	[12.0]	4.9	-	長石	赤褐	普通	外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラ磨き		北部覆土中層	60%
4176	土師器	環	13.0	5.4	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面ヘラ削り、内面ヘラ具直し		西部覆土中層	100% PL240
4177	土師器	環	[15.0]	4.7	-	長石・雲母・赤色粒子	赤橙	普通	内面ヘラ磨き		西部覆土上層	30%
4178	土師器	環	13.7	4.9	-	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き		北部覆土下層	80% PL241
4179	土師器	環	14.0	5.7	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き		北部覆土下層	30%
4180	土師器	環	13.4	5.4	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き		北部覆土中層	80% PL241
4181	土師器	環	[14.0]	5.1	-	長石・雲母	明赤褐	普通	外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き		北部覆土下層	40%
4182	土師器	環	14.1	4.4	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラ磨き		北部覆土下層	80%、PL241 内外面穿孔
4183	土師器	環	14.8	4.5	-	雲母・スコリア	赤褐	普通	口縁部外面ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き		北部覆土下層	50% 混斑

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎十	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4184	土師器	環	[14.4]	4.4	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	口縁部外面ヘラ磨き、体部外面ヘラ磨り、内面ヘラ磨き	覆土中層	45%
4185	土師器	環	14.4	(4.7)	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	口縁部外面ヘラ磨き、体部外面ヘラ磨り、内面ヘラ磨き	西北部覆土中層	40%
4186	土師器	環	[18.1]	4.1	-	長石・石英・雲母	にぶい黄 昏	普通	内面ヘラ磨き、底部ヘラ切り	西南部覆土七層	50%
4188	須恵器	蓋	[10.4]	(4.3)	-	長石	灰	普通	ロクロナデ	覆土中層	5%、自然産
4189	須恵器	蓋	[11.6]	(4.0)	-	長石・赤色 粒子	黄灰	普通	天井部回転ヘラ磨り	覆土中層	20%
4190	須恵器	環	[10.0]	(4.5)	-	長石	にぶい 黄	不良	ロクロナデ、底部回転ヘラ 切り	覆土中層	20%
4191	須恵器	環	[8.2]	(2.2)	-	砂粒	灰	普通	ロクロナデ	北部覆土中層	5%
4192	土師器	椀	[15.4]	9.2	-	長石・雲母・ 赤色粒子	赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	西北部覆土中層	30%
4193	土師器	椀	[14.6]	9.9	-	雲母・赤色 粒子	赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	北部覆土下層	40%
4194	土師器	椀	[6.7]	6.8	-	長石・石英・雲 母・赤色粒子	明褐	普通	内外面ヘラ磨き	西北部覆土中層	60%
4195	土師器	椀	7.8	4.7	-	長石・赤色 粒子	明赤褐	普通	外面ナデ、内面ヘラ磨き	西北部覆土中層	70% PL243
4196	須恵器	椀	[10.2]	(3.8)	-	長石	灰白	不良	ロクロナデ	覆土中層	10%
4197	土師器	高台付 環	14.5	4.9	8.2	雲母・雲母・ 赤色粒子	赤褐	普通	ロクロ成形、高台貼り付け	西南部覆土上層	75% 外面磨き
4198	土師器	内台付 環	-	(2.1)	-	長石・雲母	にぶい 黄	普通	高台貼り付け	覆土中	5% 曇り
4199	須恵器	蓋	[13.0]	(3.4)	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ磨り	覆土上層	30%
4200	須恵器	蓋	-	(3.1)	-	長石・石英	灰	普通	ロクロ成形	北部覆土中層	20%
4201	土師器	高環	16.3	10.3	-	長石・石英	明赤褐	普通	内面ヘラ磨き、外面ヘラ磨り	北部覆土上層	60% PL242 長石転用
4202	土師器	高環	-	(9.0)	-	雲母・長石・ 石英	明赤褐	普通	内面ヘラ磨き	北部覆土F層	30%
4203	土師器	高環	-	(10.1)	[15.8]	雲母・長石・ 石英	黄	普通	摩滅のため調整不明	西北部覆土中層	60%
4204	土師器	高環	-	(10.3)	[12.0]	砂粒	黄	普通	内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	北部覆土下層	30%
4205	土師器	高環	-	(5.6)	-	雲母・長石・ 石英	にぶい 黄	普通	内面ナデ	北部覆土上層	20%
4206	土師器	高環	-	(6.0)	-	雲母・石英	にぶい 黄	普通	内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	北部覆土中層	20%
4207	土師器	高環	-	(9.2)	-	雲母・長石・ 石英	明赤褐	普通	内面ナデ、外面ヘラ磨き	北部覆土中層	20%
4208	土師器	高環	-	(9.4)	-	雲母・長石・ 石英	黄	普通	内面ナデ、外面摩滅	西部覆土最下層	20%
4209	土師器	高環	-	(9.3)	-	雲母・長石・ 石英	黄	普通	内面ナデ、外面摩滅	北部覆土中層	20%
4210	土師器	高環	-	(9.3)	-	雲母・長石	にぶい 黄	普通	摩滅のため調整不明	北部覆土下層	20%
4211	土師器	高環	-	(8.6)	-	雲母・長石・ 石英	黄	普通	摩滅のため調整不明	北部覆土下層	40%
4212	須恵器	高盤	-	(6.6)	(7.9)	砂粒	にぶい 黄	普通	ロクロナデ	覆土中層	20%
4213	須恵器	高環	-	(4.5)	-	砂粒	灰黄	普通	ロクロナデ	覆土中層	30%
4214	土師器	埴	-	(4.1)	-	雲母・石英	黄	普通	内面ハケ目・ナデ、外面ハケ 目	北部覆土中層	40%
4215	土師器	埴	-	(5.1)	4.5	雲母・長石・ 石英	にぶい 黄	普通	内面泡頭状、外面ヘラ磨り	覆土中層	90%
4216	土師器	埴	-	(2.9)	2.4	雲母・長石	にぶい 黄	普通	外面ヘラ磨り	覆土中層	40%
4217	須恵器	提瓶	-	(3.7)	-	石英・白色 粒子	灰	普通	外面磨き面	覆土中層	10%
4218	須恵器	皿	[10.0]	(4.3)	-	長石	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土中層	5%、内面に自然輪

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4219	銅器	甕	-	(4.8)	-	雲母・長石	赤灰	普通	ロクロナデ	覆土中層	3%、PL248 内面に白粉塗
4221	土師器	甕	18.6	(32.9)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	覆土中層	30%
4222	土師器	甕	15.0	(14.8)	-	砂粒	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	北部覆土下層	40%
4223	土師器	小形甕	14.5	12.2	6.0	砂粒・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	西部覆土中層	65%
4224	土師器	小形甕	15.1	(13.6)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ、外面ヘラ削り	北西部覆土中層	50%
4225	土師器	小形甕	[9.2]	(6.4)	-	砂粒	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	西部覆土上層	20%
4226	土師器	甕	[20.2]	15.8	[4.2]	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ、外面ヘラ削り	西部覆土中層	60%
4227	土師器	子粒土器	3.4	2.1	2.7	雲母・石英・赤色粒子	橙	普通	内外面ナデ	北西部覆土中層	100% PL243
4228	土師器	ミニチュア土器	-	(3.0)	2.8	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	内外面ナデ	覆土中層	43%
4229	土師器	高杯	-	(7.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	内外面ナデ	北西部覆土中層	60%
4231	土師器	手挽土器	9.5	3.5	7.0	雲母・長石・石英	橙	普通	内面ヘラ削り、外面指痕付	北西部覆土中層	80%
4232	土師器	手挽土器	[9.7]	5.3	[6.3]	長石	にぶい赤褐	普通	内面ヘラ削り	覆土中層	40%
4233	土師器	手挽土器	-	(4.6)	[3.5]	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	覆土中層	30%
4237	銅器	壺	-	(4.0)	-	雲母・赤色粒子	灰褐	普通	体部外面縦方向の平行印き	覆土中層	2%
4271	土師器	杯	15.5	5.9	-	長石	赤褐	普通	底部ヘラ切り接ヘラ磨き	北部覆土下層	96%、PL242 内外面赤褐
4272	土師器	杯	[15.2]	6.8	-	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	北西部覆土下層	70%
4273	土師器	杯	[11.6]	5.2	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	覆土上層	70%
4274	土師器	杯	13.6	4.8	-	石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	北西部覆土下層	70%
4275	土師器	杯	[13.3]	4.5	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	北西部覆土上層	50%
4276	土師器	杯	[12.0]	5.3	-	雲母・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	北西部覆土中層	60%
4277	土師器	杯	[11.0]	5.6	-	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	西部覆土中層	40%
4278	土師器	杯	[13.4]	5.2	-	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	覆土上層	43%
4279	土師器	杯	[12.0]	(8.1)	-	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り接ヘラナデ	覆土上層	30%
4280	土師器	杯	[13.0]	(5.5)	-	雲母・長石・赤色粒子	明褐	普通	口縁部横ナデ、体部内面ヘラ磨き	北西部覆土下層	30%
4281	土師器	杯	[12.8]	3.8	8.3	長石・石英	にぶい赤褐	普通	内面ヘラ磨き	北部覆土上層	70%
4282	土師器	杯	11.6	3.6	7.8	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土上層	80% PL242
4283	土師器	杯	11.5	3.3	5.9	雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土上層	80%
4284	土師器	杯	[15.8]	5.2	[6.5]	石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土上層	30%
4285	土師器	杯	[14.9]	3.9	6.2	長石・赤色粒子	灰褐	普通	内面ヘラ磨き、底部回転ヘラ切り	覆土上層	40%
4286	土師器	杯	[12.5]	4.6	7.3]	雲母	橙	普通	ロクロナデ	覆土上層	30% PL250 「善正」の帯
4290	土師器	杯	-	(2.9)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き	北西部覆土中層	5% 外面赤褐
4291	土師器	杯	[12.4]	(2.5)	-	雲母	にぶい赤褐	普通	ロクロナデ	覆土上層	3% 外面赤褐
4292	土師器	高台付杯	15.4	5.6	9.4	雲母・長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き	覆土上層	70% PL251 墨「西」
4293	土師器	杯	8.3	4.5	-	長石・石英	にぶい橙	普通	外面ヘラ目調整後ナデ	北西部覆土中層	60% PL243

番号	機別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4284	土師器	手捏土器	5.8	3.1	3.4	長石・石英・黒色粒子	にぶい殻	普通	内外面ナデ	覆土上層	90% PL243
4295	土師器	高杯	16.9	(12.3)	-	雲母・長石	赤褐	普通	口縁部横ナデ、体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り	北西部覆土上層	60%
4296	土師器	高杯	-	(5.0)	-	雲母・長石・石英	赤褐	普通	内面ヘラ削り、外面ヘラ磨き	北西部覆土上層	30%
4297	土師器	高杯	-	(8.3)	12.8	赤色粒子	明赤褐	普通	外面ヘラ磨き	北西部覆土上層	35%
4298	土師器	高杯	-	(7.6)	-	長石・石英・赤色粒子	赤	普通	内外面ナデ	北西部覆土中層	35%
4299	土師器	高杯	-	(11.1)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	北西部覆土中層	30%
4300	土師器	高杯	-	(7.4)	-	雲母・長石	赤	普通	外面ヘラナデ	覆土上層	3%、9割焼
4301	土師器	高杯	-	(10.2)	-	雲母・石英	褐	普通	内面ヘラ削り、外面ヘラ磨き	覆土上層	50%
4302	土師器	高杯	-	(7.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい殻	普通	内面ヘラ削り、外面ヘラ磨き	北西部覆土中層	30%
4303	土師器	高杯	-	(8.3)	-	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	北西部覆土下層	30%
4304	土師器	高杯	-	(8.7)	-	石英	明赤褐	普通	内面ヘラナデ、外面磨減	西部覆土上層	50%
4305	土師器	高杯	-	(8.2)	-	長石	褐	普通	内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	北西部覆土上層	20%
4306	土師器	高杯	-	(8.6)	-	長石	にぶい殻	普通	内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	北西部覆土下層	25%
4307	土師器	壺	-	(8.1)	3.6	雲母・長石・石英	にぶい殻	普通	内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	西部覆土下層	45%
4308	土師器	壺	[21.6]	(8.6)	-	長石・石英	明赤褐	普通	内面ヘラ磨き、外面ハケ目	覆土上層	5%
4309	土師器	壺	[15.8]	(8.4)	-	長石・石英	赤褐	普通	口縁部横ナデ、体部内面ハケ目	覆土最下層	20%
4310	土師器	壺	[15.7]	(5.8)	-	雲母・長石	褐	普通	内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き	覆土上層	15%
4311	土師器	壺	12.8	15.4	[6.0]	長石・石英・赤色粒子	殻	普通	口縁部横ナデ	覆土上層	60%
4312	土師器	壺	[8.0]	(6.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい殻	普通	内面磨減、外面ヘラ磨き	覆土上層	30%
4313	土師器	壺	16.6	(23.6)	-	雲母・長石・石英	にぶい殻	普通	口縁部横ナデ、内外面ヘラナデ	北西部覆土中層	70%
4314	土師器	壺	19.0	(26.6)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	北部覆土中層	50%
4315	土師器	壺	[18.2]	(26.9)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	北西部覆土中層	40%
4316	土師器	手捏土器	[9.4]	4.6	[7.0]	長石・石英	赤褐	普通	口縁部横ナデ、内面ヘラナデ、外面磨減、底部木葉痕	覆土上層	50%
4317	土師器	手捏土器	-	(4.4)	16.0	雲母・長石・石英	褐	普通	内面ヘラ当て痕、外面傾倒圧、底部木葉痕	覆土上層	45%
4318	須恵器	坏	-	0.6	-	長石	暗灰黄	普通	底部外面ヘラ削り	覆土上層	5% 焼片(一)
4319	須恵器	坏	[12.2]	(3.6)	-	砂粒	灰	良好	ロクロナデ	覆土上層	5%
4320	須恵器	壺	16.0	4.0	8.2	長石・石英	灰黄	普通	ロクロナデ	覆土中層	60%
4321	須恵器	瓶	-	(8.1)	-	長石・黒色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ、体部下端回転ヘラ削り	覆土上層	20%
4322	須恵器	壺	[24.0]	46.0	-	雲母・石英	灰	普通	口縁部ナデ	北西部覆土中層	60% PL244
4327	須恵器	壺	-	(16.4)	-	雲母・長石・砂粒	黄灰	普通	頸部ロクロナデ	覆土中層	5% 自然釉
4328	須恵器	壺	-	(11.5)	-	長石	黄灰	普通	頸部ロクロナデ	北西部覆土中層	5%、自然釉
4329	須恵器	壺	[36.0]	(14.4)	-	雲母・長石	灰	普通	口縁部ナデ	北西部覆土中層	5%
4330	須恵器	壺	[41.4]	(15.1)	-	雲母・長石・石英	暗灰黄	普通	口縁部ナデ	北西部覆土中層	5%
4331	須恵器	壺	[67.4]	(9.3)	-	砂粒	灰黄	普通	口縁部ナデ	北西部覆土中層	5%
4332	須恵器	壺	-	(10.3)	-	雲母・石英	灰黄褐	普通	頸部ナデ	北西部覆土中層	5%
4333	須恵器	壺	[24.9]	(9.6)	-	長石・石英	灰	普通	口縁部ナデ	北西部覆土中層	5%
4334	須恵器	壺	[30.2]	(14.1)	-	小粒・長石	黒	普通	口縁部ナデ	北西部覆土中層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
4336	須恵器	平瓶	-	(6.3)	-	長石・石英	黄灰	普通	把手部貼り付け残ナデ	北部覆土中層	5%
4337	土師器	坏	[12.6]	(4.0)	-	雲母・長石・石英	にぶ・黄黒	普通	体部下端回転ヘラ刮り	覆土上層	10% PL251(鎌倉「井刀」)
4338	灰輪陶器	瓶	-	(3.8)	[6.8]	砂粒	胎土:黄白、 灰:黄黒	良好	ロクロナデ、高台貼り付け	覆土上層	5% 二川産
4339	灰輪陶器	瓶	-	(1.0)	7.0	砂粒・雲母・ 黒色粒子	胎土:黄白、 灰:黄黒	良好	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	覆土上層	30% PL247 二川産
4340	灰輪陶器	瓶	-	(3.7)	[8.0]	砂粒・赤色 粒子	胎土:黄白、 灰:黄黒	良好	ロクロナデ	覆土上層	25% PL246 飯牧産
4341	灰輪陶器	瓶	-	(2.3)	-	砂粒	胎土:黄白、 灰:黄黒	良好	ロクロナデ	覆土上層	5%
4342	灰輪陶器	瓶	-	(2.0)	-	砂粒・雲母・黒色 灰・赤色粒子	胎土:灰黒	良好	ロクロナデ	覆土上層	3% 飯牧産
4343	灰輪陶器	瓶	-	(1.4)	-	砂粒・黒色 粒子	胎土:灰黒、 灰:黄黒	良好	ロクロナデ	覆土上層	3% 飯牧産
4344	灰輪陶器	瓶	-	(2.4)	-	砂粒	胎土:黄白、 灰:黄黒	良好	ロクロナデ	覆土上層	5% 飯牧産
4345	灰輪陶器	瓶頸	-	(2.9)	-	雲母	胎土:赤色、 灰:黄黒	良好	ロクロナデ	覆土上層	5% 飯牧産
4346	灰輪陶器	瓶頸	-	(4.7)	-	砂粒	胎土:黄白、 灰:黄黒	良好	ロクロナデ	北部覆土上層	5% 飯牧産
4347	灰輪陶器	長頸瓶	[11.0]	(2.8)	-	砂粒・黒色 粒子	胎土:オリーブ 灰:黄黒	良好	ロクロナデ	覆土上層	5% PL248 飯牧産
4348	灰輪陶器	長頸瓶	-	(5.6)	-	長石・黒色 粒子	胎土:黄白	良好	ロクロナデ	覆土上層	5% 飯牧産
4349	緑輪陶器	瓶	-	(2.0)	-	砂粒	胎土:オ リーブ灰	良好	底部回転系切り後、高台貼り付け	覆土上層	25% PL246 飯牧産、異径 90号型式
4350	緑輪陶器	瓶	[13.0]	(1.0)	-	砂粒	胎土:オ リーブ灰	良好	ロクロナデ	覆土上層	3% 尾北産
4352	須恵器	壺	-	(6.6)	-	砂粒	黄灰	普通	外面横位・斜位の平行叩き	覆土上層	5% PL256
4353	須恵器	壺	-	(6.0)	-	砂粒	黄灰	普通	外面横位の平行叩き	北部覆土中層	5% PL257
4354	須恵器	壺	-	(9.3)	-	砂粒	黄灰	普通	外面斜位の平行叩き	北部覆土中層	5% PL256
4355	須恵器	壺	[16.0]	(4.1)	-	小礫・長石	黄灰	普通	口縁部ナデ	覆土上層	5%
4356	須恵器	壺	-	(4.7)	-	長石	灰	良好	内面輪組み痕	覆土上層	5%
4357	須恵器	壺	-	(8.3)	-	砂粒	黄灰	普通	外面横位の平行叩き	覆土上層	5%
4358	須恵器	壺	-	(5.5)	-	砂粒	灰	普通	外面13本1單位の溝輪状工具による成形文	覆土上層	5%
4359	須恵器	壺	-	(5.1)	-	砂粒	灰	普通	外面横位の比線文、内面同心門の当て具痕	覆土上層	5%
4360	須恵器	提瓶	-	(13.1)	-	長石・砂粒	灰	普通	ロクロナデ	北部覆土上層	5%
4361	須恵器	壺	-	(5.1)	-	砂粒	にぶ・黄黒	普通	内面格子目叩き、内面同心門の当て具痕	覆土上層	5%
4362	須恵器	壺	-	(4.6)	-	砂粒	黄灰	普通	口縁部ロクロナデ	覆土上層	3%
4364	須恵器	壺	-	(5.0)	-	砂粒	灰	普通	口縁部ロクロナデ	覆土上層	5%
4365	須恵器	壺	-	(7.0)	-	砂粒	黄灰	普通	外面横位平行叩き、内面同心門の当て具痕	覆土上層	3% PL256
4367	須恵器	壺	-	(6.3)	-	砂粒	黄灰	普通	外面斜位の平行叩き	北部覆土中層	5% PL256
4369	須恵器	壺	-	(5.5)	-	砂粒	灰	普通	外面格子目叩き、内面同心門の当て具痕	覆土上層	5% PL256

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	行	数	出土位置	備考
4051	磁石	10.1	7.1	3.9	464.0	蛇紋岩	紙面2面, その他は割離面		覆土最下層	
4052	磁石	12.1	8.4	3.5	388.0	砂岩	紙面4面, その他は割離面		南西部覆土下層	
4053	磁石	11.0	11.2	2.7	447.0	砂岩	紙面2面, その他は割離面		北西部覆土下層	
4054	磁石	10.4	11.3	7.2	744.0	砂岩	紙面2面, その他は割離面		北西部覆土下層	
4055	磁石	14.0	14.9	8.3	1710.0	砂岩	紙面4面, その他は割離面		北西部覆土最下層	PL268
4056	磁石	12.9	10.1	9.0	1550.0	砂岩	紙面1面		北西部覆土下層	
4057	磁石	21.5	8.3	6.6	1330.0	玄武岩	紙面3面, その他は割離面		覆土下層	
4058	磁石	18.8	8.3	6.2	1690.0	砂岩片	紙面2面, その他は割離面		西部覆土下層	
4059	磁石	14.9	13.3	5.4	1470.0	凝灰岩	紙面1面, その他は割離面		南西部覆土中層	
4060	磁石	24.0	17.3	8.7	4160.0	砂岩	紙面1面, その他は割離面		南西部覆土中層	
4061	磁石	26.2	13.5	10.5	5270.0	砂岩	紙面1面, その他は割離面		南西部覆土中層	
4062	磁石	27.2	21.1	10.7	7840.0	砂岩	紙面2面, その他は割離面		南西部覆土中層	
4063	磁石	30.9	33.1	7.2	11200.0	凝灰岩	紙面2面, その他は割離面		南西部覆土下層	
4064	磁石	27.9	15.9	15.0	7200.0	砂岩	紙面2面, その他は割離面		南西部覆土最下層	
4065	磁石	20.2	12.8	13.2	2470.0	砂岩	断面台形		北西部覆土下層	
4066	磁石	22.8	13.7	12.4	4560.0	砂岩	断面台形		北西部覆土下層	
4070	磨石	10.3	6.0	5.1	486.0	磨石	使用面3面		南西部覆土中層	
4072	磨石	14.4	10.4	11.8	976.0	安山岩	使用面3面		南西部覆土下層	
4139	磁石	4.8	3.5	1.3	41.2	凝灰岩	紙面5面, 穿孔		北西部覆土下層	PL269
4140	磁石	4.9	6.4	5.55	307.0	磨石	紙面1面		北西部覆土中層	
4141	磁石	9.8	6.2	6.2	377.0	砂岩	紙面2面		北西部覆土下層	
4142	磁石	13.1	6.5	2.5	224.0	凝灰岩	紙面2面		北西部覆土下層	
4143	磁石	15.0	7.1	5.7	594.0	砂岩	紙面1面		北西部覆土下層	
4145	磁石	23.0	10.9	6.7	1730.0	凝灰岩	紙面2面		北西部覆土上層	
4147	磁石	21.3	14.2	6.0	2180.0	粘板岩	紙面1面		南西部覆土上層	
4148	磁石	23.3	17.4	6.4	2750.0	砂岩片	紙面1面		西西部覆土中層	
4149	磁石	18.2	14.4	10.6	3090.0	砂岩	紙面1面		北西部覆土下層	
4150	磁石	13.7	20.1	11.0	3630.0	砂岩	紙面1面, 被熱面		西部覆土中層	
4151	磁石	13.7	28.1	8.9	4240.0	砂岩	紙面1面		北西部覆土下層	
4152	白石	15.7	12.6	9.2	2360.0	砂岩	2面が平直		北西部覆土下層	
4153	磁石	20.1	14.3	17.8	4350.0	砂岩	1面が平直		北西部覆土下層	
4156	磁石	19.9	23.2	6.3	4330.0	砂岩	紙面2面, その他は割離面		北西部覆土下層	
4209	磁石	13.2	4.4	3.5	309.0	石灰岩	紙面3面, その他は割離面		西部覆土中層	
4240	磁石	11.0	11.4	6.1	735.0	砂岩	紙面2面, その他は割離面		北西部覆土中層	
4241	磁石	11.1	12.6	10.0	1260.0	砂岩	紙面1面, その他は割離面		北西部覆土上層	
4242	磁石	13.7	10.5	6.6	1420.0	砂岩	紙面1面, その他は割離面, 叩き底有り		西部覆土下層	
4244	磁石	10.3	16.1	8.0	1800.0	砂岩	紙面1面, その他は割離面		北西部覆土上層	
4245	磁石	12.8	15.0	8.3	2070.0	砂岩	紙面1面		北西部覆土下層	
4246	磁石	18.4	11.4	2.7	695.0	粘板岩	紙面1面, その他は割離面		覆土中層	PL265
4247	磁石	18.7	10.4	10.6	1930.0	石灰岩	紙面1面, その他は割離面		北西部覆土中層	
4248	磁石	18.3	11.6	5.6	1900.0	砂岩	紙面1面, その他は割離面		北西部覆土中層	
4249	磁石	17.2	9.7	7.6	1820.0	玄武岩	紙面1面, その他は割離面		北西部覆土中層	PL268
4250	磁石	18.0	13.0	5.8	1810.0	砂岩	紙面2面, その他は割離面, 磨石未用		北西部覆土中層	
4251	磁石	20.0	15.0	10.7	4000.0	石灰岩	紙面2面, その他は割離面		西部覆土上層	
4252	磁石	19.1	15.6	7.7	3090.0	砂岩	紙面2面, その他は割離面		北西部覆土下層	
4253	磁石	13.9	4.3	3.8	233.0	砂岩	紙面1面, その他は割離面		覆土中層	
4254	磁石	13.1	9.0	2.0	181.5	凝灰岩	紙面2面, その他は割離面		覆土中層	
4372	石皿	(20.5)	(19.3)	(10.3)	(4040.0)	安山岩	磁石・円石使用		北西部覆土上層	

番号	器 種	長 さ	幅	厚 さ	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
4373	砥石	16.7	10.2	7.6	1380.0	砂岩	砥面1面,その他は割離面	北西部覆土中層	
4371	砥石	14.7	7.3	1.2	215.0	凝灰岩	砥面1面,その他は割離面,全体的に被熱痕	北西部覆土中層	
4375	砥石	24.5	18.3	9.5	4140.0	玄武岩	砥面2面,その他は割離面	北西部覆土中層	
4376	砥石	15.1	7.2	5.4	613.0	砂岩	砥面2面,その他は割離面	覆土上層	
4377	砥石	12.4	6.9	8.0	1130.0	砂岩	砥面1面,その他は割離面	覆土上層	
4378	砥石	12.6	6.0	3.0	570.0	砂岩	砥面1面,その他は割離面	覆土上層	
4379	砥石	9.3	10.6	4.6	359.0	須志礫	砥面1面,未製品境台からの転用	北部覆土上層	PL269
4380	砥石	12.6	6.5	7.5	1170.0	砂岩	砥面2面,その他は割離面	北部覆土上層	

番号	器 種	種 厚 さ	孔 径	重 量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考	
4137	土埴	5.6	3.6	1.0	63.9	砂粒	外面ナテ	南西部覆土中層	PL260
4162	紡錘車	4.0	2.2	0.6	34.7	砂粒	付加糸一種の厚体による輪文	覆土下層	
4238	紡錘車	[5.0]	1.1	[1.2]	(14.3)	砂粒	外面ナテ	覆土中層	
4370	紡錘車	(3.9)	1.34	0.4	13.5	長石・石英	外面ナテ	覆土上層	
4371	輪形Fi	14.8	7.9	1.9~2.6	708.0	砂粒	ガラス質付着	覆土上層	

番号	器 種	長 さ	幅	厚 さ	重 量	特 徴	出土位置	備 考
4138	平瓦	(9.1)	(4.2)	2.3	141.0	布目痕	覆土上層	

番号	器 種	長 さ	幅	厚 さ	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
4073	板材	(14.6)	(12.0)	(4.0)	-	木	板状	覆土最下層	PL278
4074	木杭 ^o	(14.5)	3.7	4.5	-	木	加工痕あり	南西部覆土最下層	PL278
4075	曲げ物 ^o	3.12	2.6	0.5	-	木	刻み二条	南西部覆土最下層	PL278
4076	曲げ物 ^o	5.3	1.7	0.4	-	木	刻み五条	南西部覆土最下層	PL278
4077	曲げ物 ^o	3.7	1.1	0.3	-	木	刻み三条	南西部覆土最下層	PL278
4078	曲げ物 ^o	4.7	2.0	0.4	-	木	刻み一条	南西部覆土最下層	PL278

(5) 土坑

今回の調査では、1071基の土坑を確認した。そのうち、古墳時代に属すると考えられる土坑は33基である。ここでは、これらの土坑の中で、遺構形態に特徴のある土坑や注目される遺物が出土した土坑5基について、その概要を記述する。また、それ以外の土坑については実測図と土層解説を記載し、位置や規模等については一覧表で紹介する。

第215号土坑 (第415図)

位置 調査区中央部のJ13h4区に位置し、南東部への緩やかな斜面部に立地している。

重複関係 第1号盗跡を掘り込み、北東コーナー部は第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.0m、短軸1.9m、深さ0.8mの方形状を呈し、主軸方向はN-79°-Wである。底面は中央部に向かって緩やかな斜面を示し、壁は直立気味に立ち上がっている。

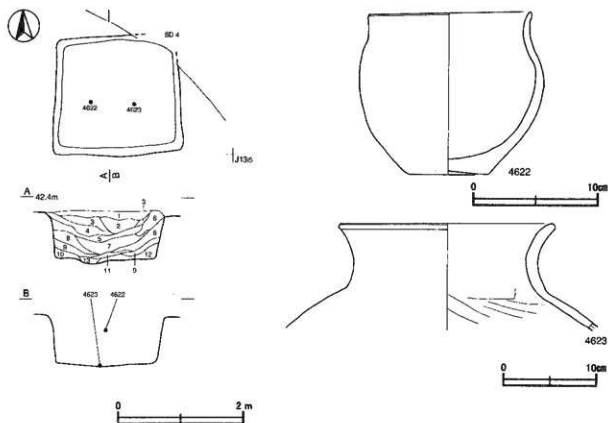
覆土 13層からなり、ブロック状の人為的な堆積状況を示している。

土層解説

- | | | |
|----|-----|---------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、焼酒バミス・ロームブロック微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量、砂質粘土ブロック少量 |
| 3 | 出褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 5 | 黒褐色 | 焼酒バミス少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 | 黒褐色 | 焼酒バミス中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 | 黒褐色 | 炭化粒子・焼酒バミス少量、ローム粒子微量 |
| 8 | 暗褐色 | 焼酒バミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 9 | 暗褐色 | 焼酒バミス中量、炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 10 | 黒褐色 | 焼酒バミス少量 |
| 11 | 黒褐色 | ローム粒子・焼酒バミス微量 |
| 12 | 暗褐色 | 粘土ブロック・焼酒バミス少量、ローム粒子微量 |
| 13 | 黒褐色 | ローム粒子・焼酒バミス・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片206片(坏33, 埴4, 甕146, 小形甕23), 須恵器片13片(坏4, 甕9), 土製品1点(紡錘車), 礫片13点, 炭化材が出土している。4623は中央部の床面から破片で出土し, 4622は中央部覆土中層から出土しているが, いずれも投棄されたものである。

所見 床面から出土した甕の形状から, 時期は6世紀中葉と考えられる。



第415図 第215号土坑出土遺物実測図

第215号土坑出土遺物観察表 (第415回)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4622	土師器	小形甕	12.9	12.9	6.2	長石・石英	赤褐色	二次焼成	口縁部内・外面横ナデ	中央部覆土中層	70% PL237
4623	土師器	甕	22.4	(11.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ, 体部内面ヘラナデ	中央部床面	5%

第217号土坑 (第416回)

位置 調査区中央部のJ13c3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1号濠跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.8m, 短径1.9mほどの楕円形で、長径方向はN-90°-Eである。深さは0.8m前後で、壁は外方向に開き気味に立ち上がっている。底面より一段高い部分には、柱状穴のピットが3か所見られる。

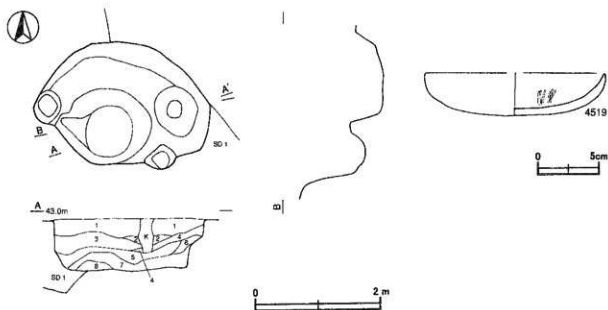
覆土 8層からなり、ブロック状の人為的な堆積状況を示している。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼沼バミス・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 焼沼バミス・ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 3 灰褐色 ロームブロック・焼沼バミス少量, 炭化物・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 焼沼バミス中量, ロームブロック少量, 炭化物微量
- 5 灰褐色 焼沼バミス少量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量, 焼沼バミス少量
- 7 灰褐色 焼沼バミス中量, 炭化物少量, 焼土ブロック, ロームブロック微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼沼バミス多量

遺物出土状況 覆土中より、土師器坏片1点が出土している。

所見 検出されている土器が1点であるため時期の特定が困難であるが、6世紀までには廃絶されたと考えられる第1号濠跡を掘り込んでいることや、出土土器から、時期は7世紀前半に位置づけられる。



第416回 第217号土坑出土遺物実測図

第217号土坑出土遺物観察表 (第416図)

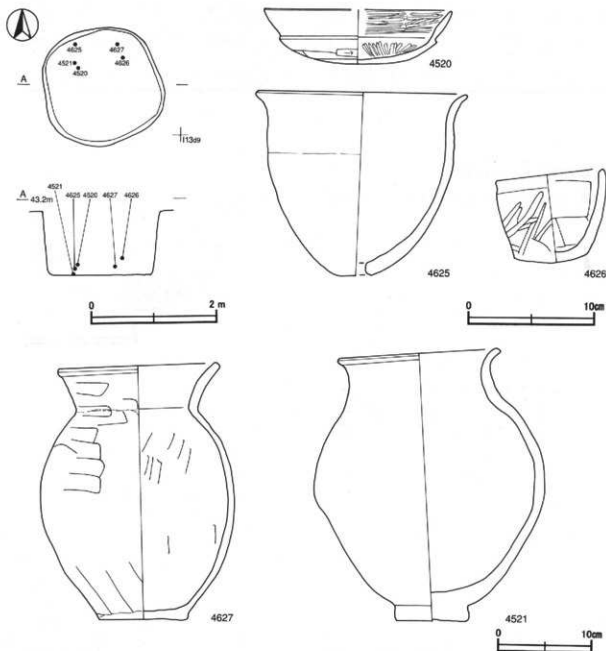
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4519	土師器	坏	[14.2]	3.8	-	雲母・赤色 靑子	にぶい黄緑	普通	体部外面ヘラナデ、内面ヘラ 磨き	覆土中	50%

第244号土坑 (第417図)

位置 調査区中央部のI13c8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1号濠跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺が1.9mほどの隅丸方形で、長径方向はN-20°-Wである。深さは1.0mで円筒状を呈している。底面は平坦で、横はやや外傾して立ち上がっている。



第417図 第244号土坑出土遺物実測図

覆土 第1号壕跡を調査中に確認されたため、覆土の調査は実施されていない。

遺物出土状況 土師器片16点(坏4, 手捏土器カ1, 甕10, 瓶1)が覆土中から出土している。4521は北寄りの床面から出土し、4520・4625などは覆土下層から出土している。

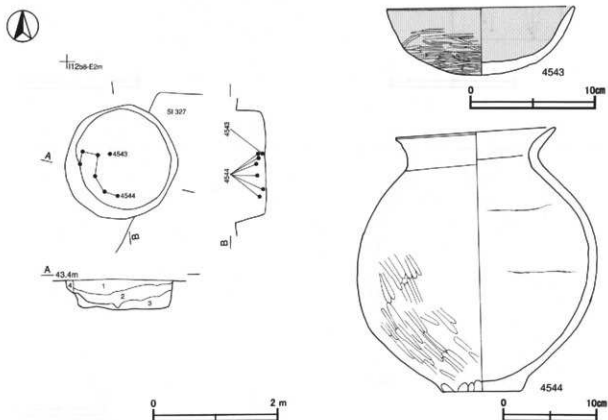
所見 第1号壕の調査中に確認されたため、覆土の状況については不明であるが、土器の出土状況などから人為的な堆積と想定され、時期については7世紀前葉と考えられる。

第244号土坑出土遺物観察表(第417図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4520	土師器	坏	[14.8]	4.3	-	雲母・長石	赤褐色	普通	体部外面へラ削り, 内面放射状の縮文	北部下層	20%
4521	土師器	甕	16.7	28.8	7.4	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面へラ磨き, 口縁部横ナデ	北部床面	90% PL238
4625	土師器	瓶	16.6	14.5	2.6	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	体部下層へラ削り, 内面へラナデ, 単孔式	北部下層	100% PL239
4626	土師器	手捏土器カ	8.4	7.5	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部外面へラ磨き, 内面へラナデ	北部下層	100% PL238
4627	土師器	甕	16.6	26.3	9.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	二次焼成	体部内・外面へラナデ	北部下層	98% PL238

第531号土坑(第418図)

位置 調査区中央部のI12b8区に位置し、平坦部に立地している。



第418図 第531号土坑出土遺物実測図

重複関係 第327号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 直径1.8mほどの円形を呈し、底面は平坦である。壁高は46cmほどで、壁はやや外傾して立ち上がる。

覆土 4層からなり、ロームブロックを含んだ人為堆積の状況を示している。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片146点（坏46、器台2、甕98）、礫片2点が出土している。4543は本跡のほぼ中央部の床面、4544は床面よりやや浮いて南西部に散らばった破片が接合したものである。ほとんどの遺物は、廃絶に伴い埋土と共に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は5世紀中葉の第327号住居跡を掘り込んでいることと、出土土器から、時期は7世紀前半と考えられる。

第531号土坑出土遺物観察表（第418図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
4543	土師器	坏	14.8	5.4	-	黒緑・赤色 粒子	明赤褐色	普通	体部内・外面ヘラ磨き	中央部床面	80%、円200 内外面赤彩
4544	土師器	甕	16.9	28.2	8.4	赤褐色・灰石・ 石炭	にぶい褐色	普通	体部外面ヘラ磨き、口縁部横ナデ	南西部下層	40%

第1132号土坑（第419図）

位置 調査区南部のL12i6区に位置し、南東への緩斜面部に立地している。

規模と形状 長径0.8m、短径0.7m、深さ0.4mほどの円形を呈している。底面はほぼ平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

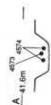
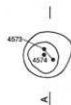
覆土 埋没谷に焼土が発見されて確認されたため、覆土の調査は実施されていない。

遺物出土状況 土師器片23点（坏1、埴1、甕21）が焼土層下から出土している。4573・4574は、焼土ブロック下の覆土下層から出土している。

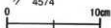
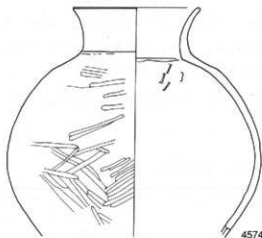
所見 土器は焼土下の覆土下層から出土したものであり、土器を遺棄した後には火が燃されたものと考えられる。出土土器から時期は6世紀初頭と考えられるが、周辺にほとんど同時期の遺構が見られないことから、地鎮的な祭祀行為の痕跡とも想定できる。

第1132号土坑出土遺物観察表（第419図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
4573	土師器	埴	12.0	16.8	3.4	赤褐色・灰石・ 赤褐色粒子	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ磨き	中央部下層	95% 24.2%
4574	土師器	甕	22.4	5.7	-	石炭・赤褐色	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	中央部下層	40%



TL126



第419図 第1132号土坑出土遺物実測図

(6) 井戸跡

第14号井戸 (第420図)

位置 調査区北部のH13a3区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 長径1.9m、短径1.7mのほぼ円形を呈し、主軸方向はN-64°-Wである。確認面から底面まで1.9mほど掘り込まれ、壁は底面から外傾して立ち上がる。

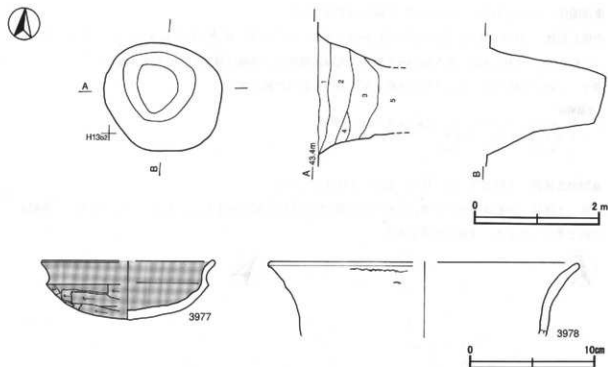
覆土 5層からなり、上部の1~4層は鹿沼バミスを含んだ人為堆積の状況を示しているが、5層以下は自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 鹿沼バミス中量
- 2 黒褐色 鹿沼バミス少量
- 3 褐色 鹿沼バミス多量
- 4 黒褐色 鹿沼バミス少量
- 5 黒色 ローム粒子・焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片99点(坏27, 高台付坏1, 甕71), 須恵器片6点(坏3, 甕3), 礫1点, 粘土塊2点が出土している。3977・3978は覆土中層から出土しているが、混入したものである。

所見 土器はいずれも覆土中層から出土した混入品で、時期を明確にすることはできないが、時期は古墳時代後期と想定される。



第420図 第14号井戸跡出土遺物実測図

第14号井戸跡出土遺物観察表（第420図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3977	土師器	坏	[13.8]	4.7	-	雲母・長石・石英	褐色	普通	口縁部横ナデ	覆土中層	25%
3978	土師器	甕	[24.5]	(5.9)	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ	覆土中層	5%

(7) 溝跡

第9号溝跡（第421図）

位置 調査区北部中央のG13h8～G13i8区に位置している。

重複関係 第118号住居，第11号井戸，第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 G13h8区から南方向（N-10°-E）に直線的に延びる。確認された長さは8mほどである。

規模は上幅0.32～0.66m，下幅0.22～0.5m，深さ約5cmで，底面は平坦である。

覆土 1層のみ確認されたが，堆積状況は判然としない。

土層解説

1 板硝褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡は出土遺物がないため，時期の詳細は不明であるが，西へ5mに位置する古墳時代後期の住居跡と主軸方向が一致することから，時期は古墳時代後期と考えられ，居住区域を区画する機能を果たしていたものと想定される。

第21号溝跡（第421図）

位置 調査区北部中央のH13d8区に位置している。

重複関係 第124号住居、第638号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第124号住居、第638号土坑に掘り込まれているため、確認された長さは4.0mほどである。規模は上幅2.5m、下幅1.8m、深さ約30cmを測り、底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

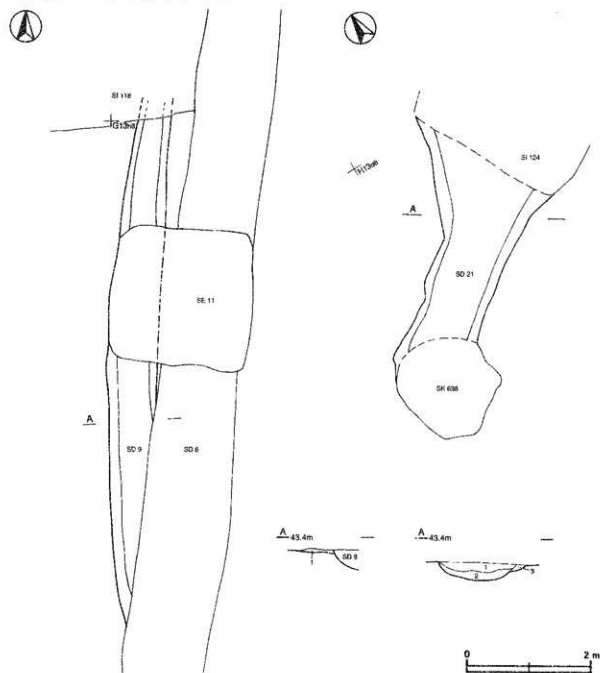
覆土 3層に分層され、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微塵
- 2 極暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微塵
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片5点(坏3、甕2)が出土している。

所見 本跡は7世紀前葉から中葉に比定される第124号住居に掘り込まれていることから、時期は7世紀前葉以前と考えられるが、詳細は不明である。



第421図 第9・21号溝跡実測図

3 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡226軒と竪穴遺構5軒、掘立柱建物跡27棟、土坑250基、井戸跡5基、溝跡3条を確認した。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡 (第422・423図)

位置 調査区北部北東寄りのF14d0区に位置し、平川部に立地している。

重複関係 第13号住居跡を掘り込み、第4・5号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸は約3.2mで、北側部分が調査区域外のため、南北軸は3.0mだけが確認され、N-8°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。東壁高は20cmで、遺存部はほぼ直立して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、第4・5号住居跡の床下から壁溝が確認され、全周していたと推定される。

竈 検出されなかったが、調査区域外に存在していると考えられる。

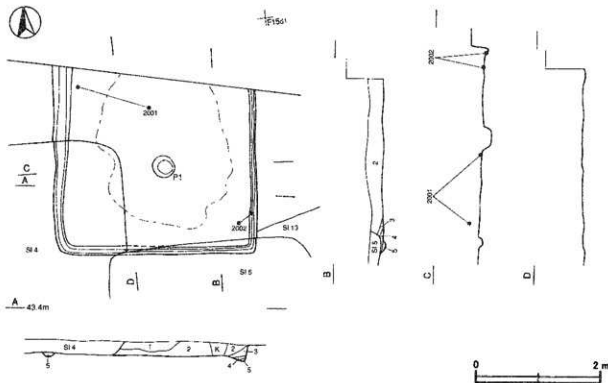
ピット 1か所。深さは14cmで、ほぼ中央部に位置し、性格は不明である。

覆土 5層からなり、ロームブロックや焼土ブロックを含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

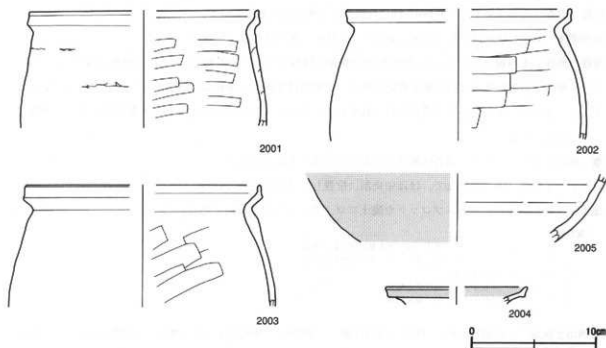
遺物出土状況 土師器片408点(坏47, 高台付碗35, 甕326), 須恵器片6点(甕片), 灰釉陶器片3点(長頸瓶)



第422図 第3号住居跡実測図

2. 短頸壺1)が出土している。床面からの出土は少なく、北西部と南東部の覆土中層を中心にほぼ全域に散在した状態で出土し、本跡廃絶後に投棄されたものと考えられ、2001・2003・2004・2005が相当する。また、2002は東壁際床面から出土しており、本跡に伴う遺物であると考えられる。

所見 本跡は北側部分が調査区外に延びているため、全体の形状を把握することはできなかったが、本跡の時期は、出土土器の形状から10世紀前葉と考えられる。



第423図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表 (第423図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2001	土師器	壺	[18.2]	(9.3)	-	雲母・石英・長石	にぶい橙	普通	口辺部横ナデ, 体部外面ナデ, 内面ヘラナデ	中央部床面, 西壁際中層	10%
2002	土師器	壺	[17.8]	(10.4)	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口辺部横ナデ, 体部外面ナデ, 内面ヘラナデ	南東部床面	10%
2003	土師器	壺	[18.6]	(9.7)	-	石英・長石	橙	普通	口辺部横ナデ, 体部外面ナデ, 内面ヘラナデ	北西部覆土中	10%
2004	灰輪陶器	鉢類	[11.2]	(1.4)	-	緻密	灰白・オリーブ灰	普通	口辺部ロクロナデ, 輪は刷毛塗り	北西部覆土中	5%
2005	灰輪陶器	短頸壺	-	(5.6)	-	緻密	オリーブ黄	良好	ロクロナデ, 輪は刷毛塗り	北西部覆土中	5%

第4号住居跡 (第424図)

位置 調査区北部北東寄りのF14d9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第3・6・9・13号住居跡を掘り込み、第5号住居、第6・7号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.9m、短軸約3.6mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は10~18cmと低い。

床 ほぼ平坦で、北東コーナー部を除いて、床面の全体が硬化している。壁溝は認められない。

竈 東壁南寄りに構築されているが、第5号住居に壊されてほとんど遺存しておらず、火床面と思われる長軸

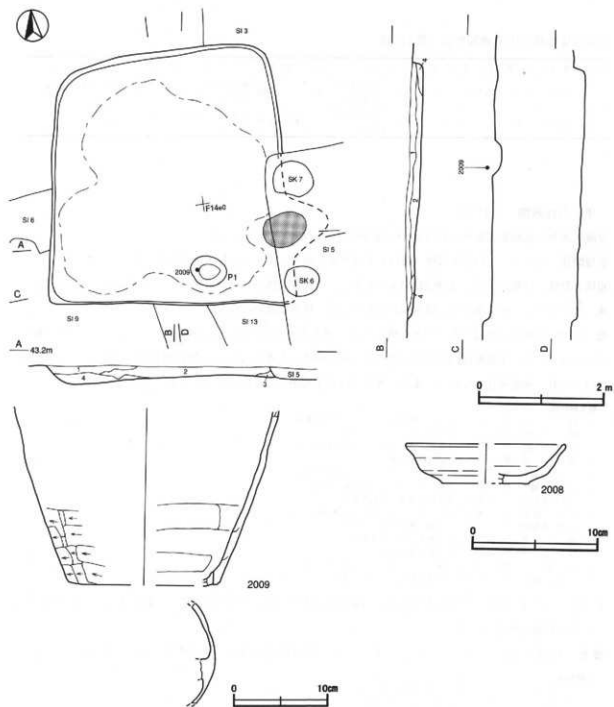
36cm、短軸28cmほどの焼土面が確認されただけである。焼土面は床面と同じ高さであり、焼き締まっている。

ピット 1か所。深さ14cmで、性格は不明である。

覆土 4層からなり、ロームブロックや焼土ブロックを含み、不自然な堆積状況を呈することから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量



第424図 第4号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片347点(坏60, 高台付碗36, 甕251), 須恵器片6点(甕2, 甌4), 鉄滓1点, 礫14点が南東部の覆土中層を中心に出土しており, 本跡焼絶後に投棄されたものと焼絶後の埋め戻しの段階で混入したものと大別できる。南東部覆土中層から出土した2009は, 破片がほぼまとまって出土したため, 本跡焼絶後に遺棄されたものと考えられる。北西部覆土中から出土した2008は, 割れ口が摩滅していることから, 混入したものと考えられる。

所見 竈は第5号住居跡に掘り込まれて埋滅したが, 火床面を確認することはできた。また, 床面がほぼ全域にわたって硬化していることや竈の火床面が明瞭に確認できたことから, 存続期間は長かった可能性がある。時期は, 出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表(第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2008	土師器	坏	12.6	3.2	6.8	雲母・長石・赤色粒子	靑	普通	体部ロクロナデ, 底部阿転ヘラ切り	北西部覆土中	30%
2009	須恵器	甕	18.6	15.7		雲母・石英・長石	にぶい褐色	不良	体部下端ヘラ削り, 内面ヘラナデ	南東部中層	10%

第5号住居跡(第425図)

位置 河合区北部北東寄りのF14e0区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第3・4・13号住居跡, 第14号土坑を掘り込み, 第6・7号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.2m, 短軸約3.0mの方形で, 主軸方向はN-88°-Eである。壁高は12~14cmと低い。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 東壁の中央部に付設されており, 焚1部から煙道部まで約100cm, 袖部幅約85cmである。壁外への掘り込みは60cmほどで, 土層断面中の第8層が天井部の崩落上と考えられる。火床部は床面を皿状に6cmほど掘りくぼめられ, 赤変硬化している。また, 煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

覆土層解説

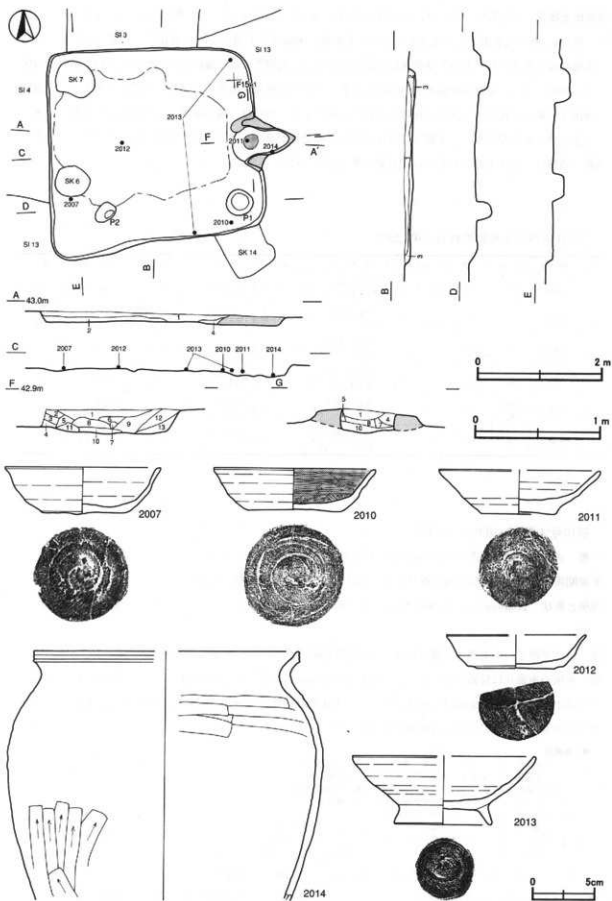
- 1 褐 色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 3 にぶい赤褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 6 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・砂質粘土粒子少量
- 7 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化物微量
- 8 にぶい褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土中量
- 9 にぶい赤褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 10 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 11 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量
- 12 赤 褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 13 にぶい褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 2か所, P1・P2は深さ14cm・20cmであり柱穴であると考えられるが, 対応するピットが見つからないため性格は不明である。

覆土 4層からなり, ロームブロックや焼土ブロックの含有状況から, 人為堆積であると考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子中量



第425图 第5号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片337点(坏73, 高台付碗49, 甕215), 須恵器片6点(甕5, 甌1), 鉄滓1点, 石器1点(砥石), 燧6点が竈とその周辺部, さらに南東部の床面及び下層を中心に散在した状態で出土しており, 本跡発掘時に遺棄されたものと廃絶後に投棄されたものに大別される。竈内出土の2011・2014と西壁際の床面出土の2007, また, 南東部床面出土の2010が前者, さらに中央部床面出土の2012, 北壁際の覆上下層と南壁際下層出土の破片を接合した2013は後者にそれぞれ相当する。2011は, 竈火床部から伏せられた状態で出土し, 火熱を受けた痕跡などから, 支脚として使用された可能性が高く, 2014も竈で使用されたものと考えられる。所見 時期は, 出土土器の形状から10世紀後葉と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表(第425図)

番号	種別	形状	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の行役	出土位置	備考
2007	土師器	坏	12.2	3.8	6.8	雲母・石英・赤色砂子	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後, ナデ	西壁際床面	70%
2010	土師器	坏	12.6	3.4	7.1	雲母・石英・粘土	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	南東部床面	100% P1.224
2011	土師器	坏	12.6	3.5	5.8	雲母・赤色砂子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後, ナデ	竈火床部	70%
2012	土師器	坏	11.0	2.7	6.2	石英・石英・赤色砂子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後, 体部下端ヘラ削り	中央部床面	40%
2013	土師器	高台付碗	14.6	5.5	7.8	雲母・石英・赤色砂子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼付付, ナデ	北東部・西壁際下層	60%
2014	土師器	甕	21.2	19.8	-	雲母・石英・砂粒	黄	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	竈火床部	30%

第10号住居跡(第426・427図)

位置 調査区北部北東寄りのF14g0区に位置し, 平垣部に立地している。

重複関係 第13・15号住居跡を掘り込み, 第11・13・16号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約4.9m, 短軸約4.4mの長方形で, 主軸方向はN-105°-Eである。また, 壁高は2~10cmと低い。

床 ほぼ平床で, 中央部から竈にかけてよく踏み固められている。壕溝は認められない。

竈 東壁の南寄りに付設されており, 袖部幅は約130cmである。煙道部は第13号土坑に掘り込まれているが, 火床部から煙道部まで50cmほどが確認できた。火床部は胆状に4cmほど掘りくぼめられ, 水硬化している。

煙道部の立ち上がりについては確認できなかった。

覆土層解説

- 1 にぶい赤褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 2 にぶい赤褐色 ローム砂子・焼土ブロック・炭化砂子少量
- 3 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化砂子微量
- 4 灰赤色 ロームブロック・焼土砂子少量, 炭化物微量
- 5 灰赤色 焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量, 炭化砂子微量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・焼土ブロック微量
- 8 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂粒・粘土ブロック微量

ピット 3か所。P1~P3は深さが16~26cmで, 一部は柱穴の可能性がある。

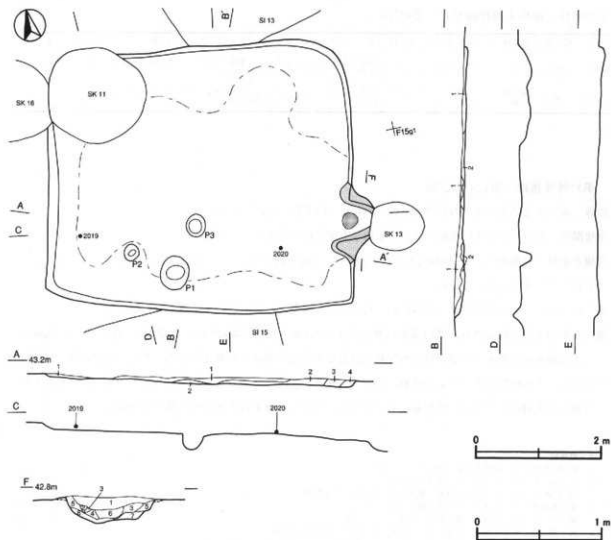
覆土 4層からなり, ロームブロックや焼土を含み, ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

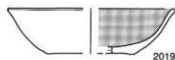
- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック、焼土ブロック、炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片348点(坏100, 高台付椀62, 甕186), 須恵器片9点(甕), 灰軸陶器片1点(長頸瓶)が南側部分の覆土下層を中心に散在して出土している。床面からの出土は少なく、本跡廃絶後に投棄されたものと本跡廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものに大別できる。2019は西壁際の覆土下層, 2020は電前床面から出土しており、本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、高台付椀の形状から10世紀後葉と考えられる。



第426図 第10号住居跡実測図



2019



2020



第427図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表 (第427図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2019	土師器	坏	[13.2]	3.6	[7.0]	石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	西壁下層	40%
2020	土師器	高台付 碗	[14.7]	5.7	6.5	雲母・赤色 粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け、ナデ	竈前床面	30%

第11号住居跡 (第428・429図)

位置 調査区北部北東寄りのF15g1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第24・25号土坑を掘り込み、第13号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約2.7m、短軸約2.6mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は22~30cmで、各壁とも直立して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部がよく踏み固められている。東壁の一部を除いて壁溝が認められる。

竈 北壁中央部に付設され、焚口部から煙道部まで約108cm、袖部幅約96cmで、壁外への掘り込みは約80cmある。土層断面図中第6・7層が粘土の含有状況から天井部の崩落土と考えられる。また、袖部の遺存状態は良好である。火床面は北壁ラインの外側に位置し、皿状に2cmほど掘りくぼめられている。また、火床面と袖部の内側は赤変硬化しており、使用頻度の高さがうかがえる。煙道は火床部から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量
- 2 灰褐色 ロームブロック、焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量
- 4 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック少量
- 6 灰褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 灰褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 8 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量

ピット 2か所。P1は深さが20cmで、性格は不明である。P2は深さが10cmであり、竈の右袖部に位置しているが、性格は不明である。

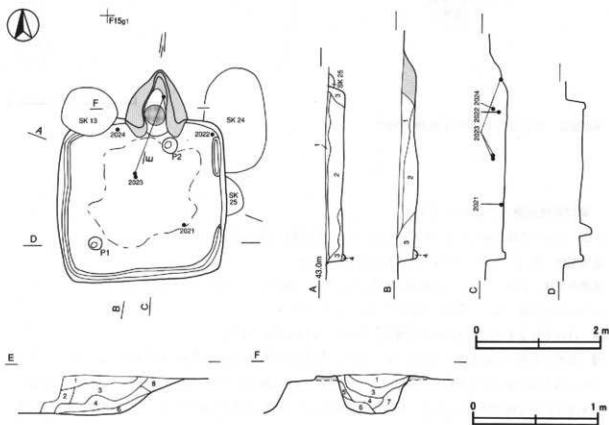
覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片467点（坏63, 高台付碗42, 鉢9, 甕342, 甌11）, 須恵器片23点（甕22点, 甌1点）が, 竈の火床部及び竈周辺部を中心にほぼ全域に散在している。これらは, 本跡廃絶時に遺棄されたものと本跡廃絶後に投棄されたものに大別できる。竈の火床部からは火熱を受けた土師器の甕や甌の破片が50点ほど出土しており, 竈で使用されていたと推定され, 本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また, 体部外面に「田前カ」と墨書された2021が南東部床面から出土し, 本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。北東壁際の覆土下層から出土した2022, 北壁際中層から出土した2024, 竈煙道部と竈前中層から出土した破片を接合した2023は投棄されたものである。

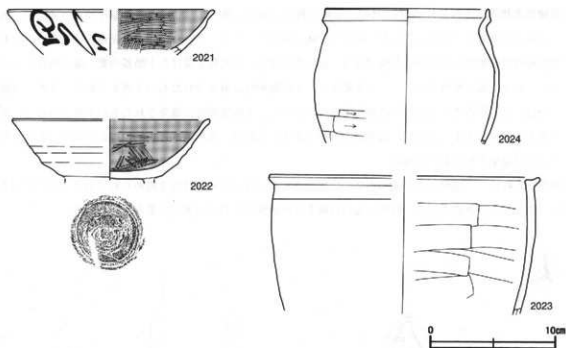
所見 本跡は, 一辺が3m未満の小型の住居であるが, 竈の火床部は焼き締められており, 居住期間が長い住居であることが推測される。時期は高台付碗などの形状から見て10世紀中葉と考えられる。



第428図 第11号住居跡実測図

第11号住居跡出土遺物観察表（第429図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2021	土師器	高台付碗	[16.4]	3.6	-	石英・長石	にぶい黄緑	普通	体部外面口クロ整形, 内面へラ磨き	南東部床面	20% 墨書「田前カ」
2022	土師器	高台付碗	[15.6]	(4.8)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	底部回転へラ切り後, 高台貼り付け	北壁際下層	40%
2023	土師器	鉢	[21.4]	(10.9)	-	石英・長石	褐	普通	口縁部横ナデ, 体部内面へラナデ	竈中央部中層	20%
2024	土師器	小形甕	10.8	(10.7)	-	長石	にぶい赤橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面上位ナデ・下位ケズリ, 内面ナデ	北壁際中層	30%



第429図 第11号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡（第430・431図）

位置 調査区北部北東寄りのF15g1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第24・39・41・47号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東コーナー部は調査区域外であるが、一辺約2.9mの方形で、主軸方向はN-5°-Eである。

壁高は40cm前後であり、各壁とも直立して立ち上がっている。

床 ほほ平坦な床で、中央部がよく硬化している。壁溝は認められない。

竈 北壁中央部のやや東寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで94cm、袖部幅は100cmである。壁外への掘り込みは56cmほどである。火床面は、床面と同じ高さの地山面を使用し、赤変硬化している。煙道部は、火床部から急な傾斜で立ち上がり、粘土の含有状況から上層断面図中の第1・2・5が天井部の崩落土に相当する。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化物微量
- 2 暗赤褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量・焼土粒子微量
- 5 暗赤褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土ブロック微量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 10 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子、炭化粒子少量・粘土粒子微量
- 11 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 12 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 13 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 14 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

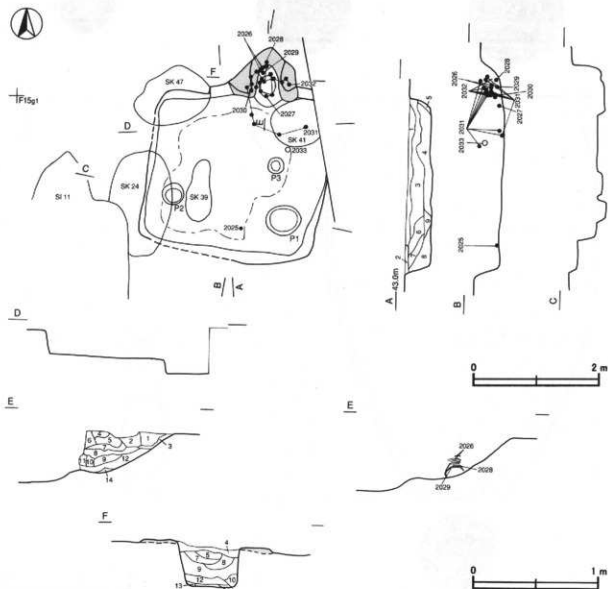
ピット 3か所。P1～P3は深さが11cm～16cmであり、一部柱穴の可能性も考えられるが性格は不明である。

覆土 9層からなり、ロームブロックや焼土粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

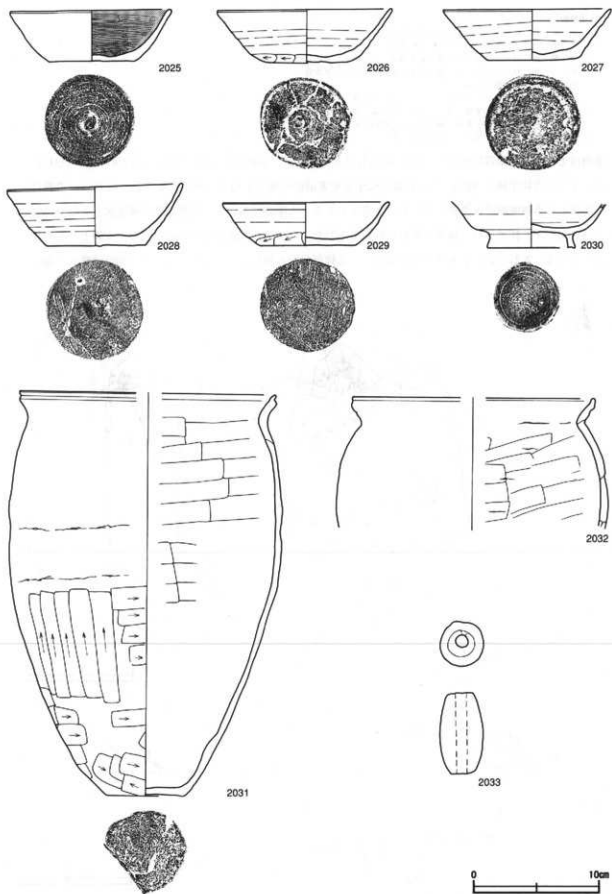
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック・焼土粒子多量、粘土ブロック少量
- 5 褐色 焼土粒子少量
- 6 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 7 褐色 焼土粒子多量、ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 8 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片267点（坏64、高台付坏8、甕195）、須恵器片33点（坏10、高台付坏2、甕21点）、土製品1点（管状土鍾）、礫35点が主に竈の火床部や竈前面の覆土下層から出土している。これらの遺物は、出土状況から本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。火床部において、土師器甕の破片20点とともに2026・2028・2029が、伏せられた状態で重ねられて出土した。いずれも火熱を受けているため、支脚としての使用が想定される。2027・2030も火熱を受けており、支脚部分から外れたものと考えられる。2032は竈火床部、2031



第430図 第12号住居跡実測図



第431图 第12号住居跡出土遺物実測図

は竈火床部と竈正面中層からほぼまとまって出土した破片を接合したものであり、竈で使用されたものと考えられる。南部下層から出土している2025、竈前面上層から出土している2033は、出土状況からみて本跡発掘後に投棄されたものと考えられる。

所見 竈内から出土した須恵器坏の形状から、時期は9世紀後葉と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表（第431図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2025	土師器	坏	12.7	4.2	6.8	長石・石英・赤色粘土	明赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り、体部内面ヘラ磨き	南部下層	90% PL234
2026	須恵器	坏	13.8	4.4	7.0	石英	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ磨り、底部回転ヘラ切り後、ナデ	竈火床部	90% PL235
2027	須恵器	坏	13.2	4.1	7.0	石英・長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後、ナデ	竈火床部	90% PL234
2028	須恵器	坏	14.0	4.8	7.8	雲母・石英・長石	にぶい黄褐色	普通	底部二方向のヘラ磨り後、ナデ	竈火床部	90% PL225
2029	須恵器	坏	13.3	3.5	7.4	雲母・石英・長石	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ磨り、底部二方向のヘラ磨り	竈火床部	100% PL225
2030	須恵器	高台付坏	-	(3.4)	7.0	石英・長石	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ磨り、底部回転ヘラ切り後、高台磨り付、ナデ	竈火床部	40%、 火障有り
2031	土師器	甕	[20.2]	32.1	6.2	雲母・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面上位ナデ、下位ヘラ磨り後、ナデ	竈火床部、 竈前中層	00%
2032	土師器	甕	19.2]	(10.3)	-	雲母・石英・長石・赤色粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラナデ、口縁磨き	竈火床部	20%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2033	管状土埴	6.5	3.6	1.0	75.0	土	ナデ、橙色を呈する	竈前面上層	

第17号住居跡（第432図）

位置 調査区北部北東の寄りF14g6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第8・291号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南北軸は約5.0mで、西側部分が調査区域外に延びているため、東西軸は2.7mほどが確認できた。東側部分の形状からN-0°を主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は44~55cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 全体的にやや軟弱であり、硬化面は確認されなかった。壁溝は壁際を巡っており、全周していたと推測される。

竈 調査区域外に付設されていると考えられる。

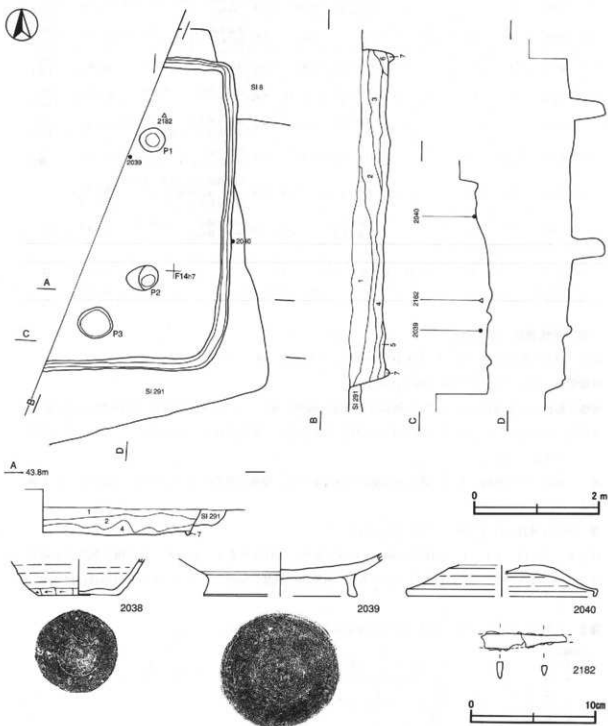
ピット 3か所。P1・P2は深さが48cm・44cmであり、主柱穴と考えられるが、北西側に想定されるピットは見つからなかった。P3は深さが14cmであり、東壁際中央部に位置しており、出入り口施設に伴うものと考えられる。

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 赤褐色 ロームブロック中層、焼土粒子・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中層、焼土粒子・炭化物少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中層、炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中層、焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片72点(坏15, 甕57), 須恵器片38点(坏25, 蓋4, 盤1, 甕7, 瓶1), 鉄製品1点(刀子), 礫7点が, 北部下層を中心にほぼ全域に散在している。下層から出土している遺物が多いため, 本跡廃絶後早い段階で投棄されたものと考えられ, それらは北部の覆土下層から出土した2039・2182が相当する。2039は内面に朱墨痕があり, 碗に転用したものである。北部覆土中から出土した2038は, 割れ口が摩滅しているため混入したものと考えられる。2040は東壁際床面から出土したため, 本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。



第432図 第17号住居跡・出土遺物実測図

所見 朱墨痕のある盤は硯に転用していたものと考えられ、本道跡の当該期を考える上で良好な資料といえる。時期は、出土土器から9世紀前後と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表 (第432図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	焼成	子法の特徴	出土位置	備考
2038	須恵器	坏		(2.9)	6.4	砂粒	灰	普通	底部回転ヘラ切り後、一方向のナデ	北部覆土中	30% 火押有り
2039	須恵器	高台付坏	-	(3.2)	5.7	砂粒	灰	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け、ナデ	北部下層	30%火押有り 内面朱墨痕、 砥石市
2040	須恵器	蓋	[15.0]	(2.5)	-	砂粒	灰	普通	天井部回転ヘラ切り	東壁際床面	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2182	刀子	6.8	1.3	0.4	(6.55)	鉄	切先・末尾欠損、両側	北部下層	

第18号住居跡 (第433図)

位置 調査区北部北東寄りのF14i6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第19・22号住居跡を掘り込み、第31・89号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.0m、短軸約2.9mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は10cm前後と低い。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて、床面全体が硬化している。壁溝は北壁際の西半分と西壁際及び南壁際の一部に認められる。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで約100cm、補部幅は約86cm、壁外への掘り込みは約60cmである。壁外に天井部の一部が確認でき、土層断面図中の第2・3・5・6層は粘土の含有状況から見て天井部の崩落土と考えられる。火床部は床面を皿状に12cmほど掘りくぼめられ、赤変硬化している。また、煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|---------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | 粘土ブロック多量、炭化粒子微量 | 9 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 10 赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 11 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 13 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 14 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |

ピット 1か所。深さは18cmで、ほぼ中央部に位置している。

覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

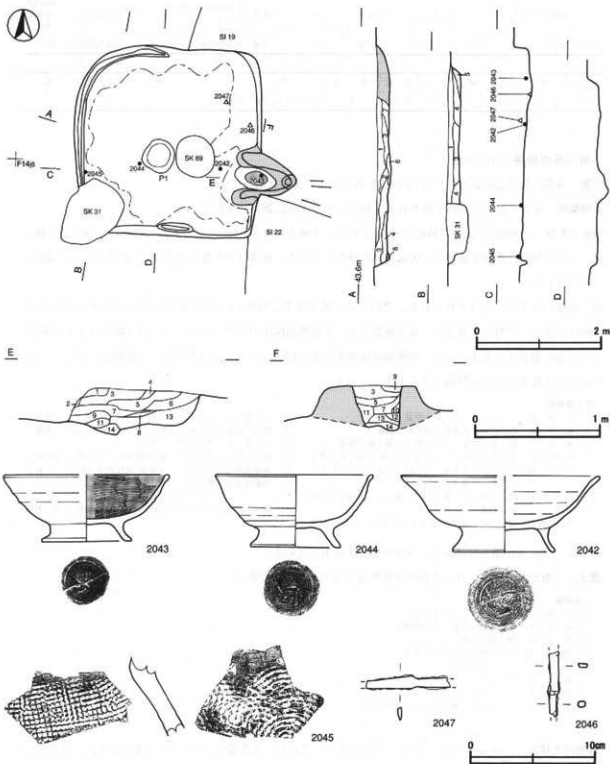
土層解説

- | | |
|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 褐色 | ロームブロック少量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 8 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片239点(坏49,高台付碗75,甕115),須恵器片1点(甕),鉄製品2点(刀子1,鉄線1),礫13点が竈周辺と中央部の覆土下層から出土している。西壁際の覆土下層出土の2045、北部中層出土の

2047は、割れ口が摩滅していることから、混入したものと考えられる。竈前床面出土の2042、中央部床面出土の2044、竈北側床面出土の2046は、床面からまとめて出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、2043は竈火床部から伏せられた状態で出土し、火熱を受けていることから、支脚として使用されたものと考えられる。

所見 本跡は、床面がほぼ全域にわたって硬化していることや竈の火床面の状態などから見て、存続期間が長い可能性が考えられる。時期は、高台付碗などの形状から10世紀中葉と考えられる。



第433図 第18号住居跡・出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表（第433図）

番号	類別	器種	口径	器高	取径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2042	土師器	高台付碗	[15.8]	5.1	8.2	雲母・長石	にぶい黄緑	普通	底部回転へう切り後、高台貼り付け、ナデ	竈北側床面	70%
2043	土師器	高台付碗	[13.0]	5.3	7.1	長石	にぶい濁	普通	底部回転へう切り後、高台貼り付け、ナデ、体部下端回転へう削り	竈火床部	60%
2044	土師器	高台付碗	12.5	6.9	7.2	雲母・長石	濁	普通	底部回転へう切り後、高台貼り付け、ナデ、体部下端回転へう削り	中央部床面	60%
2045	須恵器	壺	-	(6.2)	-	長石	黄灰	良好	外面縦筋状叩き、内面同心円状の当て直痕	西壁際下層	3%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	取径	材質	特徴	出土位置	備考
2046	磁	(5.2)	0.9	0.5	(7.0)	鉄	発鉄部から基部にかけての破片、扇状面有り	竈北側床面	
2047	刀子	(6.6)	1.0	0.4	(6.8)	鉄	切先・茎灰欠損、両側有り	北部中層	

第19号住居跡（第434・435図）

位置 調査区北部北東寄りのF14i7区に位置し、平田部に立地している。

重複関係 第22号住居跡を掘り込み、第18号住居跡、第89号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺が3.8mほどの方形で、主軸方向はN-110°-Eである。壁高は6～16cmと低く、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 北西部壁際から中央部、そして竈手前にかけて踏み固められている。北壁中央部を除いて、壁溝が認められる。

竈 東壁南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで約74cm、袖部幅約94cmである。壁外への掘り込みは42cmほどで、上層断面図中第6・7層が粘土の含有状況から天井部の崩落土と考えられる。袖部は土師器壺を部材とし、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されており、土層断面図中の第16～19層が袖部に相当し、内側は火熱を受けて赤変している。火床部は床面を皿状に6cmほど掘りくぼめられ、赤変硬化している。火床部の煙道部側には、置き竈と坏が支脚として据えられており、煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子・砂粒微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子中量、炭化物微量
- 6 暗褐色 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・砂質粘土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 11 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 12 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 13 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 14 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒微量
- 15 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 16 暗赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 17 褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
- 18 褐色 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 19 褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量

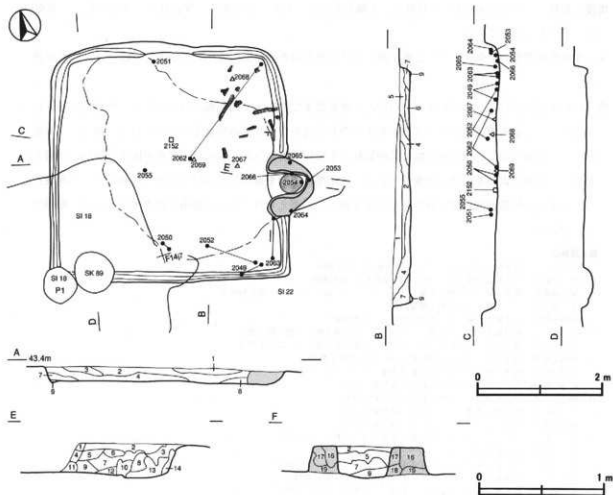
ピット 検出されていない。

覆土 9層からなり、ロームブロックを含み、不自然な堆積を呈することから、人為堆積と考えられる。

土層解説

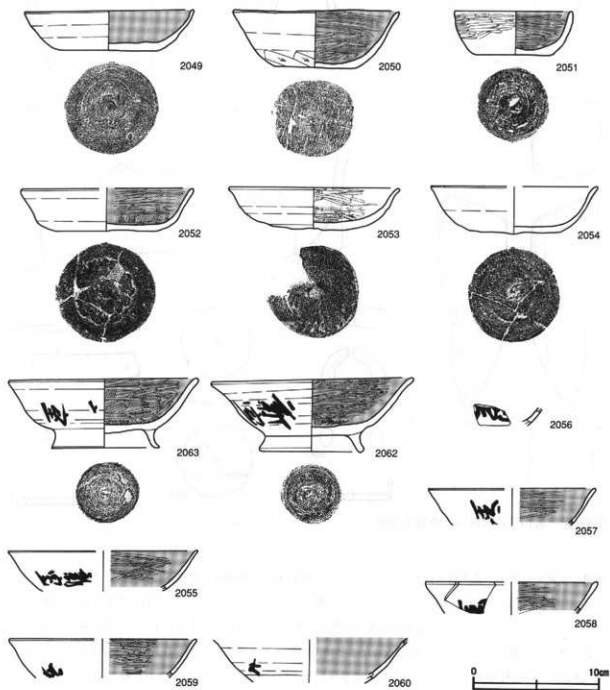
- | | | |
|---|------|---------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 6 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 7 | 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 | 黒色 | 炭化粒子・ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 9 | 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片670点(坏153, 高台付碗118, 甕398, 置き甕), 銅製品1点(耳環), 鉄製品2点(紡錘車1, 手鎌1), 礫10点が東側の覆土下層と竈の火床部を中心に出土している。また、垂木材の一部と見られる炭化材が、北東部下層の床面に近い位置から散在した状態で出土しており、炭化材の出土範囲が限定されることから、住居廃絶後に焼失したものと考えられる。2067は竈北側床面から出土しているが古墳期の遺物と考えられ、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。2051は北壁際の覆土下層, 2068は北部の覆土下層からそれぞれ出土し、また2052は南部の床面と南部の覆土上層から出土した破片が接合されたものである。また、2055は中央部の覆土下層, 2063は南東コーナー部の覆土下層と竈南側床面から出土し、2062は

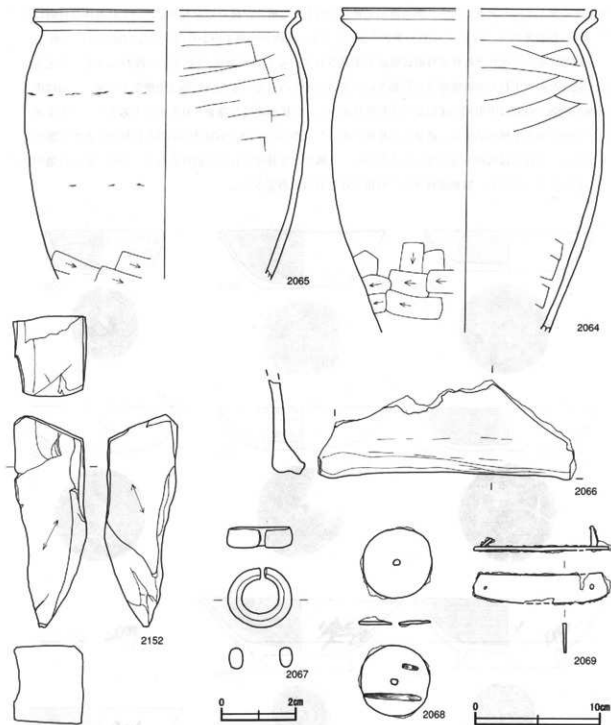


第434図 第19号住居跡実測図

中央部の覆土下層と北東コーナー部の覆土下層から出土した破片が接合したもので、いずれも体部外面に横位で「新室」と墨書されている。その他の墨書土器としては、北西部の覆土中から出土した2059, 2060が「新」, 2056～2058が「室」とそれぞれ体部外面に横位で墨書されているものがあり、「新室」に関わる文字と想定され、出土状況からいずれも本跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。また、2049は南壁際の床面、2050は南部の床面、2069・2152は中央部の床面からそれぞれ出土し、住居廃絶時に遺棄されたものと考ええる。竈火床部からは、2066が下部を埋め込まれて直立した状態で出土し、さらに2053・2054は2066の上に伏せられた状態で出土している。これらは火熱を受けていることから、支脚として使用された可能性が高く、2064・2065は竈の袖内から出土しているため、竈袖部材として使用されたものと想定される。



第435図 第19号住居跡出土遺物実測図(1)



第436図 第19号住居跡出土遺物実測図(2)

所見 本跡からは、墨書土器8点が出土しており、いずれも住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。それらは、「新室」、「新」、「室」と判読でき、すべて「新室」に関わる文字である。なお、当遺跡出土の墨書土器は96点出土しているが、「室」と書かれた墨書土器は、第427号住居跡から1点出土しているのみであり、1軒の住居跡から同様の文字が8点も検出されたことは、本遺跡の性格などを考える上で重要な資料といえる。また、本跡は、炭化材の出土状況から見て住居廃絶後に焼失したものと想定され、さらに覆土の土層観察からは、焼失後に埋め戻されていることが理解できる。時期は、床面上出の坏の形状などから9世紀末葉～10世紀初頭

と考えられる。

第19号住居跡出土遺物観察表 (第435・436図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2049	土師器	坏	13.4	3.2	7.5	雲母・石英・長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	南壁部床面	90% PL224
2050	土師器	坏	13.1	4.7	6.6	雲母・長石	にぶい黒	普通	底部二方向のヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り	南部床面	50% PL225
2051	土師器	坏	9.3	3.5	5.9	雲母・石英・長石	にぶい黒	普通	底部回転ヘラ切り、内外面ヘラ磨き	北壁部下階	90% PL225
2052	土師器	坏	[13.6]	3.4	8.0	雲母・石英・長石	にぶい黒	普通	底部回転ヘラ切り	南部床面・南壁上層	55%
2053	土師器	坏	13.5	3.5	7.4	雲母・石英・長石	にぶい赤黒	普通	底部回転ヘラ切り	竈火床部	70%
2054	土師器	坏	[13.2]	3.8	7.2	石英・長石	にぶい黄緑	普通	底部回転ヘラ切り後、ナデ	竈火床部	60%
2055	土師器	高台付瓶	[15.0]	(3.2)	-	雲母	にぶい黄黒	普通	体部口縁整形	中央部下層	30% PL250 墨書「新守」
2056	土師器	高台付瓶	-	(1.4)	-	雲母・長石	にぶい黒	普通	体部口縁整形	北西部壁土中	5% 墨書「新守」
2057	土師器	高台付瓶	[13.2]	(3.0)	-	雲母	にぶい黄黒	普通	体部口縁整形	北西部壁土中	5% 墨書「新守」
2058	土師器	高台付瓶	[13.6]	(2.5)	-	長石	にぶい黒	普通	体部口縁整形	北西部壁土中	5% 墨書「新守」
2059	土師器	高台付瓶	[15.0]	(3.1)	-	雲母・石英・長石	にぶい黒	普通	体部口縁整形	北西部壁土中	5% 墨書「新守」
2060	土師器	高台付瓶	-	(3.7)	-	雲母	にぶい黒	普通	体部口縁整形	北西部壁土中	5% 墨書「新守」
2062	土師器	高台付坏	15.7	7.0	7.8	雲母	黒	普通	底部回転ヘラ切り後、高台削り付け、ナデ	中央部床面・北東コーナー部下層	98% PL225 墨書「新守」
2063	土師器	高台付坏	15.0	5.5	8.4	雲母・石英・長石	にぶい黒	普通	底部回転ヘラ切り後、高台削り付け、ナデ	東壁コーナー部壁土中層・南壁部床面	92% PL226 墨書「新守」
2064	土師器	壺	[20.0]	(26.0)	-	石英・長石	にぶい赤黒	普通	口縁部横ナデ、体部外面下位ヘラ削り、内面ヘラナデ、内外面拉直	竈軸内	40%
2065	土師器	壺	[21.2]	(21.6)	-	雲母・石英・長石	明褐色	普通	口縁部横ナデ、体部外面上位ナデ・下位ヘラ削り、内面横ナデ	竈軸内	25%
2066	土師器	置き瓶	(7.8)	(20.5)	3.0	長石・石英	黒	普通	体部内・外面横ナデ	竈火床部	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2152	砥石	16.8	5.7	6.2	814.0	砂岩	砥面2面、その他は使用されていない。	中央部床面	

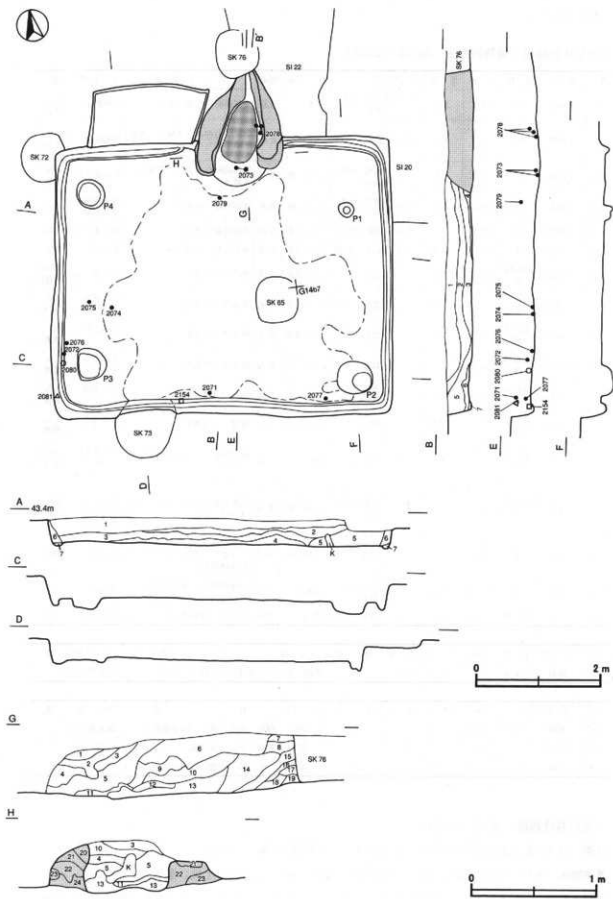
番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2067	耳環	1.7	1.6	0.5	-	5.2	銅	環状、南北に鋭角、閉き部有り	北壁部床面	
2068	銅線串	5.5	5.5	0.3	0.5	32.0	鉄	輪挿し欠損、本質付着	北部下層	
2069	千鈿	10.7	2.4	0.3	-	15.9	鉄	一部欠損、両側に爪状の突出部有り	中央部床面	

第21号住居跡 (第437・438図)

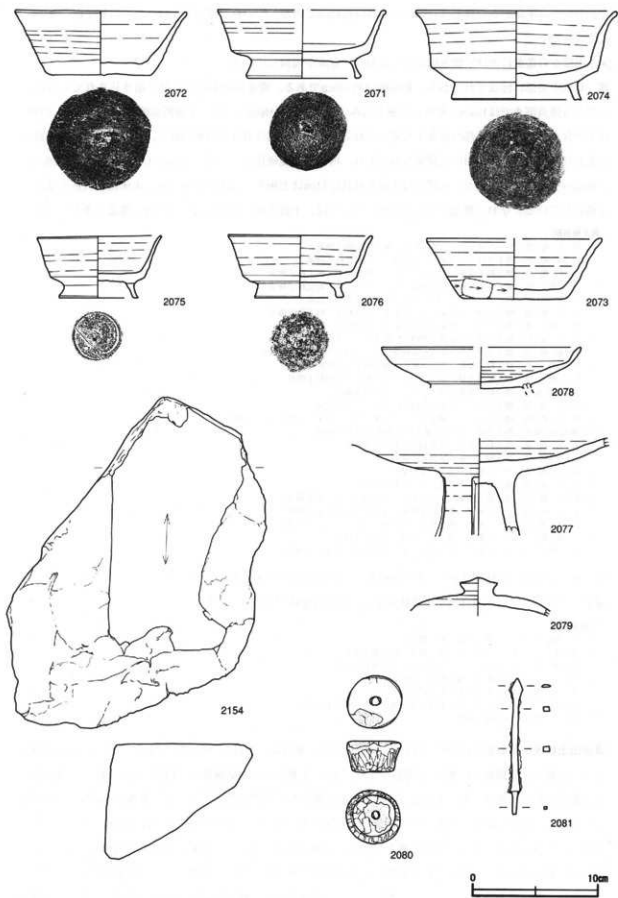
位置 調査区北部北東寄りのG14a6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第20・22号住居跡、第72号土坑を掘り込み、第65・73・76号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.4m、短軸約4.5mの長方形で、主軸方向はN-11°-Eである。壁高は30~36cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。また、竈西側に棚状施設を有しており、規模は幅約186cm、奥行き約92cm



第437图 第21号住居跡実測図



第438图 第21号住居跡出土遺物実測図

の長方形で、床面からの高さは約24cm、壁高は約12cmである。この施設部の覆土は、ローム粒子混じりの黒褐色土である。

床 南壁から竈前にかけて踏み固められており、壁溝が周囲している。

竈 北壁中央部に付設されており、袖幅は約140cmである。煙道部は第76号土坑に掘り込まれているが、火床部から煙道部までは154cm、壁外への掘り込みは102cmほどが確認できた。土層断面図中の第10・11・15層は、粘土の含有状況から天井部の崩落土と考えられる。また、袖部は遺存状態が良好で、床面と同じ高さに粘土粒子混じりの暗赤褐色土を用いて構築されており、内側が赤変硬化している。なお、土層断面図中の第20～24層が袖部の上層である。また、火床部は床面を加状に14cmほど掘りくぼめて使用され、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。なお、煙道の立ち上がりについては、土抗に掘り込まれているため、確認できなかった。

覆土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 灰褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 7 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量
- 10 灰褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 灰褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 12 におい・赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 13 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量
- 14 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
- 15 暗赤褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 16 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子・粘土粒子少量
- 17 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 18 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 19 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量
- 20 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 21 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
- 22 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 23 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 24 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 4か所、主柱穴はP1～P4が相当し、深さが16～20cmである。

覆土 7層からなり、不自然な堆積状況を示した人工堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片1359点（坏159、高台付坏15、甕1168、蓋17）、須恵器片238点（坏123、高台付坏62、蓋4、高盤2、長頸瓶9、甕38）、陶器片1点（甕）、土製品1点（紡錘車）、鉄製品1点（鎌）、鏝43点が、竈及び竈周辺部と南西部の覆土下層及び床面を中心に散在した状態で出土している。遺物は本跡発掘時に遺棄された遺物と、住居廃絶後に投棄された遺物とに大別でき、2074～2076・2080・2154は床面から出土して前者に相当し、2071・2072・2077・2079は覆土上層から下層にかけて出土した後者に相当すると考えられる。2073・2078は、竈の火床部から伏せられた状態で火熱を受けて出土しており、支脚としての使用が想定される。2081の鉄鎌は、壁に押し込まれたように南西コーナー部の壁上層から横位で出土したが、本跡との関わりは不明である。

所見 本跡の西壁際の床面からは、須恵器高台付坏がほぼ完形のまま3点出土しており、本遺跡と在地の須恵器窯の関連を考える上で良好な資料といえる。また、棚状施設を有しており、本遺跡の当該期を考える上で有効な資料と考える。時期は、床面出土の高台付坏などの形状から見て8世紀後半と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表（第438図）

番号	類別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2072	須恵器	坏	13.7	5.2	8.3	長石・石英	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り	西壁際上層	85%
2073	須恵器	坏	13.8	4.8	8.0	長石・石英	灰	普通	体部下端手付ヘラ削り、底部回転ヘラ切り	竈火床部	60%
2071	須恵器	高台付坏	13.3	5.5	9.1	長石・骨針	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け、体部下端回転ヘラ削り	南壁際上層	80%
2074	須恵器	高台付坏	16.0	7.1	10.3	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	西壁床面	90% PL225
2075	須恵器	高台付坏	9.9	5.0	6.2	雲母・石英・長石・骨針	黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	西壁床面	100% PL225 ヘラ記号
2076	須恵器	高台付坏	11.3	5.0	7.0	黒色粒子	黄灰	良好	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け、体部下端回転ヘラ削り	西壁際床面	80% PL225
2077	須恵器	高盤	-	(7.8)	-	石灰・骨針・黒色粒子	黄灰	良好	体部内外両ナデ	南壁際下層	10%
2078	須恵器	盤	15.8	(5.3)	-	長石・砂粒	灰ミナソフ	普通	体部下端回転ヘラ削り	竈火床部	40%
2079	須恵器	蓋	-	(3.0)	-	白色粒子	褐灰	普通	天井部回転ヘラ削り後、つまみ接合	竈前面上層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3080	紡錘車	4.2	4.4	2.5	50.4	土	体部外面ヘラナデ	西壁際床面	

番号	器種	長さ	最大幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2154	磁石	(26.4)	(20.2)	(12.0)	(5540)	砂岩	磁石1面、二次焼成、欠損部有り	南壁際床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2081	鐵	10.9	0.95	0.4	14.2	鉄	三角形鎌、茎部一部欠損、台状開有り	南西コーナー部上層	

第23号住居跡（第439図）

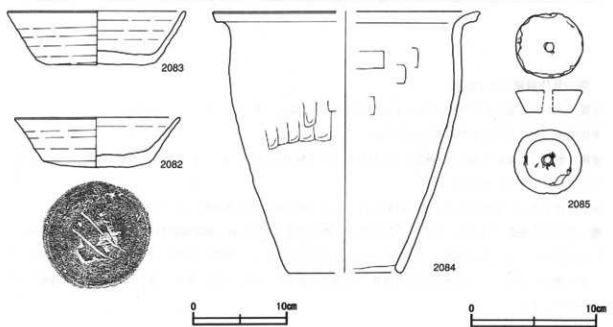
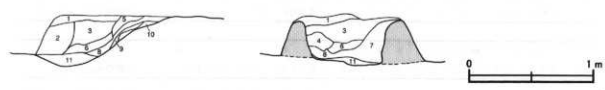
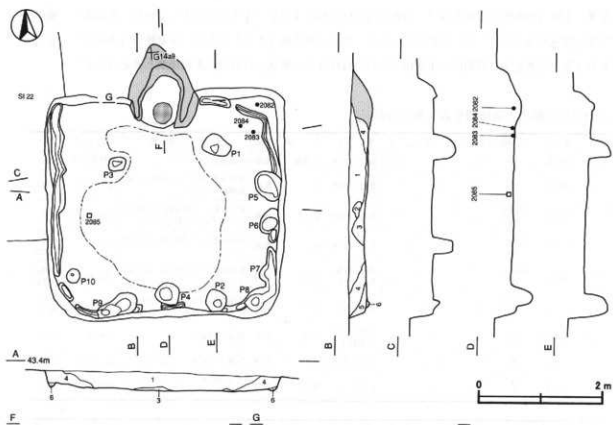
位置 調査区北部北東寄りのG14a9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第22号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸約3.8m、短軸約3.7mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は26~38cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、断続的ながら各壁際において壁溝が認められた。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで約136cm、袖部幅約114cmで、壁外への張り込みは約80cmである。天井部は崩落しているものの、遺存状態は良好で、袖部の内側から火床面に掛けて火熱を受けて赤変硬化している。火床部は床面を皿状に12cmほど掘りくぼめている。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。



第439图 第23号住居跡・出土遺物実測図

壤土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 暗赤褐色 ロームブロック少量、焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 5 暗赤褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック少量
- 9 暗赤褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック少量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物多量、砂粒少量
- 11 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 10か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さは30～36cmである。P5は南西側に位置し、主柱穴の可能性はあるが、P1～P3と比べ深さが5cmと浅く、断定できない。P4は出入り口施設に伴うピットで、深さ34cmである。また、P6～P10は、深さ5～8cmであり、壁際にあるため壁柱穴と考えられる。

覆土 6層からなり、ロームブロックや焼土ブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片281点（坏82、甕199）、須恵器片57点（坏15、甕42）、灰軸陶器片1点（版）、石製品1点（紡錘車）、礫2点が北東コーナー部と西部の覆土下層を中心に散在した状態で出土し、2085は西部の覆土下層から出土している。また、2082・2083・2084は北東コーナー部の床面から出土しており、本跡発掘時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡は、8か所に壁柱穴が認められるが、当遺跡において壁柱穴を有する住居はごくわずかであり、当該期に比定される住居は本跡だけである。時期は、床面出土の坏の形状などから8世紀前葉と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表（第439図）

番号	種別	器種	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径
2082	須恵器	坏	12.9	4.0	8.5	石英・赤色粒子	にぶい投	普通	底部回転へら切り	北東コーナー部床面	80% PL225 底部貯蔵 [...]	
2083	須恵器	坏	14.2	4.3	9.0	長石・石英	灰	普通	底部回転へら切り後、多方向の削り	北東コーナー部床面	65%	
2084	土師器	甕	[28.0]	27.5	[11.8]	雲母・石英・長石	にぶい投	普通	口縁部積ナデ、体部内外面へラナデ	北東コーナー部床面	90%	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径
2085	紡錘車	5.1	5.4	1.7	0.7	68.2			松板岩	無文、円錐台形	西部下層	85% PL286

第25号住居跡（第440図）

位置 調査区北部北東寄りのF1419区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第42号土坑や第1号掘立柱建物跡を掘り込み、第63号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.6m、短軸約2.7mの長方形で、主軸方向はN-92°-Eである。壁高は6cm前後と低い。

床 中央部から壁前面に向けてよく踏み固められている。南東コーナー部にだけ壁溝が認められた。

竈 東壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで約80cm、袖部幅約104cmである。壁外への掘り込みは44cmほどで、火床部は床面が皿状に3cmほど掘りくぼめられ、赤変硬化している。また、煙道部は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック少量

ピット 認められなかった。

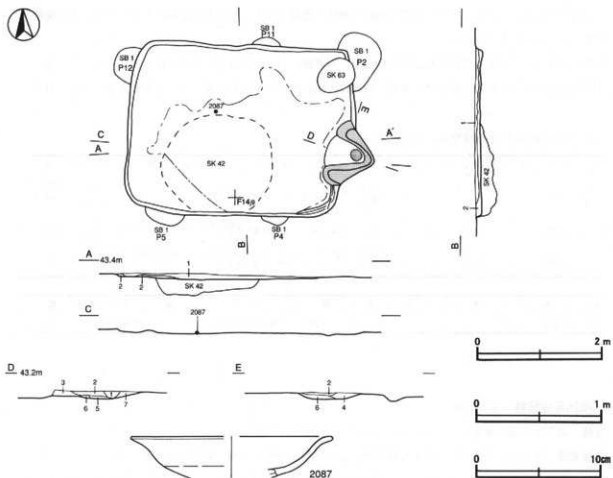
覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片145点(坏12, 高台付椀17, 小皿4, 甕112)が竈の周辺部の覆土下層を中心に散在した状態で出土し、ほとんどが細片であり、割れ口が摩滅している。2087は、中央部床面から出土している。

所見 本跡は覆土が薄く、土坑等に掘り込まれおり、土器も細片が多いが、時期は、土器の形状や住居跡の形態などから10世紀中葉と考えられる。



第440図 第25号住居跡・出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表（第440図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	新上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2087	上脚器	高台付 椀	[15.8]	(3.3)	-	石英・赤色 粒子	緑	普通	体部外面ロクロナデ	中央部床面	20%

第26号住居跡（第441図）

位置 調査区北部北東寄りのG14b8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第27号住居跡を掘り込み、第55号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.6m、短軸約3.3mの長方形で、主軸方向はN-98°-Eである。壁高は5~12cmと低い。

床 ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められており、南境の一部を除いて、壁溝が認められる。

竈 東壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで約100cm、袖部幅約134cmである。壁外への掘り込みは72cmほどで、火床部は床面が皿状に6cmほど掘りくぼめられ、赤変硬化している。袖部は床面と同じ高さの壇山面の上に暗褐色上を基部とし、粘土ブロックを混ぜた褐色土を貼り付けて構築し、内側が赤変硬化している。上層断面図中、第8~11層が袖部の土層である。また、煙道部は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

埋土層解説

- 1 褐灰色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 8 褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック中量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 11 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化物微塵

ピット 4か所。主柱穴は明確ではない。P3は出入り口施設に伴うピットで、深さは13cmである。

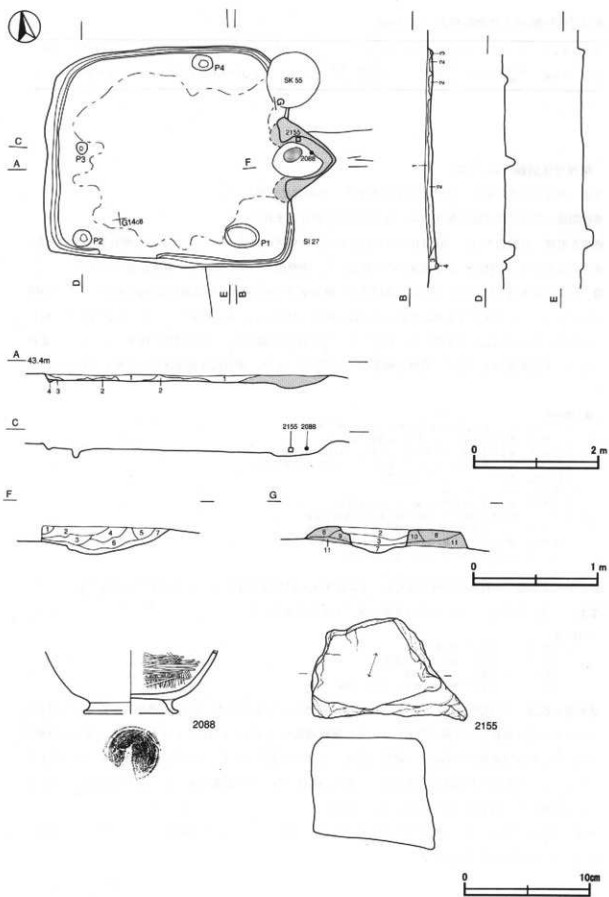
覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片206点（坏43、高台付椀36、甕127）、石器1点（砥石）、礫10点が竈とその周辺部の覆土中層を中心に散在した状態で出土している。竈周辺部からの出土土器は、いずれも細片で割れ口が摩滅しているため、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。2088は、竈火床部から伏せられた状態で出土し、火熱を受けた痕跡が認められた。また、砥石である2155も竈火床部から出土し、赤変しているため、ともに支脚として再利用されたものと考えられる。

所見 本跡は、貼床や竈の火床部の状況などから、居住期間が長い住居と推測される。時期は、土師器坏の形状などから10世紀後半と考えられる。



第441图 第26号住居跡・出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表（第441図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2088	土師器	高台付碗	—	(5.0)	[7.5]	石英・長石	にぶい橙	普通	回転糸切り後、高台貼り付け、ナデ	竈火床部	30%

番号	器種	長さ	最大幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2155	磁石	(8.0)	(12.4)	8.8	(1100)	砂岩	砥面1面、二次焼成、欠損部有り	竈火床部	95%

第28号住居跡（第442・443図）

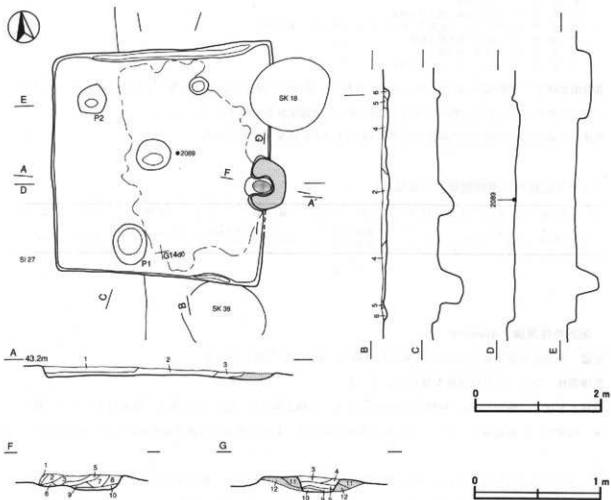
位置 調査区北部北東寄りのG14c0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第27号住居跡、第38号土坑を掘り込み、第18号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.6m、短軸約3.5mの方形で、主軸方向はN-102°-Eである。壁高は3～6cmと低い。

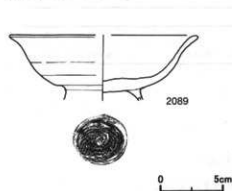
床 ほぼ平坦で、東部がよく踏み固められており、北及び南壁際に部分的ながら壁溝が認められた。中央部及び中央部北壁寄りにくぼみが確認されているが、性格は不明である。

竈 東壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで約54cm、袖部幅約83cmである。壁外への掘り込み



第442図 第28号住居跡実測図

は28cmほどで、土層断面図中の第5層が粘土の含有状況から天井部の崩落土と考えられる。火床部は床面が皿状に10cmほど掘りくぼめられ、赤変硬化している。また、袖の内側も赤変硬化し、煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。



土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 5 暗赤褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 10 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 11 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 12 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

第443図 第28号住居跡出土遺物実測図

ピット 2か所。深さが57cm・40cmであるが、支柱穴とは考えられない。

覆土 6層からなり、ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量、ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片284点（坏66、高台付柄49、甕169）、竪2点が北部の覆土下層を中心に散在した状態で出土したが、ほとんどが細片である。2089は、中央部床面から出土している。

所見 床面出土の土師器の形状などから、時期は10世紀後半と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表（第443図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2089	土師器	高台付柄	[14.8]	(5.2)	-	石英・長石・赤色粒子	にがい黄澄	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け、ナデ	中央部床面	40%

第29号住居跡（第444図）

位置 調査区北部北東寄りのG14c8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第27・31号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸約3.6m、短軸3.2mの長方形で、主軸方向はN-92°-Eである。壁高は8~16cmと低い。

床 西壁際から竪前面にかけて、よく踏み固められおり、北壁中央部から西壁中央部にかけて壁溝が認められる。

竪 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで約100cm、袖部幅約86cmである。壁外への掘り込みは58cmほどで、火床部は床面が皿状に4cmほど掘りくぼめられ、赤変硬化している。また、袖の内側も赤変硬化している。土層断面中、第4・7層は粘土の含有状況から天井部の崩落土と考えられ、煙道部は火床部か

ら急な傾斜で立ち上がっている。

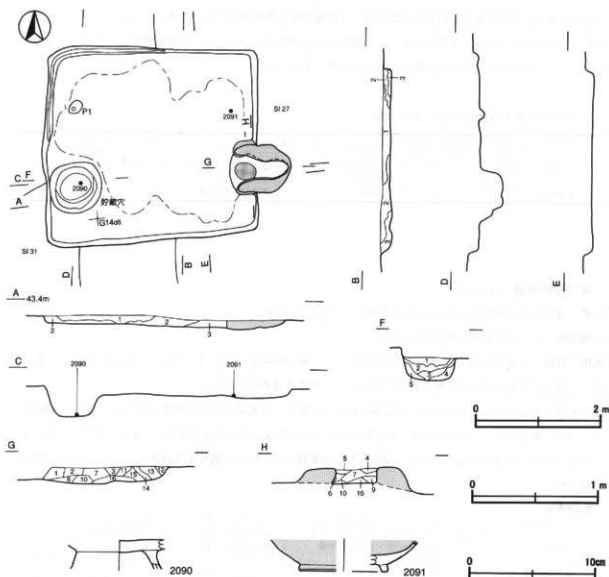
覆土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|----------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量, 炭化粒子・粘土ブロック・砂粒少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 砂粒少量, 炭化粒子微量 |
| 4 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土粒子・砂粒少量, 炭化粒子・ローム粒子微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 13 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 14 極暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子・砂粒少量 |
| 7 灰黄褐色 | 粘土ブロック・砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 15 極暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 16 極暗赤褐色 | 焼土ブロック多量, 炭化粒子・砂粒少量 |

ピット 1か所。深さは12cmであり, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南西コーナーに付設されており, 直径84cmの円形で, 深さは36cmであり, 底面は皿状を呈している。

覆土は5層からなり, ロームブロックの含有状況は, 人為な堆積状況を示している。



第444図 第29号住居跡・出土遺物実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量

覆土 3層からなる。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を呈することから、人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 黒色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片134点（坏78，高台付碗52，甕2，三足鍋2），須恵器片5点（甕），緑釉陶器片1点（碗）が、東壁際の覆土下層及び貯蔵穴から出土しており、土師器甕や須恵器甕の出土数が極端に少ないなど出土土器の器種構成に偏りが認められ、本跡廃絶後に遺棄されたものと考えられる。貯蔵穴の底部から出土している2090と東壁側床面から出土した2091は、本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡は貯蔵穴を有する住居であり、全体的に出土遺物は少ないため、住居廃絶時に持ち出されたものと考えられる。時期は出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。

第29号住居跡出土遺物観察表（第444図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2090	土師器	高台付碗	-	(2.3)	-	右赤・黒石・赤色粒子	におい煙	普通	回転へう切り後、高台駱り付け後、ナデ	貯蔵穴底部	10%
2091	緑釉陶器	碗	-	(2.6)	(7.0)	緻密	灰グリープ	普通	内外面施釉	東壁側床面	5%

第33号住居跡（第445図）

位置 調査区北部西寄りのG14g9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第56号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸約2.6m，短軸約2.4mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は6cm前後と低い。

床 北西部から竈前にかけて踏み固められており、華落は認められない。

竈 東壁中央部に付設されており、袖部幅は約96cmである。火床部から煙道部までは74cm，壁外への掘り込みは34cmほど確認できた。土層断面中、第5層が粘土の含有状況から天井部の崩落土であると考えられる。また、火床部は床面が皿状に4cmほど掘りくぼめられて赤変硬化し、袖の内側も赤変硬化している。煙道部は外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量
- 5 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子少量
- 6 褐灰色 炭化粒子中量、焼土ブロック少量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子中量、粘土ブロック少量
- 10 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量
- 11 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化粒子少量

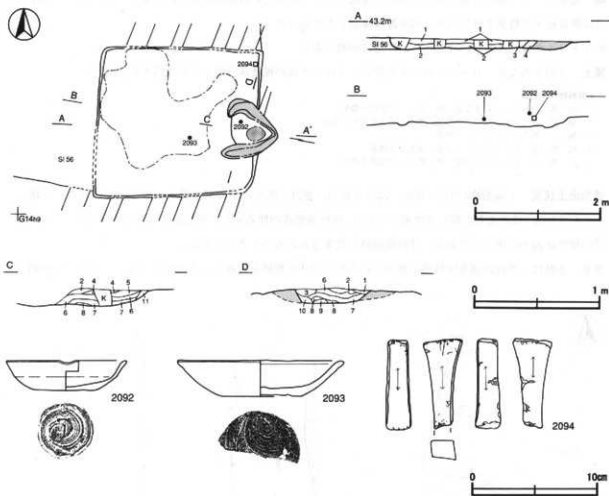
ピット 確認できなかった。

覆土 4層からなり、各層にロームブロックが含まれていることから、人為堆積であると考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
 4 暗赤褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片19点（高台付碗11，小皿5，壺3），石器1点（砥石），礫3点が竈及び南側下層を中心に散在した状態で出土しており，土師器壺の出土数が少ないなど器種構成に偏りがあり，住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。中央部の覆土下層出土の2093，東壁際の覆土中層出土の2094は投棄されたもので，竈火床部出土の2092は，火熱を受けて伏せられた状態で出土し，支脚として使用されたものと考えられる。所見 硬化面や火床部の状況から，住居の使用期間は長いと想定され，時期は，出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。



第445図 第33号住居跡・出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表（第445図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2092	土師器	小皿	9.4	2.4	5.0	石英・長石	にぶい赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り，口縁部に注口あり	竈火床部	95% PL226
2093	土師器	碗	[13.2]	2.9	[6.5]	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	中央部下層	45%

番号	部 位	長 寸	幅	厚 寸	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
2094	磁石	(7.2)	3.1	2.0	(11.8)	凝灰岩	方柱状、底面4面、端部片断欠損、中央部が湾い	東壁際中層	95%

第34号住居跡 (第446図)

位置 調査区北部北東寄りのF14h6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第291号住居跡を掘り込み、第60号上坑に掘り込まれている。

規模と形状 西側が調査区域外のため、南北軸約2.6m、東西軸約1.9mが確認されただけであり、N-78°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は12cm前後と低い。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。南側の一部に壁溝が認められる。

竈 北東コーナー部に付設されているが、掘乱を受けているため右袖部が部分的に確認されただけである。袖部は砂質粘土で構築されており、火床部は確認できなかった。

ピット 1か所。深さは15cmであり、性格は不明である。

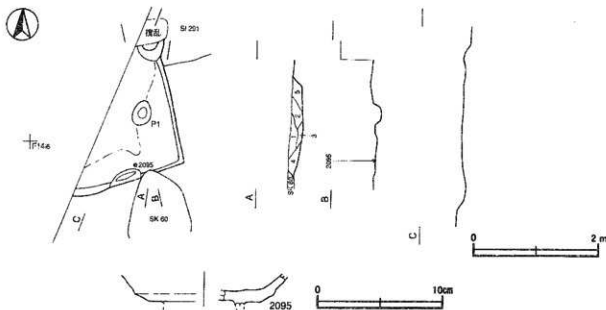
覆土 5層からなり、ロームブロックを含み、ブロック状の推積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片123点(坏26、高台付碗24、甕71、瓶2)が南部の覆土下層を中心に散在した状態で出土している。ほとんどが細片で摩滅しており、住居廃絶後の埋め戻しの際に混入したものと考えられる。2095は南壁際床面から出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡は、西側が調査区域外に延びているため全体の形状を把握することができなかったが、床面出土の



第446図 第34号住居跡・出土遺物実測図

高台付環の形状から、時期は9世紀後葉と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表（第446図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2095	土脚器	高台付環	-	(2.8)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶ黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	南壁際床面	10%

第39号住居跡（第447・448図）

位置 調査区北部東寄りのG14e4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第36・43・76号住居跡、第326・340号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸約3.5m、短軸約2.6mの長方形で、主軸方向はN-96°-Eである。壁高は4~18cmと低い。

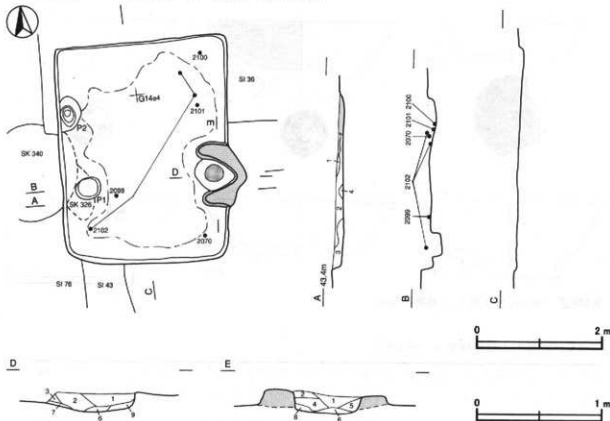
床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められており、壁溝は認められない。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで約80cm、袖部幅約100cmである。壁外への掘り込みは30cmほどで、火床部は床面が皿状に12cmほど掘りくぼめられて赤変硬化し、袖の内側も赤変硬化している。

また、煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 灰褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量



第447図 第39号住居跡実測図

- 6 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 7 極暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
 8 暗赤褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
 9 暗赤褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 2か所。P1は深さ16cmで、東壁際の竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は深さ49cmであり、性格は不明である。

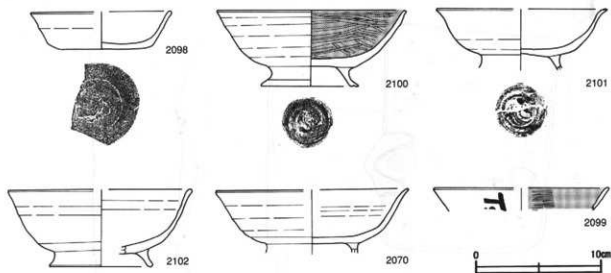
覆土 4層からなり、ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
 4 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片137点(坏9, 高台付碗30, 小皿23, 甕75), 須惠器片2点(高台付坏), 礫7点が東側の覆土下層を中心に出土している。2102は南西部の覆土下層と北東部の床面から出土した破片が接合したものであり、2099は中央部の床面から出土している。また、2099の体部外面には墨書が見られるが、判読できない。北東コーナー部の床面から出土した2100, 南東コーナー部の床面から出土した2070, 東部の床面から出土した2101は、出土状況から住居廃絶時に遺棄されたものと考えられ、竈覆土中から出土した2098は、二次焼成を受けているため、支脚として使用された可能性が高い。

所見 椀類は東壁際床面から出土し、その付近が供膳具の保管場所として機能していた可能性が高い。また、硬化面や火床部の状況から判断すると、使用期間の長い住居であると考えられる。時期は、高台付碗や坏の形状から10世紀後葉と考えられる。



第448図 第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表(第448図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2098	土師器	坏	[11.0]	3.0	6.0	石英・長石	橙	二次焼成	底部回転ヘラ切り	竈覆土中	30%
2099	土師器	高台付碗	[13.8]	(1.8)	-	雲母	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き	中央部床面	5% 墨書「□」

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2100	土師器	高台付 碗	14.9	6.1	7.7	雲母・長石・ 赤色粒子	にぶい黄緑	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼 り付け、ナデ	北西コーナ 一部床面	98% PL225
2101	土師器	高台付 碗	[13.4]	(4.9)	-	雲母・赤色 粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼 り付け、ナデ	東部床面	50%
2102	土師器	高台付 碗	[14.4]	(3.5)	8.2	石英・長石・ 赤色粒子	にぶい黄緑	普通	体部下端回転ヘラ削り、底部回 転ヘラ切り後、高台貼付、ナデ	南西部下層、 北東部床面	60%
2070	土師器	高台付 碗	[15.2]	(5.0)	-	雲母・石英・長 石・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	体部下端回転ヘラ削り、底部回 転ヘラ切り後、高台貼付、ナデ	南東コーナ 一部床面	40%

第40号住居跡 (第449・450図)

位置 調査区北部東寄りのG14d3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第32・41号住居跡、第302号土坑を掘り込み、第303号土坑に掘り込まれている。

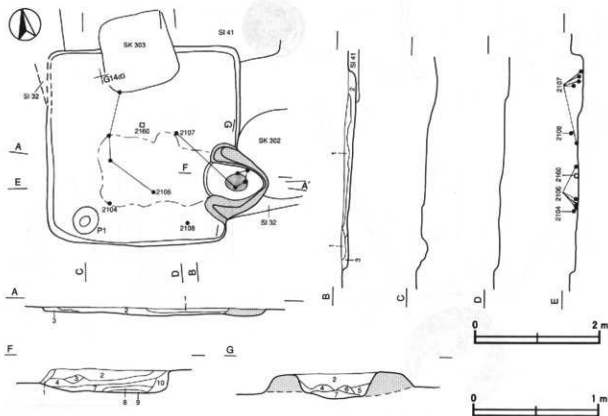
規模と形状 一辺約3.1mの方形で、主軸方向はN-107°-Eである。壁高は4~12cmと低い。

床 中央部から竈手前にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで約104cm、袖部幅約120cmである。壁外への掘り込みは56cmほどで、火床部は床面が皿状に12cmほど掘りくぼめられ、赤変硬化している。土層断面中、第5・6層が粘土の含有状況から天井部の崩落土と考えられる。また、煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量



第449図 第40号住居跡実測図

- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 4 暗赤褐色 炭化粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック微量
- 5 極暗赤褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 極暗赤褐色 粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 7 極暗赤褐色 焼土ブロック少量
- 8 極暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・砂粒微量
- 9 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 10 暗赤褐色 焼土粒子少量

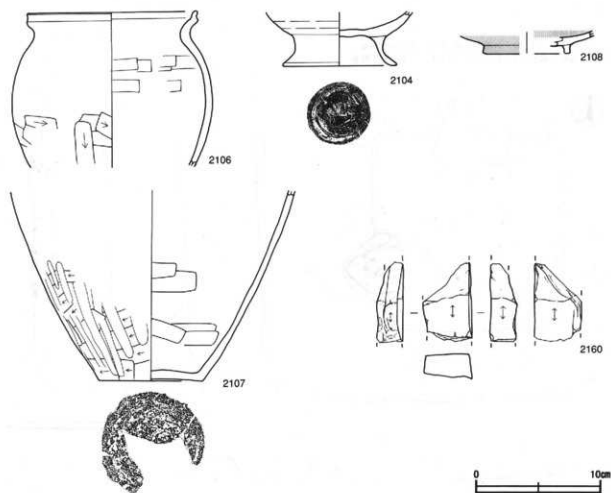
ピット 1か所。深さは10cmであり、性格は不明である。

覆土 3層からなり、第2層にはロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片329点（坏13，高台付碗48，小皿5，甕262，羽釜1），灰輪陶器片1点（瓶），緑輪陶器片1点（碗），石器1点（砥石）が竈及び北東コーナー部の中・下層を中心に出土している。これらは細片が多く接合できる遺物も多いため、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。南部の上層から出土した2108は、住居廃絶後の埋め戻しの際に混入したものと考えられ、南部の下層から出土した2104，中央部の床面から出土した2106・2160は投棄されたものと考えられる。また、2107は竈前床面と火床部から出土した破片が接合され



第450図 第40号住居跡出土遺物実測図

たものであり、破片のほとんどが竈火床部から出土しているため、竈で使用されたものと考えられる。

所見 本跡は他の住居跡等に掘り込まれていないにもかかわらず、床面出土の遺物が少なく、木跡焼絶時に食膳具類は持ち去られたものと考える。時期は、出土土器の形状から10世紀後葉と考えられる。

第40号住居跡出土遺物観察表 (第450図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2104	土師器	高台付碗	—	(4.2)	8.9	雲母・石英・長心・赤色粒子	—	赤褐色	普通	底部回転へう切り後、高台貼り付け、ナデ	南部下層	30%
2106	土師器	甕	13.2	(12.4)	—	石英・長石	—	赤褐色	普通	体部外面へう削り、内面へうナデ	中央部床面	20%
2107	土師器	甕	—	(15.2)	8.2	石英・長石・赤色粒子	—	赤褐色	普通	体部外面下位へう削り後、へう磨き、内面へうナデ	竈火床部	30%
2108	緑釉陶器	碗	—	(1.8)	[7.1]	鐵帝	—	灰青・オリーブ灰	普通	底部回転へう切り後、高台貼り付け、角高台	南部上層	30%

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2163	灰石	(6.3)	4.0	1.9	(51.8)	凝灰岩	砥面は3面	中央部床面	95%

第41号住居跡 (第451・452図)

位置 調査区北部西寄りのG14c3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第32・36号住居跡、第301・312号土坑を掘り込み、第40号住居、第303号土坑に掘り込まれている。
規模と形状 長軸約3.1m、短軸約2.9mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は約20cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 中央部から竈前にかけてよく踏み固められており、壁際は認められなかった。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで約78cm、袖部幅約66cmである。壁外への掘り込みは34cmほどで、火床部は床面が皿状に4cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けてわずかに赤変しているが、焼き締まった感じはない。土層断面中、第4・5層が粘土の含有状況から天井部の崩落土と考えられる。袖部は、床面と同じ高さの地山面の上に砂質粘土を用いて構築されている。また、煙道部は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層観察

- 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 赤 褐色 焼土ブロック多量、粘土ブロック中量
- 灰 褐色 焼土粒子・粘土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 灰 褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 暗赤褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック中量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 認められなかった。

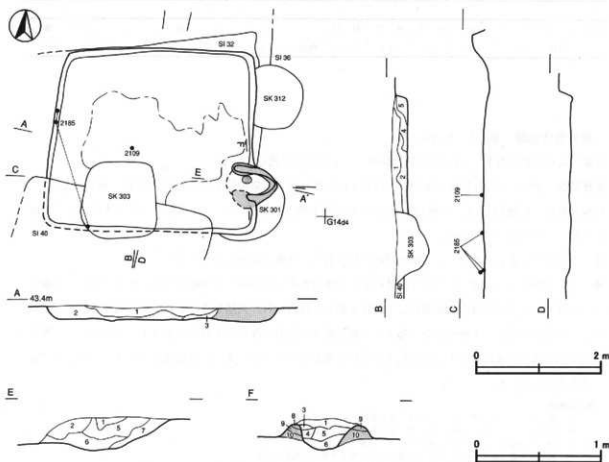
覆土 5層からなり、ロームブロックを含み、不自然な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子
- 5 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片750点（坏212、高台付碗30、甕508）、須恵器片66点（坏50、甕13、蓋3）、石器1点（砥石）、礫69点が、竈周辺部下層を中心に出土しているが、床面出土の遺物は少なく、ほとんどが小破片である。遺物の出土状況から見ると、これらは住居廃絶後の投棄によるものと考えられる。2109は中央部床面、2185は西壁際出土の破片と南壁際出土の破片が接されたものである。

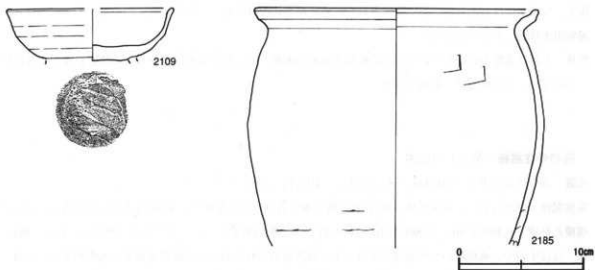
所見 出土遺物は供膳具における土師器の割合が須恵器を上回っている様相を示し、出土土師器の形状から見て、時期は10世紀中葉と考えられる。



第451図 第41号住居跡実測図

第41号住居跡出土遺物観察表（第452図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2109	土師器	高台付碗	[13.0]	4.1	-	雲母・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	高台貼付面、底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り	中央部床面	60%
2185	土師器	甕	22.0	[18.8]	-	雲母・長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁肩部横ナデ、体部内外面ナデ	南西壁際下層	40%



第452図 第41号住居跡出土遺物実測図

第42号住居跡 (第453図)

位置 調査区北部東寄りのG14f4区に位置し、平坦部に立地している。

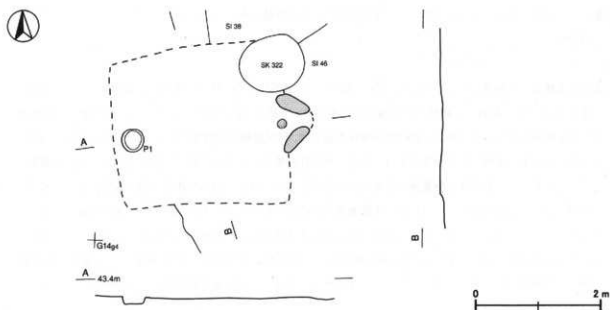
重複関係 第38・45・46号住居跡を掘り込み、第322号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がりは明確ではないが竈やピットの位置から判断して、N-86°-Eを主軸とする一辺が2.7mほどの方形と推定される。

床 耕作等によって硬化面が削平されているため、硬化面は確認されず、また、壁溝も認められない。

竈 遺存状態が悪いが東壁中央部に火床部が確認された。火床部は床面が皿状に4cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けてわずかに赤変し、硬化していない。火床部の両側には袖状になった粘土の範囲が認められる。

ピット 1か所。深さは12cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。



第453図 第42号住居跡実測図

覆土 床面がほぼ露出した状態で検出されたため、堆積状況は確認できなかった。

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡は遺物が出土していないため時期の判断が困難であるが、東壁に竈を有する住居形態や重複関係などから見て、10世紀後葉と推測される。

第43号住居跡（第454・455図）

位置 調査区北部東寄りのG14e3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第39・47・76号住居跡、第340号土坑を掘り込み、第44号住居、第344号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約4.9m、短軸約4.4mの長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は約10cmと低い。

床 ほぼ平坦で、東壁際から中央部にかけてよく踏み固められており、東壁際北部から西壁際北部にかけて、糠溝が認められる。南西部から中央部にかけて擾乱を受けている。

竈 北壁の東寄りに付設されており、焚11部から煙道部まで約92cm、袖部幅約126cmである。壁外への掘り込みは68cmほどで、火床部は床面が壁状に4cmほど掘りくぼめられ、赤変硬化している。上層断面中の第5層は粘土の含有状況から天井部の崩落土と考えられる。また、煙道部は外傾して緩やかに立ち上がっている。

壁土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量、ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、粘土ブロック少量、ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 5 赤褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック中量、ローム粒子微量
- 6 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 7 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 9 暗赤褐色 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 10 褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量
- 11 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 12 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 13 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 14 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 1か所。深さは34cmであり、性格は不明である。

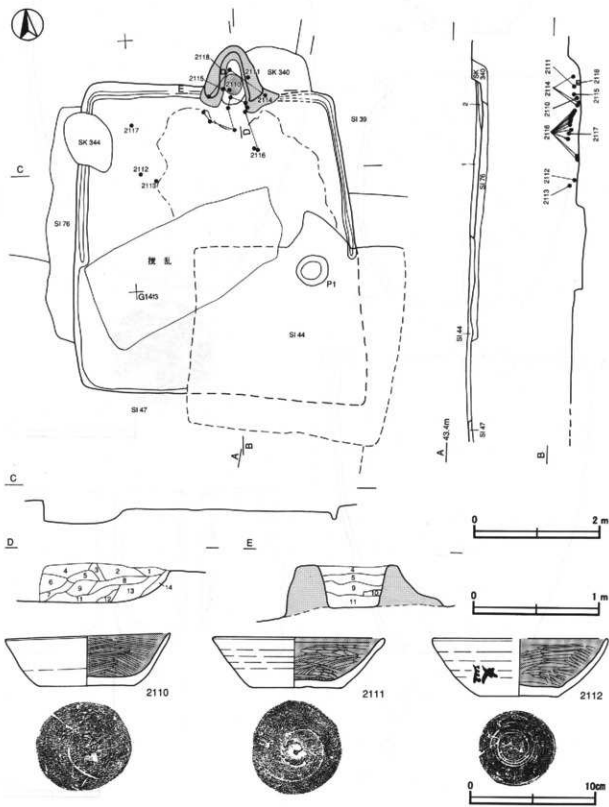
覆土 2層からなり、ロームブロックの含有状況から人為堆積であると考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片125点（坏27、甕87、瓶11）、須恵器片29点（坏9、甕19、長頸瓶1）、灰釉陶器1点（椀）、石器1点（砥石）が竈及びその周辺部の覆土中・下層を中心に出土している。土師器甕や須恵器甕の出土数が極端に少ないなど出土器の器種構成の偏りは、住居廃絶後の投棄によるものと考えられる。2116は、竈正面の床面から上層にかけてまとまって出土した破片を接合したものであり、2113・2117は北部中層から出土しているが、いずれも住居廃絶後の投棄によるものと考えられる。2113の体部外面には墨書が見られるが、判読できない。北部床面出土の2112は、木跡廃絶時に遺棄されたものと考えられるが、体部外面に「益」かと墨書されている。2110・2111は、竈火床部から完形のまま伏せられた状態で火熱を受けて出土し、支脚として使用された可能性が高い。また、2118も竈火床部から火熱を受けた痕跡があり、砥石として使用された後に、支脚として転用されたものと考えられる。火床部出土の2114・2115は竈で使用されたものと考えられる。

所見 竈内から被熱痕のある土師器甕の破片が60点以上出土し、竈で使用されていたものが、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。時期は、土師器の形状や土師器と須恵器の出土割合などから見て、10世紀前葉と考えられる。



第454図 第43号住居跡・出土遺物実測図



第455図 第43号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡出土遺物観察表 (第454・455図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2110	土師器	坏	13.0	4.1	7.5	石英・長石	にぶい黄緑	普通	底面回転ヘラ切り	竈火床部	85% PL225
2111	土師器	坏	13.4	3.9	7.2	雲母・石英・長石	にぶい黄	普通	底面回転ヘラ切り、内面ヘラ増き	竈火床部	95% PL225
2112	土師器	坏	[13.7]	4.7	6.4	雲母・石英・長石・赤色粒子	にぶい黄	普通	底面回転ヘラ切り、内面ヘラ増き	北部床面	60% PL250 黒雲「益」
2113	土師器	坏	[12.6]	3.8	[6.6]	雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	体部下端回転ヘラ削り、内面ヘラ増き	北部中層	30% 黒雲「上」
2114	土師器	甕	19.7	29.9	8.5	石英・長石	にぶい赤黒	普通	口縁部横ナデ、体部外面ト位ヘラ削り、内面ヘラナデ	竈火床部	30% PL226
2115	土師器	甕	14.2	18.2	9.7	石英・長石	にぶい赤黒	普通	口縁部横ナデ、体部外面ト位ヘラ削り、内面ヘラナデ	竈火床部	50%
2116	土師器	甕	[30.0]	31.1	[14.3]	雲母・石英・長石・赤色粒子	にぶい赤黒	普通	口縁部横ナデ、体部外面ト位ナデ・沈殿、内面ヘラナデ	竈台上部・5面	40%
2117	灰釉陶器	椀	-	(2.8)	[6.6]	緻密	灰黄・オリーブ灰	良好	体部クロコナデ、柳毛削り、角高台	北部中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2118	砥石	17.6	(7.8)	(8.9)	(2000)	砂岩	砥面は3面、二次焼成	竈火床部	

第44号住居跡 (第456・457図)

位置 調査区北部西寄りのG14f3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第43・47・76号住居跡を掘り込み、第317・619・620号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.3m、短軸約3.1mの方形で、主軸方向はN-6°-Eであり、埠高は約14cmと低い。

床 ほほ平坦で、中央部から竈手前にかけて踏み固められており、壁溝は認められない。

竈 北壁のやや東寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで約110cm、軸部幅約114cmである。壁外への掘り込みは60cmほどで、火床部は床面が凹状に13cmほど掘りくぼめられ、赤変しているがそれほど硬化はしていない。土層断面中、第1・5・6・9・10層が粘土や砂粒の含有状況から天井部の崩落土である。また、煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 灰 褐色 粘土ブロック多量、砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ローム粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 灰 褐色 粘土ブロック・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック多量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 9 褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子中量
- 10 暗赤褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 11 暗赤褐色 焼土粒子多量、砂粒少量
- 12 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 13 暗赤褐色 焼土ブロック中量・ロームブロック少量、炭化粒子微量

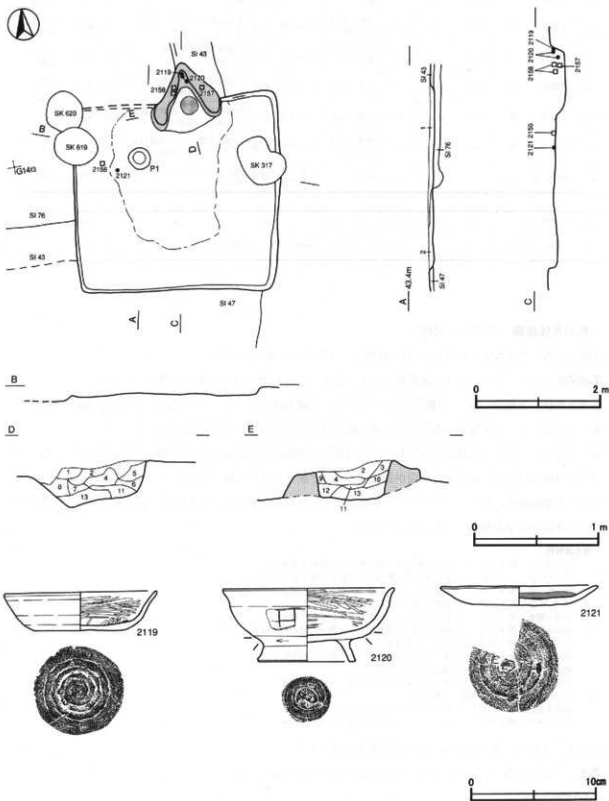
ピット 1か所。深さは17cmであり、性格は不明である。

覆土 2層からなり、ロームブロックの含有状況から人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

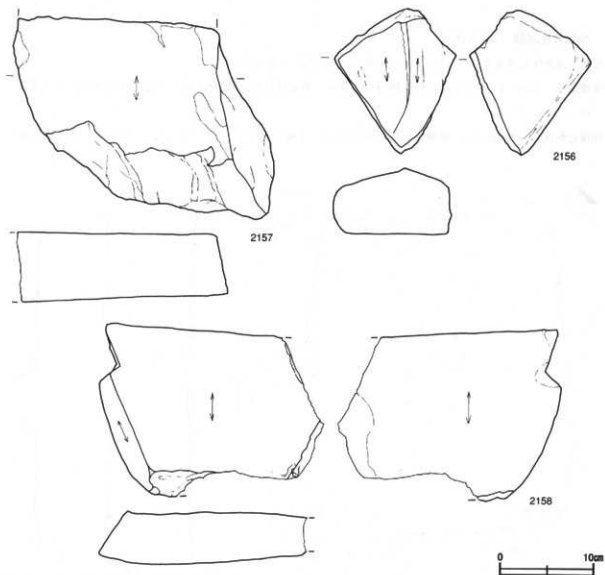
遺物出土状況 土師器片311点（坏21，高台付碗68，皿4，甕218），石器3点（砥石）3点，礫21点が竈及び中央部北西寄りの覆土下層を中心に出土している。北西部床面出土の2121・2156は本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。竈火床部出土の2119・2120は、火熱を受けて伏せられた状態で重なって出土し、支脚として



第456図 第44号住居跡・出土遺物実測図

使用されたものと考えられる。また、袖部内から出土した2157・2158は、砥石として使用された後、袖部材として使用されたものと考えられる。

所見 本跡は、竈の火床部に使用した痕跡があまり見られないことから、存続期間が短かったと推測される。時期は、出土土器の形状から見て10世紀中葉と考えられる。



第457図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表 (第456・457図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2119	土師器	坏	12.0	3.2	7.0	雲母・石英・長石	明褐色	普通	底部回転ヘラ切り	竈火床部	100% PL225
2120	土師器	高台付 碗	13.5	5.9	7.6	雲母・石英	にぶい黄褐色	普通	体部下端回転ヘラ削り、底部 回転ヘラ切り後、高台貼り付 け、ナデ	竈火床部	70% 刷書「田」※
2121	土師器	皿	12.6	1.6	7.6	雲母・石英・長石・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	北西部床面	85% 油桶付着

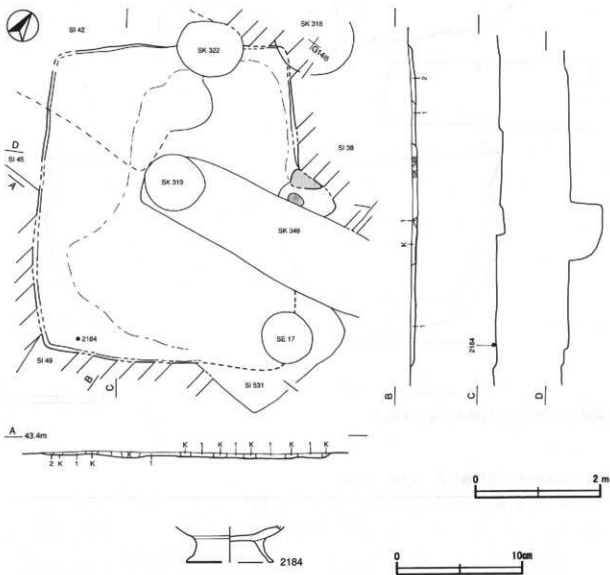
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2156	砥石	(15.3)	(12.8)	7.1	(1720)	砂岩	砥面は2面、欠損部有り	北西部床面	
2157	砥石	(21.4)	27.7	(17.0)	(8360)	砂岩	砥面は1面、欠損部有り、二次焼成	竈石袖	
2158	砥石	18.4	(23.7)	(5.7)	(3870)	砂岩	砥面は3面、欠損部有り、二次焼成	竈左袖	

第46号住居跡 (第458図)

位置 調査区北部東寄りのG14f4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第38・45・49・531号住居跡を掘り込み、第42号住居、第318・319・322・348号土抗、第17号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約5.0m、短軸約4.1mの長方形で、主軸方向はN-55°-Eである。壁高は8cm前後と低い。



第458図 第46号住居跡・出土遺物実測図

床 住居跡等に掘り込まれ、床面全体の様子はつかみにくいが、中央部床面から竈前面にかけてよく踏み固められており、壁溝は認められない。

竈 北東壁中央部に付設され、第348号土坑に掘り込まれているため、火床部と北袖部だけが確認できたが、北袖部は粘土範囲が認められただけである。火床部は、床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており、火熱を受けて赤変し、わずかに硬化している。

ピット 検出されていない。

覆土 2層からなり、ロームブロックの含有状況から人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片74点（坏3，高台付椀16，小皿4，壺47，甗4），碟8点が、南部の覆土下層を中心に出土しているが、ほとんどが小破片である。2184は、南部床面から出土している。

所見 本跡は覆土が薄く、別の住居跡等に半分以上を掘り込まれているために遺存状態が悪く全体の状況がつかみにくいが、時期は、土器の形状から見て10世紀中葉と考えられる。

第46号住居跡出土遺物観察表（第458図）

番号	種別	器種	口径	器高	既録	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2184	土師器	高台付椀	—	(2.8)	[6.8]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転へつ切り後、高台縁り付け、ナデ	南部床面	3%

第55号住居跡（第459・460図）

位置 調査区北部北東寄りのF14f8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第16号住居跡、第8・17号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸約2.8m、短軸約2.3mの長方形で、主軸方向はN-97°-Eである。壁高は10cm前後と低い。

床 ほゞ平坦で中央部が踏み固められており、壁溝は認められない。

竈 東壁のやや南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで約120cm、袖部幅約80cmである。壁外への掘り込みは84cmほどで、火床部は床面が現状に9cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変しているが赤変範囲は狭く、硬化していない。袖部は、床面と同じ高さの地山面の上にローム土を主体とする暗褐色土を基部とし、その上に粘土を主とする灰褐色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中、第8～10層が袖部の上層である。また、煙道部は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 3 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 5 極暗赤褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土ブロック少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量
- 8 灰褐色 粘土粒子多量、ロームブロック・焼土ブロック中量
- 9 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、粘土ブロック微量
- 10 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土ブロック微量

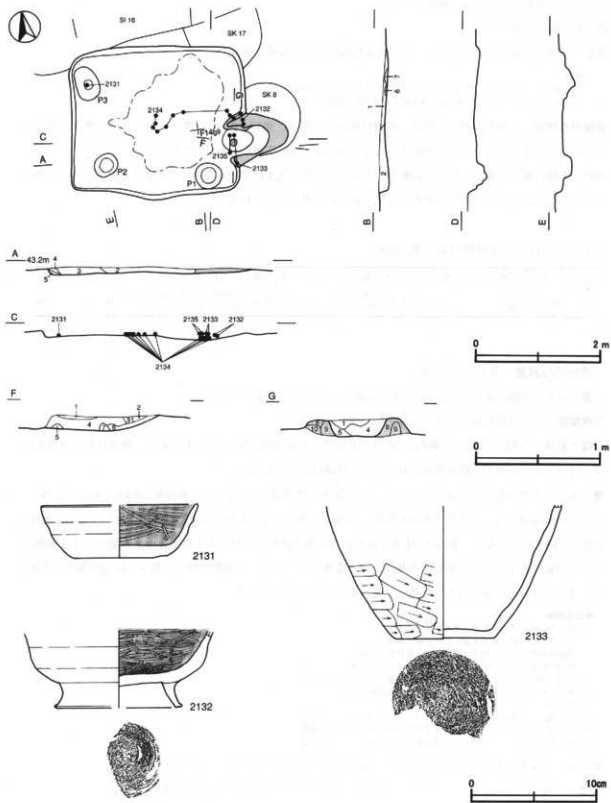
ピット 3か所。P1～P3は深さは14～18cmであり、主柱穴とは考えられない。

覆土 7層からなり、ロームブロックを含み、不自然な堆積状況を呈する人為堆積である。

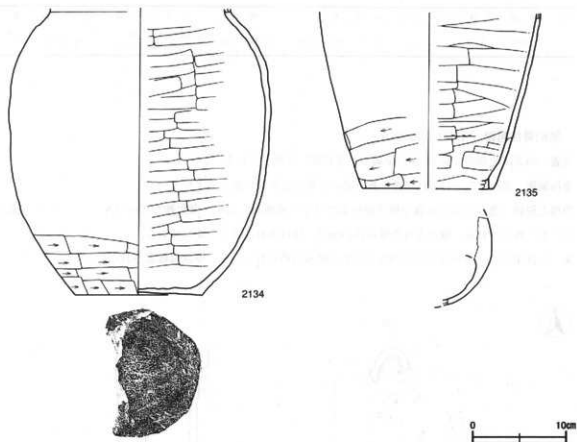
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 暗褐色 ロームブロック多量
- 7 褐色 ロームブロック多量



第459図 第55号住居跡・出土遺物実測図



第460図 第55号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片288点(坯25, 高台付椀50, 甕184, 甕28, 羽釜1), 礫4点が竈及び中央部下層を中心に出土している。竈左袖側床面と中央部床面出土の破片を接合した2134は, 出土状況から住居廃絶直後に東側から投棄されたものと考えられる。また, 2131は北西部の床面から出土しているが, P3上であるため柱の抜き穴に混入したものと考えられる。2132は竈火床部から伏せられた状態で出土し, 火熱を受けた痕跡から支脚として使用された可能性が高く, 火床部から出土した2133・2135は, 竈で使用されたものがそのまま遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡は, 竈の火床部に使用した痕跡があまり見られない。時期は, 出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。

第55号住居跡出土遺物観察表 (第459・460図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2131	土師器	坏	[12.3]	5.3	7.2	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り	北西部床面	50%
2132	土師器	高台付椀	-	(6.2)	[10.1]	雲母・石英・長石	にぶい褐色	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台踏み付け, ナデ	竈火床部	35%
2133	土師器	甕	-	(14.0)	8.0	雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外面下位ヘラ削り, 体部外面上位・内面ナデ	竈火床部	20%
2134	土師器	甕	-	(30.4)	13.5	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面下位ヘラ削り, 体部内面ヘラナデ	東部床面, 中央部床面	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2135	土師器	瓶	-	(18.7)	[14.0]	石英・長石	にぶい黒	普通	体部外面下位へラ削り、上位ナデ、体部内面へラナデ	竈火床部	20%

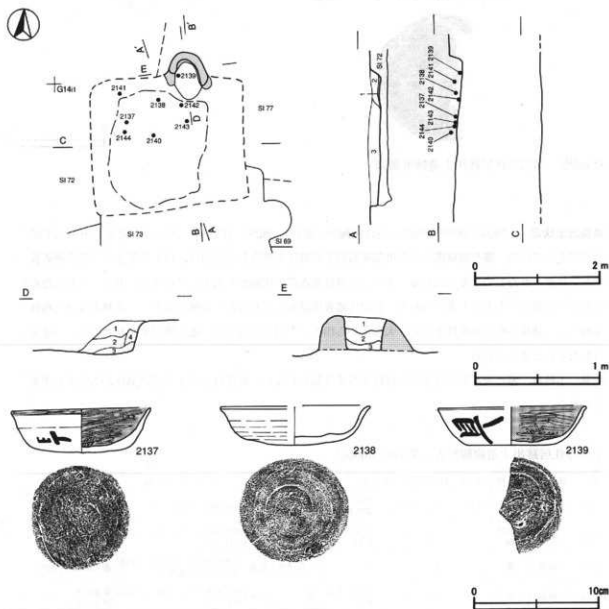
第63号住居跡（第461・462図）

位置 調査区北部のG14i1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第69・72・77号住居跡を掘り込み、第73号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している竈や硬化面の広がりから東西軸2.42m、南北軸2.16mのN-4°-Wを主軸とする長方形と推定される。確認された壁高は14cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部のやや西寄りがよく踏み固められている。壁溝は確認されなかった。



第461図 第63号住居跡・出土遺物実測図

竈 北壁中央やや東寄りに付設され、規模は焚口部から煙道部まで75cm、袖部幅80cmである。壁外の掘り込みは40cm、火床面は18cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子多量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック中量、炭化物・粘土ブロック少量

ピット 検出されていない。

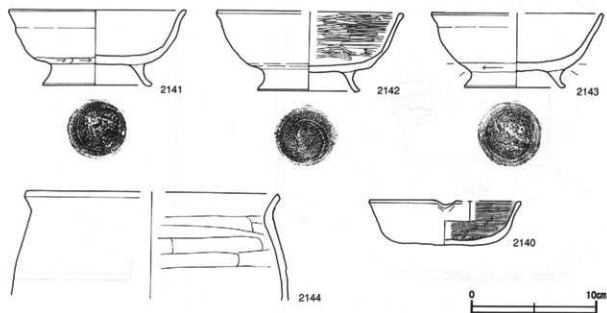
覆土 3層からなり、各層にローム粒子を含む人為堆積である。土層断面中の第2・3層に含まれる粘土ブロックは、竈から流出したものと考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・粘土ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片152点（坏46、高台付碗6、甕100）、須恵器片4点（坏2、甕2）、礫1点（被熱痕あり）が中央部から北西部の覆土中層から下層を中心に出土している。「目下」カと墨書されている2139は竈内下層、「日下」カと墨書された2137や2144は西部下層から出土している。2138・2141・2142は北部の覆土中層・下層、2140・2143は中央部の覆土中層・下層から出土している。

所見 本跡は一辺が3m未満の小形の住居であり、須恵器がまだ若干見られることや出土土器の形状から、時期は10世紀中葉と考えられる。



第462図 第63号住居跡出土遺物実測図

第63号住居跡出土遺物観察表（第461・462図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2137	土師器	坏	10.9	3.5	6.9	雲母・赤色 粒子	にぶい褐色	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	西部下層	98% PL236 墨書「日下」 *
2138	土師器	坏	[12.0]	3.1	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	底部回転ヘラ切り	北部下層	70%

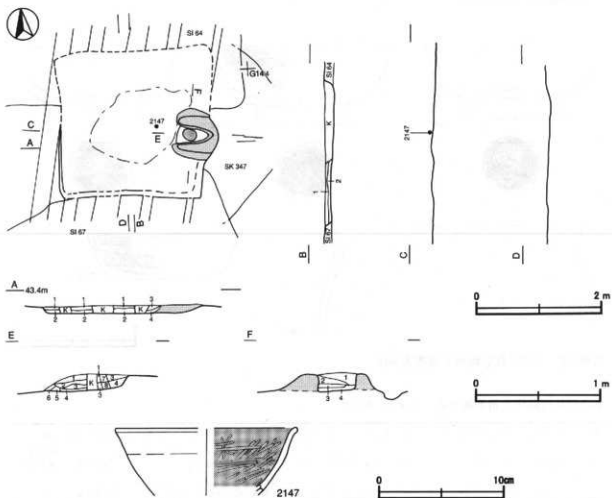
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2139	土師器	坏	[11.8]	3	7.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈内下層	40% 墨書「目下」 _a
2140	土師器	坏	[12.0]	4.5	6.0	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り, 口縁部に注口あり	中央部中層	40%
2141	土師器	高台付碗	14.1	6.0	8.6	雲母・長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け	北西部中層	90% PL226
2142	土師器	高台付碗	[14.9]	6.3	8.1	雲母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け	北部床面	60%
2143	土師器	高台付碗	[13.6]	6.0	8.0	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け	中央部下層	60%
2144	土師器	甕	[20.0]	(8.4)	-	長石・石英	橙	普通	口縁端部横ナデ, 体部内面ヘラナデ	西部下層	10%

第66号住居跡 (第463図)

位置 調査区北部東寄りのG14i3区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第64・67号住居跡, 第347号土坑を掘り込んでいる。また, 耕作による攪乱が激しい。

規模と形状 遺存している竈や硬化面の広がりから, 一辺約2.3m前後のN-90°-Eを主軸とする方形と推定される。確認された壁高は10~15cmで, 外傾して立ち上がると考えられる。



第463図 第66号住居跡・出土遺物実測図

竈 東壁中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで65cm、袖部幅80cmである。壁外への掘り込みは18cmで、火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、赤変硬化している。煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 3 暗赤褐色 炭化粒子・粘土粒子中量、焼土ブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子中量

ピット 検出されていない。

覆土 4層からなり各層にロームや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片37点（坏11、高台付碗1、甕25）、須恵器片1点（坏）、礫1点が出土している。

大部分は細片で図示できたものは少なく、2147は中央部下層から出土している。

所見 本跡は東竈を有する住居形態と出土土器の形状から、時期は10世紀後半と考えられる。

第66号住居跡出土遺物観察表（第463図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	施文	手法の特徴	出土位置	備考
2147	土師器	高台付碗	[14.4]	(5.3)	-	辰石・石英	にぶい橙	普通		体部ロクロナデ、内面へタ磨き	中央部下層	20%

第70号住居跡（第464図）

位置 調査区北部東寄りのG14g1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第71・77号住居跡、第351号土坑をそれぞれ掘り込み、第601号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されたため、竈の立ち上がりは不明である。硬化面の広がりから判断し、N-105°-Eを主軸とする2.5m前後の方形と推定される。

床 竈の手前から南北に硬化面が広がり、竈の北側まで続いている。また、増漆は確認されなかった。

竈 東壁側に位置し、焚口部から煙道部まで80cm、袖部幅100cmほどである。袖部は、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状にくぼみ、煙道は上部が削平されているために、外傾して緩やかに立ち上がる様子が若干認められる程度である。

竈土層解説

- 1 にぶい赤褐色 粘土ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 2 赤褐色 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 4 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

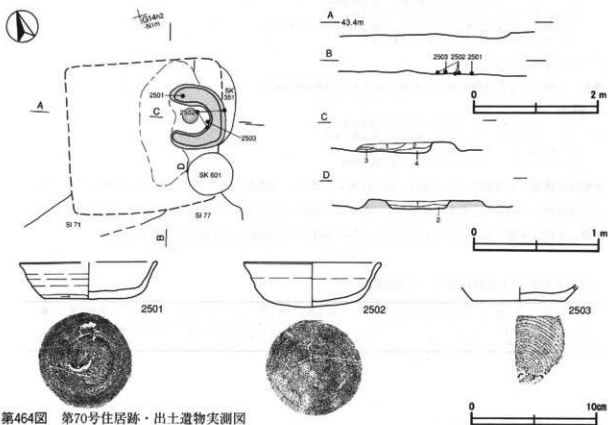
ピット 確認されなかった。

覆土 検出されていない。

遺物出土状況 土師器片42点（碗17、甕25）、礫1点が竈内部およびその周辺から出土している。2501は竈左

袖部、2502・2503は竈火床部からそれぞれ出土している。2501には焼土が付着し、火熱を受けた痕跡が認められ、袖部の補助材として使用されていたものと考えられる。

所見 本跡の時期は、須恵器片が見られないことや土師器が小振りになってきていることなど、出土土器の形状から10世紀後葉と考えられる。



第464図 第70号住居跡・出土遺物実測図

第70号住居跡出土遺物観察表 (第464図)

番号	種別	器種	口径	径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2501	土師器	杯	[10.8]	2.9	6.4		雲母・赤色 粒子	橙	普通	体部クロロナテ、底部回転ヘラ切り	北袖部上層	70%
2502	土師器	杯	10.8	3.5	-		雲母	にぶい橙	普通	体部クロロナテ、底部ヘラナテ	火床部・竈 北側	60% PL226
2503	土師器	杯	-	(1.3)	7.4		雲母・赤色 粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	竈火床部	5%

第72号住居跡 (第465・466図)

位置 調査区北部東寄りのG13h0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 東側部分で第71号住居跡を掘り込み、第63号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.4m、短軸4.3mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は24cmであり、ほぼ直立して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で壁際を除いてよく踏み固められており、壁溝は北壁部を除いて、周回している。

竈 北壁中央部に位置し、焚口部から煙道部まで130cm、袖部幅120cmで、壁外への掘り込みは60cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面にローム土を主体とする暗褐色土を基部として、その上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。上層断面図中の10～19層が袖部に相当し、補強材として両袖部に土師器甕を正位の状態で使用している。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化しており、使用頻度の高さが窺われる。煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 1 極暗褐色 粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 灰黄褐色 ローム粒子・粘土粒子・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック中量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、粘土粒子・砂粒少量
- 11 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、砂粒微量
- 12 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 13 暗褐色 ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子微量
- 14 暗褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック・砂粒少量
- 15 暗褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 16 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、砂粒微量
- 17 褐色 砂粒中量、焼土粒子・粘土粒子少量、ロームブロック微量
- 18 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 19 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量

ピット 5か所。P1・P2が主柱穴に相当し、深さは64cm・21cmである。P3は深さが50cmほどあり、竈と対峙する南壁際に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4・P5は深さがそれぞれ85cm・60cmで、柱穴の可能性があるが性格は判然としにくい。

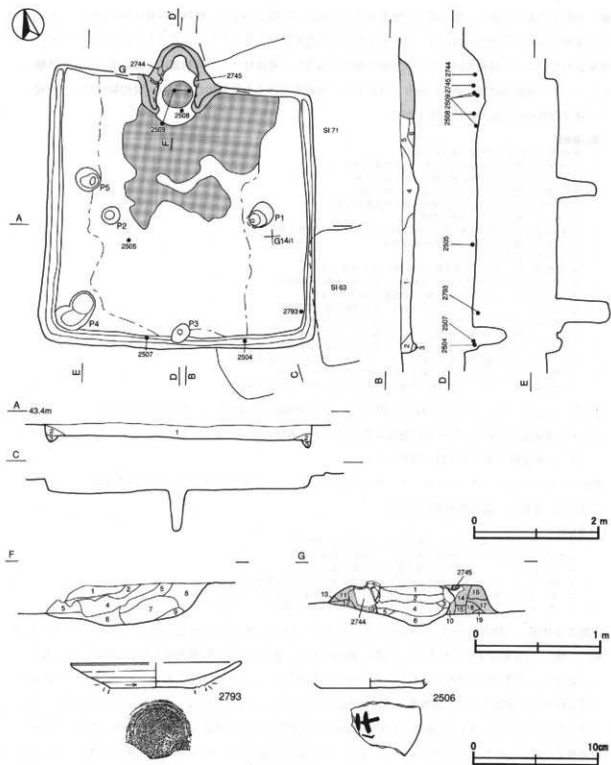
覆土 6層からなり、ロームブロックや焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。第4～6層には、竈材の一部流出が認められる。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片1091点(坏237, 高台付皿15, 甕837, 鉢2), 須恵器片122点(坏106, 皿1, 甕8, 瓶2, 甕5), 鉄製品1点(刀子カ), 石器(砥石)1点, 燧石19点(3点に被熱痕あり)が出土している。これらの遺物は、ほぼ全域に散在しており、その内8点を図示することができた。2744・2745は先に述べた竈袖部の補強材として使用された土師器甕で、両袖部からほぼ正位で出土している。体部には焼土が付着し、火熱を受けて赤変している。「用」と墨書されている2504は南壁際東寄り床面から、判読不明の墨書土器2506は南西部覆土中層からそれぞれ出土している。また、中央部から壁前にかけての床面に、焼土が薄く広がって検出され、火床部前からは、体部外面に墨痕のある2508が横位の状態でつぶれて出土している。竈の崩壊と共にそこに据えられていた甕が倒れたものと想定される。

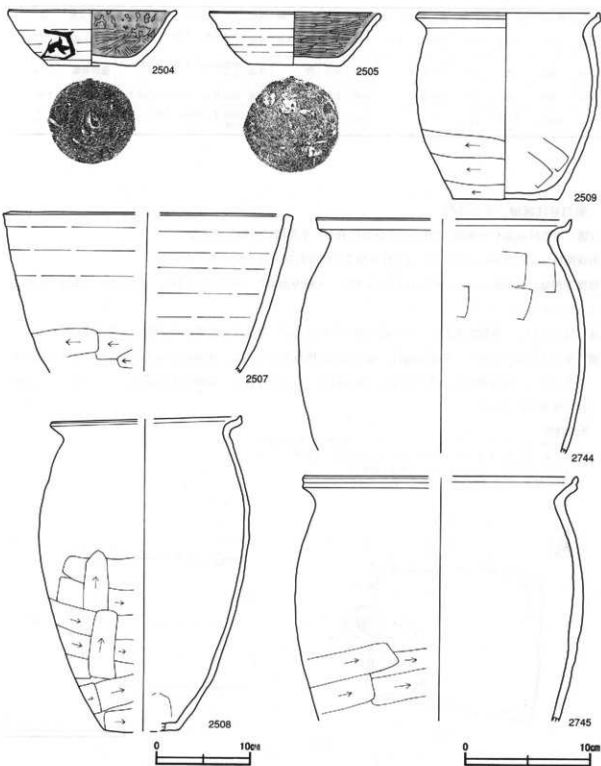
所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に位置づけられ、この時期としては大型の住居跡である。また、1軒の食膳を賄うには十分すぎる環・変形の出土や重厚な構造をもつ竈の使用頻度の高さから、樹的な機能が示唆される。本跡から北へ25mほどの距離には、第4号掘立柱建物跡が位置している。さらに、焼土の広がり状況から見て火災があったことが想定でき、覆土の土層観察から焼失後に埋め戻されている様子を見て取れる。また、焼土の広がりに併せて被熱している土器片が散在している。



第465図 第72号住居跡・出土遺物実測図

第72号住居跡出土遺物観察表 (第465・466図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2504	土師器	杯	13.2	4.4	7.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	南壁際下層	100% PL226 墨書「田」・ 油懸付着
2505	土師器	杯	13.3	4.3	8.2	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ、内面ヘラ磨き	南西部下層	90% L.226



第466図 第72号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2506	土師器	坏	-	(0.8)	8.0	長石・石英	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	南西部礎土中	5% 磨青「庄」 ^a
2507	須恵器	鉢	[23.0]	(12.6)	-	石英・雲母	黄灰	普通	内外面ロクロナデ。外面ヘラ削り	南壁際下層	15%
2508	土師器	甕	[19.8]	33.0	[7.6]	長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り。内面ナデ	甕手前床面	30% PL227 磨灰あり

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2509	土師器	小形甕	13.8	14.9	8.4	石英	にぶい赤黒	普通	体部外面へう削り、内面へうナデ	竈前床面	70% PL227
2744	土師器	甕	[20.4]	[18.5]	-	石英・長石	橙	普通	体部外面へう削り、内面へうナデ	竈西袖部	30%
2745	土師器	甕	[21.6]	[19.5]	-	石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へう削り、内面ナデ	竈東袖部	20%
2793	須恵器	高台付皿	[13.4]	(2.0)	-	長石	灰黄褐	普通	体部下端回転へう削り、底部回転へう切り	南東コーナ一部床面	40%

第73号住居跡（第467図）

位置 調査区北部やや東寄りのG14i1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 北部で第63・69・72・77号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

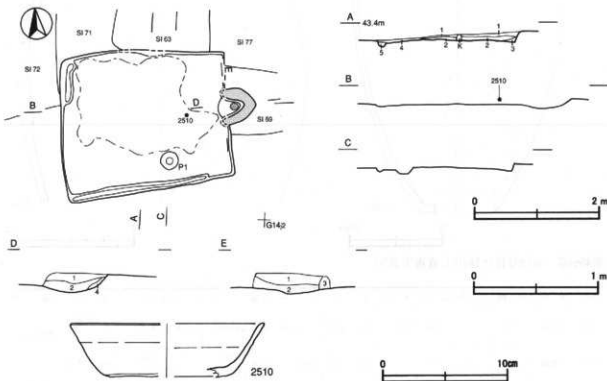
規模と形状 長軸2.6m、短軸2.3mの長方形で、主軸方向はN-83°-Eである。壁高は6~13cmであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、南壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は南壁際と西壁際の一部で認められる。

竈 東壁中央部に位置し、壁を40cmほど掘り込んで構築されており、袖部幅は60cmである。火床面は浅い皿状を呈しており、焼き締まった感じはない。袖部はローム土を主体とする褐色土を基部にして、砂質粘土を貼り付けて構築されている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量



第467図 第73号住居跡・出土遺物実測図

ピット 1か所。深さは12cmで、柱穴と考えられるが、対応する柱穴は検出されていない。

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片143点(碗118、高台付輪5、甕20)、須恵器片13点(坏9、蓋1、高台付坏1、甕2)、燻1点が、主に覆土下層から出土している。坏片に対して甕片が少なく、比率的に不自然であることから、住居廃絶後に投棄されたものと推測される。また、覆土中から出土した須恵器は、細片で破断面が摩滅しており混入したのと考えられる。なお、P1の覆土中から被熱した燻が出土している。

所見 時期は、伴う遺物が少なく判断材料に乏しいが、出土土器の形状や第63号住居跡(10世紀中葉)を掘り込んでいることなどから10世紀後葉の可能性が高い。

第73号住居跡出土遺物観察表(第467図)

番号	検別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2510	土師器	坏	[15.2]	4.3	[9.9]	雲母	明赤褐	普通	内外面クロナテ	遺溝下層	30%

第77号住居跡(第468図)

位置 調査区北部中央のG14h1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第69・71号住居跡を掘り込み、第63・70・73号住居や第601号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

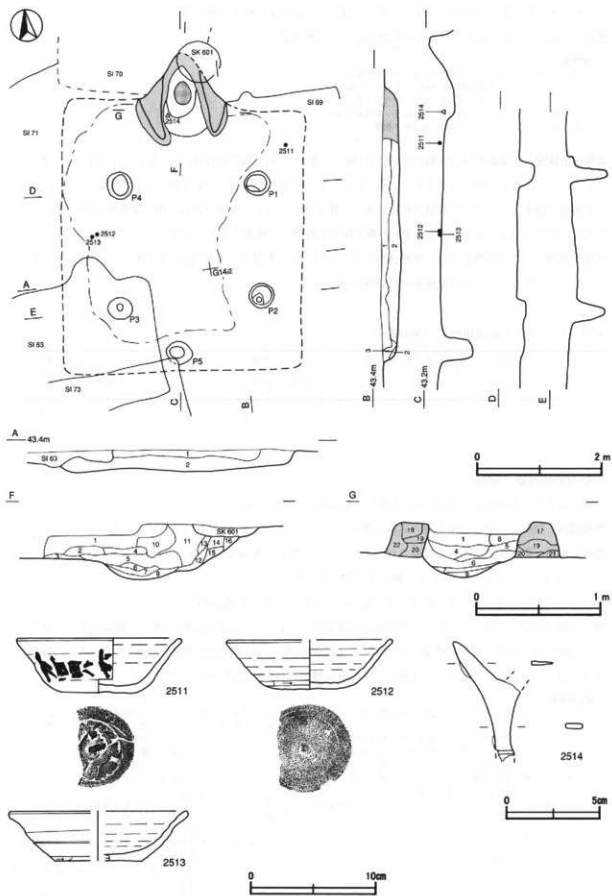
規模と形状 礎の立ち上がりが確認されなかったため、柱穴の配置や硬化面の広がりなどから判断して、長軸4.3m、短軸3.8mのN-9°-Eを主軸とする長方形と推定される。

床 ほぼ平坦で、竈から南壁手前までよく踏み固められている。準溝は確認されなかった。

竈 北壁中央部に付設されており、焚1部から煙道部まで135cm、袖部幅140cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土を用いて構築されており、上層断面図中の第17-22層が袖部に相当する。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

土層解説

- | | | | |
|-----------|---------------------------------|-----------|-----------------------------------|
| 1 暗 褐色 | ロームブロック・砂粒中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 13 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・砂粒多量 |
| 2 暗 灰 色 | 砂粒多量、ローム粒子・焼土粒子少量 | 14 暗 赤 褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・砂粒中量、炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 3 黒 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 15 暗 褐色 | ローム粒子多量、砂粒中量、焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐色 | 砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 | 16 暗 褐色 | ローム粒子・砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 5 黒 褐色 | 砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 17 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、粘土ブロック微量 |
| 6 黒 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 | 18 暗 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 7 暗 赤 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 19 灰 黄 褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 黒 褐色 | 砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 20 黒 褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 9 暗 赤 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量 | 21 暗 褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 10 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック・砂粒中量 | 22 暗 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 11 暗 褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒多量 | | |
| 12 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子中量 | | |



第468图 第77号住居跡出土遺物実測図

ピット 5か所。主柱穴は、P1～P4で、深さは18～64cmである。P3は、第71号住居跡のP2と同じ位置や形状であるため、掘り込んで再利用している可能性が考えられる。P5は深さ40cmで竈と対峙しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、黄土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・黄土粒少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、黄土粒子微量

遺物出土状況 土師器片292点（坏12、甕280）、須恵器片18点（坏11、甕7）、鉄製品2点（鐵1、釘カ1）、土製品1点（輪羽1）、標13点（6点に被熱痕あり）が覆土中層から下層を中心に、全域に渡って散在した状態で出土している。2511は北東部床面から出土しており、「方富集」かと達筆な文字で墨書されている。また、小型の輪羽口（外径4.5cm、内径1.5cm）が中央部南寄りの覆土中層から出土し、埋土と共に混入したものである。

所見 本跡からは輪羽1が出土しており、他の住居跡から出土している多くの鉄滓とともに敷治関連施設の存在を窺わせるものである。時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第77号住居跡出土遺物観察表（第468図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2511	須恵器	坏	12.8	4.4	6.0	赤色粒子・炭母	灰黄	普通	体部口コロナテ、底部回転ヘラ切り残ナテ	北東部床面	50% PL249 外面墨書「方富集」*
2512	須恵器	坏	[12.8]	3.9	7.0	長石・石英	灰	普通	体部ト端子持ちヘラ削り、底部回転ヘラ切り	中央部西寄り床面	50%
2513	須恵器	坏	[13.8]	3.9	[7.0]	長石	灰	普通	体部ト端子持ちヘラ削り、底部回転ヘラ切り	中央部西寄り床面	25%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2514	鐵	(6.3)	(3.6)	0.3	(10.6)	鉄	鐵身形は進取	北東部	

第81号住居跡（第469図）

位置 調査区北部東端のH14c7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 南西部を除く大部分が第85号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東部部分は調査区域外に延びているが、N-18°-Eを主軸とする4.3m前後の方形または長方形と推定される。壁高は9cmで、外方向に開き気味に立ち上がっている。

床 ほほ平坦であり、壁溝は認められない。

竈 検出されていない。

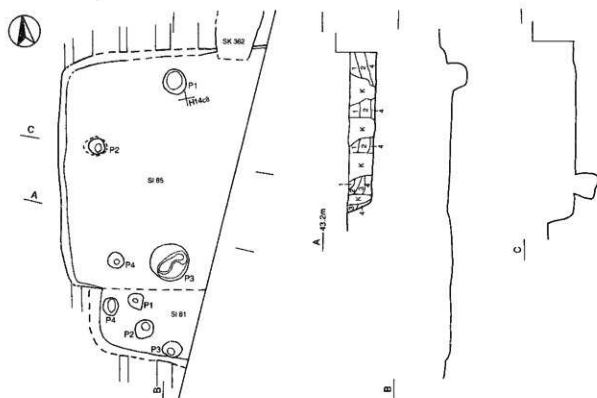
ピット 4か所。P1は深さが41cmで柱穴と考えられる。P2～P4は深さが13cm～40cmで竈柱穴の可能性が考えられるが、いずれも配置が不自然なため性格は不明である。

覆土 重複のため残存数が少なく、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡の大部分が掘り込まれているために本来の形状を明らかにすることはできなかったが、第85号住居跡の北側には遺構は延びておらず、第85号住居跡と同規模かそれ以下と推測することができる。また、時期は

重複関係から見て10世紀前葉よりも古い段階になると考えられるが、出土遺物が少ないため時期の特定はできない。



第469図 第81・85号住居跡実測図

第85号住居跡（第469・470図）

位置 調査区北部東端のH14c7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第81号住居跡の北部を掘り込んでいる。第362号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

竈 検出されていない。

規模と形状 東側部分は調査区域外に延びているが、南北軸3.8m、東西軸3.1mだけが確認され、N-12°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は42cmであり、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁溝は認められなかった。

ピット 4か所。P1～P4の深さは22～40cmで、形状から見て柱穴の可能性も考えられるが、東側部分が未調査のため性格は不明である。

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土器器片241点(碗35, 高台付碗4, 甕199, 小皿3), 須恵器片13点(蓋1, 甕12), 鉄滓3点, 礫9点(被熱痕あり)が、全域に散在した状態で出土している。破断面が磨滅している土器片が主体で、本跡

廃絶後に埋土と共に混入したと考えられる。

所見 時期は、高台付碗や小皿、甕の形状から10世紀後葉と考えられる。



第470図 第85号住居跡出土遺物実測図

第85号住居跡出土遺物観察表（第470図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2516	土師器	高台付碗	[17.2]	(6.7)	-	雲母	にぶい黄褐色	普通	体部内外面へラ磨き	西部覆土中	10%
2517	土師器	小皿	[9.0]	1.7	[6.0]	雲母・石英・赤色粒子	浅黄褐色	普通	体部ロクロ整形。底部回転糸切り	南部覆土中	40%

第90号住居跡（第471図）

位置 調査区北部東寄りのH14d6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 北部で第82号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.4m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-98°-Eである。壁高は38cmであり、外傾して立ち上がっている。

床 竈前に硬化面が認められ、その他の部分は後世の耕作によって削平されたと考えられる。また、壁溝は認められない。

竈 東壁の南寄りに付設されており、壁外への掘り込みは35cmほどである。天井部・袖部は遺存しておらず、付近の床面に竈材の一部が流出したものと考えられる粘土粒子が散在している。火床面は床面とほぼ同じ高さの平坦面で、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、粘土ブロック微量
- 3 灰褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子中量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 9 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

ピット 4か所。P1～P4は形状や配置から見て支柱穴と考えられ、深さは20～36cmである。

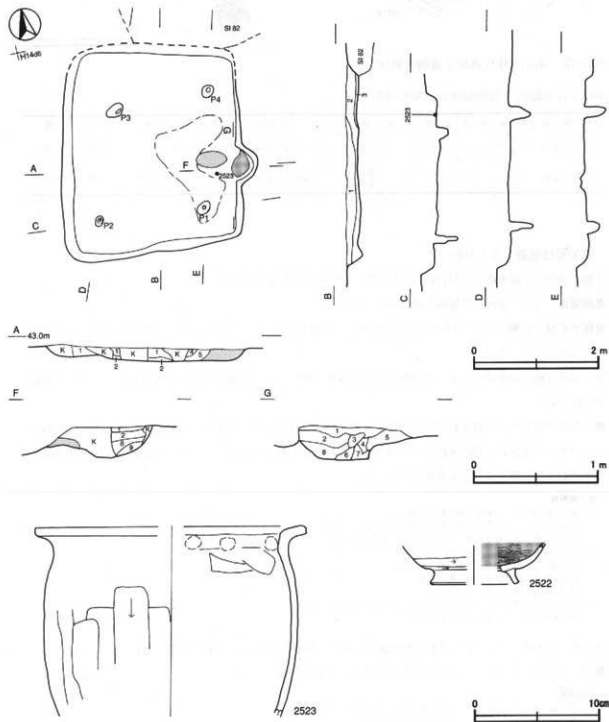
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
- 5 灰黄褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片120点(椀21, 高台付椀2, 碗1, 甕96), 須恵器片14点(坏5, 高台付坏1, 甕8), 罌9点(5点に被熱痕あり)が出土している。2523は、竈前の床面より8片がまとまって出土して接合した資料であり、住居廃絶時に投棄された可能性がある。須恵器はいずれも細片で破断面が摩滅しており、混入したものである。

所見 時期は、出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。



第471図 第90号住居跡・出土遺物実測図

第90号住居跡出土遺物観察表 (第471図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2522	土師器	高台付椀	-	(3.2)	7.6	雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け後、ナデ	東部遺土中	10%
2523	土師器	甕	121.2	(15.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ・指頭痕	壺手前床面	15%

第91号住居跡 (第472図)

位置 調査区北部南東寄りのH14h4区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 長軸3.0m、短軸2.5mの長方形で、主軸方向はN-74°-Wである。壁高は19~25cmであり、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な床面であり、壁溝は認められなかった。

竈 検出されていない。

ピット 1か所。深さ15cmで、ほぼ中央部を垂直に掘り込んでいる。柱穴の可能性が高い。

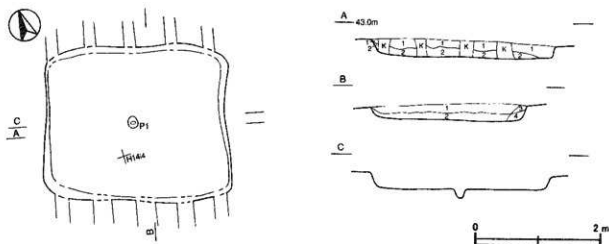
覆土 4層からなり、各層共にロームブロックを含んだ人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片31点(椀8、高台付椀1、壺22)、須恵器片4点(坏)、鉄滓1点(破碎されており、着磁性あり)、小礫4点(被熱痕あり)が覆土中層から下層のほぼ全域から出土している。破断面が摩滅している土器片が多いことや出土遺物が少ないことなどから、本跡廃絶後の埋め戻す段階で、埋土と共に混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器が細片のため断定できないが、住居の主軸方向から見て、奈良・平安時代の可能性がある。



第472図 第91号住居跡実測図

第92号住居跡 (第473・474図)

位置 調査区北部南寄りのII1413区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 長軸2.7m、短軸2.5mの方形で、主軸方向はN-17°-Eである。壁高は22~27cmで、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面や噴溝は認められない。

竈 検出されていない。

ピット 2か所。深さは20~22cmで、性格は不明である。

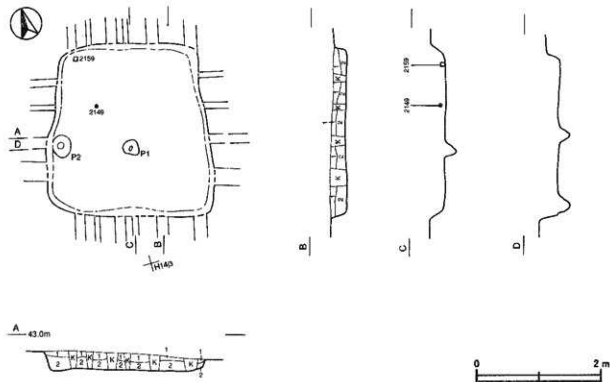
覆土 2層からなり、ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

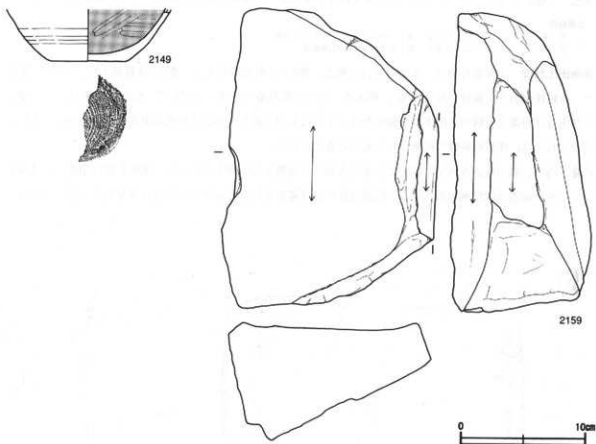
- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片46点(坏9、高台付椀2、甕35)、須恵器片4点(蓋1、甕3)、灰釉陶器片1点(碗)が出土している。大部分は細片で図示できたものは少ない。2149は北西部の下層からで底部には糸切り痕が認められる。また、2159は北西壁際床面から出土している。灰釉陶器片は小破片のため図示できなかったが、胎土から猿投産で黒笹14号窯式と推測される。

所見 本跡は竈や硬化面が確認されず、住居としての機能はされていないと推測される。出土器の形状から奈良・平安時代と推定される。また、本跡は居住施設としての機能を有していないが、北北西へ約7mに鍛冶工房跡とされる第88号住居跡が位置しており、工房跡の補助的な役割を果たした施設の可能性も考えられる。



第473図 第92号住居跡実測図



第474図 第92号住居跡・出土遺物実測図

第92号住居跡出土遺物観察表（第474図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2149	土師器	坏	-	(4.1)	6.0	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部ロクロナデ，底部回転糸切り	北西部下層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2159	紙石	(23.7)	(17.1)	(11.2)	(4960)	砂岩	紙面は2面，欠損部あり	北西壁際床面	

第93号住居跡（第475図）

位置 調査区北部南東のH14h2区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第10・12号溝，第12号井戸にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.7m，短軸3.9mの長方形で，主軸方向はN-10°-Eである。壁高は7～36cmであり，外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦であり，壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 第10号溝に掘り込まれたために，遺存していないことが考えられる。

ピット 3か所。P1は深さが16cmで，配置と形状から柱穴と考えられるが，対応するピットは検出されていない。西壁際のP2・P3は深さが45cmと10cmで，いずれも配置が不自然なため性格は不明である。

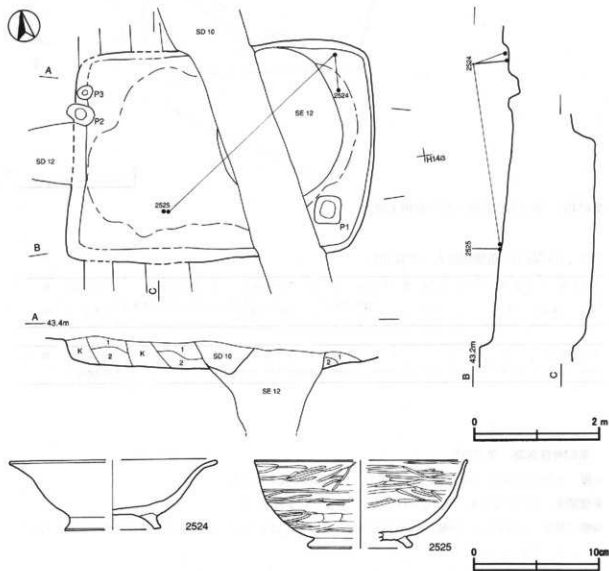
覆土 2層からなり、ロームブロックや炭化物などを含み、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片98点(坏33, 高台付碗2, 寛63), 須恵器片4点(甕), 鉄製品1点(不明), 鉄滓1点(着磁性があり, 破碎されている), 礫8点(3点に被熱痕)が出土している。2524は北東コーナー部と中央部南寄りの覆土下層から出土した破片が接合されたものであり, 2525は中央部南寄りの床面から出土している。これらは, 住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見 当初, 竈が確認されていないことから方形竪穴遺構として調査を行った。供膳具類に須恵器が見られないことや土師器高台付碗の形状から, 時期は作り付け竈を有しなくなりつつある11世紀前半と考えられる。



第475図 第93号住居跡・出土遺物実測図

第93号住居跡出土遺物観察表（第475図）

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2524	土師器	高台付甕	16.4	5.5	7.6	雲母・良石・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナガ、底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	北東隅下層・中央部第2下層	10%
2525	土師器	高台付甕	16.8	7.0	17.8	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラ付き、底部ヘラ切り後高台貼り付け、ナデ	中央部南壁寄り床面	20%

第95号住居跡（第476図）

位置 調査区北部東寄りのH14d4区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 南部の床面が露出した状態で検出されているため、硬化面の広がりから判断して長軸3.7m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-18°-Eと推定される。確認できた壁高は5cmであり、壁はほぼ直立して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は、確認されなかった。

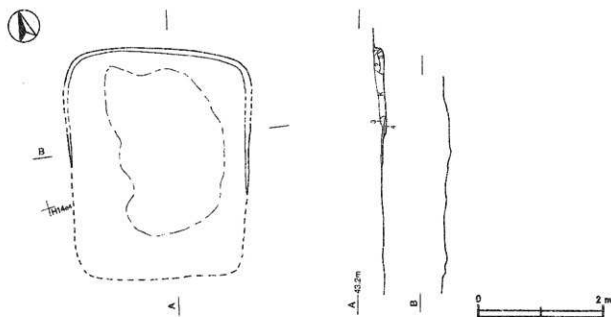
覆土 4層からなり、ロームブロックを含み不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 層 色 ロームブロック中量
- 2 層 層 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 層 層 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 層 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 上部器片32点（椀6、壺26）、須恵器片3点（坏2、壺1）が、ほぼ全域から散在した状態で出土している。覆土中から出土しているものが主体で、床面から確認された土器片はほとんどない。また、破断面が摩滅しているため、本跡発掘時の埋め戻しの段階で埋土と共に混入したものと考えられる。

所見 竈やピットが検出されていない。出土土器が細片のため断定できないが、時期は住居の規模や主軸方向から見て、平安時代と推測できる。



第476図 第95号住居跡実測図

第98号住居跡（第477図）

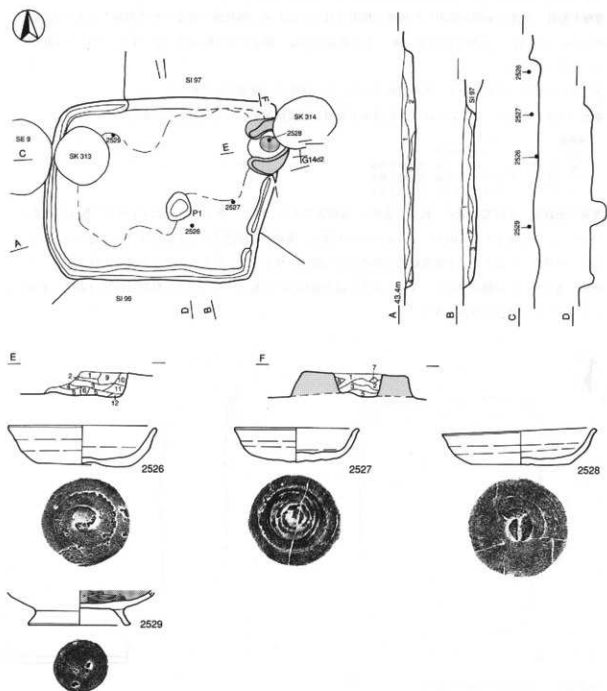
位置 調査区北部北寄りのG14d1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第97・99号住居跡を掘り込み、第9号井戸、第313・314号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.5m、短軸2.7mの長方形で、主軸方向はN-94°-Eである。壁高は24cmであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は北東コーナーを除いて周囲している。

竈 東壁の北寄りに付設されており、袖部幅90cmである。壁外への掘り込みは、第314号土坑に掘り込まれているため不明である。煙道部については、外傾して立ち上がる様子が若干確認されただけである。火床部は、



第477図 第98号住居跡・出土遺物実測図

床面よりわずかに低い平坦面をそのまま使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 黒褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 灰褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 10 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 12 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量

ピット 1か所。深さは27cmで、形状から柱穴の可能性がある。

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片319点（碗87、高台付碗12、小皿3、鉢2、甕215）、須恵器片21点（坏18、高台付坏2、甕1）、礫2点（被熱しており、1点には砥面あり）が出土している。大半の遺物は竈内部およびその付近から集中して出土しており、火床部から2528が出土している。また、竈南側の東壁寄りからは、粘土塊と共に2527が出土しており、竈の崩壊により流出したものと推測される。2526は中央部の床面から完形で出土しており、本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡から出土した土師器坏は口径・器高共に小振りになってきており、初現的な小皿の様相を呈している。時期は出土土層の形状から10世紀中葉と考えられる。

第98号住居跡出土遺物観察表（第477図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2526	土師器	坏	11.4	3.2	7.1	雲母	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後、ナデ	中央部床面	100% PL226
2527	土師器	坏	9.9	2.6	6.7	雲母・赤色 粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後、ナデ	東壁寄り 下土層	70% ヘラ記号
2528	土師器	坏	12.2	3.0	7.8	雲母・赤色 粒子・長石	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後、ナデ	竈火床部	85% PL227
2529	土師器	高台付 碗	-	(2.7)	8.2	雲母・長石	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼 り付け、ナデ	北西部壁 下土層	40%

第100号住居跡（第478・479図）

位置 調査区北部北寄りのG14e1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第99・114号住居跡をそれぞれ掘り込み、第332号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.1m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-10°-Eある。壁高は16~25cmであり、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は、北東コーナー部など一部を除いて巡っており、本米は周囲していたと考えられる。

壁 北壁の東寄り付設されており、壁外への掘り込みは焚口部から煙道部まで100cm、袖幅90cmである。火床

部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。火床部の奥には、砂岩が下部を埋め込まれて直立した状態で支脚として据えられており、火熱を受けて脆くなっている。また、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

壁土層解説

- 1 黒 褐色 粘土粒子微量
- 2 黒 褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子微量
- 3 極暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘土ブロック少量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子微量

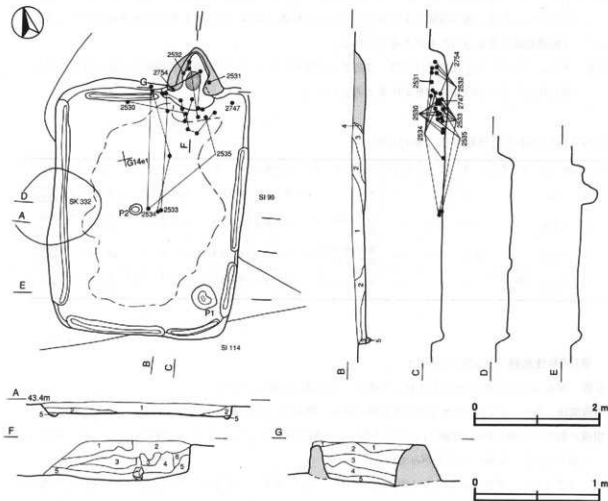
ピット 2か所。深さはそれぞれP1が24cm、P2が6cmである。いずれも性格は不明である。

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒 褐色 粘土粒子微量
- 4 黒 褐色 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 極暗褐色 焼土粒子少量

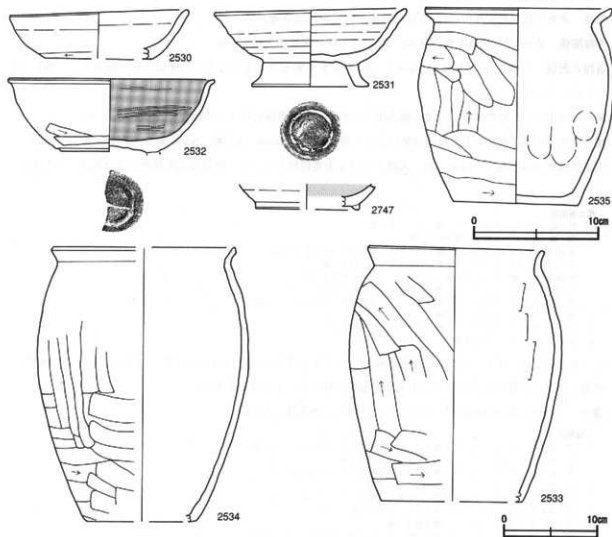
遺物出土状況 土師器片553点（碗131，高台付碗12，甕410），須恵器片42点（坏39，甕3），灰釉陶器片1点（碗），鉄製品1点（不明），石製品1点（支脚），礫3点（被熱痕あり）が出土している。これらの遺物は主



第478図 第100号住居跡実測図

に覆土中層から下層に包含され、中央部から竈周辺にかけて出土している。2530・2532～2535は、床面および竈内部から出土しており、本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。2531は、竈内部よりまとまって出土した6点が接合した資料である。また、覆土中から出土した須恵器は、細片で破断面が摩滅しており、混入したものと考えられる。なお、2747の灰軸陶器碗は北東コーナー部の覆土中層より出土しており、黒笹14号窯式と考えられ、底部には角高台を有している。

所見 時期は、出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。本跡も、竈が壁中央より右に寄って付設されており、当遺跡における同時期の住居形態に規格性をうかがうことができる。



第479図 第100号住居跡出土遺物実測図

第100号住居跡出土遺物観察表 (第479図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2530	土師器	坏	14.0	4.0	[8.4]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	竈前床面	60% PL227
2531	土師器	高台付碗	15.0	6.2	9.0	雲母・赤色粒子・長石	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	竈東袖部中	65% PL227
2532	土師器	高台付碗	16.2	(5.8)	-	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	竈前床面・竈内部	50%

番号	種類	器種	口径	器高	口径	胎土	色	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2533	土師器	甕	18.3	25.5	[14.9]	長石・石灰・赤粉	にぶい黒	普通	体部外面へかり、内面ナデ	甕前覆土下層	50%
2534	土師器	甕	[19.2]	29.0	[11.4]	長石・石灰・赤粉	黒褐色	普通	体部外面へかり、内面ナデ	甕前覆土上層	30%
2535	土師器	小形甕	14.7	15.8	9.8	石英・長石	にぶい黒	普通	体部外面へかり、内面ナデ・指痕あり	小文部深面・甕前覆土下層	85% F9.228
2747	灰釉陶器	瓶	-	2.1	[8.0]	緻密	灰白	良好	高台盛り付け残ロクロナデ、内面施釉	北沢コーナ一部中層	10% 築致差

第101号住居跡 (第480・481図)

位置 調査区北部北寄りのG13d0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第103号住居跡を掘り込み、第333号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.5m、短軸4.2mのN-95°-Eを主軸とする方形である。壁高は20~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は南東・南西壁際を除いて巡っている。

竈 東壁中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで100cm、袖部幅128cmである。壁外の掘り込みは30cm、火床部は16cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 rome砂子・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック中層、romeブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 8 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック少量
- 9 褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 10 褐色 rome砂子多量

ピット 3か所。P1~P2は主柱穴と考えられるが、深さが10~18cmとやや浅い。P3は深さは18cmで、南壁際の中央に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

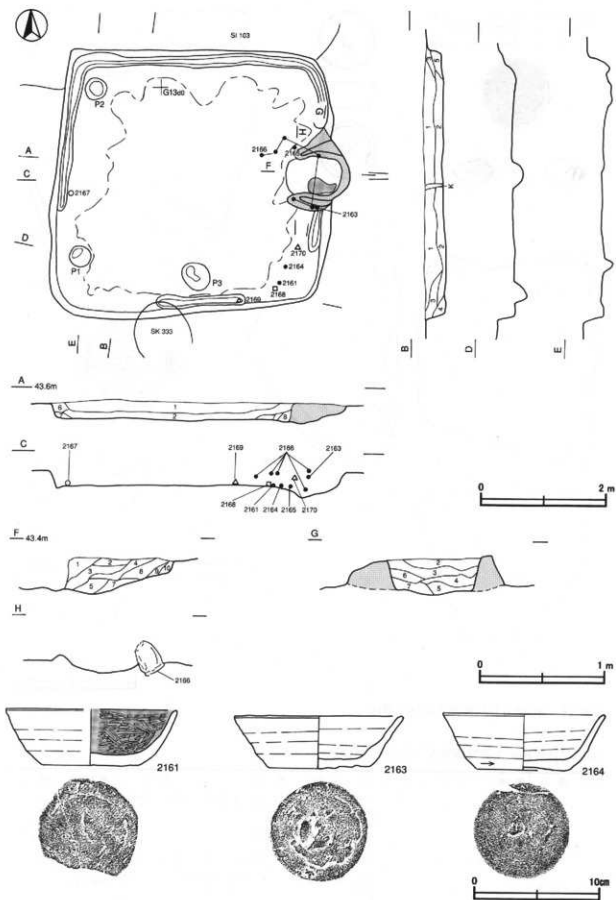
覆土 8層からなり各層にromeブロックを含む人為堆積である。

土層解説

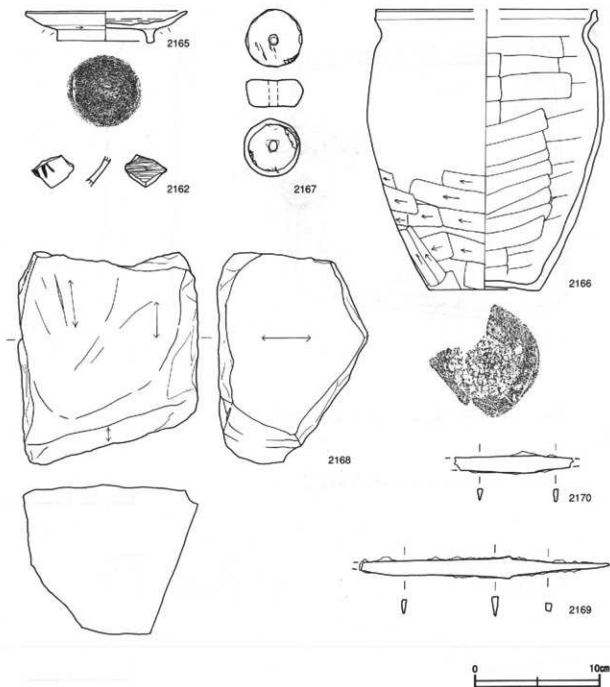
- 1 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 romeブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 romeブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック少量
- 5 黒褐色 romeブロック中層、炭化粒子・粘土ブロック少量
- 6 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 romeブロック・焼土粒子少量
- 8 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片486点(埴241, 高台付埴5, 甕240), 須恵器片76点(埴48, 高台付埴1, 高台付皿1, 蓋12, 甕14), 土製品1点(紡錘車), 石製品6点(砥石), 鉄製品3点(刀子)が東部を中心に覆土上層から床面にかけて出土している。2161・2164・2168は南東部の床周, 2165は甕前の覆土下層, 2163は右袖部内, 2166は左・右袖部内と北部覆土上層から出土した破片が接合されたものである。2167は西壁際中央部の覆土下層から住居廃絶後に埋土とともに混入したものである。

所見 出土土器の形状から、時期は9世紀中葉と考えられる。



第480图 第101号住居跡・出土遺物実測図



第481図 第101号住居跡出土遺物実測図

第101号住居跡出土遺物観察表 (第480・481図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2161	土師器	坏	[13.7]	4.5	7.8	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	底部回転ヘラ切り, 内面ヘラ磨き	南東部床面	40%
2162	土師器	坏	-	(2.5)	-	雲母・長石	にぶい褐色	普通	体部外面クロコナテ	覆土中	5% 体部外面磨き [□]
2163	須恵器	坏	13.3	4.4	7.8	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り	甕石袖内面	90% P1.227
2164	須恵器	坏	12.8	4.5	7.4	長石・赤色粒子	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り後, ナテ	南東部床面	70%
2165	須恵器	高台付皿	12.7	2.5	7.7	長石	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	甕石下層	70%

番号	種別	器種	口径	口径	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2166	土師器	甕	17.6	22.3	8.8	石英・炭石・赤色粘土	にぶい褐色	青焼	口縁部被ナテ、体部外面下位へラ削り、体部内外面ナテ	甕内底部内	10%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2167	紡錘車	4.5	2.1	0.8	58.0	土	ナテ、にぶい黄褐色	西壁際下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2168	炭石	16.9	14.3	11.9	2800	砂岩	砥面は3面、欠損部有り	東壁床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2169	刀子	9.4	1.4	0.3	13.1	鉄	切先部欠損	南壁際床面	
2170	刀子	14.1	3.3	0.4	75.8	鉄	切先部・茎先部欠損	東壁際中層	

第102号住居跡（第482図）

位置 調査区北部北寄りのG13b0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第103号住居跡、第228号土坑を掘り込み、第211・225・226・227号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺が約4.3mの方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は10cm以下と低く、立ち上がり状況は不明である。

床 ほほ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 北壁中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで約80cm、横部幅100cmである。壁外の掘り込みは45cm、火床部は16cmほど掘りくぼめられ、一部火熱を受けて赤変硬化した面が確認された。

竈土層解説

- 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 赤褐色 焼土粒子少量

ピット 検出されていない。

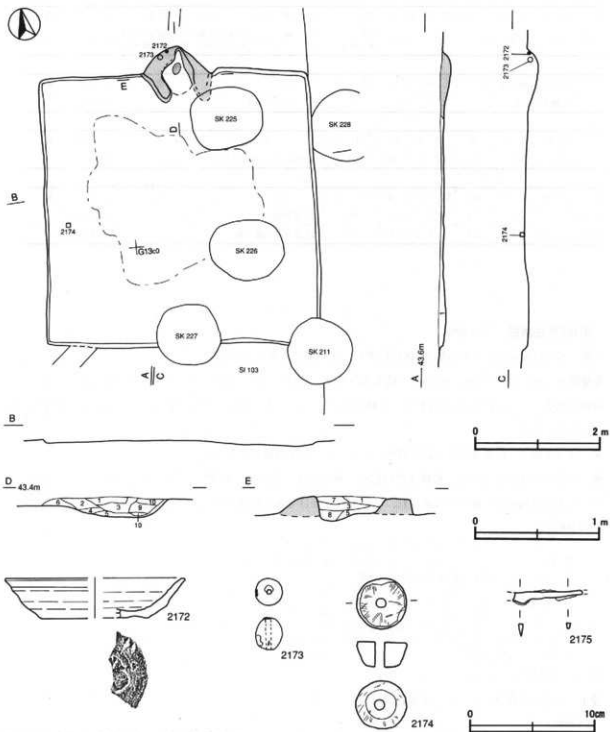
覆土 1層のみ確認されたが、堆積状況は判然としない。

土層解説

- 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片224点（坏87、高台付碗2、鉢1、高坏2、甕130、瓶2）、須恵器片12点（坏）、土製品1点（球状土錘）、石製品1点（紡錘車）、鉄製品1点（刀子）が竈内または西部の床面を中心に出土している。2172・2173は竈内からで、2172は被熱痕が見られることから、支脚に転用されていたものである。2174は西部の床面、2175は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、出土土器の形状から10世紀前葉と考えられる。



第482図 第102号住居跡・出土遺物実測図

第102号住居跡出土遺物観察表 (第482図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2172	土師器	坏	[14.2]	3.2	[8.6]	雲母・石英・長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈内中期	30%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	数	出土位置	備考
2173	球状土埴	2.1	2.4	0.4	11.5	土	ナテ		竈内中層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	数	出土位置	備考
2174	紡錘車	4.0	2.0	0.8	50.4	蛇紋岩	断面、側面がわずかに影らむ円錐台形		西部床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	数	出土位置	備考
2175	刀子	(5.5)	1.0	0.8	(4.0)	鉄	切先・手尻欠損、片側		竈土中	

第106号住居跡（第483図）

位置 洞倉区北部北寄りのG13b8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第103・107・108号住居跡をそれぞれ掘り込み、第467号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 竈の痕跡を留める位置から判断して、N-99°-Eを主軸とする長軸3.6m、短軸3.0mの長方形と推定される。遺存している南西部の壁高は20cmほどで、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から南西コーナー部にかけて硬化面の広がりが見られる。壁溝は認められない。

竪 耕作などにより遺存していないが、竈と推定される部分の痕跡から判断して、東壁中央部に付設されたものと考えられる。覆土の第3層には粘土ブロックや粒子が含まれ、竈構築材の一部が流出したものと考えられる。

覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化ブロック・焼土ブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

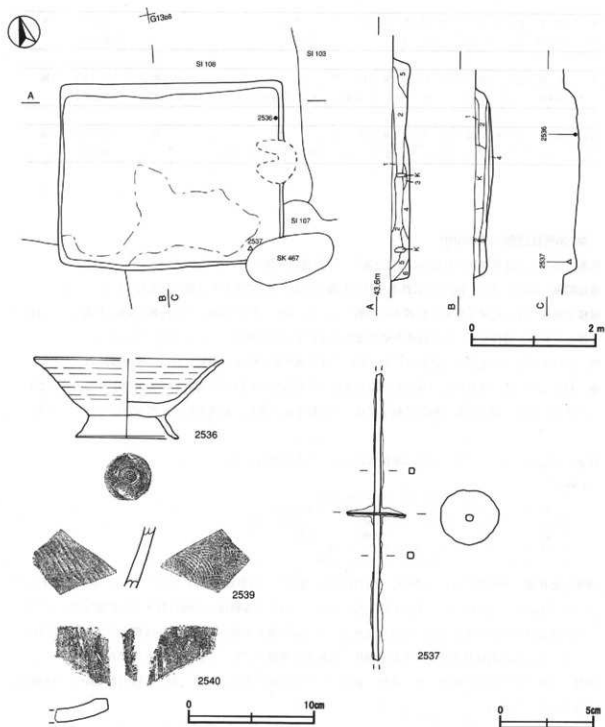
遺物出土状況 土師器片181点（坏36、高台付坏2、甕143）、須恵器片9点（坏3、甕4、蓋1、盤1）、鉄製品1点（紡錘車）、瓦片1点（平瓦）が出土している。これらの遺物は、全城に散在した状態で出土している。

2536は竈北側の東壁際覆土下層、2537は南東コーナー部の覆土下層、2539と2540は覆土中からそれぞれ出土している。須恵器の供膳具類は、いずれも細片で破断面が摩滅しており、混入したものである。

所見 木跡は黒色土中に構築され、東壁に竈を有した住居跡である。また、出土土器の形状から、時期は10世紀後葉と考えられる。

第106号住居跡出土遺物観察表（第483図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	滴	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2536	土師器	高台付甕	[15.0]	6.3	8.2	赤黒・赤色 粒子	灰白・黄緑	普通	体部ロクロナテ、底部内縁へ ウ切り後、高台張り付け	竈左袖部北 側下層	80%	
2539	須恵器	甕	—	(4.8)	—	長石	灰白	普通	体部外面斜位の平行印き、内 面同心円状の当て具痕	北西部覆土 中	5%	



第483図 第106号住居跡出土遺物実測図

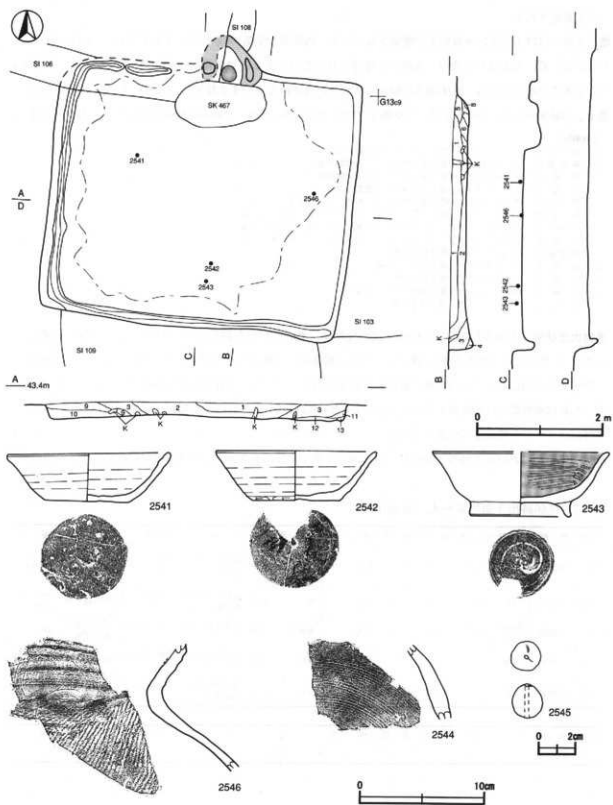
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特 徴	出土位置	備 考
2540	平瓦	(5.0)	(5.4)	1.0	(29.0)	凹面毎日痕, 凸面平行印き	北東部覆土中	5%

番号	器種	最大径	厚さ	長さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
2537	紡錘車	3.1	0.5	(15.3)	(12.0)	鉄	円盤状の紡錘部, 断面方形の棒茎	南東コーナー部覆土下層	

第107号住居跡（第484図）

位置 調査区北部北寄りのG13c8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第103・108・109号住居跡をそれぞれ掘り込み、第106号住居と第467号土坑にそれぞれ掘り込まれ



第484図 第107号住居跡・出土遺物実測図

ている。

規模と形状 長軸4.8m、短軸4.2mの長方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は37cmであり、ほぼ直立して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は東壁際を除いて巡っており、本来は周回していたと推定される。

竈 北壁のほぼ中央部に砂質粘土で構築されている。西側部分を第106号住居、手前を第467号土坑に掘り込まれているため、火床部と右袖の一部のみが確認されただけである。袖部幅約100cm、壁外への掘り込みは50cmほどであると推定される。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変している。

覆土 13層からなり、ロームブロックや焼土ブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 romeブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 romeブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 4 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 5 黒褐色 romeブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 6 黒褐色 romeブロック・焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化物少量
- 7 黒褐色 粘土ブロック中量、romeブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 8 灰褐色 粘土ブロック中量、romeブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 9 暗褐色 romeブロック・炭化物少量
- 10 暗褐色 romeブロック・焼土ブロック少量
- 11 暗褐色 romeブロック・炭化物少量
- 12 黒褐色 romeブロック中量、焼土ブロック少量
- 13 黒褐色 romeブロック・炭化物少量

遺物出土状況 土師器片711点（坏102、高台付坏4、甕605）、須恵器片122点（坏91、甕17、蓋11、釜2、提瓶1）、土製品1点（球状土鉢）、礫10点（2点に被熱痕、小礫8点）、が出土している。これらの遺物は、覆土中層から下層にかけてはほぼ全域に散在した状態で出土している。2541は中央部西壁寄りの覆土下層から出土し、2546は東壁際寄りの床面から出土している。2544は提瓶と思われる須恵器片で覆土中から出土し、2542の底部には「=」と焼成前の窠書が見られる。

所見 供膳具における土師器と須恵器の出土割合や出土土器の形状から、時期は9世紀後半と考えられる。

第107号住居跡出土遺物観察表（第484図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	予法の特徴	出土位置	備考
2541	須恵器	坏	12.8	4.0	6.7	長石	黄灰	普通	体部ロクロナテ、底部ヘラ切り後多方向のヘラ削り	中央部西壁寄り覆土下層	80% PL227 ヘラ記号「-」
2542	須恵器	坏	12.5	3.9	6.8	長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り、底部回転ヘラ削り	中央部下層	60% ヘラ記号「=」
2543	土師器	高台付坏	[13.9]	5.0	7.9	雲母	赤褐色	普通	底部回転ヘラ削り後、高台削り付け	中央部西壁寄り下層	60%
2544	須恵器	提瓶	-	(3.9)	-	長石・赤色粒子・黒色斑点	暗灰	良好	体部外面カキ目調整、内面ロクロナテ	覆土中	5%
2546	須恵器	甕	-	(9.6)	-	石英	灰白	普通	体部外面斜位の平行叩き、内面削磨痕	東壁寄り床面	20%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特	備	出土位置	備考
2545	球状土鉢	1.6	1.6	0.2	4.26	土	ナテ、明赤褐色を呈する。		覆土中	

第115号住居跡（第485図）

位置 調査区北部北寄りのG14f2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 南西コーナー部を除く大部分で第68号住居跡を掘り込み、第339号土坑に掘り込まれている。

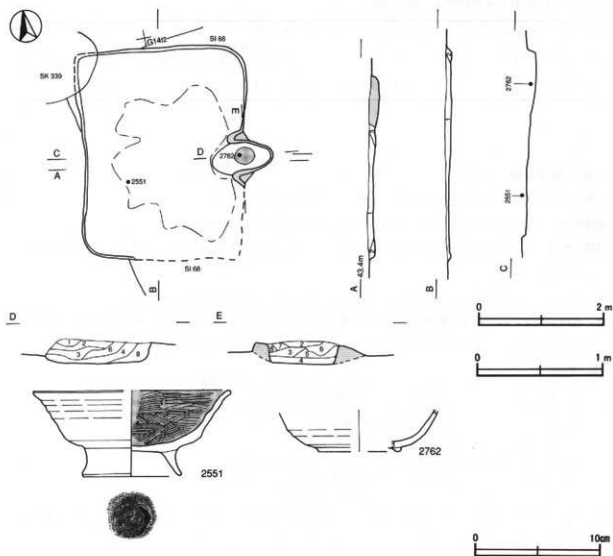
規模と形状 長軸3.4m、短軸2.7mの長方形で、主軸方向はN-102°-Eである。壁高は8cmであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、竈前から中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 東壁中央部に付設されており、焚口から煙道部まで100cm、袖部幅88cmで、壁外への掘り込みは50cmほどである。袖部は砂質粘土を貼り付けて構築され、火床部は浅い皿状にくぼみ、赤変硬化している。煙道は、火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子少量
- 4 極暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量
- 5 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒中量、炭化物・ローム粒子少量



第485図 第115号住居跡・出土遺物実測図

- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒少量
 7 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量
 8 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
 2 黒褐色 ローム粒子中量
 3 黒褐色 焼土粒子少量、粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片172点（椀17、高台付椀7、甕148）、須恵器片11点（坏5、甕6）が覆土下層から全域に散在した状態で出土している。2551は西壁際寄りの床面、2762は竈火床部からそれぞれ出土している。2762は火熱を受けて赤変しており、竈での使用が想定される。また、須恵器片はいずれも破断面が摩滅しており、埋土と共に混入したものである。

所見 本跡の住居形態はやや歪み、土柱穴も検出されていない。時期は、出土土器の形状から判断して、10世紀後半と考えられる。

第115号住居跡出土遺物観察表（第485図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2551	土師器	高台付椀	[15.4]	6.8	7.6	雲母	赤褐色	普通	内部内面ヘタ磨き、底部回転ヘタ切り後、高台貼り付け	南部直下下層	50%	
2762	土師器	高台付椀	-	[2.2]	[6.4]	雲母	明赤褐色	普通	高台貼り付け後、ナテ	竈火床部	40%	

第120号住居跡（第486図）

位置 調査区北部ほぼ中央のG13j8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第623号土坑を掘り込み、第613号土坑、第22号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 3.4m前後の方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は13~20cmであり、外方向に突き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。断面U字状の境溝が周回している。

壁 北壁中央部に砂質粘土で構築されており、壁外への掘り込みは20cmほどである。袖口幅は92cm、契口部から煙道部まで72cmで、火床部は皿状に掘りくぼめられて、若干赤変硬化している。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
 3 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 5 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
 6 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量
 7 暗褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック・炭化物・砂粒少量
 8 赤褐色 粘土ブロック・砂粒中量、ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
 9 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量

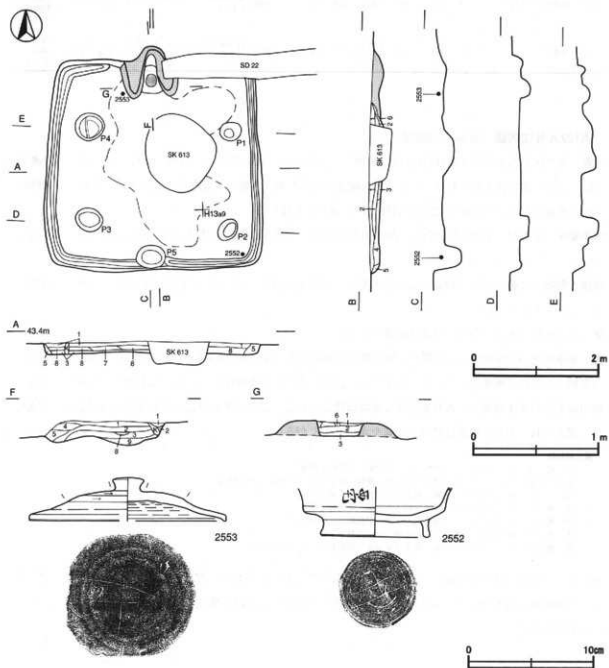
ピット 5か所。土柱穴はP1~P4が相当し、深さは16~28cmである。P5は深さが28cmであり、竈と対峙する南壁際に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 8 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片71点(坏3, 甕68), 須恵器片7点(坏2, 高台付坏1, 甕3, 蓋1), 輪羽口片1点, 礫3点が出土している。これらの遺物は、覆土中層から下層に包含され、主に竈内部および竈周辺から出土している。2552は、南東部壁際の床面から正位の状態で出土しており、体部に横位で「西宅」と墨書、底部外面



第486図 第120号住居跡・出土遺物実測図

に「井」と焼成前の窰書きが見られる。さらに、底部内面には朱墨痕、外面には墨痕が残されていることから、甕に転用されたものと考えられる。

所見 供膳具の主体がまだ須恵器であることや出土土器の形状から、時期は9世紀前後と考えられる。また、「西宅」と墨書きされた須恵器高台付杯の出土は、有力者層の存在を窺わせるものであり、甕に転用されていることと併せて、当該期における有効な資料である。

第120号住居跡出土遺物観察表（第486図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	施成	手法の特徴		出土位置	備考
2552	須恵器	高台付杯	-	(4.0)	8.8	長石・石英	灰		普通	底部回転ヘラ切り後、高台廻り付け	南東部埋跡床面	80% PL251 内面にヘラ 記号「井」	
2553	須恵器	蓋	[15.4]	3.4	2.4	長石・赤色 粒子	黄灰		普通	内外面ロクロナテ、天井部右 回りの回転ヘラ削り	南東部埋跡 前覆土下層	80% PL251 内面にヘラ 記号「井」	

第122A号住居跡（第487・488図）

位置 調査区北部中央寄りのH13b9区に位置し、平坦部に立地している。当初、1軒の住居跡として調査を開始したが、建て替えが行われていることが確認されたため、外側の東壁を有する住居跡を第122A号住居跡、内側の北壁を有する住居跡を122B住居跡として調査を実施した。

重複関係 北東部で第121号住居跡、第122B号住居跡の全域をそれぞれ掘り込み、第625号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.2m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-95°-Eである。壁高は13~20cmであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。なお、壁溝は確認されなかった。

竈 東壁中央のやや南寄りに位置し、焚口部から煙道部までは60cm、袖部幅84cmで、壁外へ35cmほど掘り込み、砂質粘土を用いて構築されている。火床部は、皿状にくぼみ赤変硬化している。火床面は、床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道の立ち上がり部には須恵器杯が支脚として据えられており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂粒・粘土ブロック少量、炭化物微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 6 赤褐色 焼土粒子・砂粒多量、炭化物・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、砂粒微量

ピット 1か所。深さが35cmで、竈と対峙する西壁際にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層断面の観察からローム土混じりの黒褐色土を充填して床面を構築した後、ピットを掘り込んでいることが確認できた。

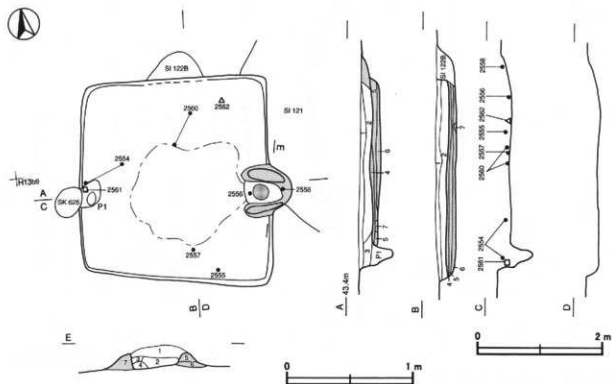
覆土 7層からなり、ロームブロックや焼土を含む人為堆積である。土層断面図中の第1・2層には、竈から流出した焼土や炭化粒子が含まれている。4～7層は貼床の土層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子多量

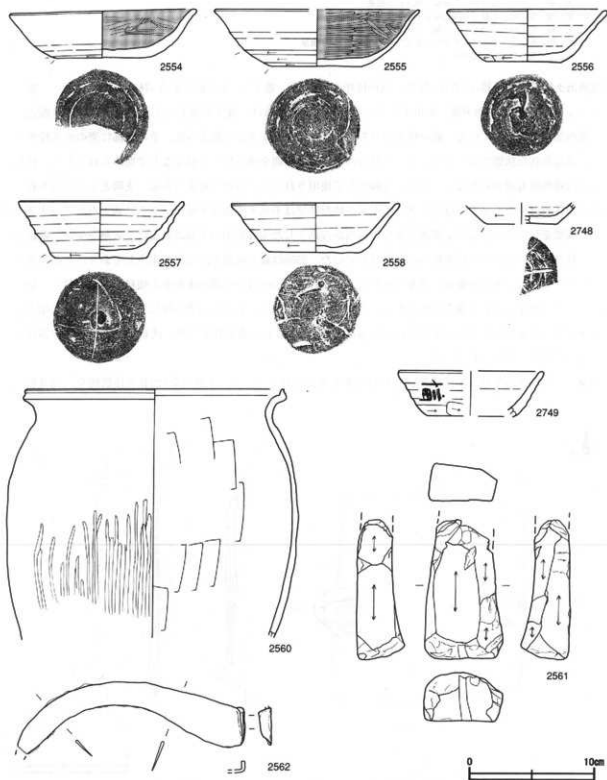
遺物出土状況 土師器片257点(坏35, 高台付坏1, 甕220, 蓋1), 須惠器片33点(坏18, 高台付坏1, 甕11, 瓶3), 鉄製品1点(曲刃鎌)が出土している。これらの遺物は、覆土上層から下層に包含され、竈周辺および竈内部から出土している。竈の煙道の立ち上がりには2558が逆位で据えられ、その下部に甕の底部片や体部片が重ねられた状態で出土している。これらの土器は、隙間を焼土化した粘土などで埋められており、体部外面には被熱痕も認められることから、支脚として使用されていたものと考えられる。支脚として使用された土器の個体数は少なくとも3点以上あり、上部の坏だけでは不足する高さを補い、さらに適正な高さにするための微調整を行っていた結果と推測される。竈内から出土した支脚転用の土器以外には、火熱を受けた痕跡はなく、投げ捨てられたように火床部内に散乱していた。2556は竈火床面より完形で出土しており、火熱を受けていないことから、本跡廃絶時に遺棄されたと考えられる。2560は中央部の床面から破砕された状態で一括して検出され、出土位置から竈で使用されていたものと考えられる。2749の須惠器坏に墨書されている文字と同一筆跡と思われる墨書土器が、北西方向に40mほどのG13d3区で表面採集され、法量も近似する須惠器坏の体部外面に横位で墨書されている。

所見 出土土器の形状から、時期は9世紀後葉と考えられる。なお、本跡は第122B号住居跡を一周り拡張し



第487図 第122A号住居跡実測図

て建て替えられている。その拡張幅は10～20cmで、建て替えに伴って122B号住居跡の床面に黒褐色土を充填して15cmほどの厚さの床を再構築しており、同時に竈や出入り口施設、主柱穴の位置を合わせて移動している。



第488図 第122A号住居跡出土遺物実測図

第122A号住居跡出土遺物観察表(第488図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2554	土師器	環	14.6	3.9	7.1	雲母・長石・石英	褐	普通	体部下端へラ削り、底部回転へラ切り	中央部・西壁際下層	55%
2555	土師器	環	16.0	4.6	7.2	雲母・長石・石英	にじみ濃褐	普通	体部下端回転へラ削り、底部回転へラ切り	南壁際下層	50%
2556	須恵器	環	12.3	4.3	6.0	雲母・長石	黄灰	普通	体部下端手持ちへラ削り、底部回転へラ切り	竈火床面	100% PL227
2557	須恵器	環	13.0	4.5	7.2	長石	灰	普通	体部下端回転へラ削り、底部回転へラ切り後ナゲ、外面白然焼	南壁寄り床面	85% PL251 東部外壁へラ足 ぎ・上白然焼
2558	須恵器	環	13.2	4.6	7.1	雲母・石英・赤色粒子	橙	一次焼成	体部下端回転へラ削り、底部回転へラ削り後一方向のへラ削り	竈壁基部	80% PL227
2560	土師器	蓋	20.4	(19.8)	-	雲母・長石・石英	褐	普通	体部下平部へラ磨き、体部下面へラナゲ	中央部床面	50%
2748	須恵器	環	-	(4.5)	(5.6)	赤色粒子・黒色粒子	灰	普通	体部下端回転へラ削り、底部回転へラ切り	覆土中	5% 底部外 壁へラ足 ぎ [2]
2749	須恵器	環	(11.4)	3.6	(7.2)	長石・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちへラ削り	覆土中	5% 体部 外面磨き [補1]

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考	出土位置	備考
2561	瓦石	(11.1)	6.1	3.4	(312)	凝灰質	方柱状、顔面5面のうち1面に肋状の研ぎ痕あり、端部片断欠損		西壁際覆土7層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考	出土位置	備考
2562	鎌	(18.2)	3.0	0.2	(62.3)	鉄	刃先部欠損、刃部彎曲、基部は全体を折り返す		竈内床面	

第122B号住居跡(第489図)

位置 調査区北部東寄りのH13b9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 北東部で第121号住居跡を掘り込み、第122A号住居が全城を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.2m、短軸3.0mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。最高は最も残りの良い北壁で30cmを測り、外方向に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。単溝は確認されなかった。また、竈の左袖手前に長径60cm、短径48cmのほぼ楕円形で、深さ6cmほどの掘り込みが検出された。覆土下層から焼土や炭化粒子、灰が確認されていることから竈の灰を掻き出してためていた灰溜と考えられる。

灰溜土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 炭化粒子・灰少量、焼土粒子微量

竈 北壁の中央部に付設されており、袖部がほとんど遺存しておらず、焚口部の上面から踏み固められた痕跡がわずかに確認されたことから、北壁を建て替え以前の本跡の竈と判断した。焚口部から煙道部までは80cm、燃焼部幅40cmで、壁外へ60cmほど掘り込んで構築されている。火床面は、浅い皿状にくぼんで赤変硬化しており、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・砂粒少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、砂粒少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック中量、炭化粒子少量



第489図 第122B号住居跡・出土遺物実測図

- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量
 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
 8 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
 9 におい褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック・灰中量、粘土粒少量
 10 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック・砂粒少量

ピット 2か所。P1は深さが24cmで、竈と対峙する南壁際にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P2は深さが17cmで、配置と形状から柱穴と考えられるが、対応するピットが検出されていない。

貯蔵穴 北東コーナー部に付設され、平面形は長径60cm、短径45cmの楕円形を呈している。深さは20cmを測り、底面は皿状を呈している。覆上は西側から流れ込んだ堆積状況を示し、龍材の一部と見られる粘土粒子や焼土が含まれる。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
 2 褐色 ロームブロック・粘土粒少量、炭粒微量
 3 褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒少量、焼土粒子微量
 4 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

覆土 確認された覆土は、すべて第122A号住居跡に帰属するものである。

遺物出土状況 土師器片251点(坏30、高台付坏1、甕218、甌1、釜1)、須恵器片35点(坏14、高台付坏5、甕9、釜3、盤4)が出土している。これらの遺物は覆土下層に包含され、主に竈内部およびその周辺から出土している。2666は東壁際の床面とピット内から出土した破片が接合したものであり、底部外面には「=」と焼成前のヘラ書きが見られ、2667にも底部外面に同様なヘラ書きが施されている。2559は竈火床部より出土しており、竈前の覆土中層より出土した破片と同一個体である。また、2669と2670もともに竈火床部から出土しており、接合面はないが同一個体と考えられる。

所見 時期は、出土土器の形状から、第122A号住居跡が木跡を建て替える以前となる9世紀中葉と考えられる。

第122B号住居跡出土遺物観察表(第489図)

番号	種別	器種	口径	径高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2666	須恵器	坏	[13.6]	4.0	6.7	雲母	灰黄褐色	普通	体部下端す持ちへり張り、底部面転へり切り後一方隅のへり張り	東壁際床面・ピット覆土上層	40% 底部外面にヘラ記号「=」
2667	須恵器	高台付坏	[13.2]	4.8	8.0	雲母・灰石	灰	普通	底部面転へり張り後、高台部付け、ナデ	竈火床部	35% 底部外面にヘラ記号「=」
2668	土師器	甕	[16.4]	(16.5)	-	雲母・灰石・石灰	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ、内面横ナデ、輪縁ミズ	竈火床部	10%
2669	土師器	小形甕	[12.2]	(7.4)	-	雲母・灰石・石灰	にふい色	普通	口縁部横ナデ、内面へり張り、輪縁ミズ	竈火床部	5%
2670	土師器	小形甕	-	(4.2)	7.4	雲母・灰石・石灰	にふい色	普通	体部外面へり張り、輪縁ミズ	竈火床部	10%
2559	須恵器	鉢	[25.8]	15.6	16.0	雲母・灰石・石灰	黄灰	普通	体部外面へり張り、内面ナデ、指痕痕	竈火床部	30%

第127号住居跡(第490図)

位置 調査区北部北側のG13a7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第105号住居跡の南西部部分を掘り込み、西壁際で第119号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.5m、短軸3.2mで、N-8°-Eを主軸とする方形と推定される。壁高は最も残りのよい南壁で16cmを測り、壁は外傾して立ち上がっている。

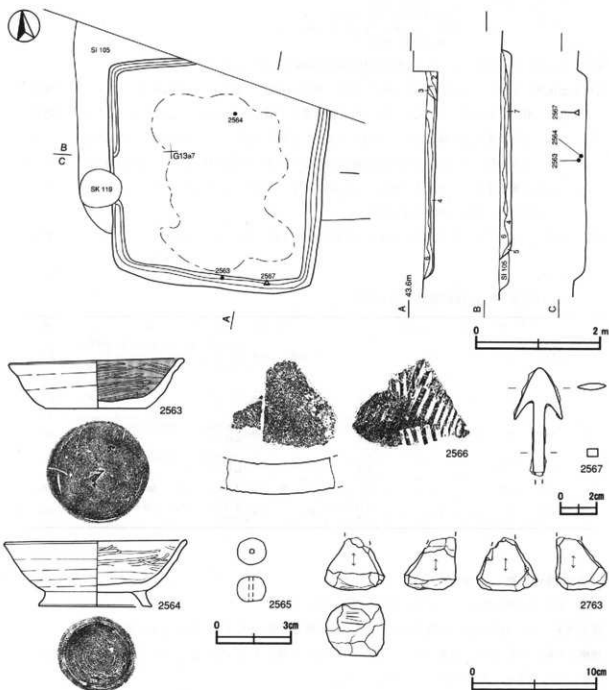
床 ほゞ平坦な粘床であり、中央部がよく踏み固められている。壁溝は、確認された壁際を巡っている。

竈 北壁中央部から北東コーナー部が調査区域外に延びているために、規模や形状は不明であるが、覆土の土層断面図中の第1～3層に焼土ブロックや炭化物、粘土ブロック、砂粒が多量に含まれ、竈から流出したものと考えられる。また、北壁際には竈構築材の一部と考えられる粘土ブロックや砂粒が散在し、北壁の東寄りに砂質粘土で構築されたものと推定される。

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物・粘土ブロック・砂粒少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量
- 3 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量



第490図 第127号住居跡・出土遺物実測図

- 5 黒褐色 ロームブロック中量
6 暗褐色 ロームブロック・焼上ブロック少量
7 黒褐色 ロームブロック・焼上粒子少量

遺物出土状況 土師器片419点(坏126, 高台付坏6, 甕287), 須恵器片23点(坏11, 甕10, 版2), 鉄製品1点(鎌), 瓦片1点(平瓦), 土製品1点(土玉), 石器1点(砥石), 糠6点が覆土中層から下層にかけて, 全域に散在した状態で出土している。2563は南壁際から斜位で出土しており, 住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。須恵器坏類はいずれも細片で, 破断面が啖滅しており, 混入したものである。

所見 本跡の住居形態はやや歪み, 土柱穴も検出されていない。時期は, 出土土器の形状から9世紀後葉と考えられる。

第127号住居跡出土遺物観察表 (第490図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2563	土師器	坏	13.7	4.0	8.0	雲母・長石	黒褐色	普通	内面ヘラ磨き, 底部回転ヘラ切り後ナデ	南壁際床面	85%
2564	土師器	高台付坏	14.2	5.4	8.8	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部内面ヘラ磨き, 底部回転ヘラ切り後, 高台磨り付け, ナデ	中央部北寄り土層	100% PL228

番号	器種	長さ	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2565	球状土器	1.0	1.1	0.2	1.4		土	側面ナデ, 指痕痕	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2566	平瓦	(7.6)	(9.5)	2.5	(178)		四面布目痕, 凸面平行叩き	覆土中	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2763	砥石	(4.1)	4.8	4.2	(79)	凝灰岩	砥面5面のうち1面に筋状の磨き痕あり, 欠損が多いため全体の形状は不明	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2567	鐵	(5.9)	2.6	0.4	(9.2)	鐵	三角形, 摺りあり	南東部壁際下層	

第128号住居跡 (第491図)

位置 調査区北部南東のH13h0区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第129・133号住居跡をそれぞれ掘り込み, 第12号溝と第642・643号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.8m, 短軸3.4mのほぼ方形で, 主軸方向はN-100°-Eである。壁高は7~17cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められている。壁際は北壁際で検出されている。

竈 東壁中央部の南寄り壁外に40cmほど掘り込んで構築されており, 焚口部から煙道部まで80cm, 袖部約80cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに外傾した後, 急な傾斜で立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

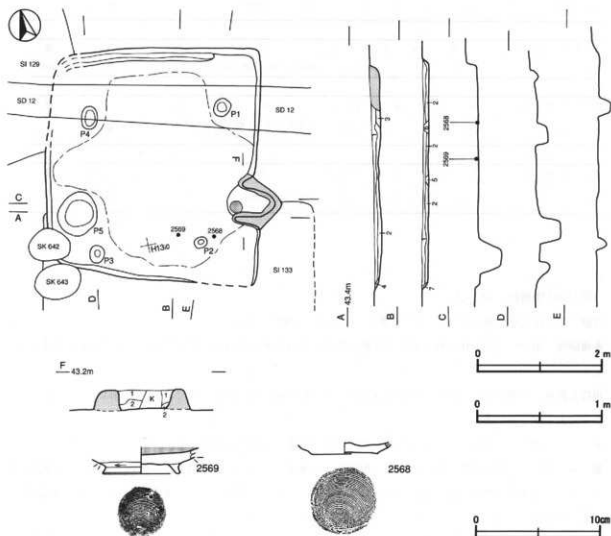
ピット 5か所。P1～P4は深さが16～22cmで、配置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さが36cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 5 極暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片150点(坏31, 高台付碗11, 甕108), 須恵器片10点(坏4, 甕5, 蓋1), 緑釉陶器片1点(皿), 灰釉陶器片1点(碗), 碟11点(9点に被熱痕あり), 土製品1点(羽口), 鉄滓37点(着磁性があるもの20点)が出土している。これらの遺物は覆土下層に包含され、全域に散在した状態で出土している。2568・2569は竈前の床面から出土し、鉄滓のほとんどは小割りされたものである。それらの中には、鉄分の付着した灰壁片1点も含まれる。



第491図 第128号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡からは鍛冶工場の形跡は確認できないが、小割りされた鉄滓やカマ片、羽1片の出土から集落内で鉄生産に関わった集団の存在をうかがい知ることができる。本跡から北東へ3.0mほどの距離には、鉄生産に関わる工房跡である第88号住居跡が位置している。時期は、出土器の形状から11世紀前半と考えられる。

第128号住居跡出土遺物観察表 (第491図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底徑	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2568	土師器	坏	-	(0.9)	5.2	赤色粒子	にぶい橙	普通	底部割れ未切り	竈手前床面	3% 小破の可能性あり
2069	土師器	高台付輪	-	(2.0)	6.0	雲母	橙	普通	体部下端同軸へへ張り、底部部割れ未切り後、高台張り付け	中央部灰土下層	30%

第130号住居跡 (第492図)

位置 調査区北部南寄りのH13f8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第129・132号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.4m、短軸3.1mの方形で、主軸方向はN-102°-Eである。壁高は4~8cmであり、外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 東壁中央部に付設され、壁外に80cmほど掘り込んで構築されている。袖部幅は100cm、突口から煙道まで110cmであり、袖部は砂質粘土を貼り付けた痕跡が確認される。また、火床部は浅い皿状にくぼみ、赤変硬化している。確認段階ですでに竈の上半部が削平されており、煙道は外傾して立ち上がる下部が若干認められた程度である。

竈土層解説

- 1 黄褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 黒褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 10 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 11 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

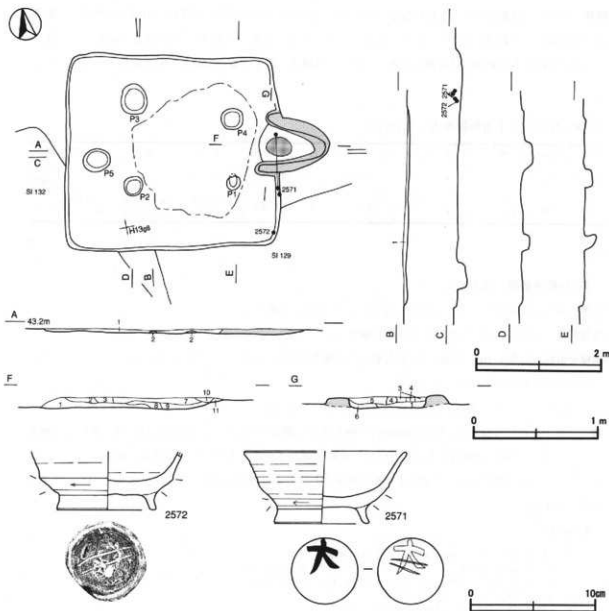
ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは12~20cmである。P5は深さが18cmで、竈と対峙しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片45点(坏11, 甕34)、須恵器片31点(坏9, 高台付坏6, 甕16)、糠5点が出土している。これらの遺物は覆土下層に包含され、竈内部および竈周辺にかけて出土している。2571は竈火床部と東壁際の破片が接合したもので曇書「大」が認められ、2572は南東コーナー部壁際の床面よりやや浮いた状態で出土している。いずれも底部外面に「=」と焼成前の施青きが見られる。



第492図 第130号住居跡・出土遺物実測図

所見 供膳具の主体が須恵器であることと出土土器の形状から、時期は9世紀中葉と考えられる。また、本跡は黒色土中に構築された東壁に竈を有する住居跡であり、当遺跡においては、この時期の東壁の住居形態は特異な存在である。

第130号住居跡出土遺物観察表（第492図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2571	須恵器	高台付 杯	[12.8]	5.8	7.5	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り、底部 回転ヘラ切り後、高台貼り付 け	竈火床部・ 東壁際下層	65% 墨書「大」 ヘラ記号「=」
2572	須恵器	高台付 杯	-	(4.7)	7.9	紫母	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り、底部 回転ヘラ切り後、高台貼り付 け	南東コーナ- 部埋跡床面	60% PL251 ヘラ記号 「=」

第131号住居跡（第493図）

位置 調査区中央部北端のH12j8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第345号住居と第466号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北側部分が農道のため、南北軸1.3m、東西軸3.7mだけが確認され、その形状からN-10°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は南壁で16cmを測り、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。また、壁溝は認められない。

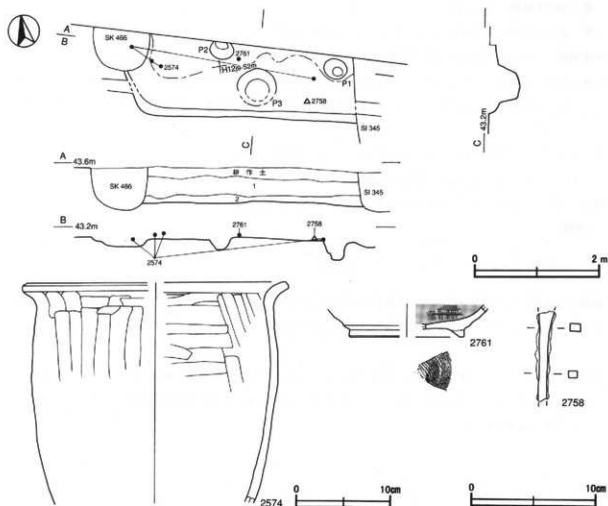
ピット 3か所。P1・P2の深さはそれぞれ28cm・36cmであり、配置と形状から柱穴と考えられる。P3は出入り口施設に伴うピットと考えられ、深さは23cmである。

覆土 2層からなり、ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片123点（坏12、高台付碗3、甕108）、須恵器片1点（坏）、鉄製品1点（不明）、鉄片14点（9点に着磁性あり）、礫3点（被熱痕あり）が主に覆土下層から全域に散在した状態で出土している。2574は、南壁際床面や西壁寄りの覆土下層より出土した21片が接合したものであり、広範囲に散在しているこ



第493図 第131号住居跡・出土遺物実測図

とから本跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。また、鉄滓はいずれも破砕された痕跡を残している。

所見 本跡の大部分は幅5mほどの農道下にあり、その北側からは遺構が検出されていないことから、小型の住居跡と想定される。また、多数の鉄滓が出土する鉄生産にかかわる工房跡とも考えられるが、詳細については判然としない。しかし、北東へ15mほどには第1号鍛冶工房跡が位置しており、この地区に鉄生産にかかわる集団の存在を想定することができる。時期は、出土土器の形状から10世紀後半と考えられる。

第131号住居跡出土遺物観察表（第493図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2574	土器	甕	27.0	(23.3)	-	灰石・石英	にがい編	普通	体部内外面ヘラナデ	市野郡実直・西野町東上下君	30%
2761	土器	高台付碗	-	(2.7)	[9.2]	雲母・赤色 殺子	にがい編	普通	体部内面ヘラ治き、底部回転 糸切り後、ナデ	中央部後土層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	産地	材質	特徴	出土位置	備考
2758	不明	[11.2]	0.5	0.2~0.3	(7.7)	鉄	両端部欠損のため、全体の形状は不明、釘か	山崎町東見部	

第133号住居跡（第494図）

位置 調査区北部南端のH1310区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第86号住居跡を掘り込み、第128号住居、第642・643号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 南壁部分は農道であり、南北幅1.7m、東西軸4.3mだけが確認され、長軸方向はN-7°-Eを折し、形状は方形または長方形と想定される。壁高は確認された北壁で18cmを測り、外傾して緩やかに立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、敷層を除いた床全体が硬化している。破層は認められなかった。

ピット 1か所。深さは32cmで、性格は不明である。

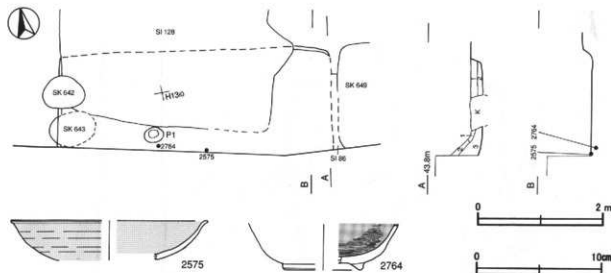
覆土 3層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中層、廃土ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中層、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土器碎片1点(高台付碗)、須恵器片1点(高台付杯)、灰釉陶器片1点(碗)が出土しただけである。2575の灰釉陶器碗は、中央部の床面から出土しており、猿投産黒笹14号室式と考えられる。

所見 本跡の大部分は、幅5mほどの農道下層にあり、その南側からは遺構が検出されていないことから、本跡は同時期の住居跡としては中型と想定される。出土土器が少ないため帰属時期を明確にし得ないが、時期は10世紀後半と推測される。



第494図 第133号住居跡・出土遺物実測図

第133号住居跡出土遺物観察表 (第494図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2764	土師器	高台付碗	-	(3.7)	[6.4]	雲母・赤色 粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き、高台貼り 付け後ナデ	中央部床面	15%
2575	灰輪陶器	碗	[15.6]	(3.1)	-	緻密	灰白・オ リーブ灰	良好	高台貼り付け後クロコナデ、 軸研毛塗り	中央部床面	20% 鉄投産

第134号住居跡 (第495図)

位置 調査区北部南寄りのH13e5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 はほぼ全域で第189号住居跡を掘り込み、南西コーナー部で第135号住居に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されたため、硬化面の広がりや竈の位置から判断してN-97°-Eを主軸とする長軸3.5m、短軸3.4mの方形であると推定される。壁の立ち上がりは確認できない。

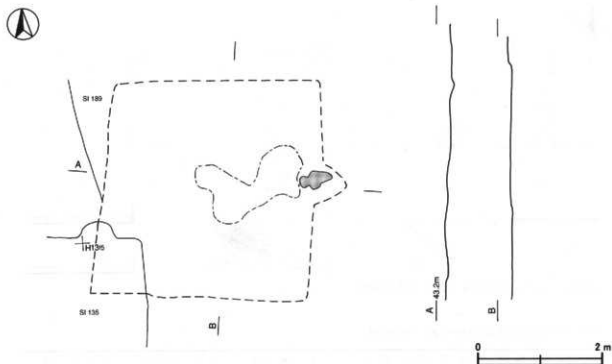
床 はほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。また、壁溝は認められない。

竈 遺存状態が悪く、東壁中央部の壁際から火床部が確認されただけである。火床面は、床面から若干掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 検出されていない。

遺物出土状況 土師器片33点(坏5, 甕28)、須恵器片2点(坏1, 甕1)、漆5点(被熱痕あり)が出土している。いずれも細片である。

所見 本跡からは、遺物が細片しか出土していないため時期の判断が困難であるが、東壁に竈を有する住居形態と重複関係などから見て、時期は10世紀中葉と考えられる。



第495図 第134号住居跡実測図

第135号住居跡（第496図）

位置 調査区北部南寄りのH13f4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第134・189号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 床面がほぼ露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは外傾して立ち上がる様子が若干確認されただけである。平面形は長軸3.5m、短軸3.4mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝が周回している。

竈 北壁の東寄りに付設されているが、遺存状態が悪く、袖部の基部のみが残存しているだけである。両袖部とも砂質粘土で構築され、袖部幅は80cm。焚口から煙道部まで80cmほどで、壁外への掘り込みは30cmである。

火床部は皿状に掘りくぼめられ、赤変硬化した部分は認められない。煙道は、外傾しながら立ち上がる。

覆土層解説

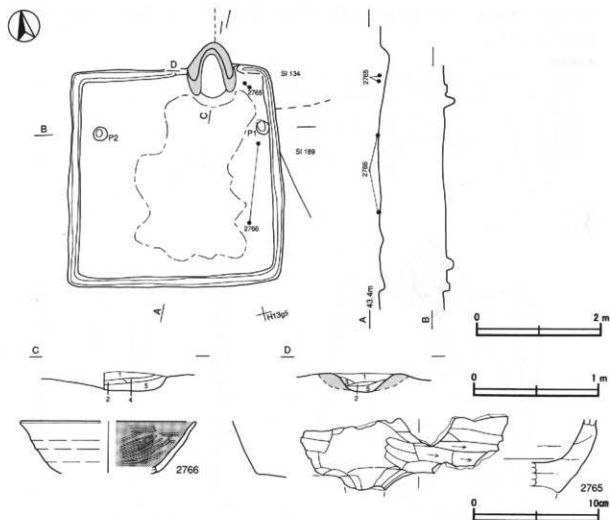
- 1 黒色 粘土ブロック・焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量
- 2 黒色 炭化物中量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化物・粘土ブロック少量
- 4 赤褐色 焼土ブロック多量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 2か所。P1・P2は深さが16cm・12cmで、配置と形状から柱穴と考えられるが、南部に対応する柱穴が検出されていない。

覆土 検出されていない。

遺物出土状況 土師器片34点（坏8，甕24，三足鍋2），須恵器片6点（甕），灰釉陶器片2点（不明）が出土している。これらの遺物は、全域に散在する状態で出土している。2765は竈右袖脇の床面より出土し、2766は東壁際床面から出土している。2765は三足鍋と考えられ、出土状況から使用方法は不明であるが、興味深い資料といえる。なお、覆覆土中から灰釉陶器の細片が出土しており、猿投産黒笹90号甕式と考えられる。

所見 時期は、出土土器の形状と10世紀中葉の住居を掘り込んでいることから、10世紀後葉と考えられる。



第496図 第135号住居跡・出土遺物実測図

第135号住居跡出土遺物観察表（第496図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2765	土師器	三足鍋	-	(5.8)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部内面ナデ、体部下端ヘラ磨り後足部貼り付け、ヘラナデ	北東コーナ一部壁際床面	5%
2766	土師器	高台付碗	[13.8]	(4.1)	-	雲母・長石	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き	東壁際床面	10%

第148号住居跡（第497・498図）

位置 調査区北部中央のH13a6区に位置し、平坦部に立地している。

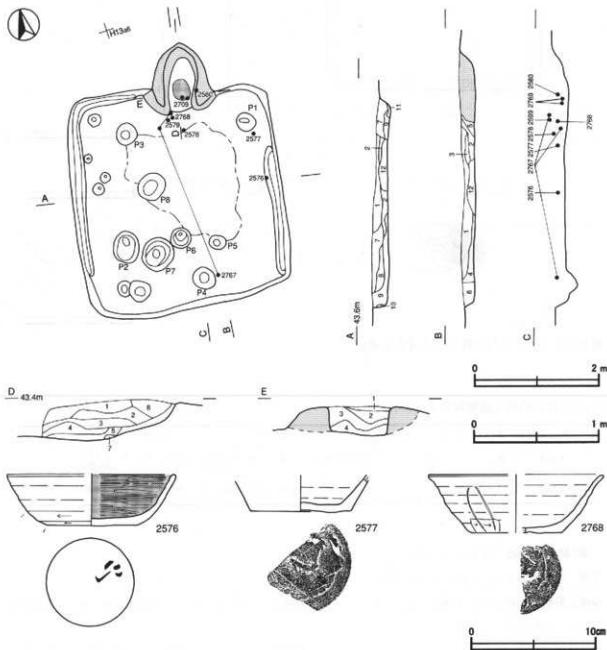
規模と形状 長軸3.6m、短軸3.3mの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は23cmであり、やや外傾しながら立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。南壁際と北東コーナ部を除いて壁溝が巡っている。

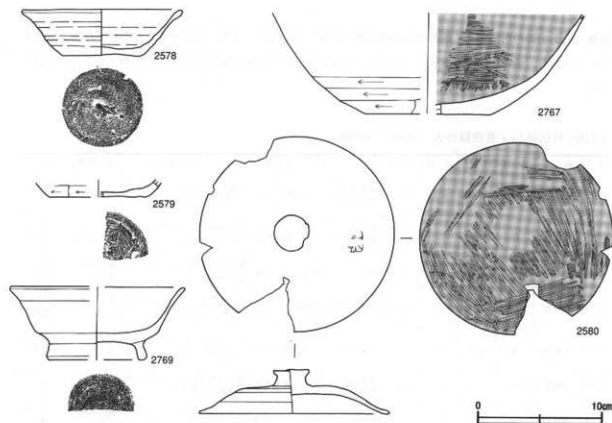
竈 北壁のほぼ中央に付設されており、焚口部から煙道部まで108cm、袖部幅110cmで、壁外への掘り込みは70cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土を主体とする褐色土を基部とし、その上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は浅い皿状にくぼみ、赤変硬化している。煙道は、火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量
- 5 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量



第497図 第148号住居跡・出土遺物実測図



第498図 第148号住居跡出土遺物実測図

ピット 8か所。主柱穴は3か所確認され、P1～P3が相当し、深さは21～25cmである。南東コーナー寄りに想定される柱穴は、床面を精査したが検出されていない。また、P5～P8は深さが16～36cmで補助的な柱穴と考えられるが、配置が不自然なため断定できない。P4は竈と対峙しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。西壁際寄りに深さ10～25cmほどの6か所の小ピットは、壁を支える壁柱穴の可能性がある。

覆土 12層からなり、ブロック状の不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | |
|----|-----|------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 2 | 黒色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 5 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 6 | 黒色 | ロームブロック少量 |
| 7 | 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 8 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 9 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 10 | 褐色 | ローム粒子多量 |
| 11 | 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 |
| 12 | 灰褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片438点(坏61, 甕371, 蓋3, 鉢3), 須恵器片48点(坏28, 高台付坏1, 甕17, 蓋1, 盤1), 鉄滓1点(着磁性あり), 礫2点が出土している。これらの遺物は、主に竈内やその周辺に散在している。2580の土師器蓋は竈右袖部上層から出土しており、内面黒色処理を施され、天井部には墨書されているが判読できない。さらに、2576の底部外面にも判読不明の墨書があり、2577の底部外面には「×」、2579の底部外面には「=」と考えられる荒書きが残されている。また、中央部床面からは粘土塊が検出されており、その上に覆い被さるような状態で土師器壺片が数点出土している。出土した遺物の多くは、本跡が埋め戻される段階で投棄されたものと考えられる。

所見 出土土器の形状から、時期は9世紀後葉に位置づけられる。また、黒書きや焼書きが施された土器が多く出土しており、他の住居跡と重複していないことと併せて、当該期の集落の様相をうかがう上での好資料といえる。

第148号住居跡出土遺物観察表（第497・498図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2576	土師器	杯	[13.4]	4.1	7.0	雲母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面へラ磨き、体部下端へラ削り、底部回転へラ切り	東壁際下層	55% 底部墨書「□」
2577	須恵器	杯	-	(3.0)	[8.0]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内外面ロクロナデ、底部回転へラ切り後ナデ	東壁際下層	20% 底部に焼書「×」
2578	須恵器	杯	12.7	3.7	6.2	長石	黄灰	普通	体部下端手持ちへラ削り、底部回転へラ切り	甕手前覆土中層	80% PL228
2579	須恵器	杯	-	(1.4)	[7.8]	雲母・長石	灰黄緑	普通	体部下端手持ちへラ削り、底部回転へラ切り後ナデ	甕手前覆土中層	5% 底部外面焼書「~」
2580	土師器	蓋	15.0	3.5	-	石英	にぶい黄橙	普通	天井部右回りの回転へラ削り、内面へラ磨き	甕右袖部	95% PL228 天井部墨書「□」
2767	土師器	鉢	-	(8.0)	[10.0]	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転へラ削り、体部内面へラ磨き	南壁寄り覆土中層	5%
2768	須恵器	杯	[13.8]	4.7	[7.2]	長石	黄灰	普通	体部下端手持ちへラ削り、底部回転へラ切り後ナデ	甕手前覆土下層	20% 体部外面にへラ記号々
2769	須恵器	高台付杯	[13.8]	5.8	[7.6]	長石	黄灰	二次焼成	底部回転へラ切り後高台貼り付けナデ	甕火床部	40%

第149号住居跡（第499図）

位置 調査区北部中央のH13a7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 ほは全域で第141号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.0m、短軸3.3mの長方形で、主軸方向はN-71°-Eである。壁の立ち上がりは北壁で確認され、高さが10cmほどで、やや外傾しながら立ち上がっている。

床 ほは平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 東壁の中央部に位置し、砂質粘土で構築されている。袖部軸は100cm、焚口から煙道部まで100cmである。火床部は浅い皿状にくぼみ、赤変硬化している。また、煙道の立ち上がり部には土製支脚が架えられており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 4 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
- 5 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

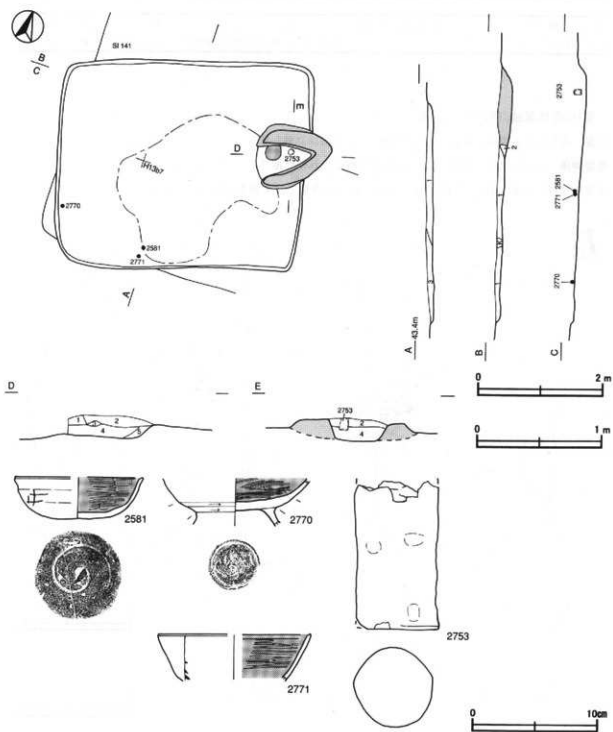
覆土 3層からなり、ブロック状の地積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片152点（坏36、高台付碗2、甕114）、須恵器片12点（坏6、甕4、盤2）、土製品2点（支脚）、産6点（5点に被熱痕あり）が覆土下層から、全域に散在して出土している。2581は南壁際の床面よりやや浮いた状態で出土し、体部外面に正位で「井」と焼成後に窺書きされている。2770は西壁際の床面から逆位で出土し、2771の判読不明の墨書土器片は南壁際床面からそれぞれ出土している。須恵器の供膳具類は破断面が摩滅しており、混入したものである。

所見 出土土器の形状から、時期は10世紀中葉と考えられる。



第499図 第149号住居跡・出土遺物実測図

第149号住居跡出土遺物観察表 (第499図)

番号	器種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2581	土師器	坏	[10.0]	3.3	-	雲母	にぶい橙	普通	体部内面へラ磨き、底部回転へラ切り後、ナデ	南壁際覆土下層	40% 体部外面に割書「升」
2770	土師器	高台付碗	-	(3.5)	-	雲母・赤色粒子	にぶい赤黄	普通	体部下層回転へラ磨り、底部回転へラ切り後、高台貼り付け、ナデ	西壁際床面	60%
2771	土師器	高台付碗	[12.0]	(3.6)	-	雲母	にぶい黄黒	普通	体部内面へラ磨き	南壁際覆土下層	5% 体部外面に割書「□」

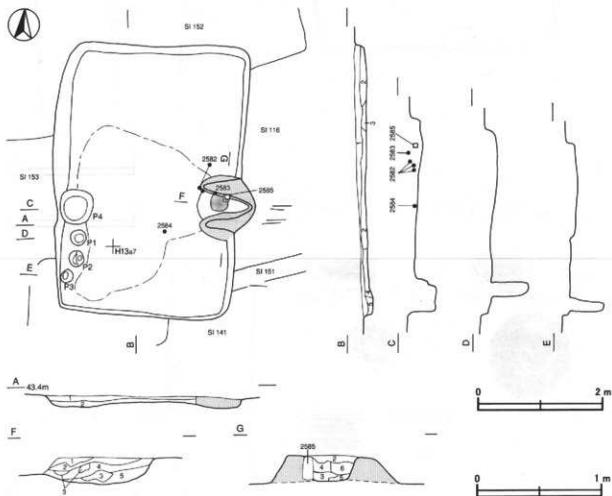
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
2753	支脚	(11.8)	7.0	-	(529)	土	円柱状、ナデ、端部片削欠損、被熱痕あり		礎火床部	

第150号住居跡 (第500・501図)

位置 調査区北部中央のG13j7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第116・141・151・152・153号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.4m、短軸3.0mの南北に長い長方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は10~20cm



第500図 第150号住居跡実測図

であり、やや外傾しながら立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 東壁中央部に位置し、壁外に24cmほど掘り込んで構築されている。袖部幅は100cm、笑口から煙道部まで約90cmである。袖部はローム土を主体とする褐色土を基部として、その上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は皿状にくぼんで赤変硬化しており、砥石から転用したと考えられる支脚が直立した状態で据えられていた。また、煙道は火床部から外傾しながら立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子中量、砂粒少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 4か所。P1は深さ30cmで、竈と対峙する西壁際に配され、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

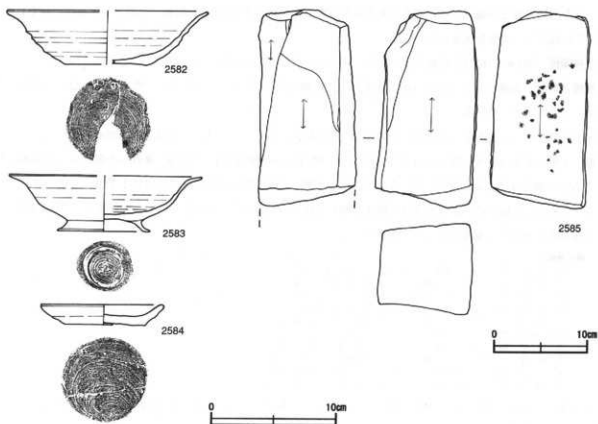
P2～P4は深さが21～58cmで形状から柱穴と考えられるが、配置が不自然なことから性格は不明である。

覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片152点(坏18, 高台付碗15, 甕111, 瓶1, 皿6, 小皿1), 須恵器片9点(坏2, 高台付坏1, 甕5, 瓶1), 石製品1点(支脚), 鏝5点(被熱痕あり), 鉄滓1点(炉壁に付着し, 着磁性あり)



第501図 第150号住居跡出土遺物実測図

が出土している。これらの遺物は覆土下層から全域に散在した状態で出土している。図示したものは、いずれも竈内部やその周辺の床面より出土し、2585は台石として使用された痕跡も留め、如壁片に付着したと思われる鉄滓と共に竈火床部より出土している。

所見 本跡は、長軸が短軸の1.5倍弱もある特異な形状をしているが、拡張した痕跡は認められず、当初から横長を想定して構築されたものと考えられる。この横長の住居形態から何らかの工房跡と想定できるが、それを裏付ける施設や遺物は検出されていない。時期は、竈前の床面から土師器小皿が出土したことや出土土器の形状から10世紀後半と考えられる。

第150号住居跡出土遺物観察表 (第501図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2582	土師器	杯	[15.8]	4.3	6.7	雲母・赤色 粒子	にぶい肌	普通	体部内面横ナデ、底部斜転糸 切り	竈左袖部	50%
2583	土師器	高台付 碗	[15.4]	(4.4)	7.3	雲母・赤色 粒子	にぶい肌	普通	底部斜転糸ヘラ切り後、両台貼 り付け、ナデ	竈火床部	40%
2584	土師器	小皿	9.5	1.7	6.4	雲母・灰赤・石 英・赤色粒子	粗	普通	体部口縁整形、底部斜転糸 切り	中央部床面	90% PL228

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2585	砥石	(20.7)	10.4	10.1	(3540)	砂岩	方柱状、砥面4面、端部片側欠損、産熱痕あり	竈火床部	

第158A号住居跡 (第501図)

位置 調査区北東中央のG1312区に位置し、平坦部に立地している。当初、1軒の住居跡として調査を開始したが、建て替えが確認されたため、北東壁を有する住居跡を第158A号住居跡、東壁を有する住居跡を158B号住居跡として調査を実施した。

重複関係 第156・161号住居跡を掘り込み、第420号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.5m、短軸3.1mの長方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は16~23cmであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平床で、竈前から中央部にかけてよく踏み固められている。また、壁間はほぼ周回している。

竈 北壁の北東コーナー寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで120cm、壁外への掘り込みは80cmほどである。袖部はほとんど遺存していないが、その痕跡から袖部幅は約110cmで砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面の高さから15cmほど皿状に掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変色している。煙道は、火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

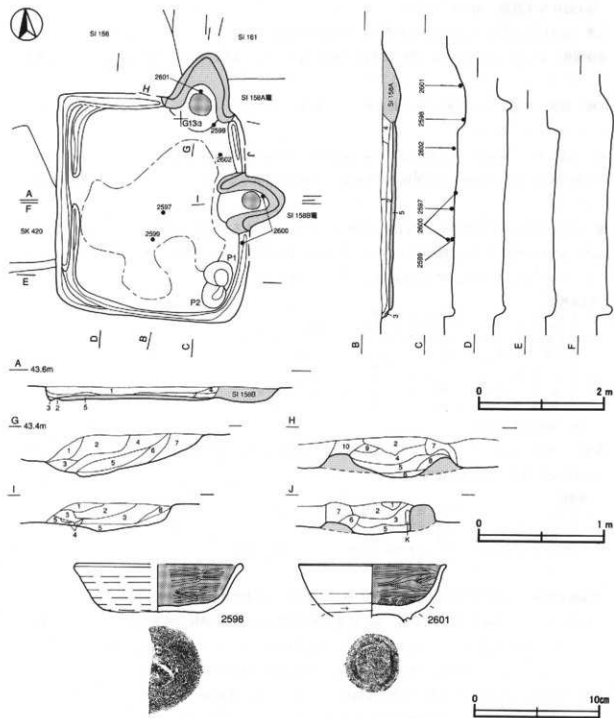
- 1 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 4 黒褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック少量
- 7 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 9 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック少量
- 10 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量

ピット 2か所。P1・P2の深さはそれぞれ30cm・20cmほどで、2か所とも第158B号住居跡の床面の下(貼り床)から確認されている。

覆土 確認された覆土は、全て第158B号住居跡に帰属するものである。

遺物出土状況 土師器片10点(坏5, 高台付碗1, 甕4)が竈火床部やピット覆土下層から出土している。2598は竈焚口部, 2601は竈火床部からそれぞれ出土している。2601は竈火床部より完形に近い状態で出土しており, 火熱を受けていないことから, 本跡廃絶時に遺棄されたと考えられる。

所見 本跡は建て替え前の住居跡であり, 建て替えに伴って竈を北壁から東壁へと移動している。時期は出土土器が少ないため明確でないが, 第158B号住居跡の年代から見て, ほぼ同時期の10世紀中葉と考えられる。



第502図 第158A・B号住居跡, 第158A号住居跡出土遺物実測図

第158A号住居跡出土遺物観察表（第502図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2598	土師器	坏	[18.2]	3.8	7.2	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り、内面ヘラ磨き	竈火床部	50%
2601	土師器	高台付 碗	11.4	(4.5)	-	雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台磨り付け後、ナガ、体部下部回転ヘラ磨り	竈火床部	90%

第158B号住居跡（第502・503図）

位置 調査区北部中央のG1312区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第158A号住居跡を建て替えて本跡が構築されている。また、第161号住居跡・第120号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.5m、短軸2.7mの長方形で、主軸方向はN-95°-Eである。築高は16~23cmであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前から中央部にかけてよく踏み固められおり、壁溝はほぼ増回している。また、158A号住居跡の床面にローム土混じりの黒褐色土を充填して床面を構築していることが、土層断面の観察から確認されている。

竈 東壁のほぼ中央に付設され、焚口部から煙道部まで100cmである。竈外への掘り込みは60cmほどで、袖部幅は92cmで砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し、火熱を受けて赤変しているが、焼け締まった感じはない。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層観察

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘土粒子少量
- 4 灰褐色 粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子少量
- 5 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

ピット 検出されていない。

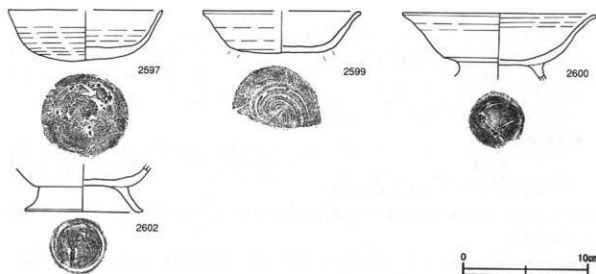
覆土 5層からなり、ロームブロックや焼土を含む人為堆積である。土層断面四中の第4・5層には竈材の一部流出が認められ、第5層が貼床である。

土層観察

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子少量
- 2 黒色 ロームブロック少量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片230点（坏78、高台付碗14、甕138）、須恵器片28点（坏12、壺2、甕14）、鉄洋1点が全域から散在した状態で出土している。2600は竈南側の壁際の下層から逆位の状態で出土しており、竈火床面からの出土の破片と接合したものである。2599は中央部床面から出土しており、覆土中の破片2点と接合したものである。これらの土師器は、住居廃絶時に埋土と共に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は、第158A号住居跡の床面に黒褐色土を充填して床を再構築している。また、建て替えに伴って竈を北壁から東壁に移設し、西壁側を20cmほど拡張していることも確認された。時期は、出土土器の形状から10世紀後半と考えられる。



第503図 第158B号住居跡出土遺物実測図

第158B号住居跡出土遺物観察表 (第503図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2597	土師器	坏	[12.2]	4.1	6.0	石英	にぶい橙	普通	体部回転ヘラ切り, 体部内外面ロクロナデ	中央部下層	70%
2599	土師器	坏	[12.2]	3.3	6.4	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り, 体部内外面ロクロナデ	中央部床面	30%
2600	土師器	高台付 椀	15.2	(5.4)	-	雲母・長石・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け後, ナデ	竈火床面 竈南側壁脚	70%
2602	土師器	高台付 椀	-	(3.9)	8.8	雲母・赤色 粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け後, ナデ	竈北側下層	20%

第160号住居跡 (第504・505図)

位置 調査区北部のほぼ中央のG13i1区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第156・220・223・225号住居跡, 第420号土坑をそれぞれ掘り込み, 第403・410号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-97°-Eを主軸とする長軸3.9m, 短軸3.5mの長方形である。壁高は最も残りの良い南壁で16cmほどであり, 外傾しながら立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 壁際を除いてよく踏み固められており, 壁溝は北壁から西壁の一部にかけて確認されている。

竈 2か所。竈1は東壁中央部の南寄りに付設されており, 焚口部から煙道部まで92cmほどである。袖部幅は88cmで, 壁外への掘り込みは64cmほどであり, 袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道の立ち上がる手前には, 砂岩が下部を埋め込まれて支脚として据えられており, 火熱を受けて脆くなっている。また, 煙道は火床面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。竈2は, 竈1の北側である東壁中央部やや北寄りから検出されている。壁外への掘り込みは56cmほどで, 天井部や火床部は遺存していない。袖部は壁面にその痕跡が確認され, 砂質粘土で構築されている。また, 煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。さらに, 袖部が遺存していない竈2は破棄された後, 埋め戻されたことが想定され, 竈2から竈1へ作り替えられたものである。

■ 1 土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 7 暗褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック中量 |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量 | 8 黒褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物・粘土ブロック・ローム粒子少量 | 9 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化物粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック少量 | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | 灰多量、ロームブロック・焼土ブロック少量 | | |
| 6 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子少量 | | |

■ 2 土層解説

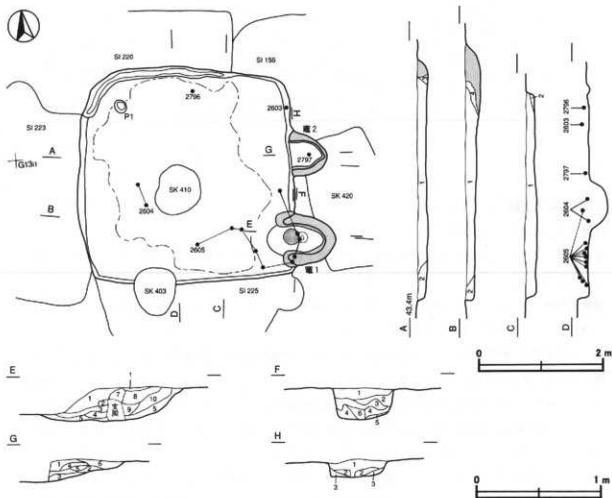
- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 4 暗赤褐色 | 炭化粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量 | 6 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量 |

ピット 1か所。P1の深さは8cmほどで、配置と形状から柱穴と考えられるが、対応するピットは検出されず、不明である。

覆土 4層からなり、ロームブロックや焼土を多く含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

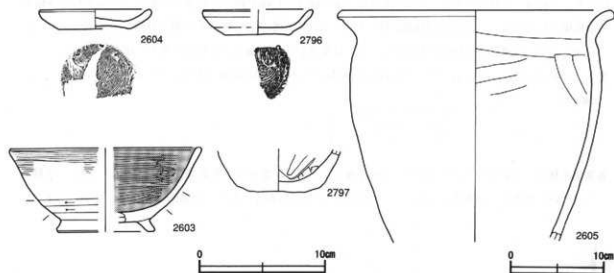
- | | |
|-------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量、粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物・粘土ブロック少量 |



第504図 第160号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片396点(碗158, 高台付碗14, 小皿2, 甕222), 須恵器片29点(坏13, 甕16), 土製品1点(支脚), 鉄滓5点(2点に着磁性があり), 礫27点(22点に被熱痕あり)がほぼ全城から散在した状態で出土している。2603は竈2北側の壁際下層, 2604は中央部西壁寄りの床面から出土したものである。2605の甕は竈火床部およびその周辺より出土している破片11点が接合したものである。これらの遺物は, 本跡廃絶時に埋土と共に投棄されたものと考えられる。なお, 須恵器片は破断面が摩滅しており, 混入したものである。

所見 本跡は竈の作り替えを行っている住居跡であり, 出土した小皿はいずれも口径が9cm未満で小形化していることから, 時期は11世紀前半と考えられる。



第505図 第160号住居跡出土遺物実測図

第160号住居跡出土遺物観察表 (第505図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2603	土師器	高台付碗	[15.0]	6.7	[7.4]	雲母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面へラ磨き, 体部下端回転へラ磨り	竈北側壁際下層	20%
2604	土師器	小皿	8.6	1.5	5.5	長石	浅黄橙	普通	底部回転糸切り, 体部ロクロナデ	中央部床面	50%
2605	土師器	甕	29.0	(24.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部内・外面へラナデ	竈火床部, 竈床部, 下層	30%
2796	土師器	小皿	[8.8]	2.0	5.2	雲母・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り, 体部ロクロナデ	北壁際下層	25%
2797	土師器	手捏土器	-	(3.5)	4.8	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部は内聲気味に立ち上がる, 内面へラナデ	竈火床部	30%

第164号住居跡 (第506図)

位置 調査区北部のほぼ中央であるG13f4区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第166号住居跡を掘り込み, 第253号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.2m, 短軸2.6mで, N-107°-Eを主軸とする長方形である。壁高は20~24cmほどであり, 壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められている。壁溝は南壁際と西壁際で確認されている。

竈 東壁の中央部から南寄りにつ設され, 規模は焚口部から煙道部まで92cm, 袖部幅104cmである。壁外への

掘り込みは60cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土混じりの砂質粘土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられて、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から外傾しながら立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 暗褐色 炭化粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック・粘土ブロック少量
- 4 暗褐色 焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量

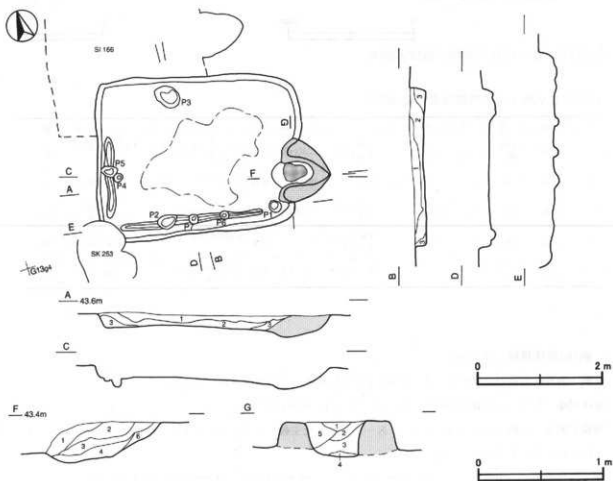
ピット 7か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さは4～12cmを測り、北東部に想定される主柱穴は精査したが検出されていない。出入り口施設に伴うピットはP4が相当し、西壁際の竈と対峙する位置にあり、深さは15cmである。壁溝内から検出されたP5～P7は深さが5～17cmで、壁柱穴と考えられる。

覆土 3層からなり、ロームブロックや焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 2 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片155点（坏42、高台付碗3、小皿2、甕108）、須恵器片18点（坏10、甕8）、灰軸陶器片1点（碗）が覆土下層を中心に出土しているが、いずれも細片である。灰軸陶器片は覆土中から出土してお



第506図 第164号住居跡実測図

り、狼投産と考えられる。

所見 本跡からは、遺物が細片しか出土していないため時期の判断が困難であるが、出土土器の形状や重複関係から、時期は10世紀後葉と考えられる。

第165号住居跡（第507図）

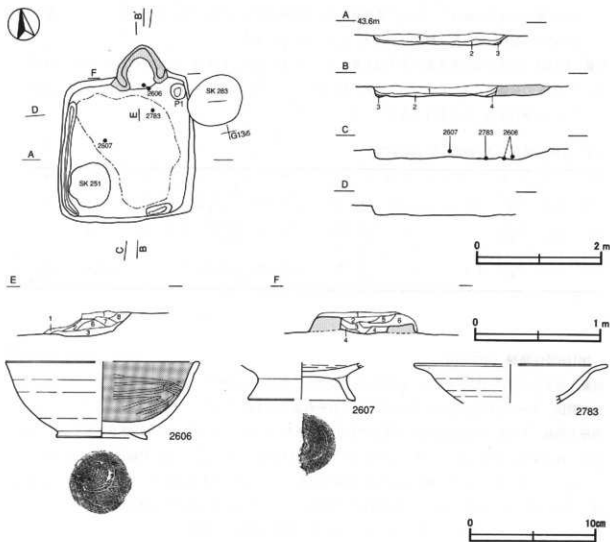
位置 調査区北部の中央であるG13h4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第251・283号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-14°-Eを主軸とする長軸2.3m、短軸2.2mの方形である。壁高は15cmほどであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いた中央部がよく踏み固められている。壁溝は西壁際と南壁の一部で認められる。

竈 北壁のほぼ中央部やや東寄りに付設され、焚口部から煙道部まで68cm、袖幅88cmである。壁外への掘り込みは50cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面と同じ地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から緩やかに外傾しながら立ち



第507図 第165号住居跡・出土遺物実測図

上がっている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量

ピット 1か所。P1は深さが60cmで、配置と形状から主柱穴と考えられるが、対応するピットは検出されていない。

覆土 4層からなり、ロームブロックや焼土を多量に含んだ人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片213点（環87、高台付椀14、小皿2、甕110）、須恵器片20点（環12、高台付環2、甕6）、鉄滓1点（流動滓、着磁性なし）、石器1点（砥石：砥面1面、被熱痕あり）、鏝2点（被熱痕あり）が覆土下層を中心に出土している。2606は竈火床面から出土し、2607は中央部覆土下層から出土している。また、2783は竈前床面から出土しており、接合面はないが器形や胎土から見て2607と同一体体であると考えられる。須恵器の供膳類は被熱面が摩滅しており、混入したものである。

所見 時期は、出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。また、同時期に比定される住居跡は52軒で、当遺跡における最盛期にあたる。なお、前期と比べ住居数が2.5倍と急激に増加しており、意図的に鉄生産に関わる工人の増員を図った可能性が考えられる。

第165号住居跡出土遺物観察表（第507図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2606	土師器	高台付椀	[15.2]	6.1	7.2	雲母・長石	にぶい褐色	普通	底部回転車切り後、高台貼り付け、ナデ	竈火床面	40%
2607	土師器	高台付椀	-	[3.0]	8.4	雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	底部回転車ヘラ切り後、高台貼り付け、ナデ	中央部下層	10%
2783	土師器	高台付椀	[15.4]	[3.2]	-	雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部内外面口コロナデ	竈前床面	20% P2607と同一体*

第166号住居跡（第508図）

位置 調査区北部のほぼ中央であるG13f4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第164号住居、第185・256号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 北壁際の床面が露出した状態で検出されたため、北壁の立ち上がりは確認できなかった。第164号住居跡や第185号土坑に掘り込まれて南壁の立ち上がりも確認できなかったが、黒褐色上の床面の広がりから判断して、N-96°-Eを主軸とする2.5m前後の方形または長方形と推定される。壁の立ち上がりは西壁で確認され、壁高は5cmほどであり、壁は外傾して緩やかに立ち上がる様子が若干認められた。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められているが、壁際は認められない。

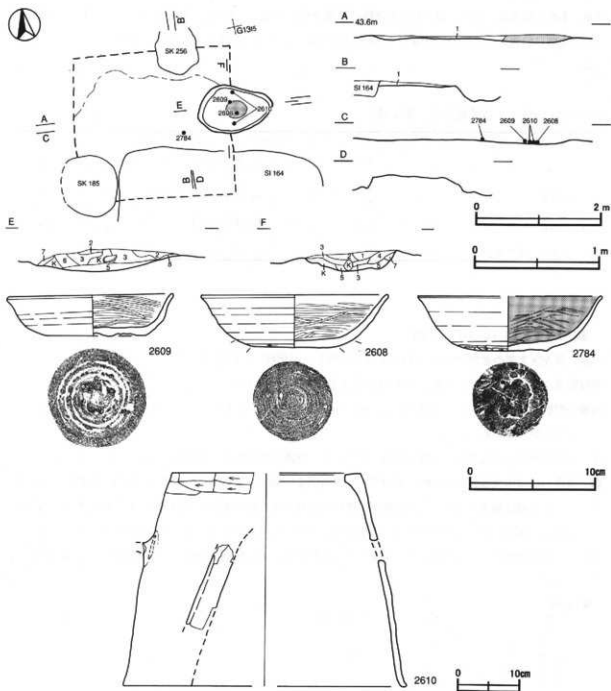
竈 東壁のほぼ中央部に付設され、焚口部から煙道部まで90cmで、壁外への掘り込みは70cmほどである。竈の

上部がほとんど削平されているため、両袖部とも遺存していない。火床部は浅い皿上に掘りくぼめられて、火熱を受けて赤変している様子が認められる。煙道は、火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 3 灰褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 6 灰褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック少量

ピット 検出されていない。



第508図 第166号住居跡・出土遺物実測図

覆土 1層からなり、ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片180点（坏42、高台付碗3、甕108、置き甕27）、須恵器片18点（坏10、甕8）が、主に竈火床部から出土している。2608・2609はほぼ完形で、竈火床面より止位の状態です出している。これら2点の土器には火熱を受けた痕跡が残る。焼土粒子が付着していることから竈で使用されて、廃絶に伴って遺棄されたものと推定される。2784は竈前の床面と竈覆土中の破片とが接合したもので、被熱痕が認められる。また、2610は竈火床面と覆土中の破片27点が接合したものである。須恵器の坏片はいずれも細片で、破断面が摩滅しており、混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土土器の形状や遺構の重複関係から見て、10世紀中葉と推測される。また、本跡の北15mの距離に位置する第169号住居跡と主軸方向が近似しており、両跡から置き甕片が出土していることは興味深い。

第166号住居跡出土遺物観察表（第508図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	胎調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2608	土師器	坏	14.8	4.2	6.3	雲母・長石・石英	にぶい赤褐色	普通	体部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ切り	竈火床面	95% J1.228
2609	土師器	坏	13	3.1	8	雲母・赤色粘土	黄	普通	底部回転ヘラ切り	竈火床面・覆土中	90% J1.228
2784	土師器	坏	[14.5]	4.3	5.7	長石	にぶい黄褐色	普通	体部下端手持ちヘラ削り、底部回転ヘラ切り	竈前床面・覆土中	60%
2610	土師器	置き甕	[30.0]	[34.0]	[45.0]	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	表裏面・覆土中	3%

第169号住居跡（第509・510図）

位置 調査区北部の北寄りであるG13a3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第4号方形竈穴遺構、第181号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 N-100°-Eを主軸とする長軸3.6m、短軸2.8mの長方形である。単高は24cmほどであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。境界は北壁際から西壁際にかけて通っている。

竈 東壁のほぼ中央部に付設され、焚口部から煙道部まで88cm、袖部幅84cmである。壁外への掘り込みは40cmほどで、天井部は崩落しており、土層断面図中の第3層が天井部の崩落上に相当し、粘土粒子を多く含んでいる。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用して、火熱を受けて赤変している様子が認められる。煙道は、火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

遺土層解説

- 1 出 場 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 6 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

ピット 2か所。P1・P2は深さが20cmほどで、配置と形状から柱穴と考えられるが、詳細は不明である。

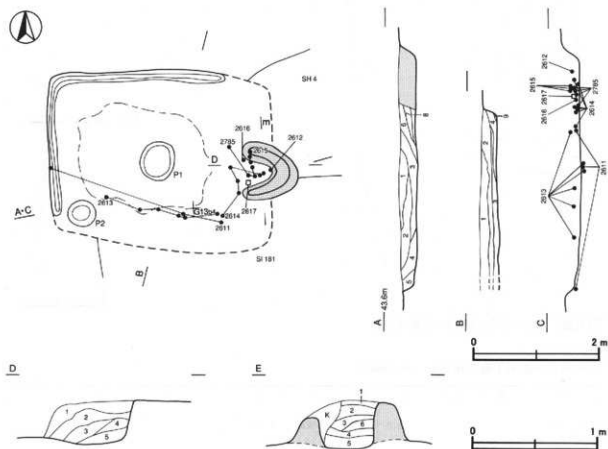
覆土 9層からなり、ロームブロックや焼土を多量に含んだ人為堆積である。

土層解説

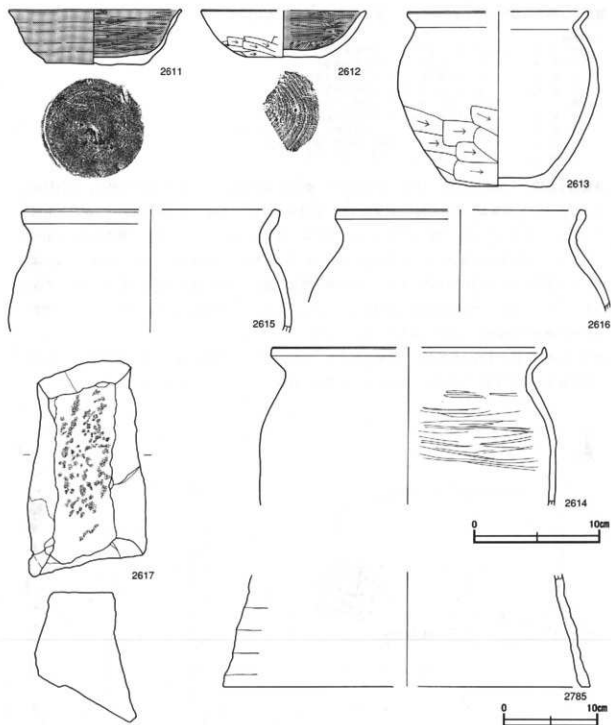
- | | | |
|---|-----|--------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 | 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 6 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 7 | 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量 |
| 8 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物・粘土ブロック少量 |
| 9 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片453点(坏63, 高台付碗6, 甕377, 置き甕7), 須恵器片25点(坏4, 高台付坏1, 蓋2, 甕18), 灰軸陶器片1点(椀), 鉄製品1点(紡錘車の軸部カ), 礫5点(被熱痕あり)が覆土中層から下層にかけて出土している。2612・2615・2616・2617は、竈火床部から出土し, 2614は竈火床面と竈前の床面から出土した破片6点が接合したものである。2617の砥石は火熱を受けて亦変しており, 破砕した後, 竈で支脚として使用された可能性がある。また, 2785の置き甕は, 竈前の床面と竈火床部から出土した10点が接合したものである。なお, 中央部床面から猿投産90号窯式と考えられる灰軸陶器細片が出土している。須恵器の供膳具類は破断面が摩滅しており, 混入したものである。

所見 時期は, 出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。また, 本跡の南15mほどの距離に位置する第166号住居跡からも置き甕片が出土しており, 同一の集落を構成していたことが想定される。



第509図 第169号住居跡実測図



第510図 第169号住居跡出土遺物実測図

第169号住居跡出土遺物観察表 (第510図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2611	土師器	坏	12.8	4.4	6.0	赤色粒子・雲母	灰黄	普通	体部口クロナデ、底部回転ヘツ切り後ナデ	西壁部・中央部床面	90% PI.228
2612	土師器	坏	[12.8]	3.7	[5.8]	黒色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘツ削り、底部回転系切り	竈煙道部	20%
2613	土師器	小形甕	[14.3]	13.9	8.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘツ削り、口縁部横ナデ	中央部下層・床面	40%

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎上	色	滑	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2614	土師器	甕	[21.6]	(12.5)	-	雲母・石英	にぶい滑	普通	普通	体部内面ヘラナデ	竈火床部、 竈前床面	20%
2615	土師器	甕	[19.6]	(9.7)	-	雲母・長石・ 石英	明赤陶	普通	普通	体部内外面横ナデ	竈火床部	10%
2616	土師器	甕	[19.8]	(8.0)	-	雲母・長石・ 石英	にぶい滑	普通	普通	体部内外面横ナデ	竈火床部	5%
2785	土師器	甕	[11.8]	(3.8)	-	雲母・長石・ 石英	滑	普通	普通	体部内外面横ナデ	竈火床部、 竈面下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2617	磁石	22.9	12.6	15.7	4840	砂岩	磁面は1面、被熱痕あり	竈火床部	支脚取付あり

第170号住居跡（第511図）

位置 調査区北部の北寄りであるG13d4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第168号住居跡を掘り込み、第172・177号住居と第223・224号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 北壁の竈の西側は東側より60cmほど奥へ掘り込まれており、竈の東側には棚状の施設が付設されていたことが想定される。規模は竈の東側の南北軸が3.5m、西側では4.0mを測り、東西軸は3.5mである。主軸方向はN-4°-Eであり、棚状施設を含めた平面形は南北に長い長方形を呈している。壁高は最も残りの良い部分で10cmほどであり、外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

床 ほば平坦で、壁際を除いた中央部がよく踏み固められている。壁溝は西壁際で確認されている。

竈 北壁のほぼ中央部に付設され、焚口部から煙道部まで96cm、袖部幅84cmである。壁外への掘り込みは60cmほどで、天井部は崩落しており、土層断面図中の第1～3層が天井部の崩落上に相当し、粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されており、棚状施設が想定される側の右袖部には補強材として土師器甕を逆位の状態で使用している。火床部は床面とほとんど同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変している様子が認められる。煙道は、火床部から外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 概略褐色 焼上ブロック・粘土ブロック・砂粒中量、炭化物・ローム粒子少量
- 2 概略赤褐色 焼上ブロック中量、粘土ブロック・砂粒・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 3 概略赤褐色 焼上ブロック多量、粘土ブロック・砂粒・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼上ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼上ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼上ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼上粒子・炭化粒子少量
- 8 暗赤褐色 焼上ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック・焼上ブロック少量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼上ブロック・炭化物少量

ピット 検出されていない。

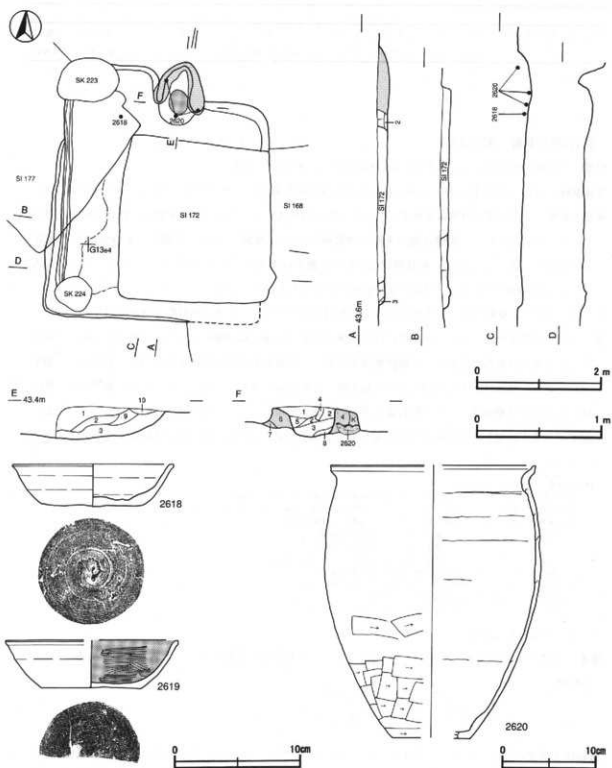
覆土 3層からなり、ロームブロックや焼土を含み、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼上ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼上ブロック・粘土ブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量、焼上粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片486点（坏112、高台付坏3、甕371）、須恵器片37点（坏23、高台付坏1、甕13）、灰袖陶器片1点（皿）、鉄滓1点（着磁性あり）、礫2点（1点は砂岩で、砥面あり）が覆土下層を中心に出土し

ている。2620は、竈袖部の補強材として使用された土師器甕で、体部には粘土粒子や砂粒が付着し、火熱を受けている。左袖部と火床面から出土した破片と接合していることから、右袖部以外にも竈の補強材として使用されていた可能性がある。2618の坏は焼土塊や粘土、その他の土器片と共に出土しており、廃絶時に投棄されたものと思われる。なお、狼投産黒笹90号窯式と考えられる灰軸陶器片が覆土中より出土している。須恵器の供膳具類は破断面が摩滅しており、混入したものである。



第511図 第170号住居跡・出土遺物実測図

所見 時期は、北壁の中央部に竈を有する住居形態と出土土器の形状から、9世紀後葉と考えられる。

第170号住居跡出土遺物観察表 (第511図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2618	土師器	環	12.6	3.4	8	雲母・石英	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り後、ナデ	北西部下層	100% FL228
2619	土師器	環	[13.6]	3.8	7.8	雲母・石英	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	45%
2620	土師器	甕	[21.6]	29.0	[8.2]	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面下位のヘラ削り	竈火床面・左袖部	30%

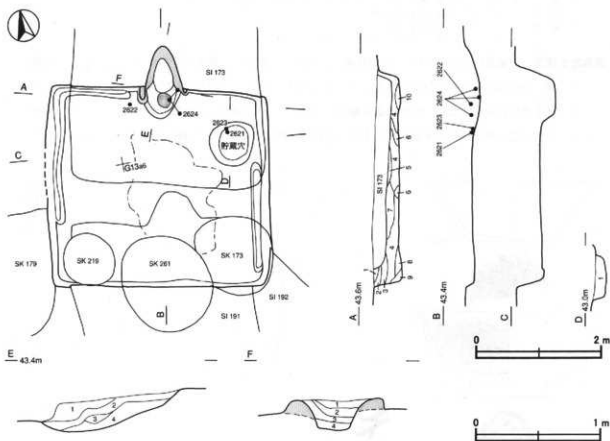
第171号住居跡 (第512・513図)

位置 調査区北部の北端であるG13a6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第192号住居跡を掘り込み、第173・191号住居と第173・179・219・261号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-8°-Eを主軸とする長軸3.5m、短軸3.2mの方形である。壁高は最も残りの良い部分で44cmほどであり、ほぼ直立する。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は東壁と北壁から西壁にかけて確認されている。



第512図 第171号住居跡実測図

竈 北壁の中央部に付設され、焚口部から煙道部まで96cm、袖部幅80cmである。壁外への掘り込みは64cmほどで、天井部は第173号住居跡に掘り込まれているため遺存していない。土層断面図中の第2層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築され、右袖部には補強材として土師器甕が使用されていたと考えられる。火床部は床面の高さから15cmほど皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量

ピット 検出されていない。

貯蔵穴 平面形は径70cm前後の不整形円形を呈し、北東コーナー部の東壁際に位置している。深さは約25cmを測り、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

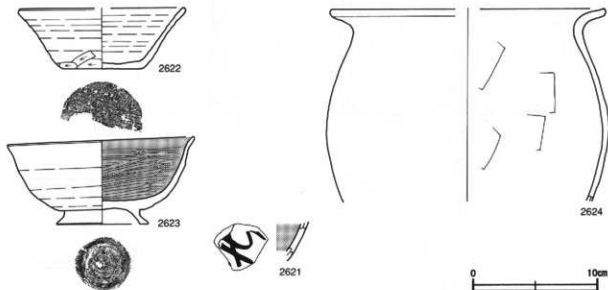
- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量

覆土 10層からなり、ロームブロックや焼土を含むブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 10 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片110点（坏7，高台付碗1，高坏2，甕100），須恵器片25点（坏7，甕18），灰釉陶器片1点（碗）が竈およびその周辺から出土している。2621・2623は、ともに貯蔵穴覆土上層から出土したもので、2621の墨書は判読できない。2624は竈右袖部より出土している破片8点が接合したもので、被熱痕が認められる。2622は竈左袖部西側の床面からやや浮いた状態で出土しており、廃絶後に埋土と共に混入したものと



第513図 第171号住居跡出土遺物実測図

考えられる。

所見 本跡は竈の右側に貯蔵穴を有した住居跡で、出土土器の形状から見て、時期は10世紀前葉と考えられる。

第171号住居跡出土遺物観察表（第513図）

番号	種別	器種	径	高さ	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2621	土師器	杯	-	(3.3)	-	砂粒	にぶい黄褐色	普通	内面ヘラ磨き	貯蔵穴上層	5% 外周部 器 <small>21</small>
2622	須恵器	杯	13.0	4.8	6.2	灰石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り、底部多方向のヘラ削り	竈内焼成面	40%
2623	土師器	高台付碗	14.6	6.9	7.0	雲母・赤色 粒子	にぶい黄褐色	普通	底蓋脱けヘラ切り後、高台貼り付け、内面ヘラ磨き	貯蔵穴上層	83% 器 <small>229</small>
2624	土師器	壺	21.6	(15.3)	-	雲母・灰石・ 石英	灰	普通	体部内面ヘラナデ	竈火床面、 竈前床面	30%

第172号住居跡（第514図）

位置 調査区北部の北寄りであるG13d4区に位置し、平坦部に立地している。当初、1軒の住居跡として調査を開始したが、2軒重複していることが確認されたため、北側に竈を有する住居跡を前述した第170号住居跡、東側に竈を有する住居跡を第172号住居跡として調査を実施した。

重複関係 東部で第168号住居跡、ほぼ全域で第170号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 N-94°-Eを主軸とする長軸2.6m、短軸2.4mのほぼ方形であると推定される。壁の立ち上がりは確認できなかったが、上層断面の観察から外傾しながら緩やかに立ち上がるものと考えられる。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いた中央部がよく踏み固められている。

竈 東壁の南東コーナー寄りに付設され、焚口部から煙道部まで84cm、袖部幅80cmである。壁外への掘り込みは不明である。袖部は、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。さらに、右袖部には土師器杯、左袖部には土師器高台付碗をそれぞれ補強材として砂質粘土を貼り付けている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変している様子が認められる。煙道は、火床部から緩やかに外傾した後、急な傾斜で立ち上がっている。

壁土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 7 にぶい黄褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 検出されていない。

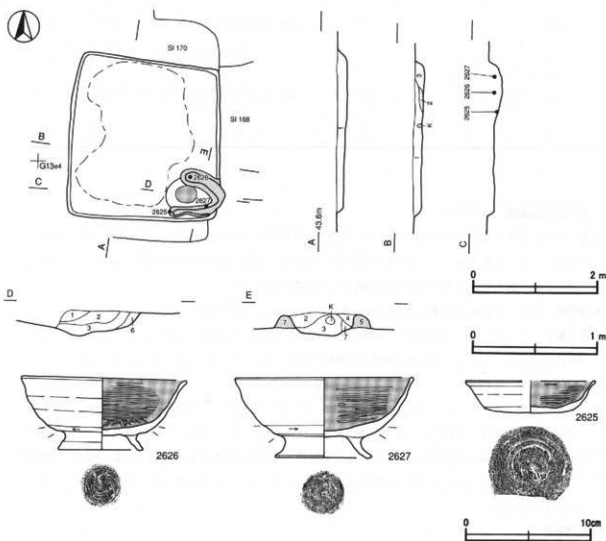
覆土 3層からなり、ロームブロックや焼土を含む不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片67点(杯29、高台付碗8、小皿1、壺29)、須恵器片3点(杯1、高台付碗1、壺1)、罌2点(破痕あり)が覆土下層を中心に出土している。2625・2626は、竈袖部の補強材として利用されてお

り、体部には粘土粒子や砂粒が付着し、火熱を受けている。2627は竈火床部から出土しており、本跡廃絶時に投棄されたものと考えられる。須恵器の供膳具類は破断面が摩滅しており、混入したものである。所見 時期は、東壁に竈を有する住居跡であることや出土土器の形状から、10世紀中葉と考えられる。また、東壁の中央部から南寄りに竈を付設する住居形態は、当該期集落の特徴のひとつである。



第514図 第172号住居跡・出土遺物実測図

第172号住居跡出土遺物観察表 (第514図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2625	土師器	坏	[10.3]	2.5	7.0	雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後、ナデ	竈右袖部	40%
2626	土師器	高台付碗	13.0	5.8	6.8	雲母・赤色	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け	竈左袖部	80%
2627	土師器	高台付碗	[14.0]	6.3	7.6	雲母・赤色 粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け	竈火床部	45%

第173号住居跡 (第515・516図)

位置 調査区北部の北端であるF13j6区に位置し、平坦部に立地している。

竪掘関係 第171号住居跡を掘り込み、西壁際で第124号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.4m、短軸3.0mで、N-9°-Eを主軸とする長方形と推定される。壁高は最も残りのよい南壁で16cmを測り、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床であり、壁際を除き中央部がよく踏み固められている。壁溝は、南壁際から西壁際の一部を除いて検出されており、木炭は間回していたものと推定される。

竪 北壁中央部から北東コーナー部が調査区域外に延びているために、規模や形状は不明であるが、覆土の土層断面図中の第5層には焼土ブロックや粘土ブロックを多く含んでおり、竪材が流出したものと考えられる。また、北壁際に竪構築材の一部と考えられる粘土ブロックや焼土が散在していることから、北壁の東寄りには砂質粘土で構築されたものと推定される。

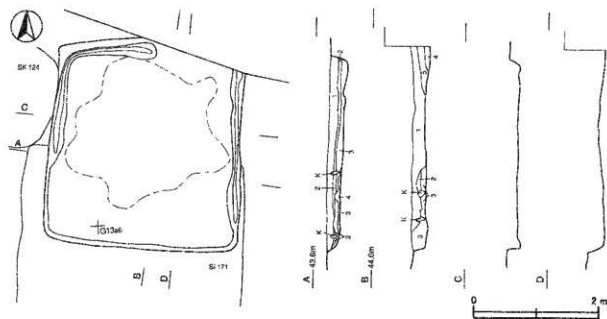
覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

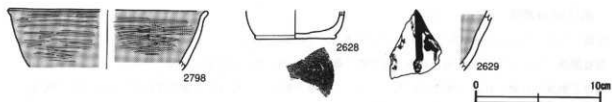
- 1 焼 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片492点(坏102, 高台付碗7, 甕383), 須恵器片28点(坏14, 高台付坏1, 甕13), 小鏢10点(4点に被熱痕)が、全域に散在する状態で出土している。2628・2629はいずれも覆土中からの出土である。須恵器坏類はいずれも細片で、破断面が摩擦しているため、混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器の形状から10世紀後半と考えられる。竪が壁中央から右寄りに付設される特徴は、9世紀と10世紀の一時期に取り入れられる当跡における住居形態の一類型である。



第515図 第173号住居跡実測図



第516図 第173号住居跡出土遺物実測図

第173号住居跡出土遺物観察表 (第516図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2628	須恵器	小瓶	-	(2.2)	[6.2]	砂粒	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り, 体部ロクロナテ	覆土中	5% 外面自然釉
2629	土師器	坏	-	(4.8)	-	長石	にぶい褐	普通	内面ヘラ磨き	覆土中	5% 漆付着
2798	土師器	碗	-	(4.8)	-	長石	にぶい褐	普通	内・外面ヘラ磨き	覆土中	10%

第174号住居跡 (第517図)

位置 調査区北部の北側であるG13c4区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第187号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 N-118°-Eを主軸とする長軸3.4m, 短軸3.2mのほぼ方形である。壁高は10cm前後であり, 外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈 東壁の南東コーナー部寄りに付設され, 焚口部から煙道部まで65cm, 袖部幅76cm, 壁外への掘り込みは20cmほどである。天井部は崩落しており, 土層断面図中の第4層が相当し, 粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上に, 砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面の高さから10cmほど皿状に掘りくぼめられ, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から外傾した後, 急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック中量, 炭化粒子少量
- 4 黒褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子少量
- 7 黒褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 8 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子少量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子少量

ピット 1か所。P1はほぼ中央部に位置し, 深さが24cmほどであり, 性格は判然としない。

覆土 4層からなり, ロームブロックや焼土を含んだブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

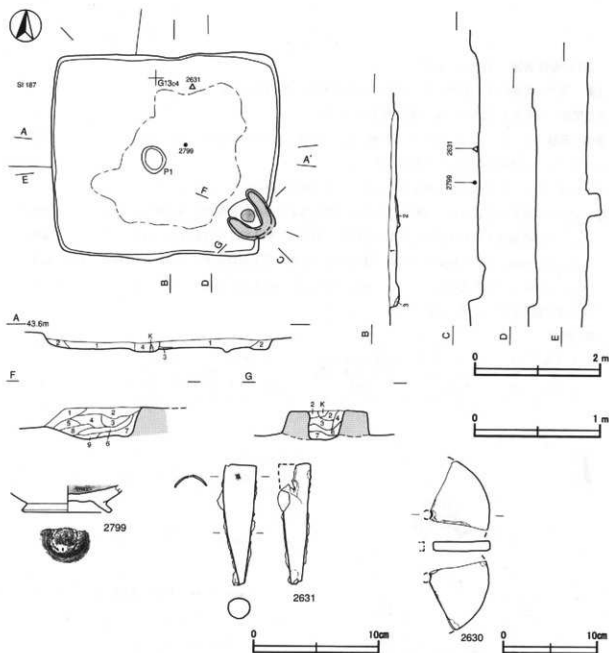
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片138点 (坏17, 高台付碗5, 甕116), 須恵器片17点 (坏11, 甕6), 礫3点 (被熱痕あり), 土製品1点 (紡錘車), 鉄製品1点 (石突) が全域から散在した状態で出土している。2630は覆土中から

の出土で、須恵器甕片の底部を紡錘車に転用している。2631は、北壁寄りの床面から出土したものである。須恵器坏片は破断面が摩擦しており、埋土と共に混入したものと考えられる。

所見 本跡はコーナー竈に近い形態を有した住居跡であり、時期は出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。



第517図 第174号住居跡・出土遺物実測図

第174号住居跡出土遺物観察表 (第517図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2799	土師器	高台付 甕	-	(2.1)	7.2	雲母・赤色 粒子	橙	普通	底部回転へつ切り後、高台貼り付け、内面へラ磨き	中央部下層	20%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
2630	紡錘車	[13.0]	1.1	[1.0]	(58.1)	須恵器	須恵器窯の底部を転用。ナデ調整痕あり	覆土中	25%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
2631	石突	9.6	2.4	1.7	60.4	鉄	先端部は中実で、円錐形状に尖る	中央部北寄り床面	80%

第175号住居跡 (第518・519図)

位置 調査区北部のほぼ中央であるG13f3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 西壁際が第249号土坑に掘り込まれている。

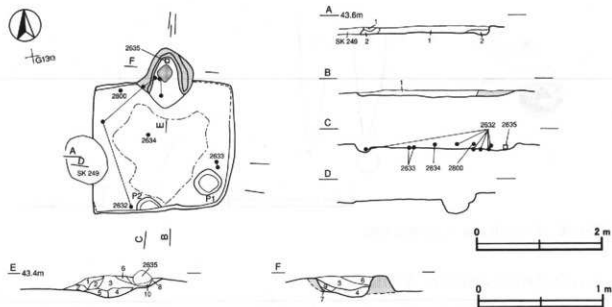
規模と形状 N-11°-Eを主軸とする長軸2.3m、短軸2.1mの方形である。壁高は最も残りの良い部分で14cmほどであり、外傾しながら立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈 北壁の中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで88cm、袖部幅80cm、壁外への掘り込みは52cmほどである。土層断面図中の第2層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上に、砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面の高さから10cmほど皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに外傾して立ち上がり、その煙道の立ち上がりには支脚に転用した砥石が据えられている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 8 赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭下粒子少量 | 10 黒色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子少量 |



第518図 第175号住居跡実測図

ピット 2か所。P1は深さが21cmで柱穴と思われるが、規模や断面の形状から貯蔵穴の可能性も考えられる。

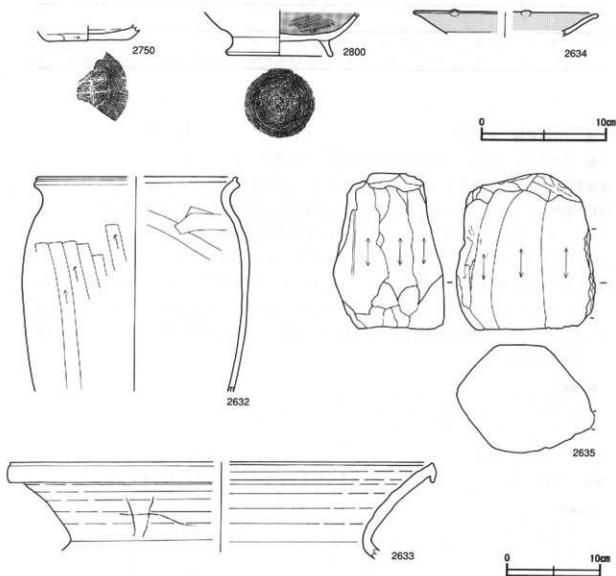
P2は深さが8cmほどで、竈と対峙する南壁際に位置することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層からなり、焼土や炭化物を含んだ堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片241点（坏32、高台付碗1、甕208）、須恵器片14点（坏5、高台付坏1、甕8）、灰輪陶器片1点（輪花皿）、石製品1点（砥石）がほぼ全域に散在した状態で出土している。2634は中央部の覆土下層から、2750は覆土中から出土しており、いずれも混入したものと考えられる。2634は東濃産光が丘1号窯式の輪花皿と考えられ、2750は底部にヘラ記号が施されている。2635は竈煙道部より出土しており、火熱を受けていることから支脚に転用された可能性が考えられる。2632は竈火床面や南壁際などから出土した破片10点が接合したものである。2633は廃絶時に投棄されたもので、東壁際床面から斜位の状態で出土しており、頸部



第519図 第175号住居跡出土遺物実測図

外面には「井」と焼成前の窠書きが施されている。

所見 出土土器の形状から、時期は10世紀中葉と考えられる。本跡からは、焼成前に窠書きされた須恵器焼片が出土しており、興味深い資料である。

第175号住居跡出土遺物観察表（第519図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2632	土師器	甕	[20.8]	(22.4)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	電気床前、南側器床面	10%
2633	須恵器	甕	[44.0]	(10.0)	-	長石・石英・白色片状磁石	にぶい黄褐色	普通	口縁部ロクロナデ	東摩郎床面	5% PL251 焼片
2634	灰釉陶器	輪花皿	[14.4]	(1.8)	-	磁土	灰白	良好	体部ロクロナデ、縁は刷毛塗り	中央部下層	5% 卓遺産
2750	須恵器	杯	-	(0.8)	[6.4]	長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後、高台筋り付けナデ	覆土中	10% PL251 底部ヘラ記号
2800	土師器	高台付 碗	-	(3.4)	8.5	雲母	にぶい褐色	普通	底部回転ヘラ切り後、高台筋り付け、内面ヘラ書き	東西側壁部 下層	25%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2635	土師器	14.6	16.4	11.3	3350	花崗岩	磁石を転用、軟熱度あり、砥面は粗、うち1面に研ぎ痕あり	電機室部	100%

第177号住居跡（第520図）

位置 調査区北部の北寄りであるG13d3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第170号住居跡を掘り込み、第231・223・234・235号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-44°-Eを主軸とする長軸2.6m、短軸2.2mの長方形と推定される。壁高は最も残りの良い部分で4cmで、外傾して緩やかに立ち上がる様子が若干確認できる程度である。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いた中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 北壁中央部が第223号土坑に掘り込まれているため、ほとんど遺存していない。火床部の一部だけが残存し、その痕跡から北壁のほぼ中央に付設されていたものと推定される。火床部は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変している。土層断面の観察から、第3層のローム土を主とする黒褐色土を基部にして、輪部を構築していたと考えられる。

竈土層解説

- 1 黒赤褐色 粘土ブロック中試、ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

ピット 検出されていない。

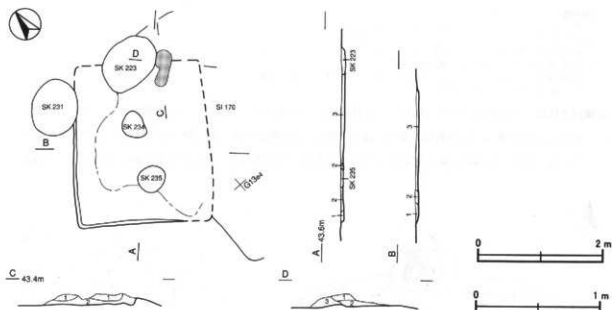
覆土 3層からなり、ロームブロックや焼土を含む不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子・粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡は遺物が出土していないため時期の特定が困難であるが、北東方向を主軸方向とする特異な例であることや重複関係などから見て、時期は10世紀前半以降の平安時代と考えられる。



第520図 第177号住居跡実測図

第178号住居跡 (第521・522図)

位置 調査区北部の北寄りのG13d6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第245号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 N-4°-Eを主軸とする長軸4.2m、短軸3.8mの長方形である。各壁とも壁高は40cmほどであり、やや外傾しながら立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は西壁際と北壁際の一部、南壁際から東壁際にかけて確認されている。

竈 北壁のほほ中央部に付設され、焚口部から煙道部まで95cm、袖部幅96cm、壁外への掘り込みは52cmほどである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第3～5層が相当し、粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されており、火床部も床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 8 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子中量
- 10 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 11 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 12 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

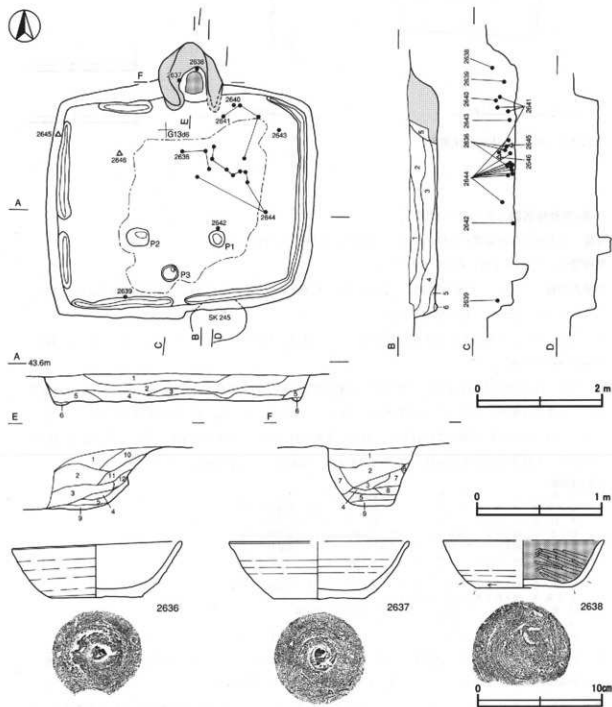
ピット 3か所。P1・P2が支柱穴に相当し、いずれも深さは23cmである。P3は深さが26cmで、竈に対峙する南壁際に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、各層ともロームブロックや焼土を含んだブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

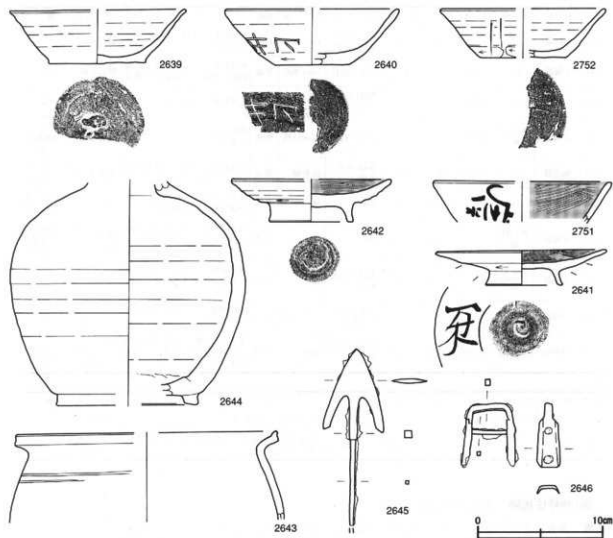
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片1525点(坏405, 高台付坏46, 高台付皿7, 甕1067), 須恵器291点(坏232, 高台付坏8, 蓋4, 高台付皿4, 長頸瓶10, 甕24, 瓶6, 鉢3), 鉄製品2点(鐵, 鋸)が全域から散在した状態で出土している。2637・2638は, 竈火床部からの出土である。2642の高台付皿は中央部床面, 同器種として2641が



第521図 第178号住居跡・出土遺物実測図



第522図 第178号住居跡・出土遺物実測図

竈前中層から下層にかけて出土しており、体部外面に「万木」と墨書されている。2751には、「庄南」と墨書されており、2640には「井刀」と宛書きされている。その他に墨書土器2点が出土している。2644の長頸瓶は、中央部から東壁際にかけての覆土下層より出土した破片18点が接合したものである。2645と2646の鉄製品は、西壁際の覆土下層と中央部西寄りの覆土中層よりそれぞれ出土している。これらの遺物の多くは、本跡廃絶時に埋土と共に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡からは、墨書土器や宛書きされた土器が計5点出土している。さらに、鎌や鍔金具と考えられる鉄製品も出土していることから、有力者の存在をうかがうことができる。土師器高台付碗の出土量や供膳具に占める須恵器の割合など、出土土器の形状から、時期は10世紀前葉と考えられる。また、本跡は他の住居跡と重複しておらず、10世紀前葉の住居形態や土器の様相をうかがい知ることのできる良好な資料といえる。

第178号住居跡出土遺物観察表 (第521・522図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2636	土師器	坏	13.2	4.4	7.2	雲母・長石・石英	にぶい黄緑	普通	底面回転へら切り、体部ロクロナデ	中央部電寄り下層	80% P1.228 内面薬付着

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	魚目	成成	手技の特徴	出土位置	備考
2637	土師器	坏	[14.2]	4.6	7.3	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	底部回転ヘラ切り、体部口ロナテ	竈火床部	90%
2638	土師器	坏	12.7	3.8	7.5	雲母・長石	にぶい黄緑	普通	底部回転ヘラ切り、体部下層回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き	竈火床部	40%
2629	土師器	坏	[13.8]	4.3	[7.5]	雲母・長石・石英	黄	二次焼成	底部回転ヘラ切り後、ナテ	南階段中層	40%
2751	土師器	高台付 甗	[14.0]	(3.3)	-	雲母・石英	にぶい黄	普通	体部外周口ロナテ、内面ヘラ磨き	竈覆土中	5% 外周部書 「床部」
2540	須恵器	坏	[13.4]	4.5	5.8	雲母・長石・石英	灰黄緑	普通	底部回転ヘラ削り、体部下層回転ヘラ削り	竈東階中層	30% 胎書 「井刀」
2752	須恵器	坏	[13.0]	3.9	[6.8]	長石	灰	普通	底部一方のヘラ削り、体部下層手持ちヘラ削り	竈上中	20% 外面 ヘラ起号
2641	土師器	高台付 甗	13.2	2.9	6.0	長石	黄	普通	底部回転ヘラ削り後、高台削り付け、ナテ、体部下層回転ヘラ削り	竈南中・下層	70% PL229 外面部書 「万木」
2632	土師器	高台付 甗	[12.4]	3.4	6.4	雲母・赤色粒子	黄	普通	底部回転ヘラ削り後、高台削り付け、ナテ、体部下層回転ヘラ削り	中央部床面	45%
2613	土師器	甗	[20.6]	(7.0)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	口縁部削ナテ、体部内・外面ヘラ削り	北階ローナ一部下層	5%
2644	須恵器	長頸瓶	[17.8]	[11.0]	7.0	長石・黒色粒子	陶灰	普通	底部切り差し後高台削り付け、体部口口整形、肩部熱割	中央部から東階書りにかけての1層	60% PL229

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	備考
2645	甗	14.0	4.8	0.6	39.5	鉄	長三角形、扁状あり	西階段下層
2646	鋸金具	5.1	4.6	1.8	19.8	鉄	吊り手部は断面方形、脚部は弓状で、刃が2本打たれている	中央部西寄り中層

第179号住居跡 (第523・524図)

位置 調査区北部の北寄りのG13c6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第192号住居跡を掘り込み、第172号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 N-13°-Eを主軸とする長軸3.6m、短軸3.3mのほぼ方形である。壁高は16~24cmほどであり、外傾しながら立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、甗手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は、南階段の一部と北階段を除いて巡っている。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで92cm、袖部幅124cm、壁外への掘り込みは60cmほどである。袖部は基部だけが遺存し、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道の立ち上がり部には完形品に近い土師器坏や須恵器坏が支脚として据えられており、火熱を受けている。煙道は、火床部から緩やかに立ち上がった後、急な傾斜で立ち上がっている。

出土品解説

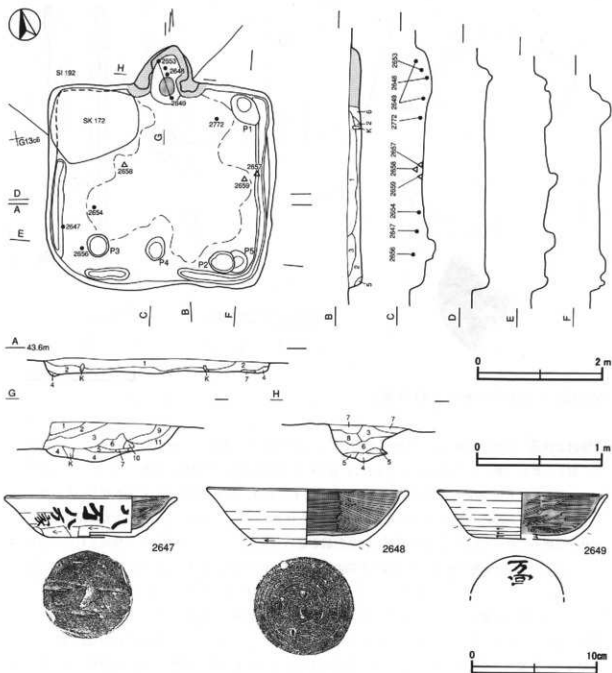
- | | | | |
|--------|--------------------------------|-----------|--------------------------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 7 黒 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物・粘土ブロック少量 |
| 2 黒 褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック少量 | 8 黒 褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 黒 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量 | 9 紺 赤 褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック少量 |
| 4 黒 褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 10 にぶい赤褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量 |
| 5 黒 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 11 黒 褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 |
| 6 黒 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 | | |

ビット 5 か所。P1～P3・P5 が主柱穴に相当し、深さは 8 cm～16 cm である。P4 は深さが 12 cm で、竈に対峙する南壁際に位置しており、出入り口施設に伴うビットと考えられる。北西コーナー寄りに推測できる主柱穴は、第172号土坑によって掘り込まれているため検出できなかった。

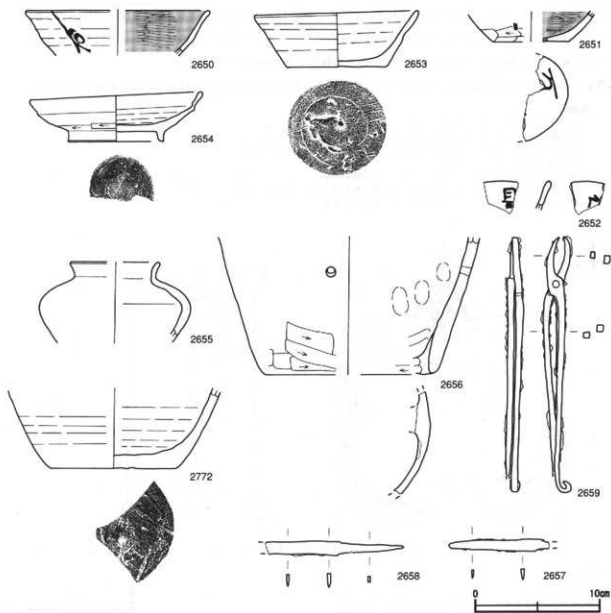
覆土 7 層からなり、各層ともロームブロックや焼土を含みブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 焼土ブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量



第523図 第179号住居跡・出土遺物実測図



第524図 第179号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片301点(坯149, 高台付坏3, 高台付皿2, 甕147), 須恵器片116点(坯73, 高台付坏1, 盤1, 甕40, 瓶1), 鉄製品3点(刀子2, 鉗1)が全域に散在した状態で出土している。2647は体部外面に「八万八万家」, 2649の底部には「万富」と墨書されており, 判読不明のものも含めると5点となる。煙道の立ち上がり部には, 2648と2653が逆位で重ねられた状態で出土している。これらの土器は隙間を焼土化した粘土で埋められて固定され, 体部外面には被熱痕が認められることから, 支脚として使用されていたものと考えられる。2657は東壁際床面, 2658は中央部の覆土下層からそれぞれ出土しており, 2659は東壁際の覆土下層から出土している。これらの遺物の多くは, 本跡が埋め戻される段階で投棄されたものと考えられる。なお, 2655の短頸壺は覆土中から, 広口壺と思われる2772は竈前の覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土土器の形状から9世紀中葉と考えられる。また, 多くの墨書や篋書きされた土器とともに, 鉄鉗などの鉄製品から鍛冶関連施設の存在が想定できるなど, 集落の様相を窺う上での好資料といえる。

第179号住居跡出土遺物観察表 (第523・524図)

番号	種別	器種	口径	径	高さ	素材	土色	地味	手法の特徴	出土位置	備考
2647	土師器	坏	[13.5]	4.0	7.0	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転へう切り後、一方のへう削り、体部下端手持ちへう削り	西壁際下部	80% PL228 外面磨き [八方方東]
2648	土師器	坏	[15.7]	4.4	7.8	雲母	橙	普通	底部回転へう切り、体部下端回転へう削り	竈火床部	70% PL229
2649	土師器	坏	13.4	3.8	7.4	雲母	赤褐	普通	底部回転へう切り、体部下端回転へう削り	竈火床部	80% PL229 外面磨き [万箇]
2650	土師器	坏	[14.4]	[3.6]	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部口ロナデ、内面へう削り	竈十中	5% 外面磨き [1]
2651	土師器	坏	-	[2.4]	[6.0]	雲母・長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底部へう切り後多方向のへう削り、体部下端手持ちへう削り	竈十中	10% 底部磨 削り [万箇]
2652	土師器	坏	-	[2.3]	-	砂粒	にぶい黄橙	普通	[口縁部微ナデ]	竈十中	5% 内・外面 磨き [1]
2653	須恵器	坏	12.8	4.5	7.8	雲母・長石	黄灰	普通	底部へう切り後、一方のへう削り	竈火床部	45% PL229
2654	須恵器	壺	13.6	4.0	7.1	長石・石英	灰	普通	底部回転へう切り後、英台磨り付け後ナデ、体部下端回転へう削り	中央部西寄り下層	50%
2655	須恵器	和製器	[7.0]	[4.6]	-	砂粒	黄灰	普通	体部口ロナデ、柄部自然物	竈十中	10%
2656	須恵器	瓶	-	[11.0]	[13.2]	長石・石英	黄灰	普通	体部下端へう削り、内面ナデ・指頭痕、体部に穿孔あり	南西コーナー一部中層	5%
2772	須恵器	仏門蓋	-	[6.3]	[10.0]	長石	灰	普通	体部口ロナデ、底部回転へう切り後、多方向のへう削り、内面磨きによる自然磨	竈前下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	張	出土位置	備考
2637	刀子	8.1	1.0	0.3	5.75	鉄	刃先・末刃欠損、片開き		東壁際床面	
2658	刀子	(11.0)	1.2	0.3	10.5	鉄	刃先・末刃欠損、両開あり		中央部中層	
2639	鉄附	20.1	2.1	1.3	69.5	鉄	断面方形で、柄部の先端は傘手状に屈曲する、挟み部手前で貫の金具を介し、交差させている		東壁際下層	PL283

第180号住居跡 (第525図)

位置 調査区北部の北寄りであるG13e4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第239・252号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-100°-Eを主軸とする長軸4.0m、短軸3.3mの長方形である。壁高は15cmほどであり、外方向に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 東壁の南東コーナー寄りに付設され、焚口部から煙道部まで64cm、袖部幅84cmである。壁外への掘り込みは60cmほどで、天井部は崩落しており、上層断面图中的第3層が天井部の崩落上に相当し、粘土粒子を多く含んでいる。袖部は、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は10cmほど皿状に掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変している。煙道は、火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

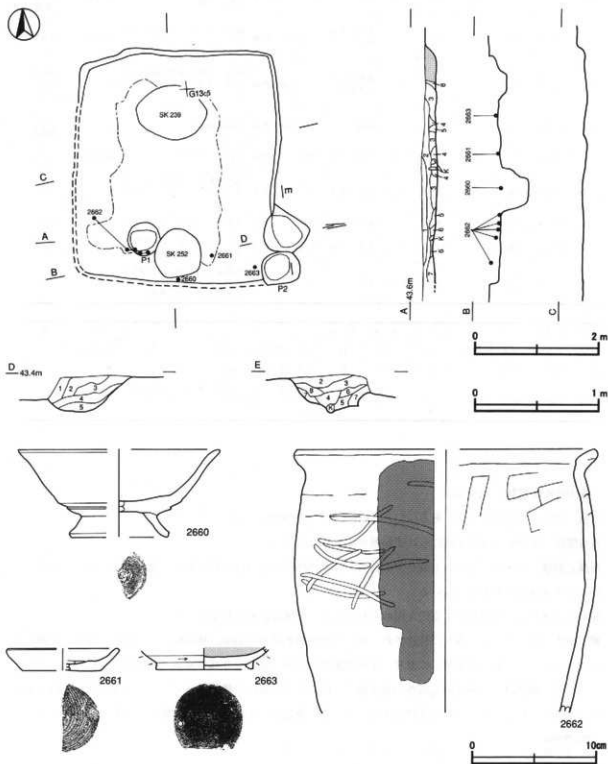
竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量

ピット 2か所。P1・P2は補助的な柱穴の可能性はあるが、性格は不明である。

覆土 8層からなり、ロームブロックや焼土を含むブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第525図 第180号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
 3 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
 4 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
 5 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
 6 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
 7 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片189点(坏67, 高台付椀9, 小皿1, 甕112), 須恵器片11点(坏9, 甕2), 曜4点(砂岩, 被熱痕あり), 灰釉陶器片1点(椀)が覆土下層を中心に出土している。2662は, 南西部の床面や覆土下層から出土した破片9点が接合したものである。なお, 2663の灰釉陶器の椀は狭投席黒笹14号窯式と考えられるが, 埋土と共に混入したものである。須恵器坏片は破断面が摩滅しており, 混入したものである。

所見 出土した土師器小皿が小形化してきており, 東室を有する住居跡であることから, 時期は10世紀後半と考えられる。

第180号住居跡出土遺物観察表 (第525図)

番号	種別	器種	口径	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2660	須恵器	高台付椀	[16.0]	7.0	7.4		雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	底部回転へつ切り後, 高台貼り付け	P1 覆土中	20%
2661	土師器	小皿	[8.5]	1.8	[6.2]		赤色粒子	にぶい褐色	普通	底部回転糸切り, 体部内外面ロクロナデ	甕手前下層	45%
2662	土師器	甕	[23.8]	(20.9)	-		長石・石英	灰黄褐色	普通	体部外面へつ書き, 内面へつナデ	西西部床面・覆土下層	30% 体部外面に風付者
2663	灰釉陶器	椀	-	(1.7)	7.6		緻密	灰オリーブ・灰白	良好	体部下層回転へつ削り, 底部回転へつ切り後, 高台貼り付け, 輪は軋毛塗り	甕下層	30% 狭投産

第183号住居跡 (第526図)

位置 調査区北部のG13d2区に位置し, 平川部に立地している。

層位関係 第182号住居跡を掘り込み, 第275号土坑に掘り込まれている。

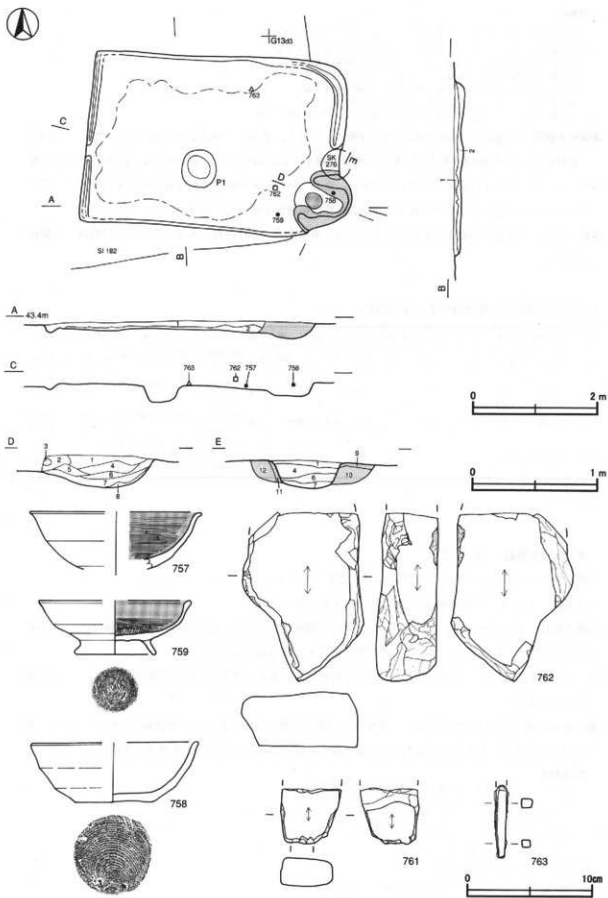
規模と形状 掘り込みが浅いため壁の立ち上がりは明確ではないが, 長軸は約4.2m, 短軸は約2.8mが確認されただけである。平面形は, N-110°-Eを主軸とする長方形と推定される。

床 ほぼ平川で, 中央部が踏み固められ, 床全面が貼床である。壁溝は西壁と北東コーナー部で一部が確認されただけである。

竈 東壁の南端部に付設されており, 規模は焚口部から煙道部まで約90cm, 袖部幅約100cm, 壁外への掘り込みは約30cmである。火床部は床面から20cmほど掘りくぼめ, 火熱を受けて赤変質化している。

覆土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土ブロック微量
 2 黒褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
 3 灰褐色 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量
 4 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量
 5 暗赤褐色 ローム粒中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量
 6 にぶい褐色 灰多量, 焼土ブロック少量
 7 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
 8 褐色 ローム粒子多量
 9 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土ブロック少量
 10 暗褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
 11 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
 12 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量



第526图 第183号住居跡・出土遺物実測図

ビット 1か所。P1は深さ約30cmで、中央部やや南側に位置しており、形状から柱穴と考えられるが、詳細は不明である。

覆土 2層だけで、堆積状況については不明である。

土層解説

- 1 黒 色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量（磁土）

遺物出土状況 出土遺物は土師器片216点（坏104、高台付椀10、壺102）、須恵器片4点（坏2、壺1、蓋1）、灰釉陶器片3点（椀）、鉄製品1点（釘）、石器2点（砥石）、礫3点がほぼ全城から散在した状態で出土している。757は北西部の覆土中、758は室内の覆土中層、759は竈前の覆土下層、761は覆土中、762は竈手前の覆土上層、763は北部の床面からそれぞれ出土している。

所見 遺物の大半が覆土中から検出されたものであるが、遺構の形態と出土した土師器の形状から、時期は、10世紀中葉と推定される。

第183号住居跡出土遺物観察表（第526図）

番号	種別	器種	口径	径高	底径	胎土	色調	施装	手法の特徴	出土位置	備考
757	土師器	高台付椀	[13.8]	4.4	(6.6)	黄土・石英・赤色粒子	緑	普通	内面ヘラ磨き	北西部覆土中	10%
758	土師器	坏	[13.1]	4.7	6.2	黄土・石英	濃い黄褐色	普通	底部回転車切り、底部クロコナア	室内中層	10%
759	土師器	高台付椀	[11.8]	4.3	6.2	石英	黒	普通	底部回転ヘラ切り後、高台部り付け	竈前床面	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	数	出土位置	備考
761	砥石	(4.5)	(1.8)	2.2	(71.2)	暖灰岩	砥面2面、その他は破断面		覆土中	
762	砥石	(13.4)	(9.6)	4.8	(616.0)	砂岩	砥面3面、その他は破断面		覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	数	出土位置	備考
763	釘	(5.6)	0.9	0.7	(12.5)	鉄	遺部欠損、断面方形		北部床面	

第184号住居跡（第527図）

位置 調査区北部の北側であるG13b2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第200号住居跡を掘り込み、第185号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.0m、短軸3.3mで、N-85°-Eを主軸とする長方形である。床面が露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いた中央部がよく踏み固められている。壁溝は北壁際を除いた壁際を巡っており、全周していたものと推定される。

竈 東壁の北東コーナー部寄り付設されている。遺存状態が悪く、右袖部の痕跡と火床面が確認されただけである。付近の床面に粘土粒子や砂粒が散在しており、竈材の一部が流出したと考えられる。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。

覆土層解説

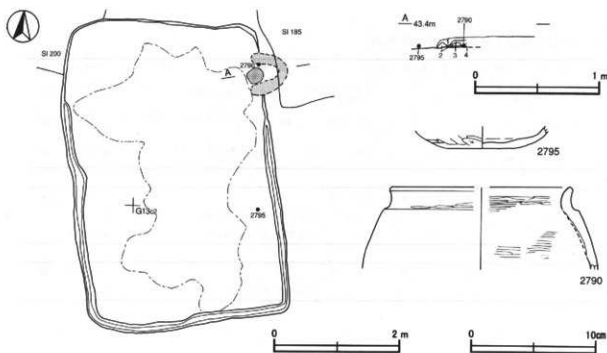
- 1 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子・砂粒微量
- 2 暗 褐色 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量
- 3 暗 赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒中量、ローム粒子・粘土粒子少量
- 4 暗 赤褐色 砂粒少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子少量

ピット 検出されていない。

覆土 検出されていない。

遺物出土状況 土師器片135点（坏14，高台付坏5，甕116），須恵器片17点（坏11，甕6），礫3点（被熱痕あり）が主に竈内部および東壁際から出土している。2790は竈火床面から出土しており，火熱を受けて焼土が付着し，器壁が剥落している部分が多いことから支脚として使用されたと考えられる。2795は東壁際床面より出土している。

所見 遺物が細片しか出土していないため時期の判断が困難であるが，出土土器の形状から8世紀前葉前後と考えられる。また，本跡は竈穴部に支柱穴をもたず，長軸が短軸の1.5倍もある特異な形状を呈しているが，拡張した痕跡は認められず，当初から横長を想定して構築されたと考えられる。この横長の住居形態から何らかの工房跡と想定されるが，それを裏づける施設や遺物は検出されていない。



第527図 第184号住居跡・出土遺物実測図

第184号住居跡出土遺物観察表（第527図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2790	土師器	小形甕	[14.2]	(6.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	体部内外面へラ磨き	竈火床面	5%
2795	須恵器	坏	-	(1.8)	6.8	砂粒	灰	普通	底部多方向のへラ削り，体部下端手持ちへラ削り	東壁際床面	5%

第185号住居跡（第528図）

位置 調査区北部北寄りのG13b2区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第184・187号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 N-11°-Wを主軸とする長軸約3.2m、短軸約2.8mの長方形である。壁高は10cm～19cmほどで、やや外傾しながら立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、竈前から中央部にかけて硬化面が認められる。壁溝は認められない。

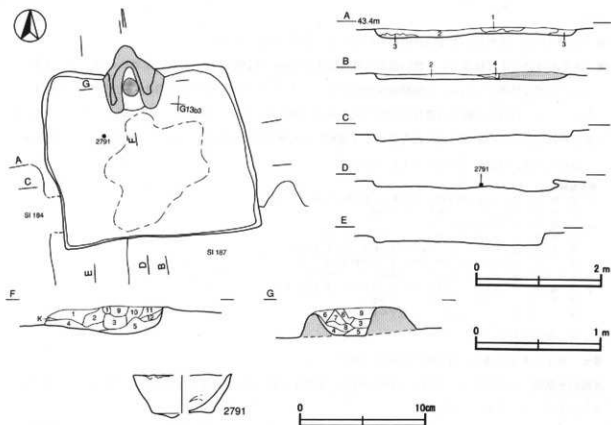
竈 北壁のほぼ中央に付設され、焚口部から煙道部まで76cm、袖部幅80cm、壁外への掘り込みは44cmほどである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第1・2・9層が相当し、粘土粒子や砂粒を多量に含んでいる。付近の床面には竈構築材の流出が見られる。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されており、火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から緩やかに傾斜した後、急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック微量
- 2 褐褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 4 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 5 極暗褐色 焼土ブロック少量
- 6 黒褐色 焼土ブロック少量
- 7 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量
- 8 赤褐色 焼土ブロック中量
- 9 灰褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック・砂粒少量
- 10 黒褐色 焼土ブロック少量
- 11 黒褐色 焼土ブロック少量
- 12 暗赤褐色 焼土粒子多量

ピット 検出されていない。

覆土 4層からなり、ロームブロックや焼土を含んだ不規則な堆積状況を示した人為堆積である。



第528図 第185号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片106点（坏21、甕84、手掘土器1）、須恵器片2点（坏1、甕1）がほぼ全域から散在した状態で出土している。2791は、竈前の覆土下層から出土したものである。

所見 本跡は、竈穴部に主柱穴をもたない小形の住居跡である。遺物が細片しか出土していないため時期の特定が困難であるが、8世紀前葉の住居跡を掘り込んだ重複関係と併せて、時期は8世紀後葉と考えられる。

第185号住居跡出土遺物観察表（第528図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	新土色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2791	土師器	子掘土器	7.8	3.4	14.8	長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	底部へう切り起こしか、内面折痕あり	竈前下層	40%

第186号住居跡（第529図）

位置 調査区北部の北寄りであるG13d4区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは確認されなかった。暗褐色を呈した床面の広がりや竈の向きから判断して、N-120°-Eを主軸とする長軸約2.1m、短軸約1.8mの長方形と推定される。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。埃溝は認められない。

竈 東壁のほぼ中央に付設され、焚口部から煙道部まで56cm、袖部幅60cmである。壁外への掘り込みは40cmほどで、天井部は崩落しており、土層断面图中的第1・5・7・8層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子を多く含んでいる。付近の床面には竈材の流出が見られる。袖部は、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されており、火床部は地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変している。煙道は、火床部から緩やかに傾斜した後、外傾しながら立ち上がっている。

覆土層解説

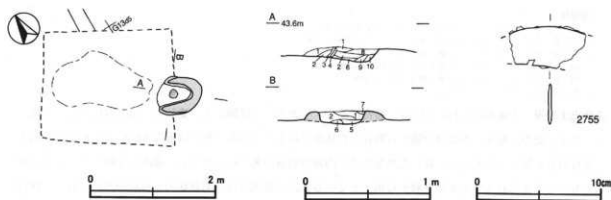
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 6 褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 7 新赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック多量、ローム粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 10 褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量

ピット 検出されていない。

覆土 覆土が非常に浅く、部分的に検出にされた。

遺物出土状況 土師器片47点（坏19、高台付瓶10、小皿1、甕17）が主に竈火床部から出土している。2755は、覆土中から出土したものである。

所見 土器片はすべて土師器であることや、土器の形状、東壁を有する住居形態であることなどから見て、時期は10世紀後葉と考えられる。



第529図 第186号住居跡・出土遺物実測図

第186号住居跡出土遺物観察表 (第529図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
2755	不明	(6.1)	3.3	0.3	(14.4)	鉄	鎌の刃部破片。刃部は若干彎曲する	覆土中	

第191号住居跡 (第530・531図)

位置 調査区北部の北寄りであるG13a6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第171・192号住居跡と第173・261号土坑をそれぞれ掘り込み、第219・468・469号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-1°-Wを主軸とする長軸3.2m、短軸2.8mの長方形である。壁高は最も残りの良い部分で36cmほどであり、ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は東壁から西壁にかけて周回しているのが確認された。

竈 北壁の中央部からやや東寄りに付設され、焚口部から煙道部まで88cm、袖部幅96cmである。壁外への掘り込みは48cmほどで、天井部は崩落しているため遺存していない。土層断面図中の第2層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上に、砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 麻痺褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック少量
- 5 黒色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土ブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 8 麻痺褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 11 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 12 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
- 13 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

ピット 検出されていない。

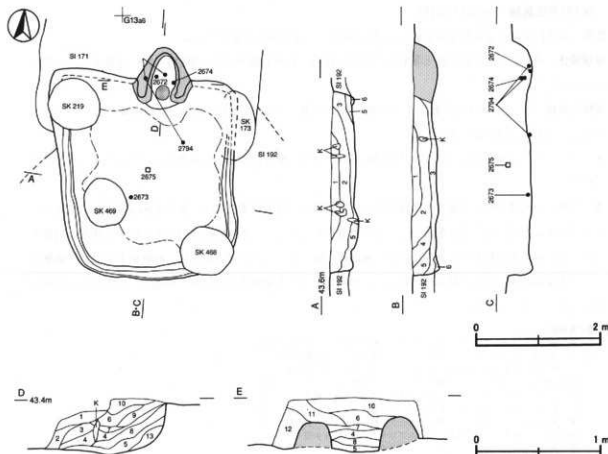
覆土 6層からなり、ロームブロックや焼土を含んだブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

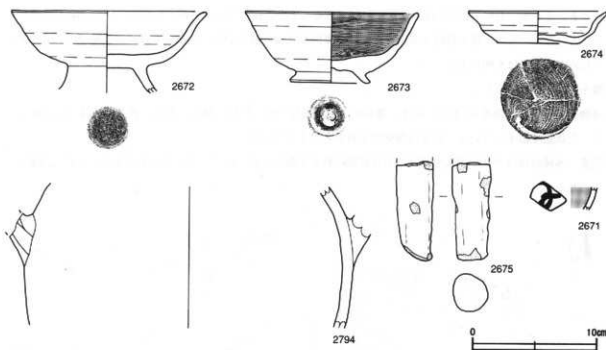
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片851点(坏237, 高台付碗12, 小皿2, 三足鍋カ1, 甕599), 須恵器片64点(坏27, 盤1, 鉢1, 甕29, 瓶6)がほぼ全域から散在した状態で出土している。2672は竈火床面からまともに出てきた破片11点が接合したもので、特に火熱を受けて内面の剥落が著しいことから、竈内で支脚として使用されていたものと考えられる。中央部下層から出土している2673の底部には、菊花状の工具痕が認められる。2674も竈火床面からまともに出てきたが、火熱は受けていないため本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。2794は竈手前の床面と竈火床部、覆土中から出土の破片6点が接合したものである。2675は中央部覆土上層から出土しており、廃絶後に投棄されたものである。

所見 出土した小皿は、口径・器高ともに大きく初現的な小皿の様相を呈しており、時期は10世紀中葉と考えられる。また、2794は被熱痕が認められることから竈で使用されていた須恵器の把手付甕と考えられ、当遺跡において出土量の少ない器種の一つである。



第530図 第191号住居跡実測図



第531図 第191号住居跡出土遺物実測図

第191号住居跡出土遺物観察表 (第531図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2671	土師器	環	-	(1.8)	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	体部外面ロクロナデ	覆土中	5% 外面黒青 □
2672	土師器	高台付 碗	15.2	(6.4)	-	雲母	黒褐	二次 焼成	底部回転ヘラ切り後、高台貼り 付け、体部下端回転ヘラ削り	南西コーナ 一部下層	80% PL230
2673	土師器	高台付 碗	13.6	5.6	6.4	雲母・長石・ 石英	にぶい黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼 り付け、底部着花状の工具痕	竈東側下層	65% PL230
2674	土師器	小皿	11.0	6.4	2.5	赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り、体部ロクロ ナデ	中央部床面	65% PL230
2675	土師器	三足 鍋	-	(7.8)	-	長石・石英	にぶい褐	二次 焼成	足部ヘラ削り後ヘラナデ、外 面に割落面あり	北西コーナ 一部床面	5%
2794	須恵器	瓶	-	(11.3)	-	雲母・長石・ 石英	明赤褐	普通	体部内・外面ロクロナデ、把 手部ヘラナデ	竈左袖部	5%

第199号住居跡 (第532図)

位置 調査区北部の北寄りであるF13j2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 ほほ全域が後世の擾乱を受けており、第5号溝跡との重複関係は不明である。

規模と形状 N-12°-Eを主軸とする長軸3.3m、短軸3.0mのほほ方形である。壁は南壁から南西コーナ
部にかけてその立ち上がりが認められ、最も残りの良い部分で36cmほどであり、ほほ直立する。

床 ほほ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は南東コーナ部を除いて周囲しているのが確認さ
れた。

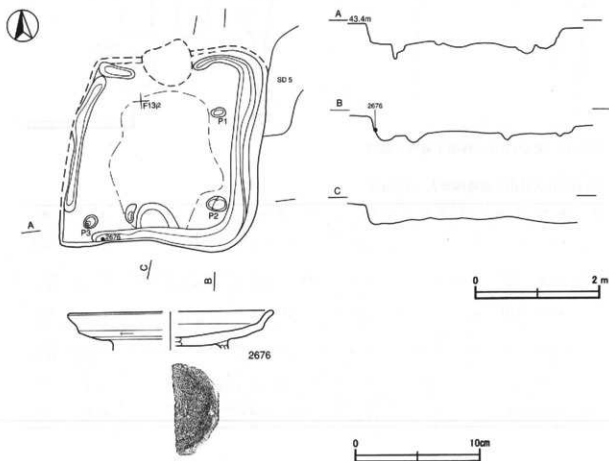
竈 擾乱のため遺存しておらず、わずかに竈火床面が確認できるだけである。火床部の痕跡から、北壁のほほ
中央部に付設されていたものと推定できる。規模や壁外への掘り込みは不明である。火床部は浅い皿状に掘り
くぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 3か所。P1～P3の深さは10～24cmである。また、検出された位置や形状からいずれも主柱穴とは考えられない。なお、竈と対峙する南壁際には、半円形状のくぼみがあり、出入り口に伴う施設の存在が想定されるが、詳細は不明である。

覆土 検出されていない。

遺物出土状況 土師器片123点(坏4, 甕119), 須恵器片22点(坏17, 盤1, 蓋1, 甕3)がほぼ全域から散在した状態で出土している。2676は南壁際下層から出土している。

所見 本跡はほぼ全域が攪乱を受けており時期の特定が難しいが、出土した土器の形状から、9世紀前葉と考えられる。



第532図 第199号住居跡・出土遺物実測図

第199号住居跡出土遺物観察表(第532図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2676	須恵器	盤	[13.2]	3.8	-	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け、体部下端回転ヘラ削り	南壁際下層	20%

第201号住居跡（第533図）

位置 調査区北部の北寄りのG12a9 区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第200・262号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 中央部から東側際にかけての大部分が復乱を受けているため、南壁と東壁および竈東側の北壁の立ち上がりを確認することはできなかった。暗褐色を呈した床面の広がりから判断して、N-4°-Eを主軸とする長軸4.0m、短軸3.5mの長方形または方形と推定される。壁高は西壁の最も残りの良い部分で24cmを測り、壁はやや外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、塹隙を除いてよく踏み固められている。壁溝は北壁から西壁にかけて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されているが、竈の上部が復乱を受けているため、天井部や袖部は遺存していない。規模は焚口から煙道部まで92cm、壁外への掘り込みは80cmほどである。両袖部の痕跡から判断して幅は100cmほどで、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は風状に掘りくぼめられて、火熱を受けて水変しているが、焼け締まった感じはない。煙道は火床部から緩やかに外傾した後、急な傾斜で立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子中量
- 3 暗褐色 炭化物中量、焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- 4 黒褐色 炭化物中量、焼土ブロック・ローム粒子少量、粘土粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
- 6 黒褐色 炭化物・粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 7 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量
- 8 黒褐色 焼土ブロック少量
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土ブロック微量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック中量
- 11 黒褐色 ロームブロック微量
- 12 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化物微量
- 13 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量

ピット 検出されていない。

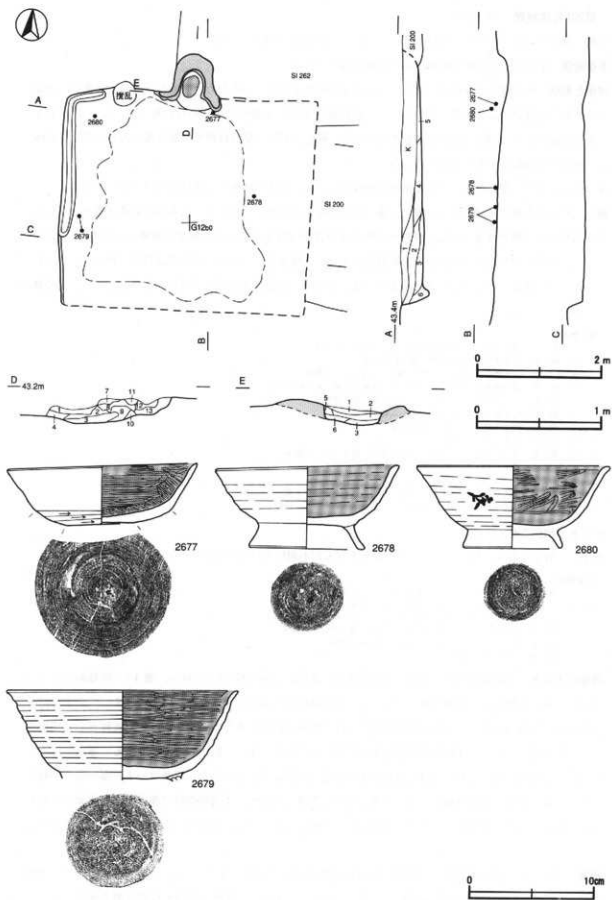
覆土 6層からなり、ロームブロックや焼土を含んだ不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・粘土粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片255点(坏52, 高台付坏14, 甕189), 須恵器片13点(坏9, 甕4), 灰釉陶器片1点(碗)がほぼ全域から散在した状態で出土している。2678は中央部床面から逆位の状態でまとまって出土した破片11点を接合したものである。2677は火熱を受けて特に内面の剥落が著しいことから、竈で支脚として使用されていたことが考えられる。2679は西壁際床面から破片8点がまとまって出土したものである。竈前から正位の状態で出土した2677は、火熱を受けた痕跡があり、竈での使用が想定される。北西コーナー部の覆土中層から出土している2680は、体部外面に「庄」と考えられる墨書が施され、本跡発掘時に埋土と共に投棄されたものと考えられる。なお、覆土中から出土の灰釉陶器片は細片のため図示し得なかったが、猿投産黒篋90号窯式と考えられる。

所見 出土した土器の形状から、時期は10世紀中葉と考えられる。また、「庄」の文字が施されている墨書土器は、「庄南」も含めると当遺跡の出土点数は10数点にのぼり、「遺跡の様相や性格を明らかにしていくための貴重な資料といえる。



第533图 第201号住居跡・出土遺物実測図

第201号住居跡出土遺物観察表 (第533図)

番号	種別	器種	口径	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2677	土師器	坏	15.0	4.6	10.6		雲母・長石	橙	普通	底部回転へう切り, 体部下端回転へう切り	甕前下層	60%
2678	土師器	高台付瓶	14.4	6.8	9.0		雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転へう切り後, 高台貼り付け, ナデ	中央部床面	70%
2679	土師器	高台付瓶	18.3	(7.2)	-		雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転へう切り後, 高台貼り付け, ナデ	西壁際床面	80% Pl.229
2680	土師器	高台付瓶	15.2	6.7	7.9		雲母・長石・石英	明橙	普通	底部回転へう切り後, 高台貼り付け, ナデ	北西コーナー 一部中層	50% 外面磨き 「上」

第202号住居跡 (第534図)

位置 調査区北部の北寄りであるF12j0区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第262号住居跡を掘り込み, 北側から北東部で攪乱を受けている。

規模と形状 北側から北東部で攪乱を受けているため, 南北軸2.4m, 東西軸2.9mの長方形または方形と考えられる。主軸方向は, 南壁の指す方向から判断して $N-10^{\circ}-E$, あるいは $N-100^{\circ}-E$ と推定される。壁高は最も残りの良い部分で25cmほどであり, 外方向に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈 北側部分が攪乱を受けているため遺存していないが, 北部の床面には粘土粒子や砂粒が散在していることから, 北壁に付設されていたことが想定される。

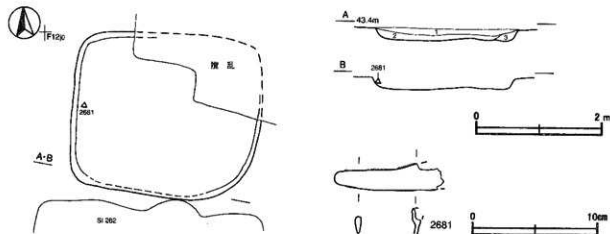
ピット 検出されていない。

覆土 3層からなり, ロームブロックや焼土を含むブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片89点(坏24, 高台付坏45, 耳皿1, 甕19), 須恵器片19点(坏14, 蓋1, 甕4), 鉄製品1点(不明)がほぼ全域から散在した状態で出土している。2681は西壁際中層から出土しており, 本跡廃絶後に埋土と共に投棄されたものである。



第534図 第202号住居跡・出土遺物実測図

所見 住居に伴う遺物が少ないが、出土土器の形状から、時期は8世紀から9世紀にかけての奈良・平安時代と考えられる。

第202号住居跡出土遺物観察表（第534図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
2681	不明	(8.7)	1.7	0.6	(15.9)	鉄	刃部一部欠損、蓋灰欠損、両面*	西壁際下層	50%

第203号住居跡（第535・536図）

位置 調査区北部の北寄りのG12c9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第205・207号住居跡を掘り込み、第204号住居に掘り込まれている。

規模と形状 N-8°-Eを主軸とする長軸5.2m、短軸1.8mのほぼ方形である。壁高は16cmを測り、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが、それほど硬化した部分は認められない。壁際は西壁際で確認されている。

竈 北壁の中央部からやや東寄りに付設され、規模は焚口から煙道部まで100cm、袖部幅は160cmほどで、壁外への掘り込みはない。天井部は崩落しており、土層断面四中の第7・9・10層が崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多量に含んでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土を主体とする黒褐色土を基部とし、その上部に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられて、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾した後、急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1	黒	色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック少量、炭化物微量	8	黒	褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
2	暗	褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物微量	9	暗	赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック微量
				10	暗	赤褐色	焼土ブロック中量
3	黒	褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック微量	11	黒	褐色	焼土ブロック中量
4	黒	褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック少量、炭化物微量	12	黒	褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量
5	黒	褐色	焼土ブロック中量、炭化物少量	13	黒	褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量
6	黒	褐色	焼土ブロック少量	14	黒	褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
7	にぶい赤褐色		焼土ブロック・粘土粒子・砂粒多量	15	黒	褐色	ロームブロック中量

ピット 5か所。P1～P4は深さが54～70cmほどで、配置と形状から支柱穴と考えられる。P5は深さが29cmで竈と対峙する南壁際に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

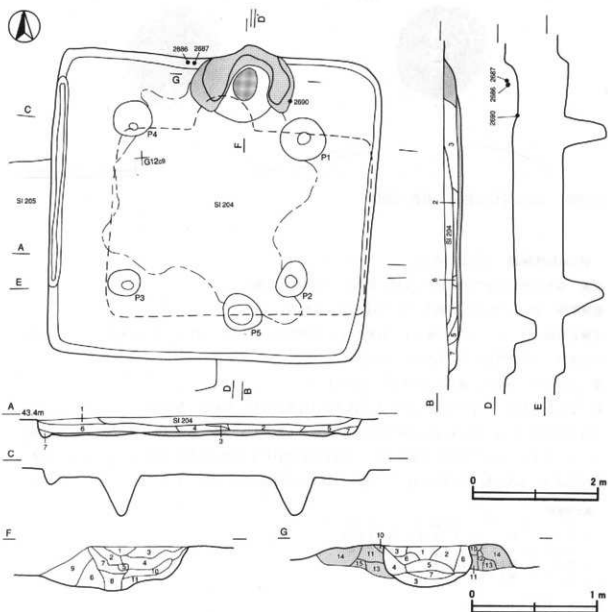
覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	黒	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
2	黒	褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3	黒	褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量
4	黒	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
5	黒	褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量
6	黒	褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
7	暗	褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片1195点（環152、高台付環7、甕1036）、須恵器片163点（環130、高台付環3、蓋4、甕26）、灰釉陶器片2点（碗）、鉄滓1点（着磁性あり）、瓦片5点、炭化種子1点（桃）が、ほぼ全域から散在した状態で出土している。2686・2687は竈左袖部西側の壁際の覆土中層からほぼ正位の状態出土しており、重なるように並んでいることから本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。2690は、竈右袖部東側の床面から出土している。なお、覆土中より狼狽産黒甕90号窯式の灰釉陶器片が出土しているが、混入したものである。

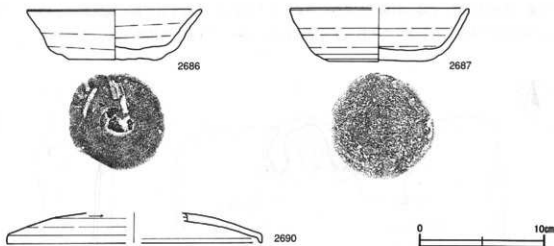
所見 時期は、出土土器の形状から8世紀中葉と考えられる。また土層断面の観察から、本跡は第207号住居跡を拡張した後に、ローム土を主体とする黒褐色土を充填して床面を再構築したものである。



第535図 第203号住居跡実測図

第203号住居跡出土遺物観察表 (第536図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2686	須恵器	坏	13.7	4.0	7.5	雲母・長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ、体部ロタロナデ	竈西側壁際上層	95% PL230
2687	須恵器	坏	[14.1]	4.2	7.8	長石	灰	普通	底部ヘラ切り後、一方向のヘラ削り	竈西側壁際上層	70% 被熱痕あり
2690	須恵器	蓋	[20.2]	(2.4)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	天井部右回りの回転ヘラ削り	竈東側床面	15%



第536図 第203号住居跡出土遺物実測図

第204号住居跡（第537・538図）

位置 調査区北部の北寄りのG12c9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第203・207号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 N-9°-Eを主軸とする長軸4.1m、短軸3.0mの長方形である。壁高は最も残りの良い部分で10cmを測り、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが、竈前にやや凹凸が認められる。

竈 遺存状態が悪く、北壁の中央部からやや西寄りに付設されていたものと想定される。付近の床面には竈構築材の流出が見られ、粘土粒子や砂粒のほか、灰や焼土も散在している。袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土を主体とする黒褐色土を基部とし、その上部に砂質粘土を用いて構築されていたものと考えられる。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられている様子がわずかに確認されただけである。

竈土層解説

- 1 褐色 粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 4 褐色 粘土粒子・砂粒多量
- 5 暗褐色 焼土ブロック中量

ピット 検出されていない。

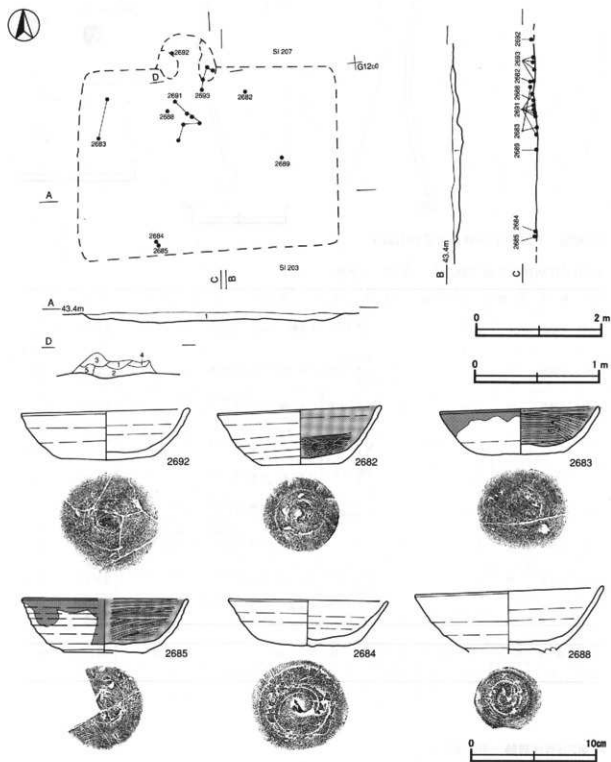
覆土 1層からなり、ロームブロックや焼土を含んだ堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

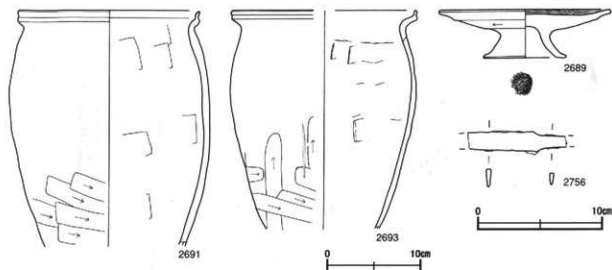
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片133点(坏31, 甕102), 須恵器片15点(坏12, 蓋1, 甕2), 礫1点(砥面を一面有し、被熱痕あり)が、ほぼ全城から散在した状態で出土している。2682は竈東側の覆土下層、竈内から2692や2693がそれぞれ出土している。竈前の床面より2691の破片15点がまとまって出土し、2689は中央部やや東寄りの床面、2684・2685は南壁際の床面から出土している。火床面から出土している礫(20×8×6cm)は砥面を一面有し、火熱を受けて脆くなっていることから、支脚(砥石から転用)として使用されていたことが想定できる。所見 時期は、出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。本跡の、竈前の硬化面が途切れている部分から、灰や焼土と共に土師器坏や甕類が多数出土している。この状態について、本跡廃絶時に意図的に竈を破壊し、

そのまま遺棄した可能性が想定できる。



第537図 第204号住居跡・出土遺物実測図



第538図 第204号住居跡出土遺物実測図

第204号住居跡出土遺物観察表 (第537・538図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2682	土師器	坏	12.8	4.5	6.2	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り, 体部口ロナテ	竈東側床面	100% PL229
2683	土師器	坏	12.5	3.7	7.2	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	西壁階床面・覆土下層	95% 運付着 PL229
2684	土師器	坏	12.6	3.7	7.2	雲母・石英	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り, 体部口ロナテ	南壁階床面	85% PL229
2685	土師器	坏	[13.0]	4.2	6.4	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り	南壁階床面	50% 運付着
2692	土師器	坏	13.3	3.9	7.6	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り, 体部口ロナテ	竈左袖部	90% PL229
2688	土師器	高台付碗	14.9	(5.1)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け, ナテ	竈前床面	75%
2689	土師器	高台付皿	13.4	3.8	6.2	雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け, 体部下端回転ヘラ削り	中央部東壁寄り床面	70% PL230
2691	土師器	甕	19.0	(25.1)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤黄	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナテ	竈前床面	40%
2693	土師器	甕	[19.4]	(22.9)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナテ	竈右袖部・竈前床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2756	刀子	(14.6)	16.4	11.3	(10.2)	鉄	切先・茎尻欠損, 両側あり	覆土中	

第205号住居跡 (第539図)

位置 調査区北部のG12c8区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第203・204・207号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺が3.7m前後の方形と推定される。壁高は約20cmで, やや外傾して立ち上がっている。また, 炉や竈については重複により確認できなかった。

床 ほぼ平坦で, 硬化面や壁溝は認められない。

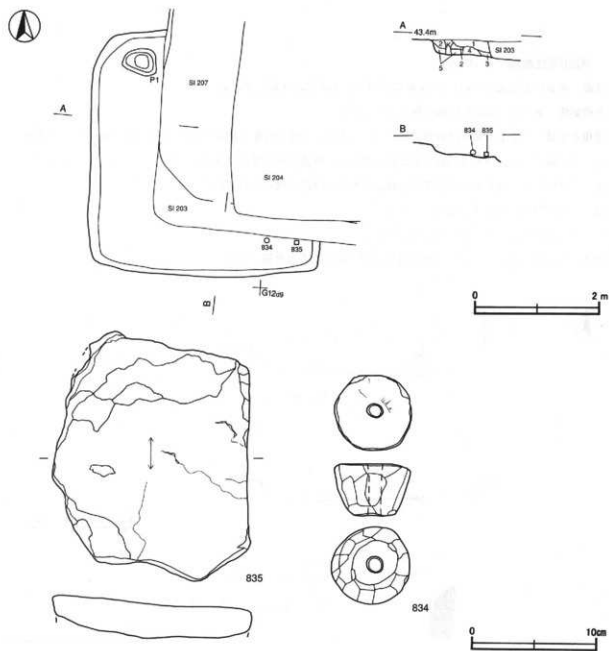
ピット 1か所。深さ約35cmで、形状から柱穴と考えられるが、対応するピットは確認できない。

覆土 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|----------------|
| 1 | 黒色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 黒色 | ローム粒子少量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量 |
| 5 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 出土遺物は土師器片218点(坏46, 高坏1, 甕169, 瓶2), 須恵器片26点(坏8, 甕17, 蓋1), 土製品1点(紡錘車), 石器1点(砥石), 鏝12点がほぼ全域から散在した状態で出土している。834・835は、南東部の床面から出土している。



第539図 第205号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡は、重複のため北西部から中央部にかけて掘り込まれており、炉や竈は確認できなかった。また、硬化した部分が認められないことから、性格については判然としない。時期は、8世紀前葉に比定される第207号住居跡に掘り込まれていることから、8世紀前葉以前と考えられる。

第205号住居跡出土遺物観察表（第539図）

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
834	紡錘車	6.1	4.1	1.1	158.5	雲母・石英・赤色粒子	側面へつ削り、両面穿孔	南東部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
835	砥石	20.4	15.8	2.7	1300.0	砂岩	砥面1面、その他は剥離面	南東部床面	

第206号住居跡（第540図）

位置 調査区北北西寄りのF13i4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第193・196号住居跡を掘り込んでいる。

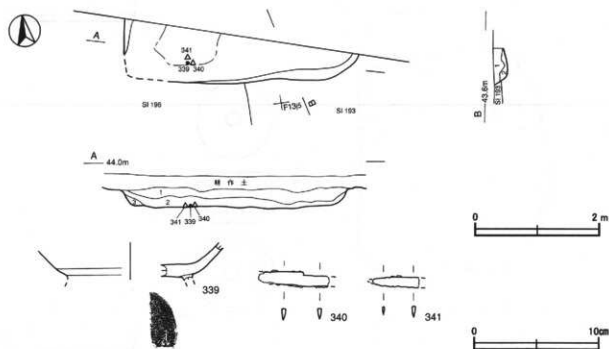
規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため、全体の様相は把握できないが、東西軸3.7m、南北軸0.7mだけが確認され、方形又は長方形と推定される。確認された壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は南西部のみ確認された。壁溝は検出されていない。

竈 調査区域外に位置すると考えられる。

ピット 調査区域外に位置すると考えられる。

覆土 3層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第540図 第206号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・凝土粒子中量、炭化粒子少量
- 2 黒褐色 凝土粒子中量、ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・凝土ブロック少量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片5点(高台付椀1, 甕4), 須恵器片1点(高台付環), 鉄製品2点(刀子)が出土しただけである。339・340・341はそれぞれ南部床面から出土している。

所見 本跡は大部分が調査区域外に延びているため、住居全体の様相は把握できないが、出土土器の形状から時期は10世紀中葉と考えられる。

第206号住居跡出土遺物観察表(第540図)

番号	種別	器種	口径	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
339	須恵器	高台付椀	-	(2.9)	-	-	長石	灰	普通	高台貼り付け後、ナデ	南部床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
340	刀子	(5.7)	1.2	0.3	(5.8)	鉄	基部欠損	南部床面	
341	刀子	(3.8)	0.8	0.3	(1.7)	鉄	刃部の破片、切先・基部欠損	南部床面	

第207号住居跡(第541図)

位置 調査区北部のG12c9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第205号住居跡を掘り込み、第203・204号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約4.9m、短軸約4.1mの長方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は20~34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 全面が貼床である。ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は北壁の一部を除いて周囲している。

炉 中央部の貼床層下からは、灰が多量に出土し、底面は火熱を受けて赤変硬化していることから、炉跡と考えられる。規模は長径約80cm、短径約60cmの不整形円形である。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量
- 3 灰褐色 焼土ブロック・灰中量、ロームブロック少量

竈 北壁の中央部東寄りに付設されており、第203号住居跡の竈下部から、火床面と袖部の痕跡が確認された。規模は確認された範囲で、焚口部から煙道部まで約98cm、袖部幅約120cm、壁外への掘り込みは約18cmである。火床部は床面が深さ約10cmほど掘りくぼめられて皿状を呈し、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量

ピット 10か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは54~70cm、柱間寸法は南北2.4m前後、東西2.7m前後である。P5は深さ約30cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6~P10は深さ12~28cmであるが、性格については不明である。

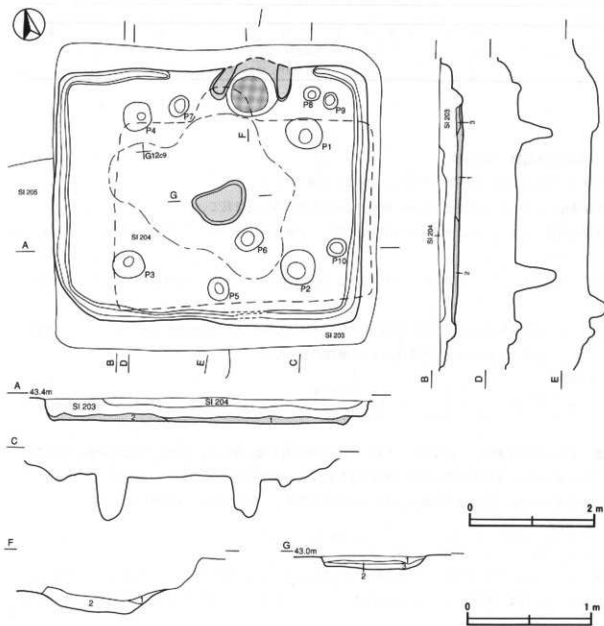
覆土 3層からなり、第1～3層は第203号住居跡の貼床層である。

土層解説

- 1 灰褐色 焼土ブロック・灰中量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片216点(坏46、高坏1、寛169)、須恵器片15点(坏8、寛4、瓶2、蓋1)、漆12点(被熱痕2)が貼床層及びピットの覆土中から出土している。いずれも細片で、破断面はほとんどが摩滅しており、図示できない。

所見 本跡の貼床層下から灰が検出されており、古い段階で灰が付設されていた可能性がある。その後、灰が付設されていた床面上に貼り床が行われ、竈が使用されたと考えられる。また、主柱穴が外側に掘り込まれ、



第541図 第207号住居跡実測図

新たに貼り床をし、第203号住居跡へと建て替えがなされたものである。各貼床層下から出土している土器片の形状から、時期は8世紀前葉と考えられる。

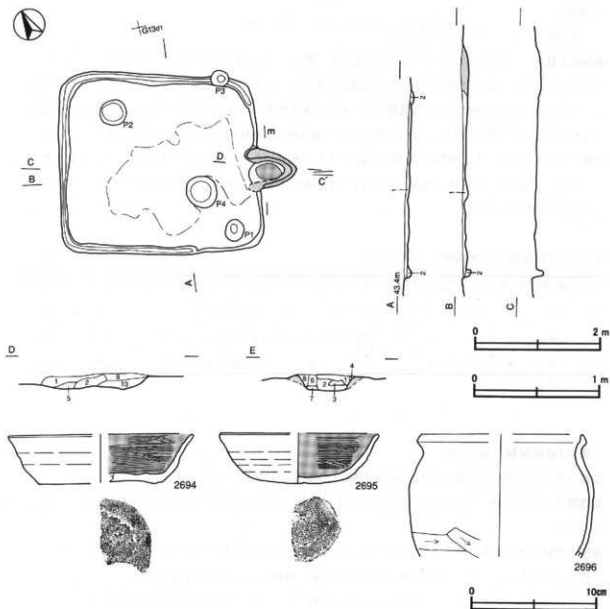
第210号住居跡（第542図）

位置 調査区北部の北寄りであるG13d1区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 長軸3.7m、短軸2.9mの東西に長い長方形で、主軸方向はN-103°-Eである。壁高は5～15cmほどで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、竈前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は、東壁から南壁の一部を除いて巡っていることが確認された。

竈 東壁のほぼ中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで72cm、壁外への掘り込みは60cmほどである。



第542図 第210号住居跡・出土遺物実測図

右袖部は遺存しておらず、その痕跡から袖部幅は70cmほどと推定される。袖部は床面と同じ高さの地山面上に、砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道部の立ち上がり部には花崗岩が下部を埋め込まれた状態で据えられており、火熱を受けて脆くなっていることから支脚として使用されていたものと考えられる。煙道は、火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・砂粒少量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 6 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒子・砂粒少量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物・砂粒少量、ロームブロック・粘土粒子微量

ピット 4か所。P1～P4は深さが14～23cmで、形状や位置から主柱穴の可能性はないと考えられる。

覆土 2層からなり、ロームブロックや焼土を含んだ堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片143点（坏44、高台付碗1、甕98）、須恵器片11点（坏8、高台付坏1、甕2）、灰釉陶器片1点（瓶か）が主に室内およびその周辺から出土している。出土土器のほとんどが細片であるため、図示できたのは3点で、2694と2696は覆土中、2695は覆土中からそれぞれ出土している。いずれも本跡発掘時に投棄されたものと考えられる。なお、覆土中より猿投産と思われる灰釉陶器類の細片が出土している。

所見 本跡から出土した土師器坏は11径・器高ともに小振りになってきており、時期は10世紀中葉と考えられる。また、本跡は他の住居跡と重複しておらず、10世紀代の住居の形態や土器の様相をうかがい知ることのできる良好な資料といえる。

第210号住居跡出土遺物観察表（第542図）

番号	種別	器種	口径	径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2694	土師器	坏	[14.6]	3.8	[9.6]		雲母・長石	におい濃	普通	底部ヘラ切り	覆土中	20%
2695	土師器	坏	[12.4]	3.9	7.2		雲母・長石・石英	におい濃	普通	底部何処ヘラ切り後、ナデ	覆土中	20%
2696	土師器	甕	[12.8]	(9.7)	-		雲母	濃	普通	外部外面ヘラ削り	覆土中	15%

第211号住居跡（第543図）

位置 調査区北部の中央部のG13g1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第212・213・214・219号住居跡をそれぞれ掘り込み、第147・174・272号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がりを確認できなかったが、硬化面の広がりや窓の位置から判断してN-95°-Eを主軸とする長軸2.5m、短軸2.4mの方形と推定される。

床 ほほ平坦で、隙隙を除いて全体的によく踏み固められている。また、壁溝は確認されなかった。

壁 東壁のほほ中央部を壁外に30cmほど掘り込んで、砂質粘土で構築されている。火床部から壁前にかけて第

174号土坑に掘り込まれているため、両袖部と煙道部の一部のみが確認された。袖部は床面と同じ高さの地山面上に構築されており、袖部幅は90cmほどと推定される。煙道は急な傾斜で立ち上がる様子が認められる。

電土層解説

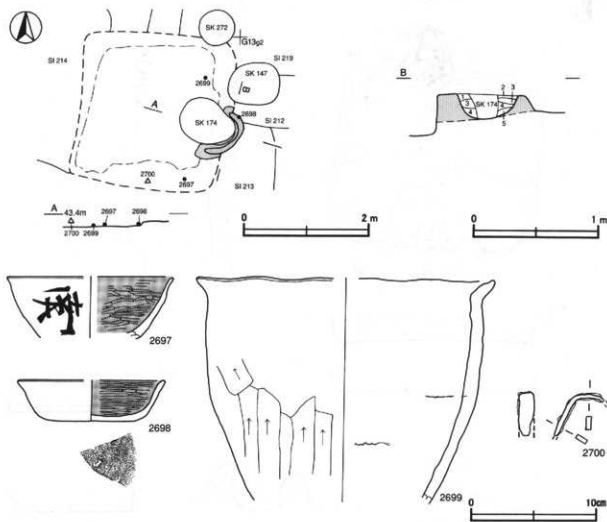
- 1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 粘土ブロック・焼土粒子少量
- 3 灰 褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック中量、炭化粒子微量
- 4 黒 色 粘土ブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 黒 色 焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量

ピット 検出されていない。

覆土 床面がほぼ露出した状態で検出されたため、堆積状況は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器片56点（坏14，甕42），須恵器片1点（坏），鉄製品1点（不明）が、主に竈内およびその周辺から出土している。2697は南東コーナー部寄りの床面，2698は竈左袖部中からそれぞれ出土している。2699は竈北側からまともに出て出土し，2700は南壁際のいずれも床面よりやや浮いた状態で出土している。これらは、本跡廃絶後に埋め戻す段階で投棄されたものと考えられる。

所見 本跡から出土した坏は口径・器高ともに小振りになってきており，時期は10世紀中葉と考えられる。また，坏の体部外面に「南」と墨書された土器が出土していることは，他の住居跡から出土している「庄南」の墨書土器と共に当該期の集落の様相を想定するのに重要である。



第543図 第211号住居跡出土遺物実測図

第211号住居跡出土遺物観察表 (第543図)

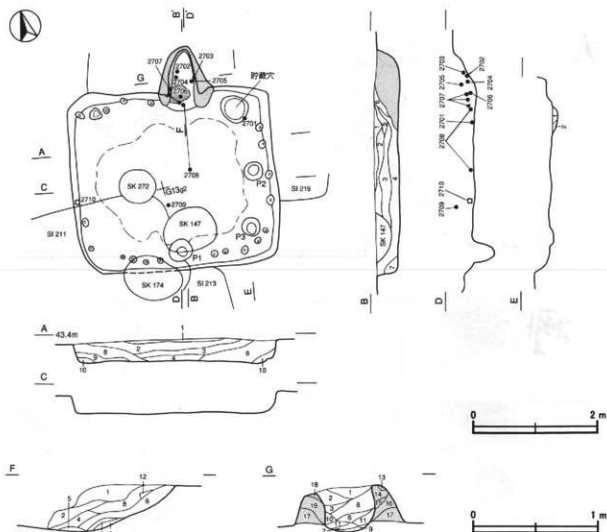
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2697	土師器	坏	[13.2]	(4.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐色	普通	体部ロクロナデ	南壁際床面	5% 外縁墨書「南」
2698	土師器	坏	[11.4]	3.3	7.6	雲母	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ、体部ロクロナデ	竈左袖部	10%
2699	土師器	甕	[23.6]	(17.7)	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り	竈北側床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2700	不明	(3.4)	3.8	1.2	(9.75)	鉄	L字状に屈曲する、鍵金具	南壁際下層	

第212号住居跡 (第544～546図)

位置 調査区北部の中央部のG13f2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第219号住居跡を掘り込み、第211・213号住居跡、第147・174・272号土坑に掘り込まれている。



第544図 第212号住居跡実測図

規模と形状 N-16°-Eを主軸とする長軸3.3m, 短軸2.9mの長方形である。壁高は28~36cmを測り, 壁はやや外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で, 壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

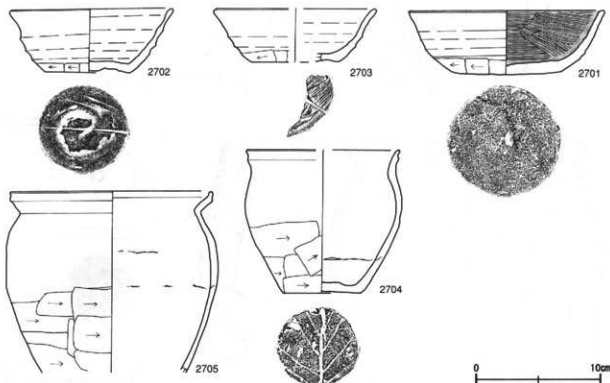
竈 北壁の中央部からやや東寄りに付設され, 規模は焚口から煙道部まで100cm, 壁外への掘り込みは76cmほどである。軸部幅は88cmほどで, 床面より若干高く掘り残した地山面上にローム土を主体とする黒褐色土を基部とし, その上部に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ, 火熱を受けて赤変しているが, 焼け締まった感じはない。また, 煙道の立ち上がり部には土師器小形甕や須恵器坏が支脚として掘えられており, 煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	11 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	12 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	13 暗赤褐色	焼土ブロック多量, 粘土粒子少量
4 にぶい赤褐色	焼土ブロック多量, 炭化物少量	14 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
5 暗赤褐色	焼土ブロック多量, 炭化物少量	15 暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量
6 灰褐色	灰多量, 炭化物中量, 焼土粒子少量	16 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
7 褐灰色	灰中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量	17 黒褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
8 暗褐色	焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	18 黒褐色	焼土ブロック中量, ローム粒子少量
9 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量	19 暗赤褐色	焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
10 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子少量		

ピット 3か所。P1は深さが36cmで竈と対峙する南壁際に位置しており, 出入り口に伴うピットと考えられる。P2・P3は深さが11cmほどであるが, 詳細は不明である。また, 壁際から深さ5~23cmの小ピット20か所が検出されており, 壁柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に付設され, 平面形は径40cmほどの不整形円形を呈し, 深さは10cmを測る。底面は平坦で, 壁は外傾しながら立ち上がっている。



第545図 第212号住居跡出土遺物実測図(1)

貯蔵穴土層解説

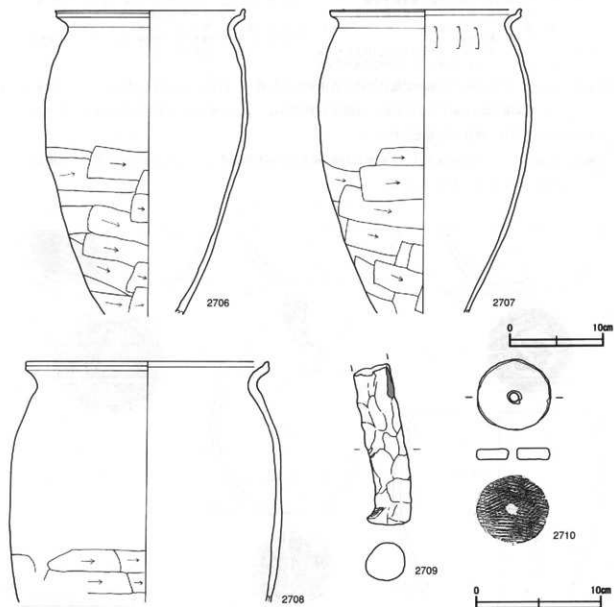
- 1 暗褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック中量

覆土 10層からなり、ロームブロックや焼土ブロック、炭化粒子を含み、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
3 黒褐色 ロームブロック中量
4 黒褐色 ロームブロック少量
5 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
6 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
7 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
8 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
9 黒褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量
10 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片589点(坏51, 高台付坏2, 三足鍋カ1, 甕535), 須恵器片76点(坏55, 蓋4, 甕17),



第546図 第212号住居跡出土遺物実測図(2)

障9点(2点は砥面あり),土製品1点(紡錘車)がほぼ全域から散在した状態で出土している。甕の標道の立ち上がり部には2704の小形甕が逆位で掘えられ,その上部に2702の坏が逆位で重ねられて出土している。これらの土器は,隙間に焼土化した粘土が詰められて固定されて,体部外面に被熱痕も認められ,支脚として使用されていたものと考えられる。2705・2706・2707・2708も甕火床部からまともに出て出土しているが,火熱は受けていないため本跡焼絶時に遺棄されたものと考えられる。2709の三足甕の脚部と思われるものは,中央部覆土上層から出土しており,焼絶後に埋没過程で投棄されたものである。

所見 出土した土器の形状から,時期は9世紀中葉と考えられる。

第212号住居跡出土遺物観察表(第545・546図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2701	土師器	坏	15.4	5.2	8.6	雲母・長石	にぶい褐	普通	底部ヘラ切り後,多方向のヘラ削り,体部下端手持ちヘラ削り	貯蔵穴上層	95% Pl.230
2702	須恵器	坏	12.8	5.2	6.8	雲母	にぶい黄褐	普通	底部脚部ヘラ切り後,ナデ,体部下端手持ちヘラ削り	甕火床部	30% 底部外面ヘラ記号「-」, Pl.230
2703	須恵器	坏	12.6	4.2	[6.8]	伊拉	灰白	普通	底部ヘラ切り後多方向のヘラ削り,体部下端手持ちヘラ削り	甕火床部	30% 底部外面ヘラ記号「-」a
2704	土師器	小形甕	[12.0]	11.4	6.1	長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り,口縁部横ナデ	甕火床部	50%
2705	土師器	甕	15.9	(14.4)	-	長石・石英	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り,口縁部横ナデ	甕火床部	60%
2706	土師器	甕	19.6	(32.0)	-	雲母・長石・石英・赤土粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り,口縁部横ナデ	甕火床部	80% Pl.231
2707	土師器	甕	20.0	33.2	[7.6]	長石	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ	甕火床部	80% Pl.231
2708	土師器	甕	19.0	(17.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り,口縁部横ナデ	甕火床部・中央部底面	30%
2709	土師器	三足甕	-	(12.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	断面不整形,外面意いヘラ削り,指痕痕	中央部上層	5%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2710	紡錘車	5.8	0.9	0.8	40.7	須恵器	須恵器製片を転用,履格子法の印き痕あり	西壁際上層	100%

第213号住居跡(第547図)

位置 調査区北部のほぼ中央部のG13g1区に位置し,平坦部に立地している。

重複関係 第212・214号住居跡を掘り込み,第211・224号住居,第174・287・401号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

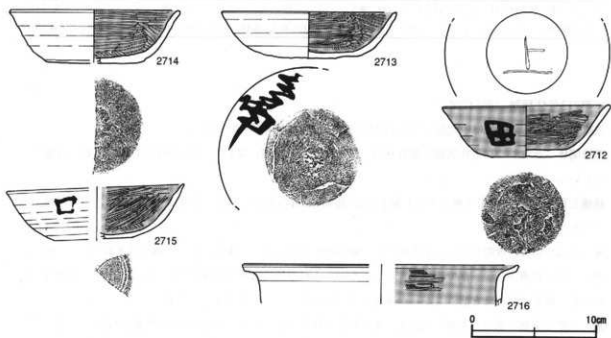
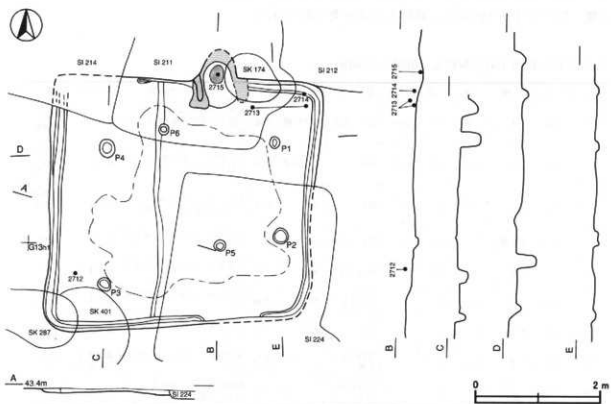
規模と形状 N-0°を主軸とする長軸4.2m,短軸4.0mの方形である。壁高は8~35cmで,壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で,壁際を除いて全体的によく踏み固められている。重複によって掘り込まれているために,南壁の一部と北西コーナー部で確認できなかったが,それ以外では増溝は検出されている。また,西側半分は地山を掘り残して10cmほど盛り上がった床面となっており,ベッド状を呈している。

竈 北壁中央部の東寄り掘り込んで,砂質粘土で構築されている。第211号住居や第174号土坑に掘り込まれているために,左袖部と火床部が確認できただけである。袖部は床面と同じ高さの平坦面上に構築されており,

竈東側の壁溝が立ち上がっていることから袖部幅は90cmほどと推定される。火床部は床面を10cmほど皿状に掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道の立ち上がりは、外傾して緩やかに立ち上がる様子が認められる。

ピット 6か所。P1～P4は深さが10～32cmであり、配置は崩れているが主柱穴と思われる。P5は深さが10cmほどで、竈と対峙する南壁際に位置することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さが



第547図 第213号住居跡出土遺物実測図

18cmで、性格は不明である。

覆土 1層からなり、ロームブロックを多く含んだ堆積状況を示す人為堆積である。

土層観察

1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片169点(坏38, 高台付坏1, 甕130), 須恵器片26点(坏12, 高台付坏1, 蓋1, 甕12), 雑1点が主に竈内およびその周辺から出土している。2712は底部内面に「上」の文字がヘラ磨き後に刻書され、体部外面には「田」と墨書されたほぼ完形の土師器坏で、南西コーナー部寄りの壁際下層から正位の状態で出土しており、本跡発掘時に埋め戻す段階で遺棄されたものと考えられる。2713にも体部外面に「庄南」カの墨書が見られ、竈前の床面から出土している。竈火床面からの出土で二次焼成のため判読しづらいが、2715の体部外面にも「田」カの墨書が見られる。2714は北東コーナー部床面からの出土である。

所見 本跡からはベッド状の段差を有する施設が確認されており、当遺跡では他に類例がない。時期は、土器の形状から9世紀後半と考えられる。前述の通り、坏の体部外面に「庄南」や「田」と墨書された土器が出土しているが、他の住居跡から出土している同様の墨書土器と共に、在地の有力者層による初期庄園の経営に組み込まれた集落であった可能性が想定される。

第213号住居跡出土遺物観察表 (第547図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2712	土師器	坏	13.2	4.1	6.8	長石・石英	灰黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ、体部外面ロタロナデ	南西コーナー部寄り下層	95% 円230 墨書「上」 外面墨書「田」
2713	土師器	坏	13.8	3.7	7.3	雲母・長石	にぶい赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り、体部外面ロタロナデ	竈前床面	70% 円230 外面墨書「田」カ
2714	土師器	坏	13.3	4.2	7.8	雲母・長石・石英	にぶい灰	普通	底部回転ヘラ切り後、ナデ	北東コーナー部床面	43%
2715	土師器	坏	13.8	4.0	6.2	雲母・長石	にぶい赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り、体部下端回転ヘラ磨り	竈火床面	5% 外面墨書「田」カ
2716	土師器	鉢	21.6	(3.2)	-	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部横ナデ、内面ヘラ磨き	覆土中	5%

第214号住居跡 (第548図)

位置 調査区北部中央のG13g1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第211・213号住居や第149号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-14°-Eを主軸とする長軸3.5m、短軸2.7mの長方形である。壁高は18~24cmを測り、壁は外方向に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は全周している。

竈 北壁の中央部から東寄りにつ設され、規模は焚口から煙道部まで68cm、壁外への掘り込みは22cmほどである。袖部幅は96cmほどで、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられて、火熱を受けてやや赤変しているが、焼け糊まった感じはない。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化物・粘土ブロック少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量

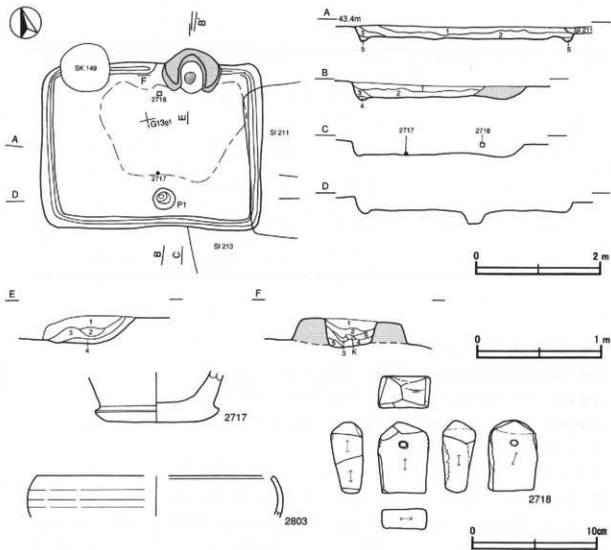
ピット 1か所。P1は深さが25cmほどで、竈と対峙する南壁際に位置しており、出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、各層にロームブロックを含んだ人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片263点(坏52, 小皿1, 甕210), 須恵器片17点(坏1, 捏鉢1, 鉄鉢形土器1, 甕14), 礫4点(被熱痕あり), 揚げ砥石1点がほぼ全域から散在した状態で出土している。2717は中央部下層より出



第548図 第214号住居跡・出土遺物実測図

上しているが、埋め戻す段階で埋土と共に混入したものと考えられる。2718は竈前中層より出土しており、本跡廃絶後の埋没過程で投棄されたと考えられる。なお、覆土中より2803が出土しているが、重複関係にある第213号住居跡に伴うものと考えられる。

所見 遺物の大半は覆土中から検出されたものや擾乱による混入と考えられ、本跡に伴う遺物は少ない。重複関係や床面から検出された土器片の形状から、時期は9世紀中葉と考えられる。また、須恵器製の鉄鉢形土器が覆土中から出土しており、当遺跡からは唯一のものである。鉢は僧尼の私有物として認められた食器であり、竈穴住居跡から出土していることは僧尼や仏教の信仰者が当集落の構成員であったことが想定される。

第214号住居跡出土遺物観察表（第548図）

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2717	須恵器	煎鉢	-	(4.0)	10.0	長石	灰青		普通	体部内・外面ロクロナゲ	中央部下層	3% 外面自然焼
2801	須恵器	鉄鉢形土器	18.8	(3.2)	-	長石・石英	灰		普通	体部内・外面ロクロナゲ	覆土中	3%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考
2718	掘り底石	5.6	4.0	2.8	93.7	凝灰岩	砥面6面。孔径0.6cm。孔は片側穿孔		竈前中層	

第215号住居跡（第549図）

位置 調査区北部南寄りのH12d0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第240・241号住居跡を掘り込み、第15号溝や第162号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-8°-Wを主軸とする長軸2.4m、短軸1.9mの長方形である。壁高は8cmほどで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 北壁の中央部からやや東寄りに付設され、遺存状態が悪いために袖部と火床面が確認できただけである。

袖部幅は80cmほどであり、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い凹状に掘りくぼめられて火熱を受けてやや赤変しているが、焼け締まった感じはない。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 検出されていない。

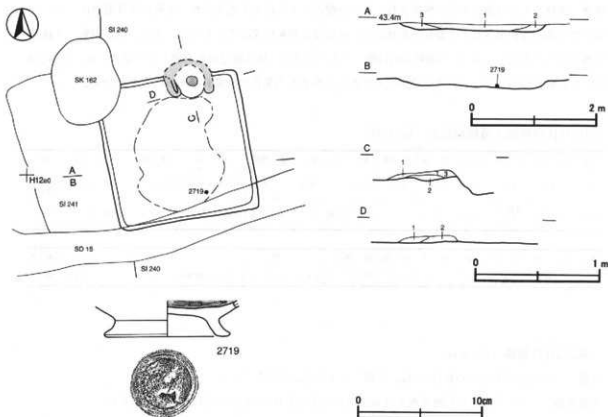
覆土 3層からなり、各層にロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片42点（坏15、高台付碗3、甕24）、須恵器片2点（甕）がほぼ全域から散在した状態で出土している。2719は南壁際下層より出土しているが、本跡廃絶時の埋め戻しの段階で埋土と共に投棄されたものと考えられる。

所見 遺物が少なく時期は明確ではないが、10世紀前葉に比定される第241号住居跡を掘り込んでいることや、伴う遺物が全て土師器であることなどから、時期は10世紀後葉と推測される。



第549図 第215号住居跡出土遺物実測図

第215号住居跡出土遺物観察表 (第549図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2719	土師器	高台付 椀	-	(2.9)	9.5	雲母	にぶい黄 橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け、体基下端回転ヘラ削り	南壁階下層	15%

第217号住居跡 (第550図)

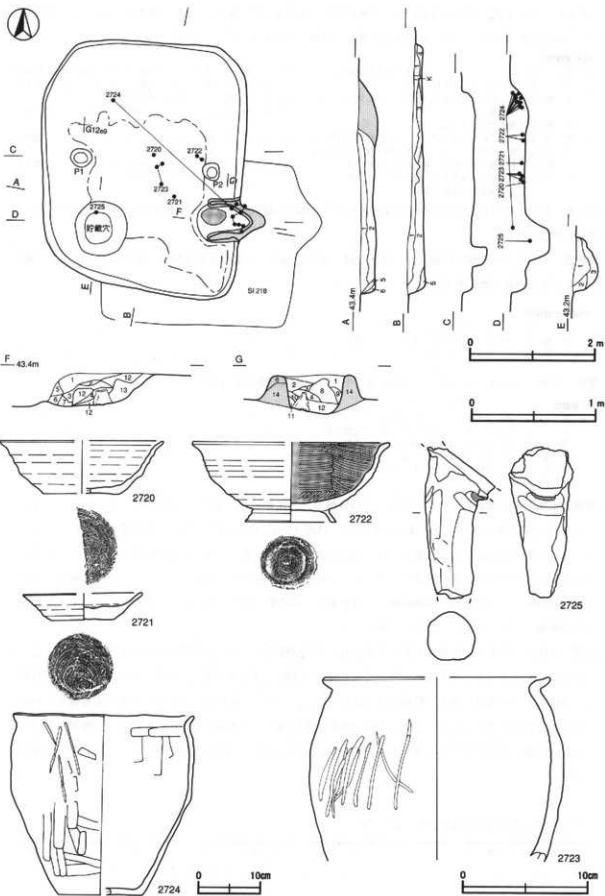
位置 調査区北部西寄りのG12e9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第218号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 N-90°-Eを主軸とする長軸4.0m、短軸3.2mの長方形である。壁高は17~24cmを測り、壁はやや外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、竈南側に当たる南東コーナー部から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈 東壁の中央部から南寄りに付設され、規模は焚口から煙道部まで86cm、壁外への掘り込みは44cmほどである。天井部は崩落しているため遺存しておらず、土層断面図中の第3・8層が崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多量に含んでいる。袖部幅は66cmほどで、床面とほぼ同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。



第550图 第217号住居跡出土遺物実測図

火床部は、浅い皿状に掘りくぼめられて火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道の立ち上がり部には支脚として砂岩が据えられており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

遺土層解説

1 黒色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	9 黒褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
2 黒色	ローム粒子・焼土粒子少量	10 黒褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
3 灰褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土粒子中量、ロームブロック微量	11 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4 黒褐色	焼土ブロック少量	12 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量
5 黒褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量	13 暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量
6 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量	14 灰褐色	焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化物少量、ロームブロック微量
7 灰褐色	炭化物・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量		
8 灰褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量		

ピット P1・P2 は深さがいずれも24cmほどで、形状から柱穴と考えられ、配置から棟持ち柱が2本の上層構造と想定される。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設され、平面形は一边が80cmほどの隅丸方形を呈し、深さは40cmを測る。底面は平坦で、逆台形状の断面形である。

貯蔵穴土層解説

1 黒色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
3 黒褐色	ロームブロック少量

覆土 6層からなり、ロームブロックや焼土を含む不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒色	焼土ブロック・ローム粒子少量
2 黒色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
3 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
4 黒褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量
5 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
6 黒褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片460点（坏108、高台付輪24、三足鍋1、甕327）、須恵器片33点（坏23、甕10）、漆29点（26点に被熱痕あり、3点には砥面もあり）、鉄滓1点がほぼ全域から散在した状態で出土している。2720は中央部床面、2721は中央部の覆土下層、2723は中央部床面と覆土下層、2725は貯蔵穴の覆土上層からそれぞれ出土している。2724は竈火床部からまとまって出土している破片と北西コーナーよりの覆土中層から出土した破片とが接合したもので、本跡焼絶時に遺棄あるいは投棄されたものと考えられる。なお、須恵器細片は破断面が摩滅しており、混入したものである。

所見 本跡から出土した小皿の形状や東壁を有する住居構造などから、時期は10世紀中葉と考えられる。前述したように、2本柱で上層を支える構造とすれば、当遺跡では特異な例と言える。また、硬化面が竈石部基から南西コーナー部に位置する貯蔵穴まで続いていることから、竈付近に土器などを保管する棚などの施設が存在した可能性も考えられる。また、多量の黒炭（主に砂岩）が床面から覆土中層にかけて確認されていることや、三足鍋の脚部と思われる破片が本跡以外にも第135・191・212号住居跡から出土しており、興味深い資料である。

第217号住居跡出土遺物観察表（第550図）

番号	類別	器種	口径	径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2720	土師器	坏	13.0	4.2	6.2		赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り、体部内・外面ロクロナデ	中央部床面	25%
2721	土師器	小皿	9.5	2.1	5.1		雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り、体部内・外面ロクロナデ	中央部下層	50%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2722	土師器	高台付 甕	[15.4]	6.3	7.0	長石・本 色 粒子	橙	普通	底部回転ヘリ切り後、高台筋り 付け、ナデ、体部ロクロナデ	竈北側下層	40%
2723	土師器	小形甕	17.8	[14.1]	-	長石・石英	にぶい 褐色	普通	体部外面ヘリ磨き、内面ナデ	中層西側下層	60%
2724	土師器	甕	[28.5]	28.8	[13.4]	雲母・長石・ 石英	にぶい 褐色	普通	体部外面ヘリ磨り、内面ヘリ ナデ	竈火床部・ 北東部中層	50%
2725	土師器	足 罎	-	[11.9]	-	雲母・長石・ 石英	にぶい 褐色	普通	断面不整形、外面磨いヘリ 磨り	貯蔵穴上層	5%

第218号住居跡（第551図）

位置 調査区北部の西寄りのG12e9 区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第208号住居跡を掘り込み、第217号住居に掘り込まれている。

規模と形状 N-90°-Eを軸とする長軸3.0m、短軸2.6mの東西に長い長方形である。壁高は15cmを測り、壁は外方向に閉き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前がよく踏み固められている。また、壁溝は確認されていない。

竈 東壁の中央部から北寄りに付設され、規模は焚口から煙道部まで68cm、壁外への掘り込みは32cmほどである。袖部幅は104cmほどで、床面よりやや高く掘り残した地山面上に砂質粘土で構築されている。火床部は床面の高さから8cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道の立ち上がり部には須恵器環や高台付環が支脚として据えられており、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、炭化物微量
- 6 灰褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 7 暗褐色 焼土ブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

ピット 検出されていない。

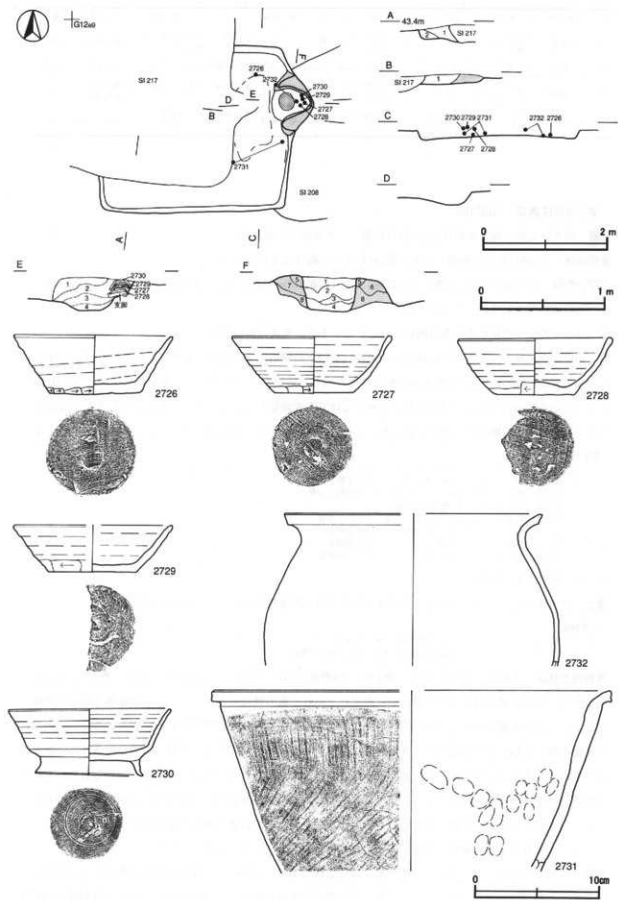
覆土 2層からなり、ロームブロックや焼土を多く含んだ堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物・焼土ブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片118点（坏6、甕112）、須恵器片45点（坏28、高台付環13、蓋2、壺2）、礫1点（被熱痕あり）が主に竈内およびその周辺から出土している。竈の煙道の立ち上がり部には厚さ5cmほどの砂岩が据えられ、その上部に2727・2728・2729の坏3点が逆位に重ねられた状態で出土している。これらの土器は隙間を焼土化した粘土で固定されて、体部外面には被熱痕も認められており、支脚として使用されていたものと考えられる。さらにその上部には2730の高台付環が逆位で据えられていたが、被熱痕が認められないため本跡の廃絶に伴う祭祀的な行為によって竈の浄化が行われた可能性がある。ほぼ完形の2726は竈手前の北東コーナー寄り下層から正位の状態で出土し、2731は竈南側下層、2732は竈火床部と竈北側下層からそれぞれ出土している。いずれも本跡廃絶時に遺棄、あるいは投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は主柱穴をもたずに、東竈を有する住居跡であり、供養具の土体が須恵器であることや出土土器の形状から、時期は9世紀中葉と考えられる。当該期に、東壁の北寄りに竈が付設されることは数少ない類型である。



第551图 第218号住居跡出土遺物実測図

第218号住居跡出土遺物観察表（第551図）

番号	種類	器種	口径	口径	口径	胎土	色	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2726	須恵器	埴	12.4	4.6	7.1	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後、方向のヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り	竈前北壁寄り下層	100% PL230
2727	須恵器	埴	12.4	4.5	6.2	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後、方向のヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り	竈火床部	60%
2728	須恵器	埴	12.1	4.6	6.2	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後、方向のヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り	竈火床部	60%
2729	須恵器	埴	12.4	3.8	6.8	砂粒	灰	普通	底部回転ヘラ切り後、方向のヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り	竈火床部	40%
2730	須恵器	高台付埴	12.8	5.5	8.5	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台削り付け、体部口ロナテ	竈火床部	80% PL231
2731	須恵器	鉢	[30.6]	(14.4)	-	雲母・長石	に白い雲母	普通	体部外面側位から斜位の平行叩き、内面ナテ、指跡痕	竈南側・中央部下層	13%
2732	土師器	甕	[20.4]	(12.1)	-	雲母・長石・石英	に白い木灰	普通	体部内・外面ナテ	竈火床面・竈前下層	5%

第219号住居跡（第552図）

位置 調査区北部の中央のG13f2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第211・212号住居、第147・148・150・272号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-9°-Eを主軸とする長軸3.7m、短軸3.0mの東西に長い長方形である。壁高は最も残りの良い東壁で20cmを測り、壁はやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁際は北壁から西壁にかけてと東壁の一部で確認されていることから、本来は全周していたものと推定される。

竈 北壁の中央部からやや東寄りにつ設され、壁外に64cmほど掘り込んでいる。狭口部から煙道部まで100cm、袖部幅は108cmほどで、袖部は床面とほぼ同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面とほぼ同じ高さの地山面をそのまま使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 に白い赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック中量
- 8 暗赤褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子少量
- 9 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量

ピット 1か所。P1は深さが20cmほどで、南東コーナー部に位置しているが、性格は不明である。

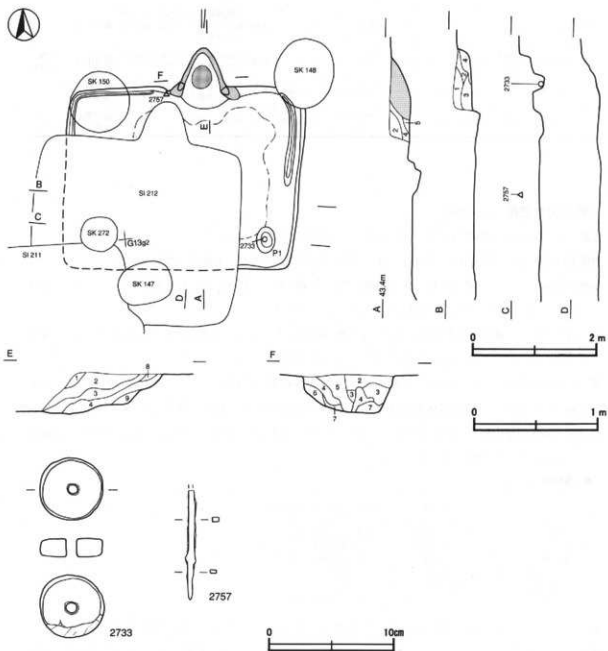
覆土 5層からなり、ロームブロックや焼土を多く含んだブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 5 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片42点(甕), 須恵器片12点(坏7, 高台付坏1, 鉢2, 甕2), 礫1点(被熱痕あり), 鉄製品1点(鎌), 土製品1点(紡錘車)がほぼ全域から散在した状態で出土している。2733はP1の底面から出土しており, 本跡廃絶時に投棄されたものと考えられる。2757は竈西壁際の覆土上層から出土し, 本跡廃絶後に埋没過程で投棄されたと考えられる。

所見 出土土器が少なく明確ではないが, 土器の形状や9世紀中葉の住居跡に掘り込まれていることから, 時期は9世紀前葉と考えられる。



第552図 第219号住居跡出土遺物実測図

第219号住居跡出土遺物観察表 (第552図)

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
2733	紡錘車	5.1	1.4	0.9	46.1	土	ナデ, にぶい橙色を呈する, 肩部一部欠損		P1底面	